

令和2（2020）年度
神戸市埋蔵文化財年報



2 0 2 4

神 戸 市

令和2（2020）年度
神戸市埋蔵文化財年報

2 0 2 4
神 戸 市

序 文

本書は、令和 2（2020）年度に実施した埋蔵文化財事業に関する概要報告となります。

この年は、新型コロナウイルス感染症が流行した時期にあたり、我々の働き方が大きく変わるきっかけの一つとなりました。そのあおりは、埋蔵文化財行政にもおよび、発掘調査現場では、感染症対策のために季節を問わずマスクやフェイスシールドを着用して作業をし、埋蔵文化財センターでは、これまで行ってきた市民向けの公開活用事業にも制限が生じました。どのような形で埋蔵文化財事業の成果を市民へ還元できるのか模索した時期でもありました。その結果、神戸市の各種地図を一元的に公開している情報マップで埋蔵文化財包蔵地を公開し、埋蔵文化財に関わる各種届出も電子受付開始に向けて、検討をはじめることとなりました。

このような社会情勢のなかにはありましたが、この年の埋蔵文化財事業は、公共事業と民間事業を含めて 39 件の発掘調査現場があり、報告書作成業務は 5 件ありました。例年に比べて現場の数が多く、報告書も抱えながら現場に立つ学芸員もいました。

遺跡の発掘調査や整理報告業務は、神戸市文化スポーツ局の学芸員が担当していますが、その事業に係る費用は、事業主が負担しています。費用の積算は、発掘調査の行程監理や整理業務を含めて、入念に精査した上で事業者へ提示しています。また、発掘調査で得た成果は、事業者はもとより、ひろく市民へ還元し、一つ一つの現場が地域の歴史を紐解くための根拠となるものです。

本書が神戸市の行っている文化財保護行政に対するご理解の一助に資するとともに、学術資料としてもひろくご活用いただければ幸いです。

令和 6（2024）年 3 月
神 戸 市

例 言

- 本書は、神戸市文化スポーツ局が令和2（2020）年度に実施した埋蔵文化財事業の概要報告である。
- 令和元（2019）年度に確認調査を実施し、令和2（2020）年度に埋蔵文化財包蔵地に指定した須磨区所在の住友家須磨別邸跡第1次調査の概要報告も掲載した。
- 令和2（2020）年度に実施した埋蔵文化財事業に関わる発掘調査は、下記の調査組織によって実施した（所属はいずれも令和2年度当時）。
調査関係者組織表
神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）
大阪府立弥生文化博物館名誉館長 黒崎 直
京都府立大学文学部教授 菱田 哲郎
神戸市
文化スポーツ局長 岡田 健二
文化スポーツ局副局長 宮道 成彦
文化財課長 安田 滋
文化財課担当課長 前田 佳久（埋蔵文化財センター担当）
文化財活用専門官 千種 浩
埋蔵文化財係長 東 喜代秀
埋蔵文化財係担当係長 斎木 巖（埋蔵文化財センター担当）
松林 宏典
中村 大介（埋蔵文化財センター担当）
指導・調整担当学芸員 阿部 敬生 小林 さやか 瀬瀬 文佳 荒田 敬介
発掘調査担当学芸員 池田 毅 山口 英正 佐伯 二郎 内藤 俊哉
浅谷 誠吾 藤井 太郎 石島 三和 小野寺 洋介
田島 靖大 加納 誉大 萱原 朋奈
埋蔵文化財センター 須藤 宏 関野 豊 中井 菜加
担当学芸員 山田 侑生（保存科学担当）
- 本書に掲載している遺跡の位置図は、下記の地図を利用した。
神戸市発行 50,000 分の 1 神戸市全図
神戸市発行 2,500 分の 1 都市計画図
- 本書に掲載している神戸市内の古地図（p26・p96）は、下記の文献から引用した。
清水靖夫（編）1995『明治前期・昭和前期 神戸都市地図』 柏書房
- 以下の図面は、下記の文献から引用し、所蔵機関から掲載許可を頂いた。
p124 fig.165 神戸市教育委員会（編・刊行）2008『兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書』 p38のfig.39
p136 fig.177 兵庫陣屋跡町割図 神戸市立博物館所蔵
第35次調査 神戸市教育委員会（編・刊行）2007「兵庫津遺跡第35次調査」『平成16年度神戸市埋蔵文化財年報』
第47次調査 神戸市教育委員会（編・刊行）2010「兵庫津遺跡第47次調査」『平成19年度神戸市埋蔵文化財年報』
- 本書の執筆は、以下の通り分担した。
Ⅰ. 令和2（2020）年度の事業概要 1～5 橋詰 清孝・山口 中村
Ⅱ. 令和2（2020）年度実施の発掘調査 6 各学芸員：表2～4参照
Ⅲ. 令和元（2019）年度実施の確認調査 藤井
- 調査現場の写真撮影、遺構・遺物の作図・トレースは、担当した各学芸員が行った。
- 表紙写真と裏表紙写真は、西大寺フォトの杉本幹夫氏が撮影した。
- 表紙の写真は雪御所遺跡第5次調査第1遺構面（平安時代）出土の唐草文軒平瓦（2分の1）、裏表紙の写真は兵庫津遺跡第84次調査SK304（平安時代）出土の巡方（等倍）である。
- 本書に記載する方位・標高は、平面直角座標系世界測地系第Ⅴ系を使用し、標高は、T.P.（東京湾平均海面）を標準とする。
- 正報告を刊行している遺跡については、その内容を本書に反映している。
- 土層注記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）2010『新版標準土色帖』富士平工業のマンセル記号を記載しているが、マンセル記号を記載していない場合は、土色・粒形・粘性等の特徴を記載している。
- 出土遺物・遺構図面・撮影写真等は、神戸市埋蔵文化財センターで保管している。
- 本書の編集は、文化財課埋蔵文化財系の協力を得て、荒田が行った。

目 次

序 文
例 言
図版目次
表 目 次

I. 令和2（2020）年度の事業概要		
1	事業体制・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2	開発指導・・・・・・・・・・・・・・・・	1
3	埋蔵文化財調査事業・・・・・・・・	2
4	指定文化財（考古資料）・・・・・	6
5	刊行物・・・・・・・・・・・・・・・・	7
6	埋蔵文化財公開活用事業・・・・・	8
II. 令和2（2020）年度実施の発掘調査		
東灘区	1 郡家遺跡第9 6次調査・・・・・・・・	19
	2 郡家遺跡第9 7次調査・・・・・・・・	21
	3 岡本東遺跡第3次調査・・・・・・・・	25
	4 森北町遺跡第3 1次調査・・・・・・・・	31
	5 北青木遺跡第9次調査・・・・・・・・	35
	6 深江北町遺跡第1 8次調査・・・・・	45
	7 深江北町遺跡第1 9次調査・・・・・	49
	8 岡本北遺跡第1 5次調査・・・・・	53
	9 魚崎郷古酒蔵群第5次調査・・・・・	57
灘 区	1 0 篠原遺跡第4 1次調査・・・・・・・・	61
中央区	1 1 旧三の宮駅構内遺跡第7次調査・・・・・	67
	1 2 雲井遺跡第4 2次調査・・・・・・・・	73
	1 3 雲井遺跡第4 3次調査・・・・・・・・	77
	1 4 日暮遺跡第4 9次調査・・・・・・・・	81
	1 5 日暮遺跡第5 0次調査・・・・・	87
	1 6 下山手遺跡第7次調査・・・・・・・・	91
兵庫区	1 7 雪御所遺跡第5次調査・・・・・・・・	99
	1 8 楠・荒田町遺跡第6 4次調査・・・・・	105
	1 9 兵庫津遺跡第8 4次調査・・・・・・・・	107
	2 0 兵庫津遺跡第8 5次調査・・・・・・・・	123
	2 1 兵庫津遺跡第8 6次調査・・・・・・・・	135
	2 2 兵庫津遺跡第8 7次調査・・・・・・・・	143
	2 3 兵庫津遺跡第8 8次調査・・・・・	145
長田区	2 4 長田神社境内遺跡第1 9次調査・・・・・	151
	2 5 二葉町遺跡第2 4次調査・・・・・	159
須磨区	2 6 松野遺跡第4 6次調査・・・・・・・・	163
	2 7 戎町遺跡第7 1次調査・・・・・・・・	169
	2 8 戎町遺跡第7 2次調査・・・・・・・・	175
	2 9 大田町遺跡第2 3次調査・・・・・	187
西 区	3 0 出合遺跡第5 7・5 8次調査・・・・・	191
	3 1 今津遺跡第2 7次調査・・・・・・・・	195
	3 2 新方遺跡第5 4次調査・・・・・・・・	201
	3 3 新方遺跡第5 5次調査・・・・・・・・	209
	3 4 延命寺古墳第1次調査・・・・・・・・	217
III. 令和元（2019）年度実施の確認調査		
須磨区	1 住友家須磨別邸跡第1次調査・・・・・	225

図版目次

I. 令和2（2020）年度の事業概要

- fig. 1 春季企画展
- fig. 2 昭和の車大集合
- fig. 3 こうべ考古学
- fig. 4 博物館実習
- fig. 5 西区文化センター出張展示
- fig. 6 兵庫区文化センター出張展示
- fig. 7 令和2年度 埋蔵文化財年報掲載遺跡地図
（各遺跡の番号は掲載遺跡番号と一致）
- fig. 8 調査地点位置図（東灘区・灘区）
- fig. 9 調査地点位置図（中央区・兵庫区・長田区）
- fig.10 調査地点位置図（須磨区）
- fig.11 調査地点位置図（西区）

II. 令和2（2020）年度実施の発掘調査

1. 郡家遺跡第96次調査

- fig.12 調査地位置図
- fig.13 調査区配置図
- fig.14 各調査区遺構配置図・土層断面図

2. 郡家遺跡第97次調査

- fig.15 調査地位置図
- fig.16 調査区配置図
- fig.17 調査区西壁土層断面
- fig.18 遺構面遺構配置図
- fig.19 1区北半遺構面全景（北から撮影）
- fig.20 2区完掘状況（北から撮影）

3. 岡本東遺跡第3次調査

- fig.21 調査地位置図
- fig.22 明治18（1885）年の地形図と今回の調査地
（網掛けが扇状地の範囲・縮尺不同）
- fig.23 調査区配置図
- fig.24 各調査区土層断面模式図（ $S = 1 / 40$ ）
- fig.25 遺構面遺構配置図
- fig.26 2区遺構面全景写真（南から撮影）

4. 森北町遺跡第31次調査

- fig.27 調査地位置図
- fig.28 調査区配置図
- fig.29 1区南壁土層断面図（ $S = 1 / 80$ ）
- fig.30 1区南壁土層堆積状況（北から撮影）
- fig.31 1区完掘状況（南から撮影）
- fig.32 2区完掘状況（北西から撮影）

5. 北青木遺跡第9次調査

- fig.33 調査地位置図
- fig.34 東地区の各調査区配置図
- fig.35 西地区の各調査区配置図
- fig.36 西地区Ⅰ区遺構配置図
- fig.37 西地区Ⅰ区南壁土層断面
- fig.38 西地区Ⅱ区遺構配置図
- fig.39 西地区Ⅱ区北壁土層断面
- fig.40 西地区Ⅲ区遺構配置図
- fig.41 西地区Ⅳ区遺構配置図
- fig.42 西地区Ⅳ区南壁土層断面図
- fig.43 西地区Ⅳ区北壁土層断面図
- fig.44 西地区Ⅴ区遺構配置図
- fig.45 西地区Ⅴ区南北壁土層断面
- fig.46 東地区Ⅰ区遺構配置図
- fig.47 東地区Ⅱ区遺構配置図
- fig.48 東地区Ⅲ区遺構配置図
- fig.49 東地区Ⅴ区遺構配置図
- fig.50 東地区Ⅴ区南壁土層断面
- fig.51 西地区Ⅱ区方形周溝墓SD201
西下層遺物出土状況（北から撮影）

6. 深江北町遺跡第18次調査

- fig.52 調査地位置図
- fig.53 調査区配置図
- fig.54 1区遺構配置図・土層断面図
- fig.55 1区西壁土層断面（東から撮影）

- fig.56 2区遺構配置図・土層断面図
- fig.57 2区南壁土層断面（北から撮影）
- fig.58 3区遺構配置図・土層断面
- fig.59 3区南壁土層断面（北から撮影）
- fig.60 1区東壁畦畔（西から撮影）

7. 深江北町遺跡第19次調査

- fig.61 調査地位置図
- fig.62 調査区配置図
- fig.63 1区南壁土層断面
- fig.64 Ⅰ区遺構平面図
- fig.65 Ⅰ区（東）遺構面全景（東から撮影）

8. 岡本北遺跡第15次調査

- fig.66 調査地位置図
- fig.67 調査区配置図
- fig.68 各調査区土層断面模式図（ $S = 1 / 50$ ）
- fig.69 遺構面遺構配置図
- fig.70 2区SI01検出状況（東から撮影）

9. 魚崎郷古酒蔵群第5次調査

- fig.71 調査地位置図
- fig.72 調査区配置図
- fig.73 遺構面遺構配置図
- fig.74 SW01（調査区北東壁）土層断面図
- fig.75 調査区西側完掘状況（東から撮影）
- fig.76 調査区東側完掘状況（西から撮影）

10. 篠原遺跡第41次調査

- fig.77 調査地位置図
- fig.78 調査区配置図
- fig.79 上段：調査区南壁土層断面図・
下段：2区東壁土層断面図
- fig.80 第1遺構面遺構配置図
- fig.81 第2遺構面遺構配置図
- fig.82 SD01平面図・断面図・遺物出土状況
- fig.83 SP19・36平面図・断面図
- fig.84 1区SP19遺物出土状況（北から撮影）
- fig.85 1区第1遺構面全景（北西から撮影）
- fig.86 1区第2遺構面全景（北西から撮影）

11. 旧三の宮駅構内遺跡第7次調査

- fig.87 調査地位置図
- fig.88 調査区配置図および調査区土層断面図
- fig.89 遺構面遺構配置図
- fig.90 1区遺構面全景（北から撮影）
- fig.91 2区積石遺構堆積状況（北から撮影）
- fig.92 3区遺構面全景（北東から撮影）
- fig.93 3区SP08遺物出土状況（南西から撮影）

12. 雲井遺跡第42次調査

- fig.94 調査地位置図
- fig.95 1～3区第2遺構面遺構配置図
- fig.96 1～3区土層断面図
- fig.97 1区第2遺構面全景（南から撮影）
- fig.98 3区第2遺構面全景（北から撮影）

13. 雲井遺跡第43次調査

- fig.99 調査地位置図
- fig.100 調査区配置図
- fig.101 上段：調査区西壁土層断面図・
下段：調査区南壁土層断面図
- fig.102 遺構面遺構配置図
- fig.103 SB101遺構平面図・土層断面図
- fig.104 3区第1遺構面全景（北から撮影）
- fig.105 3区SB101内カマド（南から撮影）

14. 日暮遺跡第49次調査

- fig.106 調査地位置図
- fig.107 各区土層断面図
- fig.108 第2遺構面遺構配置図
- fig.109 SB201・SD201・SD202平面図・断面図
- fig.110 SP223平面図・断面図
- fig.111 SP229平面図・断面図

図版目次

- fig.112 SP229 出土遺物実測図
fig.113 第3遺構面遺構配置図
fig.114 2区南半第3遺構面全景（南東から）
15. 日暮遺跡第50次調査
fig.117 調査地位置図
fig.118 調査区配置図
fig.119 遺構面遺構配置図・調査区南壁土層断面図
fig.120 調査区東半全景（西から撮影）
fig.121 調査区西半全景（東から撮影）
fig.122 SX 01（北から撮影）
fig.123 西半西端部落ち込み（北から撮影）
16. 下山手遺跡第7次調査
fig.124 調査地位置図
fig.125 調査区配置図
fig.126 遺構配置図
fig.127 1区中央北土層断面図
fig.128 1区南東部東壁土層断面図
fig.129 調査区西壁土層断面図
fig.130 SK01 平面図・断面図
fig.131 土坑 SK05 平面図・断面図
fig.132 SK06 平面図・断面図
fig.133 SK07 平面図・断面図
fig.134 SK09 平面図・断面図
fig.135 Pit08 平面図・断面図
fig.136 SE01 断面図
fig.137 調査地周辺土地変遷図（縮尺不同）
fig.138 1区遺構面全景（南西から撮影）
fig.139 1区南東東壁土層断面・SX01 土層断面（西から撮影）
fig.140 2区西遺構面全景（北東から撮影）
fig.141 3区遺構面全景・SK11 検出状況（南東から撮影）
17. 雪御所遺跡第5次調査
fig.142 調査地位置図
fig.143 調査区配置図
fig.144 調査区土層断面図
fig.145 第1遺構面遺構配置図
fig.146 SK101 平面図・断面図
fig.147 第2遺構面遺構配置図
fig.148 第2遺構面全景写真（北西から撮影）
18. 楠・荒田町遺跡第64次調査
fig.149 調査地位置図
fig.150 調査区および遺構配置図
fig.151 調査区東壁土層断面図
19. 兵庫津遺跡第84次調査
fig.152 調査地位置図
fig.153 調査区配置図
fig.154 調査区土層断面図
fig.155 第1遺構面遺構配置図
fig.156 第2遺構面遺構配置図
fig.157 第3遺構面遺構配置図
fig.158 第4遺構面遺構配置図
fig.159 第5遺構面遺構配置図
fig.160 第6遺構面遺構配置図
fig.161 奈良～室町時代の遺構面を検出している調査地点（縮尺不同）
fig.162 2区第6遺構面全景（西から撮影）
20. 兵庫津遺跡第85次調査
fig.163 調査地位置図
fig.164 調査区配置図
fig.165 元禄期兵庫津復元図上での調査地位置図（縮尺不同）
fig.166 調査区南壁土層断面図
fig.167 第1遺構面遺構配置図
fig.168 第2遺構面遺構配置図
fig.169 第3遺構面遺構配置図
- fig.170 第4遺構面遺構配置図
fig.171 1区西壁土層断面（東から撮影）
fig.172 2区南壁土層断面（北東から撮影）
fig.173 1区第1遺構面検出の礎石列（北から撮影）
fig.174 1区銭繻出土状況（北東から撮影）
21. 兵庫津遺跡第86次調査
fig.175 調査地位置図
fig.176 調査区配置図
fig.177 絵図に残る兵庫城と今回の調査地位置図および既存調査成果
fig.178 調査区北壁土層断面
fig.179 第1遺構面遺構配置図
fig.180 SB11 礎石配置図
fig.181 1区第1遺構面全景（南東から撮影）
fig.182 1区陣屋溝埋め立て状況（北西から撮影）
fig.183 2区第1遺構面全景（北東から撮影）
fig.184 2区第1遺構面下層検出状況（北東から撮影）
22. 兵庫津遺跡第87次調査
fig.185 調査地位置図
fig.186 調査区配置図
fig.187 各調査区土層断面図および遺構配置図
23. 兵庫津遺跡第88次調査
fig.188 調査地位置図
fig.189 調査区配置図
fig.190 調査区西壁土層断面
fig.191 第1遺構面遺構配置図
fig.192 第1遺構面完掘状況（北から撮影）
fig.193 第2遺構面遺構配置図
fig.194 第2遺構面完掘状況（南から撮影）
fig.195 第2遺構面耕作痕断面（北から撮影）
fig.196 調査区西壁土層断面（東から撮影）
fig.197 第3遺構面遺構配置図
fig.198 第3遺構面完掘状況（北から撮影）
24. 長田神社境内遺跡第19次調査
fig.199 調査地位置図
fig.200 調査区配置図
fig.201 調査区土層断面
fig.202 第1遺構面（左）と第2遺構面（右）の遺構配置図
fig.203 SX02 出土大洞系土器実測図・顕微鏡写真
fig.204 1区第1遺構面全景（南東から撮影）
fig.205 2区第1遺構面全景（北西から撮影）
fig.206 2区 SP10 土層断面（南東から撮影）
fig.207 2区第2遺構面全景（北西から撮影）
25. 二葉町遺跡第24次調査
fig.208 調査地位置図
fig.209 調査区配置図
fig.210 遺構面遺構配置図・調査区東壁土層断面図
fig.211 南区遺構面全景（北から撮影）
fig.212 北区遺構面全景（南から撮影）
fig.213 SD01 土層断面（西から撮影）
26. 松野遺跡第46次調査
fig.214 調査地位置図
fig.215 調査区配置図
fig.216 調査区東壁土層断面
fig.217 第1遺構面遺構配置図
fig.218 第2遺構面遺構配置図
fig.219 第1遺構面全景（北から撮影）
fig.220 第2遺構面全景（北から撮影）
fig.221 SD 201 土層断面（南から撮影）
fig.222 調査区東壁土層（西から撮影）
27. 戒町遺跡第71次調査
fig.223 調査地位置図
fig.224 調査区配置図
fig.225 上段：2区北壁土層断面・
下段：2区南壁土層断面（S = 1 / 60）

図版目次

fig.226	第 1 遺構面遺構配置図	fig.270	P 3 遺構配置図・東壁土層断面
fig.227	第 2 遺構面遺構配置図	fig.271	P 4 遺構配置図・西壁土層断面
fig.228	第 3 遺構面遺構配置図	fig.272	P 5 遺構配置図・西壁土層断面
fig.229	第 3 遺構面土器群出土状況	fig.273	P 6 遺構配置図・東壁土層断面
fig.230	1 区第 1 遺構面足跡検出状況（西から撮影）	fig.274	P 7 南壁土層断面
fig.231	2 区第 2 遺構面遺物出土状況（南東から撮影）	fig.275	P 8 遺構配置図・西壁土層断面
28. 戎町遺跡第 72 次調査		fig.276	P 9 遺構配置図・西壁土層断面
fig.232	調査地位置図	fig.277	P 10 遺構配置図・西壁土層断面
fig.233	調査区配置図	fig.278	P 11 東壁土層断面
fig.234	調査区北壁土層断面	fig.279	P 12 遺構配置図・西壁土層断面
fig.235	調査区東壁土層断面	fig.280	P 13 北壁土層断面
fig.236	第 1 遺構面遺構配置図	fig.281	P 14 遺構配置図・西壁土層断面
fig.237	第 2 遺構面遺構配置図	fig.282	P 15 東壁土層断面
fig.238	第 3 遺構面図化場所位置図	33. 新方遺跡第 55 次調査	
fig.239	6・7 区第 3 遺構面遺構配置図	fig.283	調査地位置図
fig.240	下層トレンチ配置図	fig.284	調査区配置図
fig.241	7 区南トレンチ 第 4 遺構面遺構配置図	fig.285	調査区土層断面図
fig.242	7 区南トレンチ 第 4 遺構面土器出土状況	fig.286	1 区北第 1 遺構面遺構配置図
fig.243	7 区遺構面検出状況（西から撮影）	fig.287	1 区 SP109～111 遺物出土状況
fig.244	5 区第 2 遺構面全景（南西から撮影）	fig.288	1 区北第 1 遺構面北側遺物出土状況
fig.245	6 区東側第 2 遺構面全景（北西から撮影）	fig.289	1 区南第 1 遺構面遺構配置図
29. 大田町遺跡第 23 次調査		fig.290	SP117・118・127 土層断面
fig.246	調査地位置図	fig.291	SD102 北側遺物・礫出土状況
fig.247	調査区配置図	fig.292	2 区第 1 遺構面遺構配置図・土層断面図
fig.248	1 区遺構面遺構配置図・土層断面図	fig.293	第 19 次・第 20 次・第 54 次・第 55 次 調査遺構配置図
fig.249	2 区遺構面遺構配置図・土層断面図	fig.294	1 区南第 1 遺構面完掘状況（北東から撮影）
fig.250	2 区遺構面完掘状況（東から撮影）	fig.295	トレンチ北の南半全景（北東から撮影）
30. 出合遺跡第 57・58 次調査		34. 延命寺古墳第 1 次調査	
fig.251	調査地位置図	fig.296	調査地位置図
fig.252	第 57 次調査 調査区土層断面模式図（断面幅は縮尺任意）	fig.297	造成前の調査地周辺の古墳分布図（ $S = 1/5000$ ）
fig.253	第 58 次調査 調査区土層断面模式図（断面幅は縮尺任意）	fig.298	調査地周辺区画図（ $S = 1/400$ ）
fig.254	第 57 次調査 第 2 遺構面遺構配置図・流路断面図	fig.299	墳丘測量図（ $S = 1/150$ ）
fig.255	第 58 次調査 第 2 遺構面遺構配置図	fig.300	箱式石棺検出状況平面図
31. 今津遺跡第 27 次調査		fig.301	箱式石棺平面図・断面図
fig.256	調査地位置図	fig.302	調査地現況（北から撮影）
fig.257	調査区土層断面図	fig.303	墳丘断面検出状況（北東から撮影）
fig.258	第 1 遺構面遺構配置図	fig.304	主体部検出状況（東から撮影）
fig.259	第 2 遺構面遺構配置図	fig.305	主体部埋土堆積状況（東から撮影）
fig.260	3 区南壁土層断面（北東から撮影）	fig.306	主体部床面検出状況（西から撮影）
fig.261	9 区北壁土層断面（南東から撮影）	Ⅲ. 令和元（2019）年度実施の確認調査	
fig.262	13 区 SD102 土層断面（南から撮影）	1. 住友家須磨別邸跡第 1 次調査	
fig.263	5 区流路 1 西掘形土層断面（北西から撮影）	fig.307	調査地位置図
fig.264	7 区流路 1 東掘形土層断面（北東から撮影）	fig.308	調査区配置図
fig.265	11 区北壁土層断面（南東から撮影）	fig.309	1 トレンチ平面図・断面図
32. 新方遺跡第 54 次調査		fig.310	2 トレンチ平面図
fig.266	調査地位置図	fig.311	3 トレンチ平面図
fig.267	調査区配置図	fig.312	4 トレンチ断面図
fig.268	P 1 東壁土層断面	fig.313	5 トレンチ断面図
fig.269	P 2 東壁土層断面	fig.314	調査地全体平面図
		fig.315	1 トレンチ煉瓦壁検出状況（西から撮影）

表目次

表 1	文化財保護法に基づく届出・通知等の件数一覧	表 9	考古資料の特別利用一覧
表 2～4	令和 2（2020）年度埋蔵文化財発掘調査一覧	表 10	考古資料の掲載・調査成果の公表一覧
表 5	令和 2（2020）年度埋蔵文化財整理事業一覧	表 11～13	画像データ等の貸出一覧
表 6	発掘調査面積（単位：㎡）	表 14	企画展
表 7	発掘調査対象面積別件数	表 15	歴史講演会・ワークショップ
表 8	考古資料の館外貸出一覧	表 16	こうべ考古学

I. 令和2（2020）年度の事業概要

1. 事業体制

神戸市文化スポーツ局文化財課は、令和2（2020）年4月1日に組織改正で新たに設立された部局である。昨年度までは教育委員会事務局に属していたが、今年度から市長部局へ異動した。

文化財課の体制は、埋蔵文化財係と文化財保護活用係の2係体制で文化財の保護と活用を担っている。埋蔵文化財係では、市役所文化財課と埋蔵文化財センターで以下の業務を分担している。

- ① 市役所文化財課が担当する主な業務
 - i 埋蔵文化財分布図の更新と埋蔵文化財包蔵地の照会対応
 - ii 文化財保護法に基づく届出・通知の指導事務
 - iii 試掘調査・工事立会
 - iv 本発掘調査の受託事業および補助金を適用した発掘調査に関わる調整事務
 - v 史跡の保護・管理・活用
 - vi 係内庶務
- ② 埋蔵文化財センターが担当する主な業務
 - i 遺構・遺物の保存・修復・復元に関する調査研究
 - ii 遺構・遺物の管理・保管・活用に関する調査研究
 - iii 本発掘調査で作成した記録（写真・図面等）の整理・管理・保管・活用
 - iv 企画展示・体験学習・出張講座・歴史講演会・地域連携事業等の普及啓発
 - v 収蔵資料の借用対応および調査研究に関わる資料調査対応
 - vi 施設管理

2. 開発指導

周知の埋蔵文化財包蔵地内で土木工事等を実施する場合は、文化財保護法第93条に基づく届出、同法第94条に基づく通知（以下、届出・通知と称す）が必要である。届出・通知の提出は、建築確認申請に伴う事前届出書の閲覧、神戸市各局が所管する事業を照会することで、事業者へ促している。

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧

No.	内 容	件 数	比率
1	発見・発掘届	639 件	100%
	i 民間の事業に伴う発掘届(第93条)	580 件	91%
	ii 公共の事業に伴う発掘通知(第94条)	59 件	9%
	iii 発見届・発見通知（第92・96・97条）	0 件	0%
2	開発行為事前審査等各種申請	97 件	
3	試掘調査(依頼件数)	73 件	100%
4	発掘調査(大規模確認調査も含む)	37 件	100%
	i 民間事業に伴う発掘調査	31 件	84%
	ii 公共事業に伴う発掘調査	6 件	16%
5	工事立会（解体立会・施工立会）	74 件	
6	整理作業	4 件	

届出・通知を含む文化財関係の情報管理は、神戸市埋蔵文化財情報管理システムを本庁で運用して行っている。同システムは、平成 11（1999）年度に開発・導入し、平成 18（2006）年度から Q G I S に入れ替えて同システムを運用している。届出・通知等に係る各種回答の作成は、同システムを使って発行しているため、担当職員相互で情報共有ができ、事業者に対して円滑な指導・調整を実施している。

令和 2（2020）年度の文化財保護法に基づく届出・通知件数の内訳は、表 1 を参照いただきたい。

文化財保護法第 93 条・第 94 条の件数は 639 件（前年度 703 件）であり、このうち、民間事業者・個人による同法第 93 条の件数が 580 件（前年度 649 件）、公共事業による同法第 94 条の件数が 59 件（前年度 53 件）であった。

開発行為事前審査申出書の件数は 97 件（前年度 106 件）、試掘調査の依頼件数は 73 件（前年度 110 件）であった。

以上のように届出等の件数は、前年度比でみると減少傾向にある。令和 2（2020）年度から本格的に流行した新型コロナウイルス感染症の影響もあり、ホームページ上では来庁による届出の提出を極力控えてもらい、郵送の提出を依頼した。

埋蔵文化財包蔵地の照会については、これまで窓口とファックスによる照会に対応してきた。新型コロナウイルス感染症が流行し、政府から外出自粛要請が発令されたことも影響し、窓口での照会対応が困難となった。そのような社会情勢を受け、神戸市情報マップ (<https://www2.wagmap.jp/kobecity/PositionSelect?mid=70>) に埋蔵文化財包蔵地を公開することとした。公開している埋蔵文化財包蔵地は、1 / 2,500 ～ 1 / 500,000 の縮尺で確認することができる。

3. 埋蔵文化財調査事業

令和 2（2020）年度に実施した埋蔵文化財調査事業は、調査事業 39 件（表 2 ～ 4）、調査成果整理事業 5 件（表 5）で、左記に要した経費の総額は、281,600 千円であった。

① 国庫補助事業

個人が住宅を建設する場合と文化財課が定める基準に適合する個人事業者および零細事業者の場合は、発掘調査に係る費用を補助事業として実施し、規程と基準により公費を充当している。令和 2（2020）年度の緊急発掘調査事業の調査事業費総額は、31,232 千円であった。

② 市内遺跡発掘調査事業

令和 2（2020）年度の発掘調査対象面積は、合計 11,609 m²（前年度 13,084 m²）である。各遺構面の調査面積を含めた延べ調査面積は、合計 17,323 m²（前年度 19,360 m²）であった。このうち、公共事業が合計 6,831 m²（延べ調査面積合計 9,057 m²）で、民間事業が合計 4,778 m²（延べ調査面積合計 8,266 m²）であった。前年度に比べて、発掘調査対象面積と公共事業が減少し、民間事業が増加している（表 2 ～ 4）。

発掘調査対象面積を面積別でみると、300 m²以下の発掘調査が全体の 8 割近くを占め、301 m²を超える発掘調査が全体の 2 割強という割合となっている。これは、小規模面積の発掘調査が多く、大規模面積の発掘調査が少ないことを示している（表 6）。

最後に、発掘調査にかかった期間を面積別にみていく（表7）。発掘調査面積が300㎡以下で発掘調査にかかった期間は、最長2.5ヵ月、最短1日、平均1ヵ月であった。発掘調査面積が301㎡以上で発掘調査にかかった期間は、翌年度に継続となる発掘調査を除くと、最長5.5ヵ月、最短1.5ヵ月、平均3ヵ月であった。

表2 令和2（2020）年度埋蔵文化財発掘調査一覧

	遺跡名 調査回数	所在地	調査担当者	調査対象 面積㎡	延べ調査 面積㎡	調査 開始日	調査 終了日	調査内容	調査原因
1	郡家遺跡 第96次調査	東灘区御影2丁目317-4	池田 毅	6	6	2020 4.9	2020 4.9	古墳時代中期の落ち込み状遺構、古墳時代以降のピット、弥生土器後期と平安時代の遺物を確認。	個人住宅建設
2	郡家遺跡 第97次調査	東灘区御影中町4丁目1-8	萱原 朋奈	49	49	2020 10.19	2020 11.20	古墳時代の土坑とピット、柵列の可能性あるピットを検出。土馬の可能性ある土製品が出土。	保育所 擁壁改修工事
3	岡本東遺跡 第3次調査	東灘区岡本7丁目30番2他	石島 三和	890	890	2020 11.9	2021 2.25	弥生時代の竪穴建物と平安時代の掘立柱建物と柵列を検出。	介護施設建設
4	森北町遺跡 第31次調査	東灘区森北町4丁目17番-8	石島 三和	210	210	2020 8.28	2020 10.9	中世以降の土石流堆積層を検出。	共同住宅建設
5	北青木遺跡 第9次調査	東灘区北青木1丁目・2丁目、深江北町5丁目	内藤 俊哉 田島 靖大 萱原 朋奈	2,080	2,080	2020 11.5	2021 3.31	弥生時代中期の方形周溝墓と土器埋納遺構、奈良～平安時代の河道の護岸施設を検出。	鉄道立体交差工事
6	深江北町遺跡 第18次調査	東灘区深江北町1丁目28番・30番	佐伯 二郎	19	19	2020 4.6	2020 4.9	平安時代の水田畦畔を検出。	共同住宅建設
7	深江北町遺跡 第19次調査	東灘区深江北町2丁目1	内藤 俊哉 田島 靖大 萱原 朋奈	380	380	2021 1.13	2021 3.12	弥生時代の浜提とその周囲に広がる湿地、古代～中世に耕作地となった土地利用の変遷を把握。	鉄道立体交差工事
8	住吉宮町遺跡 第56次-a調査	東灘区住吉宮町7丁目2番6号	小野寺洋介	310	1,060	2021 3.1	2021 3.31	弥生時代～飛鳥時代の遺構面を検出。調査は次年度へ継続。	保育園 舎増設工事
9	岡本北遺跡 第15次調査	東灘区西岡本5丁目41-1	石島 三和	380	380	2020 10.6	2020 11.30	弥生時代後期の竪穴建物、中世の土石流、古墳時代の可能性ある竪穴建物を検出。	宅地造成工事
10	魚崎郷古酒蔵群 第5次調査	東灘区魚崎南町3丁目607番1	荒田 敬介	18	18	2021 1.25	2021 1.29	明治～昭和時代の列石、暗渠、大甕（便所甕）を検出。龍一銭銅貨が出土。	個人住宅建設
11	篠原遺跡 第41次調査	灘区篠原北町1丁目11-8	佐伯 二郎	200	295	2020 12.2	2021 1.18	弥生時代中期後葉～後期前葉の土坑・ピット・溝、室町時代の遺物包含層と遺構面を検出。	店舗付 共同住宅建設
12	旧三の宮駅構内遺跡 第7次調査	中央区北長狭通4丁目3番10、11、1	小野寺洋介	91	91	2021 2.2	2021 2.22	平安時代後期～鎌倉時代の土坑・柵列・ピットを検出。古墳時代後期の円筒埴輪片、12世紀後半～13世紀前葉の青磁皿が出土。	共同住宅建設
13	雲井遺跡 第42次調査	中央区琴ノ緒町1丁目385番	佐伯 二郎	9	18	2020 4.14	2020 4.16	古墳時代後期の須恵器、平安時代のピットと溝を検出。	共同住宅建設

表3 令和2（2020）年度埋蔵文化財発掘調査一覧

	遺跡名 調査回数	所在地	調査担当者	調査対象 面積 m ²	延べ調査 面積 m ²	調査 開始日	調査 終了日	調査内容	調査原因
14	雲井遺跡 第43次調査	中央区旭通2丁目360番2、362番2	加納大 誉	95	190	2021 1.6	2021 1.29	飛鳥時代の竪穴建物・カマド・溝を検出。	個人住宅建設
15	日暮遺跡 第49次調査	中央区日暮通4丁目380番、381番	山口英正 田島靖大 萱原朋奈	233	525	2020 5.7	2020 6.5	11世紀後半以前の遺構面、11世紀後半の掘立柱建物・集石遺構・溝・落ち込み状遺構、11世紀後半以降の遺構面を検出。	共同住宅建設
16	日暮遺跡 第50次調査	中央区日暮通1丁目309	浅谷誠吾	200	200	2020 10.7	2020 11.12	8～9世紀の溝・落ち込み状遺構を検出。	共同住宅建設
17	下山手遺跡 第7次調査	中央区下山手通8丁目15番8、15番9	藤井太郎	320	320	2021 1.25	2021 3.5	平安～鎌倉時代の可能性がある集石・土坑・ピット、近世～近代の土坑・ピット・石抜き取り痕・井戸を検出。	共同住宅建設
18	雪御所遺跡 第5次調査	兵庫区雪御所町4番、5番1、28番3、28番4	山口英正 加納大 誉	1,446	2,892	2020 9.24	2021 3.11	弥生時代後期～古墳時代中期中葉の竪穴建物、平安時代後期の溝と土坑を検出。	小学校跡地活用事業
19	夢野南遺跡 第1次－a調査	兵庫区湊川町6丁目13番3、14番1、14番5、15番2、15番3	佐伯二郎	450	450	2021 3.22	2021 3.31	古墳時代の遺構面を検出。旧遺跡名）兵庫区No.17遺跡。調査は次年度へ継続。	介護施設建設
20	楠・荒田町遺跡 第64次調査	兵庫区荒田町1丁目6-8、6-9、6-27	荒田敬介	21	21	2020 8.11	2020 8.12	鎌倉時代～平安時代にあたる可能性がある遺構面を検出。	共同住宅建設
21	兵庫津遺跡 第84次－b調査	兵庫区三川口町1丁目1-61・62	浅谷誠吾 加納大 誉	220	1,180	2020 4.1	2020 6.12	室町～安土・桃山時代の遺構面、江戸時代の遺構面を検出。	共同住宅建設
22	兵庫津遺跡 第85次調査	兵庫区船大工町50番、52番1、52番2、53番、54番	佐伯二郎 萱原朋奈	180	720	2020 6.18	2020 8.18	17世紀末～19世紀の町屋・溝・炭溜遺構等を検出。	共同住宅建設
23	兵庫津遺跡 第86次調査	兵庫区切戸町5-14	内藤俊哉	90	150	2020 8.11	2020 9.18	近世後期以降の礎石建物と集石遺構、江戸時代後期～幕末頃の兵庫陣屋堀跡と堀の埋め立て痕跡等を検出。	個人住宅建設
24	兵庫津遺跡 第87次調査	神戸市兵庫区七宮町2丁目2-1、2-2、2-28、2-29	荒田敬介	5	5	2020 11.9	2020 11.10	16世紀後半～17世紀前半の遺構面を検出。	事務所建設
25	兵庫津遺跡 第88次調査	兵庫区東柳原町1番27、28	浅谷誠吾	210	630	2020 11.18	2020 12.15	古墳時代前期の遺構面、16世紀後半～17世紀前半の畑地、18世紀以降の土坑を検出。	共同住宅建設
26	長田神社境内遺跡 第19次調査	長田区六番町7丁目2番9	内藤俊哉 田島靖大	100	200	2020 6.22	2020 7.31	弥生時代後期～庄内式併行期の遺構面、奈良時代～中世の掘立柱建物等を検出。縄文時代晩期の土器、石鏃、サヌカイト片が出土。	介護施設建設
27	二葉町遺跡 第24次調査	長田区二葉町7丁目2番2	浅谷誠吾	100	100	2020 7.16	2020 8.7	中世前期の遺構面を検出。	共同住宅建設

表4 令和2（2020）年度埋蔵文化財発掘調査一覧

	遺跡名 調査回数	所在地	調査担当者	調査対象 面積㎡	延べ調査 面積㎡	調査 開始日	調査 終了日	調査内容	調査原因
28	松野遺跡 第46次調査	長田区若松町7-1-23	浅谷 誠 吾	250	500	2021 2.15	2021 3.18	古墳時代後期の溝・ピット・土坑、中世前期の鋤溝群を検出。	中学校 プール 建設
29	戎町遺跡 第71次調査	須磨区飛松町2丁目3番1の一部、3番2の一部、3番53、3番64、4番30	山口 英 正	200	600	2020 4.1	2020 4.15	中世～近世の湿地上位堆積と溝、中世の自然流路、弥生時代中期後半の遺構面を検出。	複合施設 建設
30	戎町遺跡 第72次調査	須磨区戎町3丁目7番5・6・12・13	藤井 太 郎 小野寺 洋 介	212	480	2020 5.25	2020 8.14	弥生時代前期末～中期初頭の遺構面と炭化米、弥生時代中期の遺構面、弥生時代中期～庄内式併行期の遺構面、庄内式併行期～古墳時代後期の遺構面を検出。	共同住宅 建設
31	大田町遺跡 第23次調査	須磨区大田町6丁目4-30	佐伯 二 郎	26	26	2020 5.18	2020 5.22	古代の土坑・柱穴・溝を検出。古墳時代後期の須恵器、古代の土師器等も出土。	共同住宅 建設
32	出合遺跡 第57次調査 試掘調査	西区王塚台5丁目70番2の一部（9号地）	小野寺 洋 介	18	36	2020 7.20	2020 7.22	鎌倉～平安時代の遺構面を検出。	個人住宅 建設
33	出合遺跡 第58次調査 試掘調査	西区王塚台5丁目70番8	小野寺 洋 介	11	21	2020 7.27	2020 7.28	鎌倉～平安時代の遺構面を検出。	個人住宅 建設
34	出合遺跡 第59次調査 確認調査	西区平野町中津（吉田池）	小野寺 洋 介	220	220	2020 8.25	2020 8.26	5世紀後半の古墳。円筒埴輪が樹立した状態で残存。調査は次年度へ継続。	確認調査
35	今津遺跡 第27次調査	西区玉津町今津384番	山口 英 正 加納 大 誉	96	96	2020 11.25	2020 12.11	弥生時代の耕作土、古墳時代以降の溝と流路を検出。	污水管 移設工 事
36	新方遺跡 第54次調査	神戸市西区玉津町新方字北方331番1の一部、332番1、332番8の一部、332番9、332番10、333番の一部、337番1、336番2の一部、337番1地先水路の一部	藤井 太 郎 小野寺 洋 介	50	50	2020 4.10	2020 5.15	弥生～古墳時代の遺構、中世の遺構を検出。	店舗建設
37	新方遺跡 第55次調査	同上	藤井 太 郎 小野寺 洋 介	130	130	2020 4.21	2020 5.14	古墳時代中期～後期の遺構面、平安時代後期の遺構面を検出。	店舗建設
38	延命寺古墳 第1次調査	西区白水丁目417番8	山口 英 正 内藤 俊 哉 田島 靖 大 加納 大 誉	85	85	2020 7.8	2020 8.20	古墳時代中期の古墳。地山削り出しの墳丘で、箱式石棺を主体部とする。	宅地造成 工事
39	城ヶ谷遺跡 第4次調査	西区樫谷町菅野169-1他	山口 英 正	2,000	2,000	2021 1.14	2021 3.31	弥生時代中期末～後期前半の高地性集落。調査は次年度へ継続。	道路建設
				調査対象面積合計㎡		11,609			
				延べ調査面積合計㎡		17,323			

表5 令和2（2020）年度埋蔵文化財整理事業一覧

	遺跡名 調査回数	調査担当者	整理 開始日	整理 終了日	事業内容	調査原因
1	篠原遺跡 第40次調査	藤井太郎 加納大侑 山田侑生	2020 5.1	2021 3.31	出土遺物整理・発掘調査記録整理・報告書作成（令和3（2021）年3月刊行）	共同住宅建設
2	雲井遺跡 第41次調査	石島三和 山田侑生	2020 4.2	2021 3.29	出土遺物整理・発掘調査記録整理・報告書作成（令和3（2021）年3月刊行）	共同住宅建設
3	兵庫津遺跡 第79次調査	藤井太郎 山田侑生	2020 5.1	2021 3.31	出土遺物整理・発掘調査記録整理・報告書作成（令和3（2021）年3月刊行）	共同住宅建設
4	松原城跡 第1次調査	佐伯二郎 山田侑生 小野寺洋介 田島靖大 萱原朋奈	2020 5.1	2021 3.31	出土遺物整理・発掘調査記録整理・報告書作成（令和3（2021）年3月刊行）	共同住宅建設
5	旧ドレウエル邸 第1次調査	藤井太郎	2020 4.1	2021 3.31	出土遺物整理・発掘調査記録整理・報告書作成（令和3（2021）年3月刊行）	市認定伝統的建造物群保存修理工事

表6 発掘調査面積（単位：㎡）

	合計	公共事業関係	民間事業関係
調査対象面積 ㎡	11609	6831 59%	4778 41%
延べ調査面積 ㎡	17323	9057 52%	8266 48%

表7 発掘調査対象面積別件数

調査面積	件数	比率
0 ～ 100㎡	18 件	46%
101㎡ ～ 300㎡	12 件	31%
301㎡ ～ 500㎡	5 件	13%
501㎡ ～ 1000㎡	1 件	3%
1001㎡ ～ 2000㎡	2 件	5%
2001㎡ ～ 5000㎡	1 件	3%
5000㎡ ～	0 件	0%
合計	39 件	100%

③ 現地説明会

埋蔵文化財調査の公開事業の一環として開催する現地説明会は、新型コロナウイルス感染症流行のため、実施できる環境になかった。

④ 刊行物の一般公開

刊行済みの発掘調査報告書、埋蔵文化財年報等については、準備の整ったものから独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所が代表機関として管理・運用している「全国遺跡報告総覧」（<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja>）で公開している。

4. 指定文化財（考古資料）

令和2（2020）年に神戸市指定有形文化財（考古資料）として登録されたのは、以下の3件である。委細は、神戸市（編・刊行）2022『令和元・2年度神戸市指定文化財調査報告書』を参照いただきたい。

① 祇園遺跡出土玳瑁釉小碗 附同遺跡第3次調査出土貿易陶磁器 18点

祇園遺跡は、天王谷川東岸に広がる扇状地上に立地する縄文時代～室町時代までの複合遺跡である。祇園遺跡を含む近隣一帯は、平家一門の別邸や「福原京」の中心域にあたりとみられている。本資料は、平成6（1994）年度に個人住宅建設に伴う発掘調査で出土した小碗である。南宋時代に中国江西省の吉州窯で生産されたもので、釉薬の拡がりや亀の甲羅（鱗甲）模様に似ていることから、玳瑁（たいまい）と名付けられている。12世紀後半の遺物とともに出土しており、玳瑁盞（たいひさん）あるいは鼈盞（べっさん）と称す

る天目茶碗の中でも古く位置づけられる。貴族を中心とする喫茶文化が広がる前に日宋貿易を通じて入手されたとみられ、平氏の栄華を象徴する奢侈品として重要な意義をもつ。

② 高津橋大塚古墳出土品一括

高津橋大塚古墳は、西区白水1丁目に所在する4世紀後半～5世紀初頭の円墳である。平成7・8（1995・1996）年度に実施された神戸市白水特定土地地区画性事業に伴って高津橋大塚遺跡が発掘調査され、その際に円墳が確認された。指定対象は、高津橋大塚古墳主体部棺内出土品「捩文鏡（変形四獣鏡）」1点、「滑石製勾玉」2点、「滑石製管玉」30点、「滑石製白玉」279点である。平成12（2000）年3月に『白水遺跡第3・6・7次 高津橋大塚遺跡第1・2次発掘調査報告書』が刊行されており、伊川流域に形成された古墳の首長系譜が追える資料として重要な位置を占めることから、この度指定となった。

③ 史跡五色塚古墳・小壺古墳出土品追加指定

五色塚古墳・小壺古墳は、垂水区五色山4丁目に所在する4世紀後半の前方後円墳である。昭和40（1965）年から昭和50（1975）年まで発掘調査が行われた。平成22（2010）年3月19日には、史跡五色塚古墳・小壺古墳出土品一括（408点）が神戸市有形文化財（考古資料）に指定され、平成24（2012）年9月6日には、市指定有形文化財（考古資料）408点のうち、79点に新たに加えた1点を追加した80点が「兵庫県五色塚古墳出土品」として国の重要文化財に指定された。今回追加した指定対象は、「碧玉製合子」1点、「滑石製子持勾玉」4点、「須恵器」3点、「滑石製白玉」1点である。

碧玉製合子は、五色塚古墳の墳丘上で表面採取されたもので、西谷真治氏の論文「古墳出土の盒」『考古学雑誌』第55巻第4号 日本考古学会（1970年刊行）で紹介されている。平成18（2006）年刊行の『史跡五色塚古墳・小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』に掲載されていなかったが、この度、所有していた清水広太郎氏の遺族から神戸市へ寄贈の申し出があったため、受け入れた。

滑石製品と須恵器は、墳丘くびれ部付近と周溝付近から出土したものである。いずれも6世紀代に比定されるものであり、墳丘が築造された後も五色塚古墳で祭祀が行われていたことを示す重要な資料と位置づけられる。

5. 刊行物

令和2（2020）年度に刊行した刊行物は、下記のとおりである。

① 令和3（2021）年1月刊行

神戸うつりかわる町とくらし～昭和ノスタルジー～ 頒価 無料

② 令和3（2021）年3月刊行

篠原遺跡第40次発掘調査報告書	頒価 1,600 円
雲井遺跡第41次発掘調査報告書	頒価 900 円
旧ドレウェル邸（ラインの館）保存修理工事報告書	頒価 6,500 円
兵庫津遺跡第79次発掘調査報告書	頒価 1,000 円
兵庫津遺跡第84次調査発掘調査報告書	頒価 1,000 円
松原城跡発掘調査報告書	頒価 2,200 円
戎町遺跡第72次発掘調査報告書	頒価 1,600 円
神戸市埋蔵文化財分布図	頒価 500 円

6. 埋蔵文化財公開活用事業

① 考古資料の調査・整理・保管および特別利用等

埋蔵文化財センターでは、発掘調査業務の一環として出土遺物の復元・修復作業および金属製品・木製品等の保存科学的処置ならびに、発掘調査報告書の編集作業を行っている。修復・調査作業の完了した遺物および写真・図面等の記録類は、主として埋蔵文化財センターにおいて保管している。これらの資料は当センターでの活用のみではなく、他の文化財公開施設や個人研究者等に対し、特別利用の機会を広く提供している。令和2（2020）年度における資料の特別利用は表8～13のとおりである。

② 埋蔵文化財センターにおける公開活用事業

埋蔵文化財センターでは、展示や体験講座等、広く市民への公開活用事業を行っているが、新型コロナウイルスまん延防止策により、令和2（2020）年3月から5月にかけて臨時休館とした。そのため当年度の入館者数は14,477人に留まり、30,000人を超えていた例年を大きく下回った。

表8 考古資料の館外貸出一覧

No	申請者	利用目的・内容	資料名	資料 点数
1	兵庫県立考古博物館	特別展『弥生時代って知ってる？－2,000年前のひょうごー』	大開遺跡出土 太形蛤刃石斧・石包丁・斧柄・柄杓未成品・鋤・鍬・炭化米・人骨 新方遺跡出土 磨製石剣 雲井遺跡出土 玉作り関連資料 桜ヶ丘4号銅鐸復元品・鋳型	31
2	吉野ヶ里公園管理センター	特別企画展『よみがえる邪馬台国－倭人伝の国を探る2－』	北青木遺跡出土 銅鐸 新方遺跡出土 鹿角製指輪・弥生土器・铸造鉄斧 玉津田中遺跡出土 木製器台・銅鍬・弥生土器	23
3	舞鶴市立赤れんが博物館	赤れんが博物館常設展示	旧神戸外国人居留地煉瓦造下水道出土 横ぜり・煉瓦	3
4	兵庫県立考古博物館	特別展『兵庫ゆかりの武将たち－明智光秀とその時代－』	花隈城跡出土 瓦	2
5	明石市	明石市立文化博物館企画展『発掘された明石の歴史展』	旧神戸外国人居留地煉瓦造下水道出土 瓦・煉瓦 祇園遺跡出土 軒丸瓦・軒平瓦 二葉町遺跡出土 船材 垂水日向遺跡出土 青磁・白磁・須恵器・土師器・切り取り（漣痕）・剥ぎ取り（足跡）	23
6	神戸市立博物館	特別展『つなぐTSUNAGU』	西求女塚古墳出土 青銅鏡（6号・7号・9号）	3
7	高槻市	高槻市立今城塚古代歴史館特別展『安満遺跡と近畿の弥生時代』	大開遺跡1次出土 弥生土器・石棒 大開遺跡14次出土 炭化米 本山遺跡17次出土 弥生土器・木製品 本山遺跡33次出土 木製品	17
8	国立歴史民俗博物館	DNA解析調査	大開遺跡14次調査出土 人骨（白歯） 舞子浜遺跡8次出土 1号棺人骨（白歯） 新方遺跡出土 1号人骨遊離片	3

表9 考古資料の特別利用一覧

No	申請者	利用目的・内容	資料名	資料 点数
1	個人	学術研究	深江北町遺跡出土 木皿 本庄町遺跡出土 木皿	20
2	個人	学術研究	湯山遺跡出土 瓦	—
3	個人	学術研究	柿谷1号墳出土 埴輪 新内古墳出土 埴輪	—
4	兵庫県立考古博物館	企画展『ひょうごゆかりの武将たち—明智光秀とその時代—』にかかる資料調査	花隈城跡出土 瓦	2
5	個人	個人研究	兵庫津遺跡51次出土 マイマイ類遺体 兵庫津遺跡62次出土 二枚貝遺体 兵庫津遺跡69次出土 腹足綱遺体	24
6	個人	個人研究	北青木遺跡出土 銅鐸 本山遺跡出土 銅鐸 西神ニュータウンNo.65遺跡出土 銅鐸鑄型未成品 雲井遺跡出土 武器形青銅器鑄型 楠・荒田町遺跡出土 石製鑄型 篠原遺跡出土 小形仿製鏡 長田神社境内遺跡出土 小形仿製鏡 松本遺跡出土 小形仿製鏡 新方遺跡出土 小形仿製鏡	9
7	個人	修士論文執筆	白水遺跡出土 製塩土器 吉田南遺跡出土 土師器・製塩土器	21
8	個人	論文執筆	本山遺跡出土 弥生土器 大開遺跡出土 弥生土器 新方遺跡出土 弥生土器	44
9	明石市	明石市立文化博物館企画展『発掘された明石の歴史展』にかかる資料調査	旧神戸外国人居留地煉瓦造下水道出土 瓦 祇園遺跡出土 軒丸瓦・軒平瓦 二葉町遺跡出土 船材 垂水日向遺跡出土 青磁・白磁・須恵器・ 土師器・切り取り（漣痕）・ 剥ぎ取り（足跡）	20
10	個人	個人研究	西岡本遺跡3次出土 須恵器・土師器・土錘	15
11	個人	修士論文・卒業論文執筆	北青木遺跡出土 弥生土器 雲井遺跡出土 弥生土器 大手町遺跡出土 弥生土器	95
12	高槻市	高槻市立今城塚古代歴史館特別展『安満遺跡と近畿の弥生時代』にかかる資料調査	大開遺跡出土 弥生土器・石棒・炭化米 本山遺跡出土 木製品・弥生土器	14
13	高槻市	高槻市立今城塚古代歴史館特別展『安満遺跡と近畿の弥生時代』にかかる資料写真撮影	大開遺跡出土 弥生土器・石棒・炭化米 本山遺跡出土 木製品・弥生土器	17
14	吹田市立博物館	特別展「新芦屋古墳—被葬者の謎に迫る—」にかかる資料調査	高塚山古墳群8号墳出土資料	1式
15	個人	個人研究	西求女塚古墳出土 青銅鏡 白水瓢塚古墳出土 青銅鏡 塩田北山東古墳出土 青銅鏡	14

表 10 考古資料の掲載・調査成果の公表一覧

No	申請者	利用目的・内容	資料名	資料 点数
1	個人	『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』 六一書房刊行	西求女塚古墳出土 青銅鏡（9号） 塩田北山東古墳出土 青銅鏡	2
2	個人	「石釧の穿孔技術研究試論－内孔形状の定量分析をもとに－」『月刊考古学ジャーナル』 ニュー・サイエンス社刊行	白水瓢塚古墳出土 腕輪形石製品	1
3	国立加耶文化財研究所	『加耶資料叢書 日本の中に加耶 資料編』	郡家遺跡出土 陶質土器	1
4	個人	「中世末期播磨・機内における瓦工人系統再考」 『考古学研究』 考古学研究会刊行	端谷城跡出土 瓦 花隈城跡出土 瓦	1 式
5	個人	黒川古文化研究所・研究図録シリーズ7『和鏡賞鑑－図像でたどる千歳のねがい－』総説	滝ノ奥遺跡（経塚）出土 和鏡（7号）	1
6	個人	「遠賀川系土器の黒色物塗布技法の成立と展開」 『古文化談叢』86号 九州古文化研究会刊行	本山遺跡出土 弥生土器	1

表 11 画像データ等の貸出一覧

No	申請者	利用目的・内容	資料名	資料 点数
1	兵庫県立考古博物館	特別展『弥生時代って知ってる？－2,000年前の兵庫－』 展示図録・広報物・HP	新方遺跡出土 3号人骨 写真 大開遺跡 調査中・出土資料 写真 雲井遺跡出土 玉作関連遺物 写真	8
2	吉野ヶ里公園管理センター	特別企画展『よみがえる邪馬台国－倭人伝の国を探るⅡ－』	北青木遺跡出土 銅鐸 写真（2点） 新方遺跡出土 鹿角製指輪・同出土状況 写真（2点） 玉津田中遺跡出土 弥生土器壺・木製器台・同出土状況 写真（2点）	6
3	神鉄観光(株)	同社情報誌『SUZURAN』	北神No.3 地点古墳出土遺物 写真	1
4	(株)ベネッセコーポレーション	同社『かがく組』4年生4号	端谷城跡出土 鬼瓦 写真	1
5	(株)日企	日本テレビ『ザ！鉄腕！DASH！！』	新方遺跡出土 蛸壺 集合写真	1
6	(株)尚企画	集英社『学習まんが 日本の歴史』（ポータブル版）第5巻	西求女塚古墳出土 6号鏡 写真（1点） 祇園遺跡出土 玳瑁釉小碗 写真（1点）	2
7	NPO法人むきばんだ応援団	WEBサイト『全国こども考古学教室』	西求女塚古墳出土 青銅鏡 集合写真（1点） 五色塚古墳 全景写真（2点）・ 出土埴輪 集合写真（1点）	4
8	兵庫県立考古博物館	特別展『金銀銅の考古学』パネル展示	森北町遺跡出土 重圈文銘帯鏡 写真	1
9	伊丹市立博物館	企画展『いざ、伊丹城（有岡城）へ！』パネル展示	兵庫津遺跡62次 調査中 写真	9
10	本庄市教育委員会	本庄早稲田の杜ミュージアムでのパネル展示	五色塚古墳出土 円筒埴輪 写真	2
11	(株)フォト・オリジナル	Z会『共通テスト攻略演習』1月号	五色塚古墳 後円部頂上埴輪列 写真	1
12	(公財)兵庫県国際交流協会	訪日教育旅行パンフレット簡体字版	五色塚古墳 写真	2

表 12 画像データ等の貸出一覧

No	申請者	利用目的・内容	資料名	資料 点数
13	(株)アマゾンラテルナ	NHK総合テレビ『ミステリアス古墳スペシャル』	五色塚古墳 ドローン映像（1点）・ 復元CG画像（1式）・写真（7点）	9
14	(株)はる制作室	宝島社『最新の発掘成果から わかった日本の古代史』	五色塚古墳 写真	1
15	(株)日経カルチャー	ツアーの募集広告等に使用	五色塚古墳 写真	4
16	西日本旅客鉄道(株)	「WEST EXPRESS 銀河」パ ンフレット	五色塚古墳 写真	1
17	(株)イディー	山陽電鉄『エスコート』	大歳山遺跡 写真	1
18	個人	個人研究	端谷城跡出土 甲 X線写真	1式
19	茨城県境町立長田小学 校	3・4年生社会科副読本『の びゆくさかい』	『昭和の暮らし・昔のくらし 12』ジオラマ 写真	1
20	明石市	明石市立文化博物館企画展 『発掘された明石の歴史展』 展示パネル・図録	旧神戸外国人居留地煉瓦造下水道 調査中 写真 二葉町遺跡 調査中 写真 垂水日向遺跡 調査中 写真	9
21	(株)山川出版社	同社『新 もう一度読む山川 日本史』（電子版）および販 促物（カタログ・パンフレッ ト・HP）	五色塚古墳 写真	1
22	(株)今人舎	同社『ビジュアル 顔の大研 究』	住吉宮町遺跡出土 人物埴輪 写真	1
23	(株)神戸新聞 総合印刷	神戸新聞総合出版センター 『兵庫の古代遺跡 1』	市内遺跡および出土資料 写真（77点） 五色塚古墳 復元CG（1点）	78
24	神戸市立博物館	特別展 「つなぐ TSUNAGU」	西求女塚古墳出土 青銅鏡（6号・7号・9号） 写真	3
25	(株)学芸出版社	『カラー版 図説 日本建築の 歴史』	松野遺跡「豪族の館」復元模型 写真	1
26	神戸市立博物館	「神戸市内出土の土鍾につい て」『神戸市立博物館研究紀 要』36	深江北町遺跡出土 土鍾 集合写真	1
27	まるはり編集部	『まるはり』2021年2月号	埋蔵文化財センター 常設展示室・外観 写真（3点） 「神戸 うつりかわる町とくらし～昭和ノスタルジー～」 イメージ画像（1点）	4
28	神戸市教育委員会 事務局教科指導課	『私たちの神戸』	五色塚古墳 航空写真（1点）・ 円筒埴輪集合写真（1点）	2
29	個人	神戸学院大学 博物館実習Ⅰ 『考古資料の文化財科学的な 調査と保存方法』講義	市内各遺跡 発掘調査・保存処理・出土資料 写真 （75点）	75
30	神戸市立博物館	特別展『和田岬砲台史跡指定 100年記念 大阪湾の防備と 台場展』パネル展示、展示図 録	明石藩舞子台場跡 航空写真・遺構写真 和田岬砲台 写真（11点）・図（6点）	21
31	東灘区まちづくり課	『東灘歴史散歩』（Web版）	本山遺跡 銅鐸出土状況 郡家遺跡（城の前14次） 全景 処女塚古墳 航空写真 住吉宮町遺跡23次 井戸出土状況 住吉宮町遺跡24次 全景	5

表 13 画像データ等の貸出一覧

No	申請者	利用目的・内容	資料名	資料 点数
32	三木市教育委員会	『与呂木古墳・与呂木12号墳』発掘調査報告書	天王山5号墳出土 石棺 写真	2
33	(株)グループSNE	ボードゲーム『ZOOM in KOBE』	埋蔵文化財センター外観 写真	1
34	(株)昭和堂	『大学の神戸ガイド』	処女塚古墳 航空写真(1点) 西求女塚古墳 遠景写真(1点)	2
35	千曲市森將軍塚古墳館	企画展『埴輪を知らう』パネル展示	五色塚古墳 円筒埴輪 集合写真(1点)・全景写真(2点)	3
36	山口大学	「古代銭貨出土集成からみた平安時代の銭貨」『山口大学山口学研究センター研究報告書』所収	下山手北遺跡出土 長年大宝差銭1点	1
37	(株)山川出版社	文部科学省検定教科書『高等学校日本史探求』	五色塚古墳 写真	1
38	神戸市立博物館	企画展『記念物100年記念』パネル展示	処女塚古墳 航空写真他	7
39	(有)ピース	びあMOOK『駅から出発! 日帰りハイキング 関西版』	五色塚古墳 写真	1
40	共同精版印刷(株)	(一財)神戸観光局 『PINTO! KOBE』および同SNS	五色塚古墳 写真	3
41	高槻市	高槻市立今城塚古代歴史館特別展「安満遺跡と近畿の弥生時代」	大開遺跡1次 SD402遺物出土状況 本山遺跡17次 木製品出土状況	2
42	堺市世界遺産課	百舌鳥古墳群ビジターセンター 展示コーナー	五色塚古墳 墳丘・出土埴輪 写真	3
43	服部プロセス(株)	『Peach Aviation デジタルマップtabinoco』	五色塚古墳 写真	4
44	(株)第一学習社	文部科学省高等学校検定教科書『日本史探究』	祇園遺跡出土 玳瑁釉小碗 写真	1
45	丸山印刷(株)	山陽電鉄『ぶらり』	五色塚古墳 写真	12
46	個人	誠文堂新光社『知られざる古墳ライフ(仮)』	白水瓢塚古墳出土 管玉・勾玉 写真	1
47	よみがえる兵庫津連絡協議会	同会HP	兵庫津遺跡62次 調査中 写真	6
48	兵庫県企画県民部兵庫津ミュージアム整備室	神戸新聞 兵庫津ミュージアム特集記事	兵庫津遺跡62次 調査中 航空写真	1
49	実教出版(株)	文部科学省高等学校検定教科書『精選日本史探求』	上沢遺跡出土 銅鏡 写真	1
50	東京大学大学院人文社会科学系研究科	朝日新聞出版『國華』	白水瓢塚古墳出土 朝顔形円筒埴輪 写真	1
51	神戸市経済観光局商業流通課	神戸市経済観光局『オモイ d e ゴハン』	五色塚古墳 航空写真	1

例年4・5月は、6年生の歴史学習導入時期であり、弥生時代や古墳時代等の学習のために多くの小学校団体の来館があるが、当年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため実施校はなかった。また、1・2月には「地域の様子の移り変わり」を学習する3年生が冬季企画展『神戸・うつりかわる町とくらし』を見学するために来館している。ただし、こちらも新型コロナウイルス感染症対策のため、市内小学校団体の入館は4校187名に留まった。近隣市町からの小学校団体についてもほとんど来館を見なかった。

企画展の開催 埋蔵文化財センターでは、平成3（1991）年の開館以来、毎年数回の企画展を開催しており、当年度は、表14のとおり3回の企画展を開催した。

春季企画展は、先述したとおり、小学校6年生の歴史学習導入に際し、歴史に興味を持てるようなわかりやすい展示を心掛けている。当年度は、『地下に眠る神戸の歴史展2020－平成時代発掘精選－』と題し、平成時代に実施した発掘調査成果について紹介した。しかしながら、新型コロナウイルス蔓延防止策のため会期を変更して開催となり、関連事業は実施することができなかった。

夏季企画展は、遺跡出土の人骨に着目した『骨が語る昔ばなし』を開催した。展示では人骨を通じて大きく4つのテーマ、「病気と健康」「社会生活」「戦い・争い」「墓ない人々」に分け、当時の人々を取り巻く環境や生活の様相を概観した。出品資料は、市内遺跡出土資料だけでなく、京都・大阪・奈良や兵庫県下の市町から出土した資料を借用し、見ごたえがある、わかりやすい展示を心掛けた（fig. 1）。会期中は、外部講師による講演会およびバックヤードツアー等を開催した。

冬季企画展は、これまでの『昭和のくらし・昔のくらし』から、神戸の街の移り変わりや昭和のくらしを身近に体験できる企画展として、新たに『神戸・うつりかわる町とくらし～昭和ノスタルジー～』を開催した。この企画展は、小学校3年生の学習課程に則した展示でもあるが、前述したように新型コロナウイルス感染症対策のため少数の学校団体の見学に留まった。

企画展に関連したイベントとしては、外部講師による講演会、埋蔵文化財センターボランティアスタッフが主力となり「昭和のあそび」を開催した。会場では、竹馬・こま回し・羽子板等の正月に因んだ昔懐かしい野外遊び体験を開催し、子供たちの笑顔があふれた。また、神戸市立西図書館・神戸空襲を記録する会による絵本読み聞かせを開催した他、旧車運転同好会の協力のもと「昭和の車大集合」とし、昭和時代のレトロな車・オートバイ14台が集まってのパレードや乗車体験を実施した（fig. 2）。

体験考古学講座 例年夏休みの期間を中心に「体験！考古学講座」を実施している。土器や勾玉、銅鐸等、遺跡の発掘調査からの出土品の製作技法を学び、それに近い方法によって、古代のもののづくりを体験する講座計12回を予定していたが、当年度は、新型コロナウ

表 14 企画展

展覧会名	開催期間	日数	入館者数
地下に眠る神戸の歴史展－平成時代発掘精選－	4/18（土）～5/31（日） ※5/26（火）～6/21（日）に期間変更	23	1,025
骨が語る昔ばなし	7/23（木）～10/18（日）	76	4,598
神戸・うつりかわる町とくらし～昭和ノスタルジー～	1/16（土）～3/7（日）	44	4,599

表 15 歴史講演会・ワークショップ

開催日	講演名	講師	入館者数
令和2（2020）年 9月20日	"骨考古学、および片山流「身体史観」"	京都大学名誉教授 片山 一道 氏	53
令和3（2021）年 1月31日	ねえ、知ってる？神戸にも戦争があったんだよ。 絵本の読み聞かせ	神戸空襲を記録する会	25
令和3（2021）年 2月6日	「神戸旧居留地・まちづくりのこれまでと今」	株式会社地域問題研究所 代表 山本 俊貞 氏	26

表 16 こうべ考古学

開催日	講演名	講 師 (神戸市教育委員会学芸員)	入館者数
令和2（2020）年6月27日	洞くつの考古学～穴にまつわる遺跡～	山田 侑生	中止
令和2（2020）年7月18日	骨と考古学	山口 英正	50
令和2（2020）年9月19日	遺跡から見る明石川流域の先進性	斎木 巖	42
令和2（2020）年10月17日	古墳とは何か	小野寺 洋介	58
令和3（2021）年1月16日	神戸の中世城郭	東 喜代秀	45
令和3（2021）年2月20日	灘酒の隆盛と重ね蔵	関野 豊	42
令和3（2021）年3月20日	こうべ発掘最前線	萱原 朋奈・加納 大誉	47

イルス感染症対策のため、すべて中止となった。

歴史講演会 各企画展のテーマにあわせ、展示をより深く理解できるような内容で先述のとおり夏季および冬季の企画展に際し、外部講師による講演会を2回開催した。のべ79名が聴講した（表15）。

連続講座「こうべ考古学」 当年度も学芸員それぞれが個別のテーマについての講演を行う全7回の連続講座を予定したが、第1回目は、新型コロナウイルス感染症対策のため中止となった。第2回以降は、通常時120名の定員を原則50名として開催し、全6回でのべ284名の参加があった（表16、fig. 3）。

出張考古学講座・出張授業・出張講義 埋蔵文化財センターで実施する体験考古学講座以外に、市内小学校や公民館等からの依頼により学芸員が赴き、勾玉づくりや土器づくりの体験講座、地域の歴史について授業や講義を行っているが、こちらも新型コロナウイルス感染症対策のため、当年度は小学校4校、121名の参加に留まった。

学校等との連携授業 神戸市と連携協定を結んでいる神戸学院大学の博物館学芸員課程の実習として、学生が企画したテーマについて展示実習を行い、11月28日～12月5日に同大学図書館において『知ってた？古代日本の装飾品の違い』『古代の食卓』の展示を開催した（fig. 4）。

当年度は、8月4日～30日の間の6日間、2校計4名の博物館実習生を受け入れた。考古資料の取り扱いや展示保管環境の測定、資料の写真撮影、保存科学、埋蔵文化財センターエントランスホールでの模擬展示等の実習を行った。

学生インターンシップの市役所全体での受け入れ方針に伴い、文化財課でも1名の大学生を受け入れ、8月19日～21日の3日間は埋蔵文化財センターでの職場研修を行った。カリキュラムは、文化財保存科学業務を軸として、南僧尾観音堂修理に伴う文化財科学的

調査を実施し、最終日には研修成果の報告会を行った。10月6日～9日の4日間には、特別支援学校高等部の生徒3名を受け入れ、講座の準備等の埋蔵文化財センターでの職場体験を行った。例年6月および11月の2回、兵庫県内の中学校2年生の職業体験プログラムである「トライやるウィーク」に協力して生徒を受け入れているが、当年度の実施はなかった。

例年、神戸市小学校教育研究会社会科部との連携により、神戸市生涯学習支援センター「コミスタこうべ」において、9月に開催される小学生の夏休み自由研究作品展『神戸市小学校社会科作品展』では、考古学的な遺物や遺跡に関する優秀な研究作品に対して『埋蔵文化財センター賞』を授与しているが、当年度の開催は中止となった。

③ 地域連携事業

埋蔵文化財センターでは、地域で開催しているイベントや区役所、図書館等と随時連携し、埋蔵文化財の公開活用事業を実施している。

地域事業への参加協力 地域・区役所等と連携して例年開催しているイベントの多くは中止となった。12月3日～10日には、西区文化センターにおいて「西神ニュータウンの遺跡と西区の文化財」、1月27日～2月7日に兵庫区文化センターにおいて「兵庫区の遺産と文化財」と題した出張展示を実施し、地域の文化財の展示と紹介を行った（fig. 5）。また、西図書館との連携による、夏休みの期間中に両館を回るクイズスタンプラリー「お宝だいぼうけん！10」を当年度も実施した（fig. 6）。

『五色塚古墳まつり』の開催 垂水区に所在する国史跡五色塚古墳の活用促進を目的として、平成26(2014)年度より垂水区役所と連携し、例年6月に『五色塚古墳まつり』を行っている。当年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため、開催中止となった。

『おおとし山まつり』の開催 例年、文化財保護強調週間(11月1日～7日)の期間中、垂水区に所在する市史跡大歳山遺跡(舞子細道公園)において、垂水区役所との連携事業として『おおとし山まつり』を開催しているが、こちらも新型コロナウイルス感染症対策のため、開催中止となった。

「西区地域学」の開催 西区役所と連携し、例年1回、西区とその周辺地域に所在する文化財を巡るバス見学会を開催しているが、当年度は開催中止となった。

④ 史跡五色塚古墳の公開

垂水区所在の史跡五色塚古墳は、日本で初めて築造当時の姿に復元された、実際に墳丘上に立つことのできる巨大前方後円墳として全国的に有名であり、歴史学習の場として学校教育・社会教育に活用されている。また明石海峡を望む絶好のビューポイントとして多くの見学者がある。令和2(2020)年度の入場者は31,001人であった。見学に訪れた小学校団体および希望のあった団体に対しては、学芸員が現地において解説を行っているが、新型コロナウイルス感染症対策のため、当年度は実施しなかった。



fig. 1 春季企画展



fig. 2 昭和の車大集合



fig. 3 こうべ考古学



fig. 4 博物館実習



fig. 5 西区文化センター出張展示



fig. 6 兵庫区文化センター出張展示

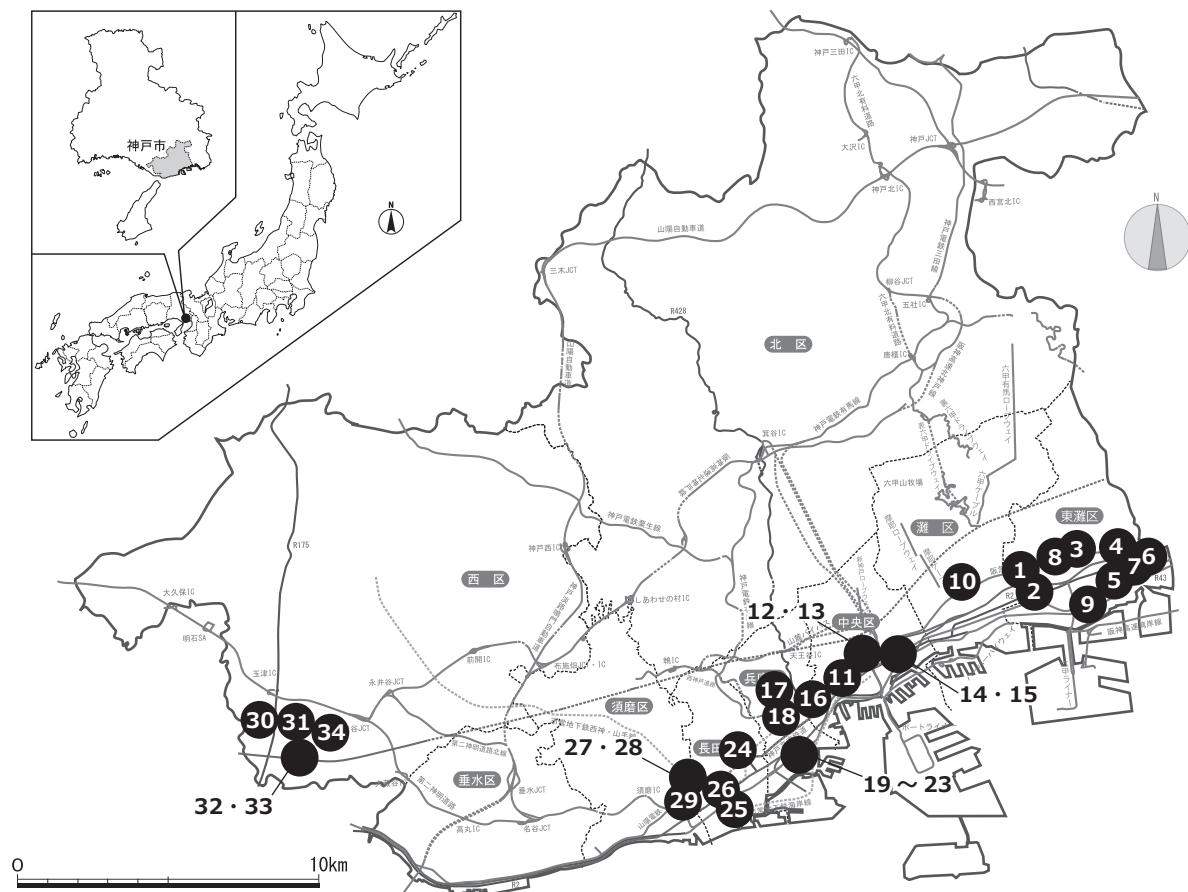


fig. 7 令和2年度 埋蔵文化財年報掲載遺跡地図（各遺跡の番号は掲載遺跡番号と一致）

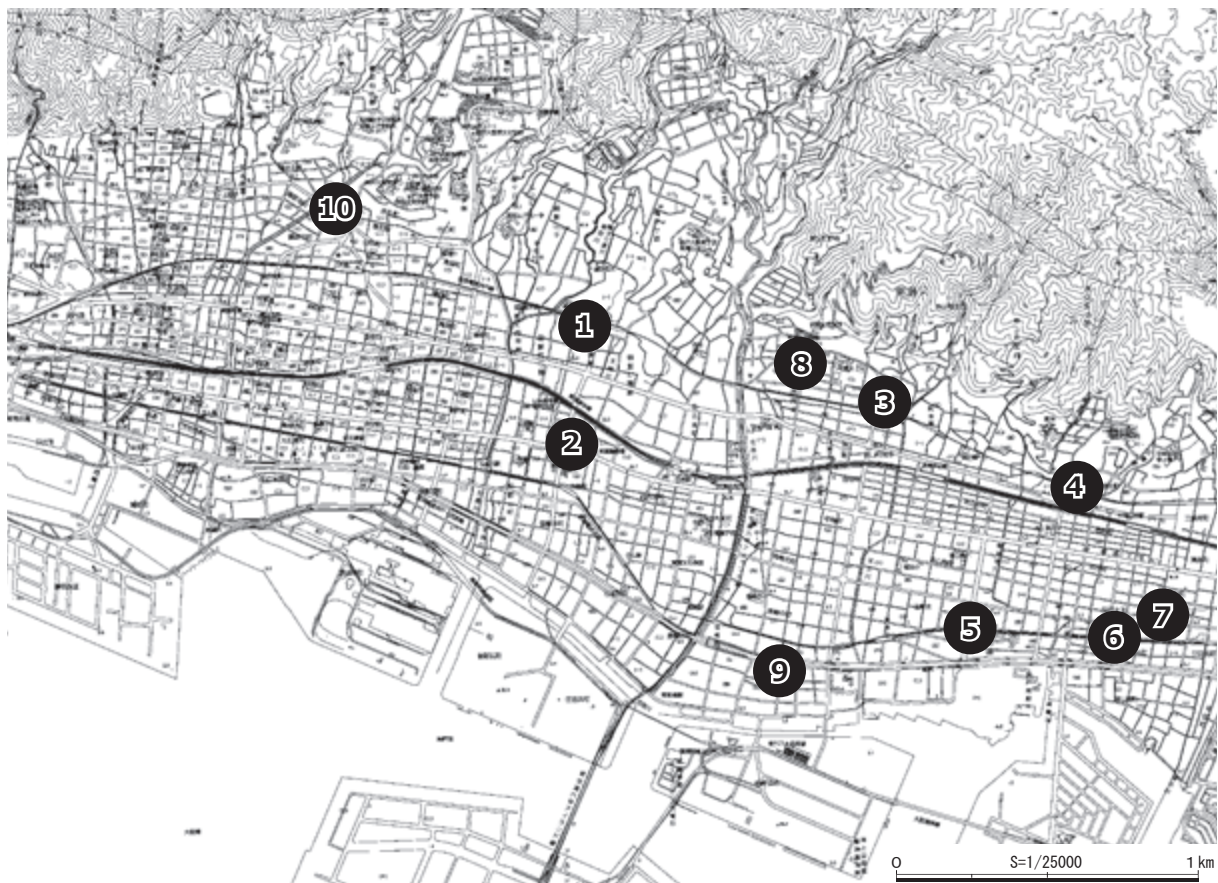


fig. 8 調査地点位置図（東灘区・灘区）

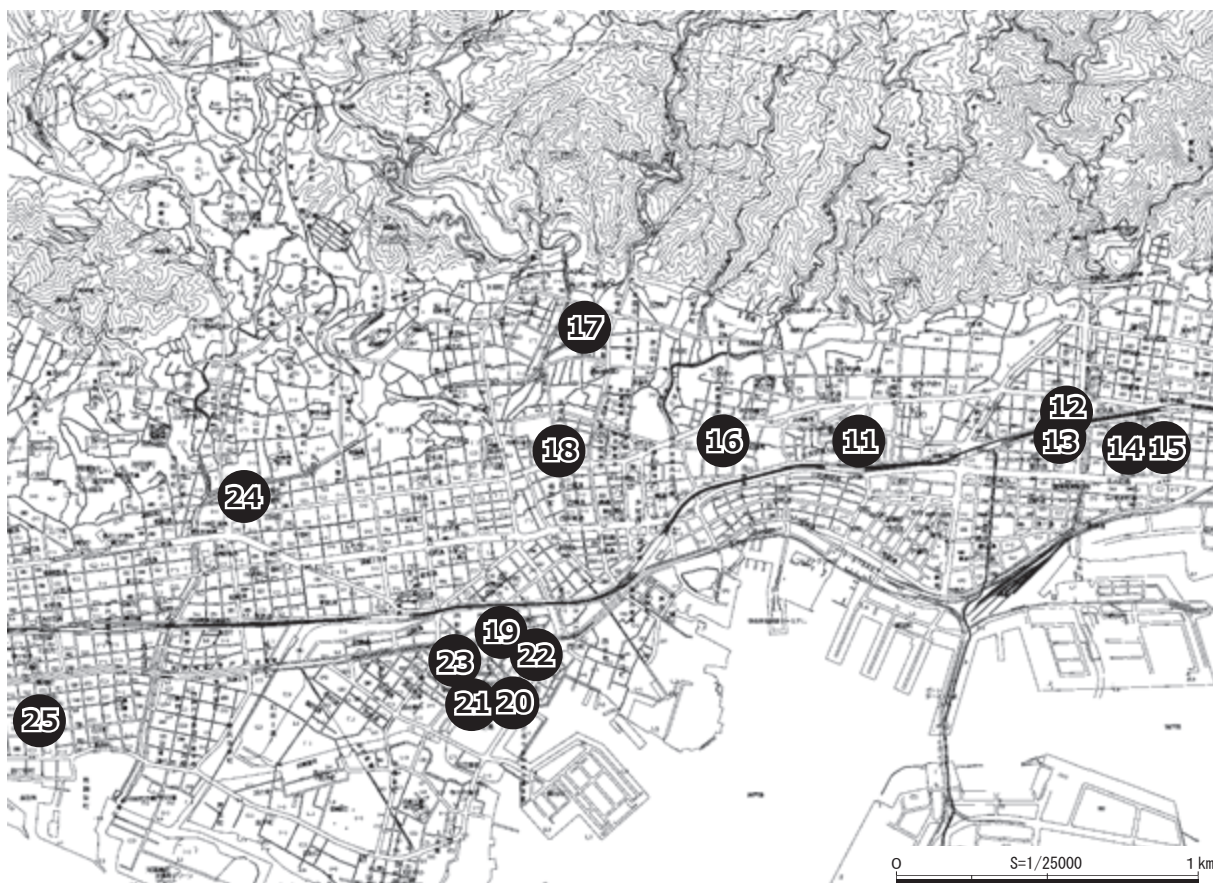


fig. 9 調査地点位置図（中央区・兵庫区・長田区）



fig.10 調査地点位置図（須磨区）

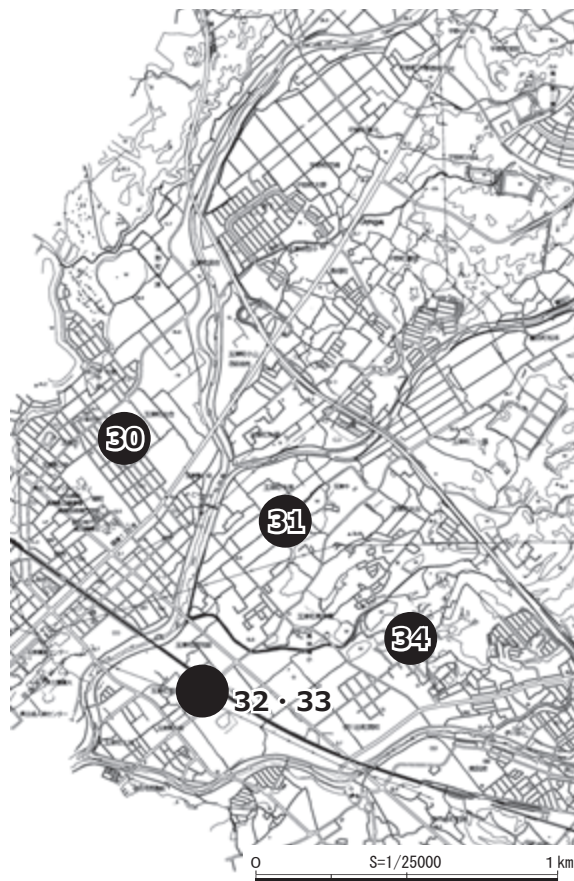


fig.11 調査地点位置図（西区）

II. 令和2（2020）年度実施の発掘調査

1 郡家遺跡第96次調査

1. はじめに

郡家遺跡は、六甲山系南麓の住吉川と石屋川に挟まれた扇状地および段丘上に位置する（fig.12）。縄文時代～中世にかけての複合遺跡であり、これまでの発掘調査によって、弥生時代後期、古墳時代中期～後期、奈良時代～平安時代に当遺跡の盛期がみられる。

2. 調査概要

今回の発掘調査は、住宅建設に伴うものである。発掘調査の結果、古墳時代中期と平安時代に比定できる遺構（ピット、落ち込み状遺構）・遺物を確認した。

発掘調査は、工事計画が埋蔵文化財に影響を与える範囲を対象としたため、調査区は2ヵ所（1区・2区）設定した（fig.13）。

3. 基本層序

上層より、盛土→旧耕土層（灰色砂質土）→旧耕土状堆積層（灰茶色砂質土・茶灰色砂質土）→遺構面直上層（1区は濃黄灰色砂質土、2区は灰黄色粘質土）の順に堆積し、その下層（茶色砂質土・淡茶色粗砂混じり砂質土）が遺構面となる基盤層である（fig.14）。

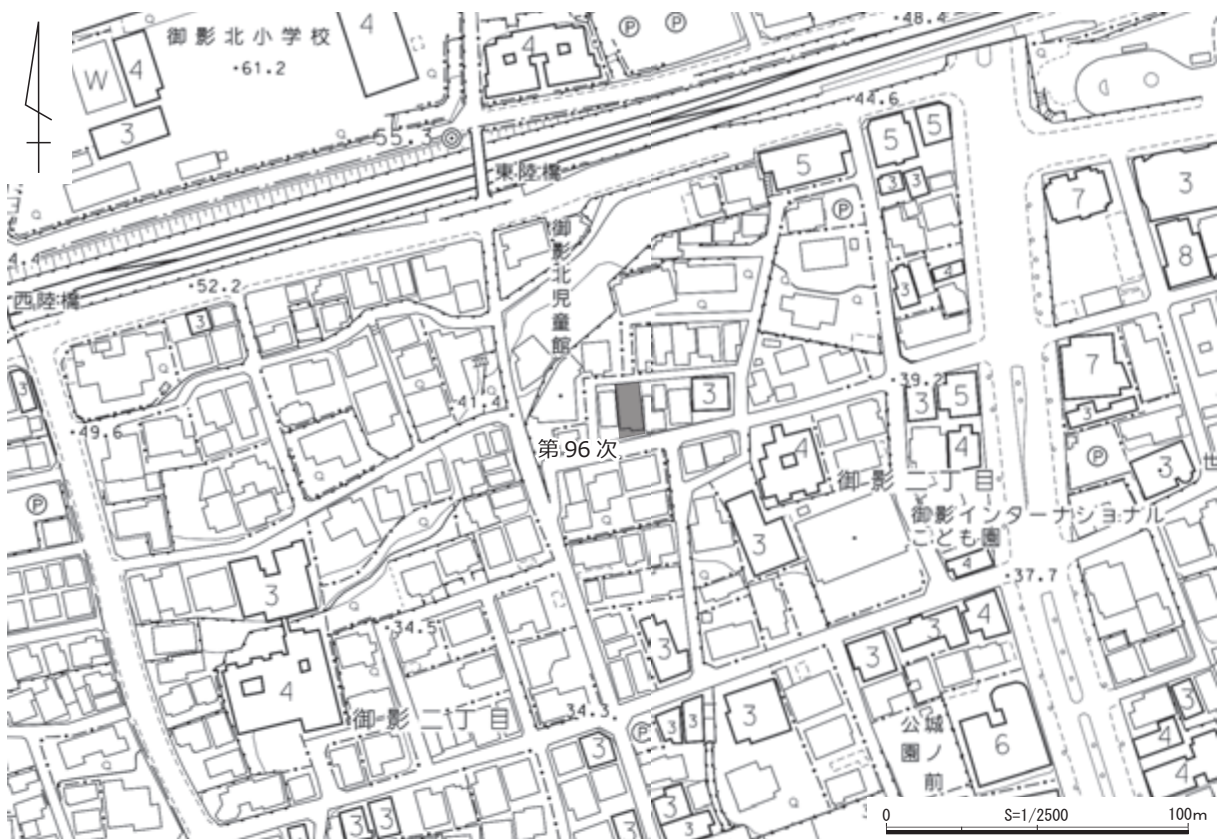


fig.12 調査地位置図

4. 各調査区の概要

① 1区

小規模なピットを2基（SP01・SP02）確認した（fig.14）。工事の影響深度が遺構検出面でとどまるため、遺構は掘削していない。ピットの帰属時期は不明だが、埋土の状況から古墳時代以降の所産である可能性が高い。



fig.13 調査区配置図

② 2区

落ち込み状遺構（SX01）、ピット3基（SP03～SP05）を確認した（fig.14）。1区と同様に工事の影響深度が遺構検出面でとどまったため、遺構は掘削していない。ピットは、いずれも落ち込み状遺構に後行している。落ち込み状遺構の埋土内からは、古墳時代中期の遺物が出土しているため、これらのピットは、古墳時代以降に帰属する可能性が高い。遺物は、落ち込み状遺構（SX01）埋土内と遺構面直上層から土師器と須恵器が出土している。

5. まとめ

今回の調査では、古墳時代中期の遺構（SX01）と遺物、古墳時代以降の遺構（SP01～05）、平安時代の遺物を確認した。発掘調査範囲と工事の掘削深度に制約があったものの、本調査地点において、当該期における集落の拡がりを確認することができた。

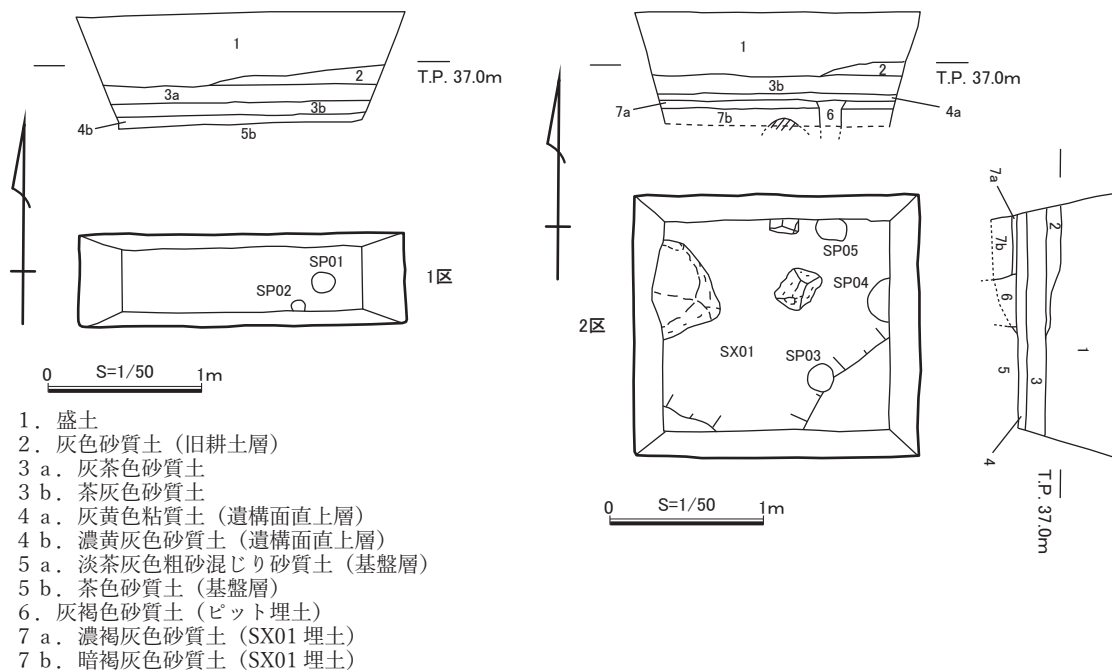


fig.14 各調査区遺構配置図・土層断面図

2 郡家遺跡第 97 次調査

1. はじめに

郡家遺跡は、神戸市東灘区御影・御影郡家・御影中町に位置し、東西約 800 m、南北約 1 km の範囲に広がる遺跡である。発掘調査は、昭和 53（1978）年度に実施した第 1 次調査以来、今回で 97 回目となり、これまでの調査により縄文時代～中世に至る複合遺跡であることが明らかとなっている。

近隣の調査成果を概観すると、当調査地の東側に位置する第 2 次調査（昭和 53（1978）年度）では、古墳時代後期～鎌倉時代の土坑や柱穴群が検出され、5 世紀代の祭祀に関係した遺構と遺物が出土している。当調査地の北東側に位置する第 25 次調査（昭和 55（1980）年度）では、弥生時代中期～奈良時代にかけての掘立柱建物等が見つかり、古墳時代の祭祀遺物も出土している。当調査地の南側に位置する第 83 次調査（平成 19（2010）年度）では、古墳時代の竪穴建物と水田、奈良時代の掘立柱建物等が見つかり、このような近隣での調査成果を踏まえると、当調査地にも同様の遺構が広がっていると予想される。

2. 調査概要

今回の発掘調査は、市立御影保育所の擁壁改修工事に伴うものである（fig.15）。工事によって埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲を調査対象として設定し、安全管理の都合上、調査区を 3 分割して発掘調査を行った（fig.16）。なお、3 区は安全勾配を確保して調査したため、



fig.15 調査地位置図

遺物包含層上面の検出までとなった。

発掘調査は、遺物包含層上面までを重機で掘削し、それ以下の掘削・遺構検出・遺構掘削等は人力で行った。遺構と遺物の記録図化にあたっては、調査地内に測量用基準点を設置して行った。記録写真は、35 mmカメラ・120 mmカメラ・デジタルコンパクトカメラを使用して撮影した。

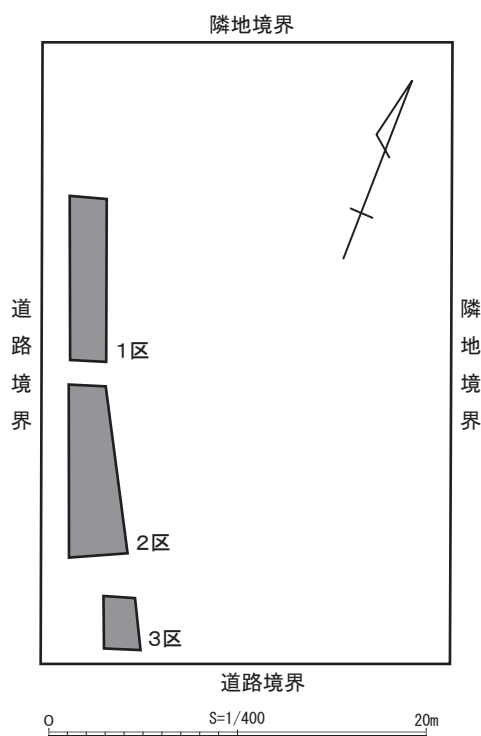


fig.16 調査区配置図

3. 基本層序

上層より、表土→造成土→近世耕作土→暗灰色砂質土（遺物包含層）→黒褐色砂質土（礫混じり）→暗茶褐色中粒砂混じり砂質土（上面が遺構面）→茶褐色砂質土→にぶい黄橙色シルト質土の順で堆積している。近世耕作土以下の土層は、南に向かって傾斜していた（fig.17）。

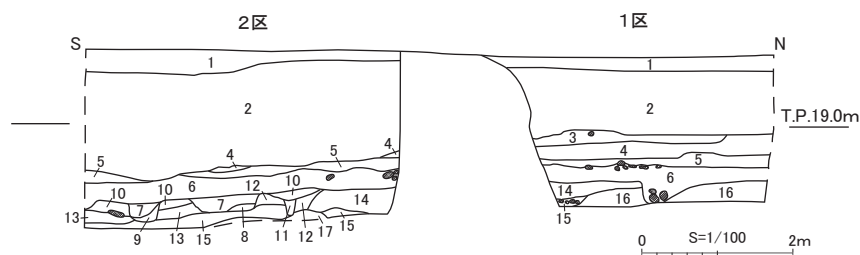
4. 遺構面の概要

暗茶褐色砂質土上面で土坑 1 基、ピット 15 基を検出した（fig.18）。

SK101 直径 90 cm、深さ 20 cm の土坑である。遺構埋土は、黒褐色砂質土（礫混じり）→茶褐色砂質土→暗灰褐色砂質土の順に堆積している。遺物は、土師器が出土した。

SP101 直径 40 cm、深さ 30 cm のピットである。黒褐色砂質土（礫混じり）→暗褐色砂質土の順に堆積している。遺物は、土師器と須恵器が出土した。

その他のピットは、いずれも直径 20 ～ 30 cm、深さ 20 ～ 30 cm である。SP106 からは土師器、



- | | |
|-------------------------------------|---------------------------|
| 1. 表土 | 9. 茶褐色砂質土（SP110 埋土） |
| 2. 攪乱 | 10. 暗茶褐色中粒砂混じり砂質土（上面が遺構面） |
| 3. 灰褐色砂質土（暗褐色土ブロック混じり） | 11. 暗褐色細砂質土 |
| 4. 暗灰褐色粗砂混じり砂質土（耕作土） | 12. にぶい黄褐色中粒砂混じり砂質土 |
| 5. 暗灰褐色粘質土（遺物包含層） | 13. 暗褐色粗砂混じり砂質土（小礫混じり） |
| 6. 黒褐色砂質土 | 14. にぶい黄褐色～灰褐色粗砂混じり砂質土 |
| 7. 暗褐色砂質土（礫混じり）
（SP110・SK101 埋土） | 15. 茶褐色砂質土 |
| 8. 暗灰褐色砂質土（SK101 埋土） | 16. 暗茶褐色砂質土 |
| | 17. にぶい黄橙色シルト |

fig.17 調査区西壁土層断面

SP114 からは須恵器の小片が出土しているが、時期比定できるものではなかった。

5. まとめ

今回の調査では、古墳時代の遺構面を1面確認した。1区・2区で検出した多数のピットは、その間隔が1mにも満たないことから、建物に伴う遺構ではなく、柵列のようなものであった可能性がある。

今回検出した古墳時代の遺構面の帰属時期については、遺物包含層と土石流層から出土している遺物が古墳時代の終わり頃～奈良時代に比定でき、遺構面検出時と遺構内出土遺物、SP101出土の杯身が6世紀後半という様相を踏まえると、第2次調査第3遺構面と同時期にあたるものと考えられる。

なお、当調査地に隣接する第2次調査では、古墳時代2面、古代1面、中世1面の遺構面が確認されているが、本調査地では、古墳時代の遺構面以外は、確認されなかった。

その他、特筆すべき遺物として、2区南端の黒褐色砂質土（礫混じり）から出土した土製品が挙げられる。この土製品は、形状からみて土馬にあたる可能性がある。ただし、近隣の遺跡から出土している土馬の形状と比較すると脚部の作りが異なるため、確証を得るには至っていない。この土製品は、土石流層から出土していることから、当調査地の近隣に土製品を利用した祭祀が行われていた場所が存在すると思われる。

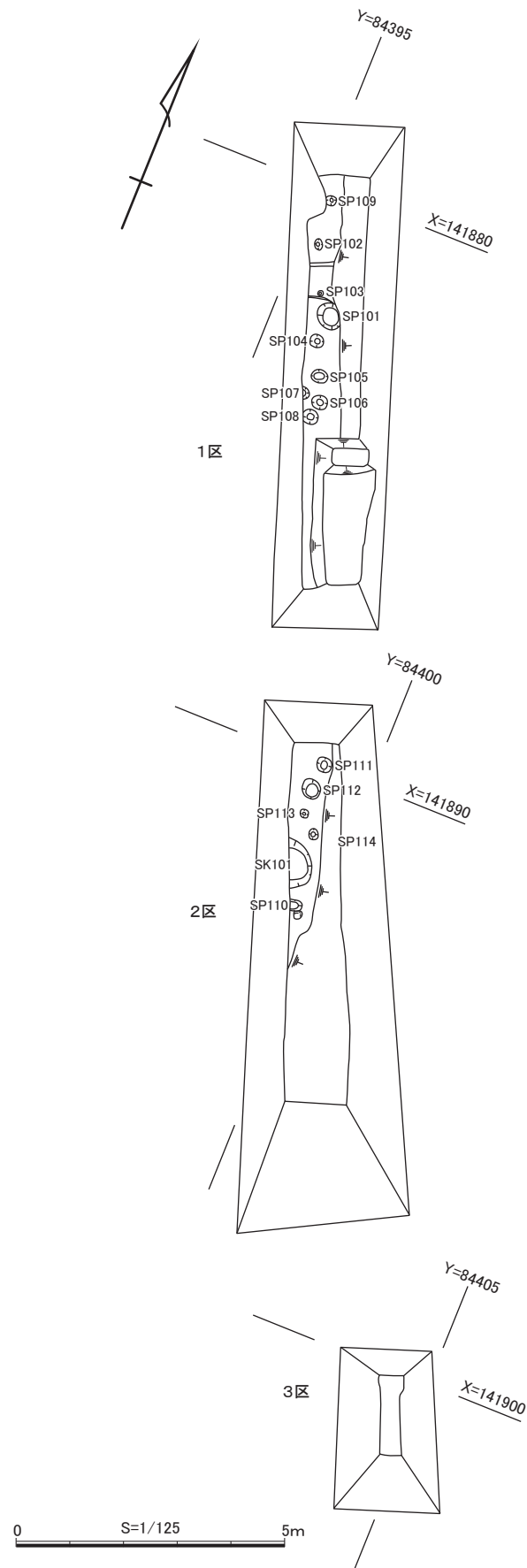


fig.18 遺構面遺構配置図



fig.19 1区北半遺構面全景（北から撮影）



fig.20 2区完掘状況（北から撮影）

3 岡本東遺跡第3次調査

1. はじめに

東灘区に所在する岡本東遺跡は、今回が3回目の発掘調査となる（fig.21）。過去に行われた2回の発掘調査では、第1遺構面が中世の耕作地、第2遺構面が弥生時代中期～後期の竪穴建物等、第3遺構面が縄文時代後期の土坑が確認されている。

過去の調査では、当遺跡の東側を南流する天井川の扇状地右岸に拡がることが指摘されてきた。この点について、旧地形が記録されている明治18（1885）年の地図を確認すると（fig.22）、当遺跡の西に住吉川、東に天井川があり、住吉川から半径1.2 km程度の範囲に扇状地形が拡がっているのに対し、天井川周辺には、大きく拡がる扇状地形が存在しない。当遺跡を含む近隣一帯は、六甲山南麓を流れる河川群によって重層的に形成された合流扇状地、または合成扇状地帯が拡がっている。今回の調査地点周辺には、微地形的な起伏が形成されており、その形成要因となっているのが住吉川と考えられる。今回の調査地点は、住吉川と天井川の扇状地扇端の合流点に近い微高地部分にあたる。第1次・第2次調査地は、今回の調査地点付近を頂点とする微高地が西へ向かって下がり始める緩斜面上に位置している。この微高地の頂点と斜面という立地の差は、遺跡形成の重要な要素であり、今回の調査で確認された遺構の盛期が平安時代（8～9世紀）であった点とも深い関わりがある。

今回の調査は、福祉施設建設に伴うものである。発掘調査の工程上、調査範囲を4分割して順次調査を実施した（fig.23）。今回の調査成果は、令和4（2022）年刊行の『岡本東遺跡第3次発掘調査報告書』で報告している。



fig.21 調査地位置図

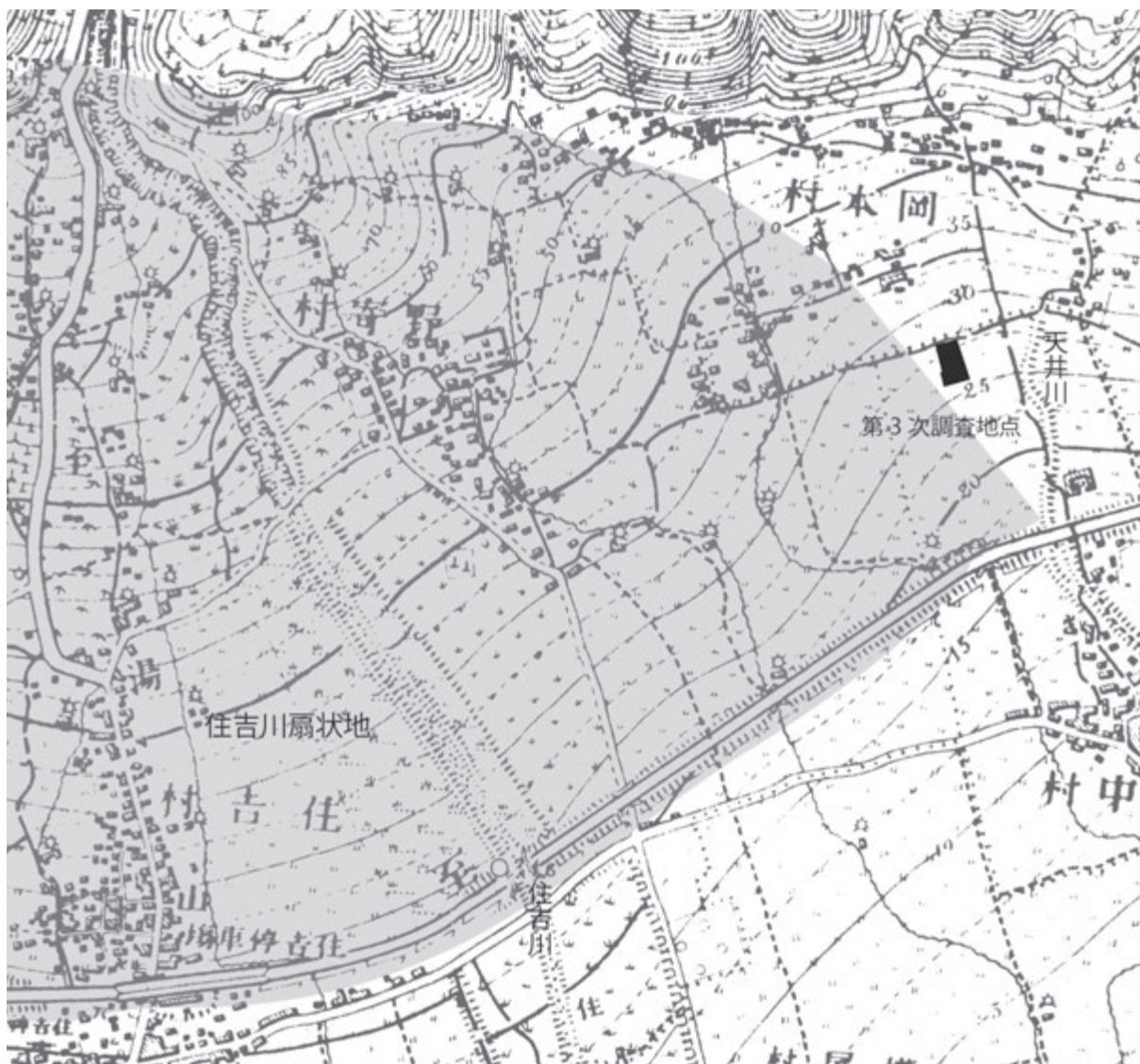


fig.22 明治 18 (1885) 年の地形図と今回の調査地（網掛けが扇状地の範囲・縮尺不同）



fig.23 調査区配置図

2. 基本層序

今回の調査地点の土層堆積状況は、調査地中央付近で確認された旧河道を境に、おおむね 2 種類に大別される (fig.24)。

① 旧河道北半の堆積状況

従前建物の解体に伴う盛土が地表面で、その直下で遺物包含層を確認した。調査地点は、南に下がる斜面地形上に立地するため、盛土の厚さは北端で 30 cm、調査地中央付近で 90 cm となる。

遺物包含層上面の標高は、調査区北端で T.P.32.5 m、調査区中央で T.P.31.9 m である。遺物包含層の直下には、黒褐色系のバイラン土層が堆積する。遺跡形成時の基盤

層は、土石流によって侵食されていたが、このバイラン土層上面で遺構面を確認した。バイラン土層は、調査地を縦断する北からの土石流堆積層によって広い範囲が侵食されていた。この土石流堆積層から遺物は出土していない。土石流堆積層の厚さは地点によって異なるが、80～100 cmであった。

バイラン土層（あるいはそれを侵食する土石流堆積層）の下位からは、遺構面基盤層上面で確認された旧河道とは別の古い旧河道と、調査地全体を覆う土砂流堆積層を確認した。この旧河道と土石流堆積層は、礫層・砂層・シルト層が互層堆積しており、1 m以上の厚さがあった。いずれの土層からも遺物は出土していない。

② 旧河道南半の堆積

旧河道以南の土層堆積状況は、盛土直下に旧耕作土およびその床土が1～2層程度存在し、その下位に旧河道と考えられる淡褐色系砂層が堆積している。盛土直下の旧耕作土は、第1次・第2次調査の第1遺構面に該当する可能性がある。

旧耕作土直下の砂層は、旧河道の堆積物とみられるが、砂層は単層で、厚さが薄いため、旧河道ではなく旧河川から溢れたフロー堆積物の可能性がある。したがって、今回の調査で検出した旧河道の範囲も広義の氾濫原ととらえるべきかもしれない。堆積物の流動方向は、北から南に向かうもので、天井川が起点となって氾濫している可能性がある。フロー堆積物には、中世前期、古墳時代、弥生時代の遺物が含まれており、これによって天井川の氾濫時期が把握できる。

フロー堆積物直下では、弥生時代の遺物包含層を確認した。この層は、粘度の低い砂層であり、北半の遺物包含層は、有機質を多く含んだ粘性の強い黒褐色砂であった。

遺物包含層上面の標高は、調査区南端で T.P.30.6 m、調査区東端で T.P.31.0 m である。

遺物包含層直下には、砂質のバイラン土層があり、これを遺構面とした。遺構面以下の

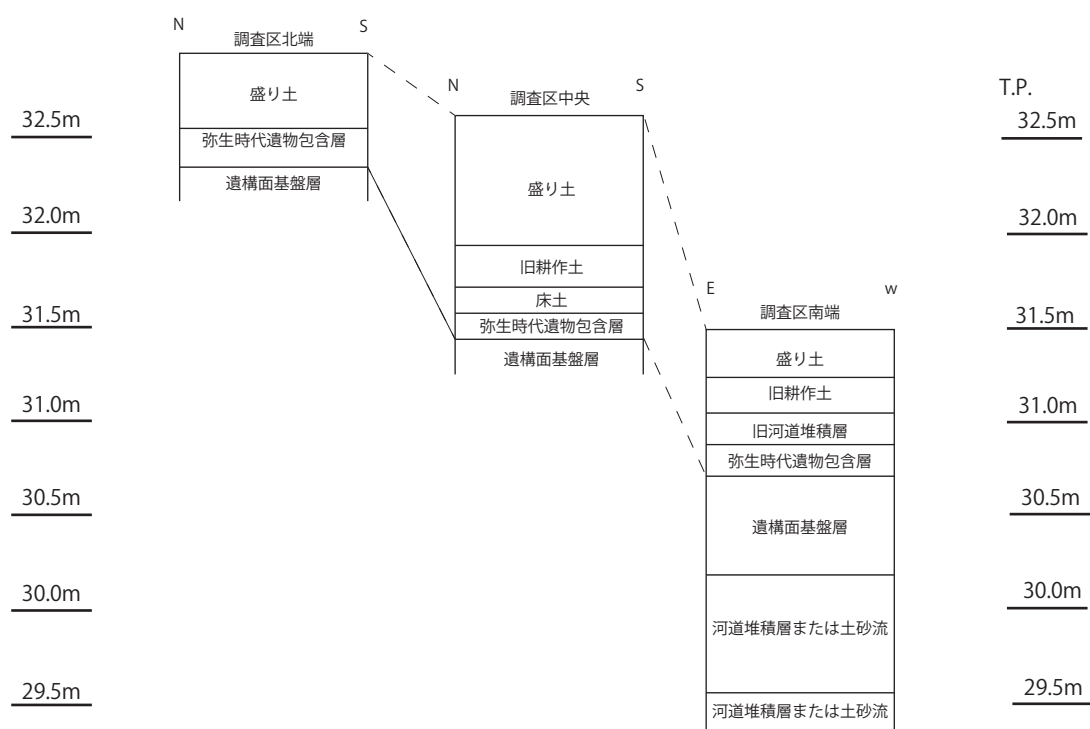


fig.24 各調査区土層断面模式図 (S = 1 / 40)

土層については、北半の土層堆積状況と同じであった。

以上の点から、当調査地において遺跡の存在する堆積層は、調査区北端で現況 G.L.-30 cm、南端で現況 G.L.-90 cmである。なお、今回の調査地では、縄文時代の遺構面は存在しないものと考えられる。

③ 土層の堆積状況

調査区の北側と南側で土質の違いがあると述べてきたが、遺物包含層は、調査区全面に広がっていた。遺構面は、その直下の無遺物層を遺構面基盤層として扱った。確認された遺構は、弥生時代中期と平安時代（8～9世紀）の建物群で、同一遺構面上で2時期の遺構を検出している。ただし、古代の遺構については、遺物包含層が本来の遺構面基盤層となっていた可能性がある。それは、黒色系の遺物包含層上に埋土が黒色の遺構が存在したことによるためで、目視による遺構検出は困難であった。調査中の所見では、遺物包含層が弥生時代中期から一部後期を含む弥生時代の土層と考えられることも、その可能性を補強する。

また、今回の調査区で確認した土層の堆積状況は、以下の通りにまとめられる。

- | | |
|-------|------------------------------|
| 調査区北側 | 1 現況の地表面をなす盛土 |
| | 2 純粋な弥生時代の遺物包含層 |
| | 3 無遺物のバイラン土層または土石流堆積層（遺構基盤層） |
| | 4 無遺物の旧河道または広範な土砂流 |
| 調査区南側 | 1 現況の地表面をなす盛土 |
| | 2 旧耕作土 |
| | 3 中世の天井川由来の氾濫堆積層 |
| | 4 純粋な弥生時代の遺物包含層 |
| | 5 無遺物のバイラン土層（遺構基盤層） |
| | 6 無遺物の旧河道または広範な土砂流 |

この土層堆積状況に関して留意すべき点は、従前建物の解体以前からの土地開発によって、旧地形が大きく削平されていると考えられることである。検出遺構の主体的時期が平安時代（8～9世紀）でありながら、それに伴う遺物包含層が確認できなかったのは、度重なる土地開発によって、遺跡の上層部分が削平されている可能性を示唆している。

3. 遺構面の概要

今回の調査地では、遺構面を1面確認した。平安時代（8～9世紀）の掘立柱建物（SB）3棟程度、建物に伴う柵、弥生時代中期の竪穴建物（SI）2棟を検出した。以下、その概要を列記する（fig.25）。

SB01 は、桁行4間、梁行3間の側柱建物である。

SB02 は、桁行3間、梁行3間か、桁行5間、梁行3間になる総柱建物である。

SB03 は、桁行2間ないし3間、梁行2間以上の側柱建物である。

SI01 は、直径 6.0 m 程度の円形となる竪穴建物である。

SI02 は、直径 5.0m 以上の円形となる竪穴建物である。

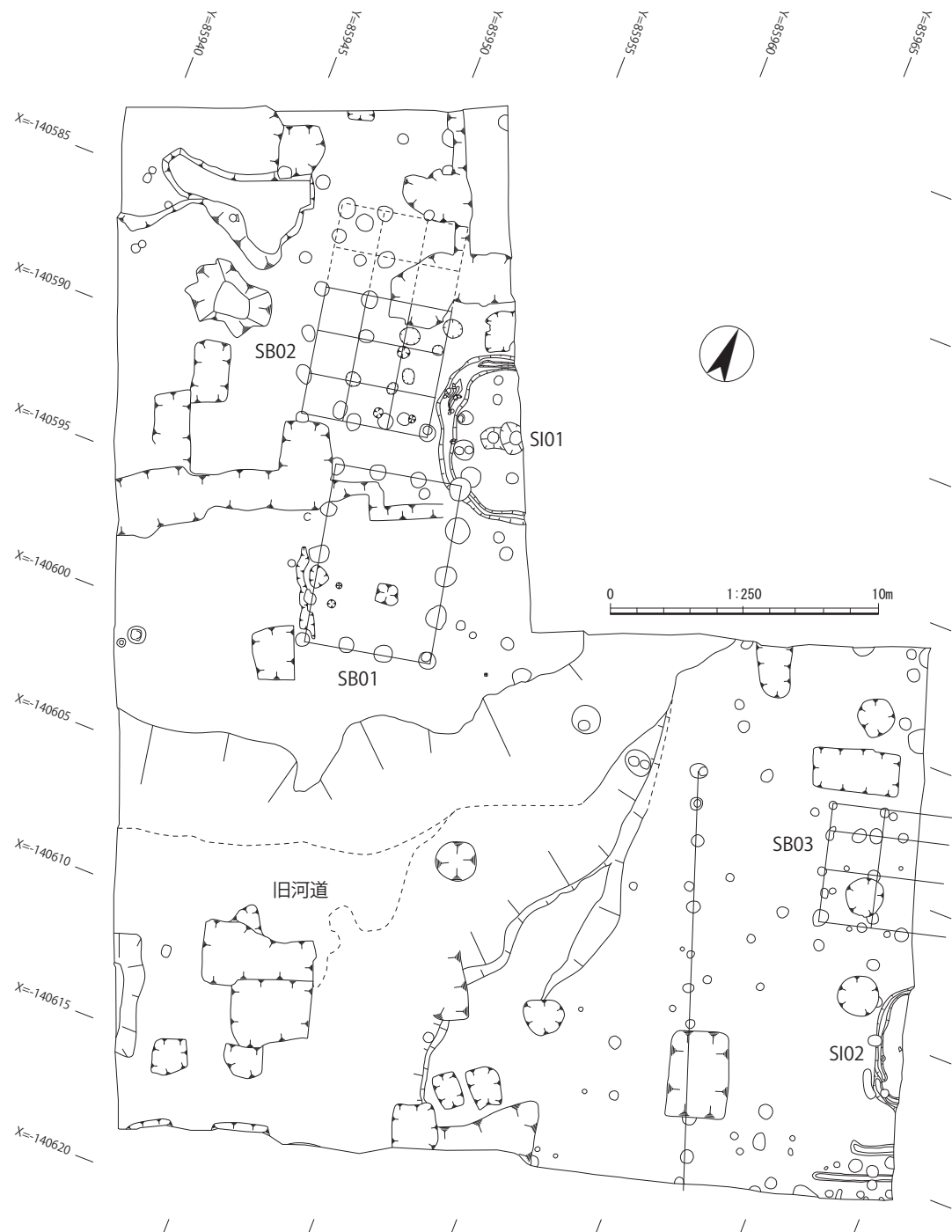


fig.25 遺構面遺構配置図

4. まとめ

今回の調査地で検出した遺構のうち、弥生時代の建物については、第1次・第2次調査で確認されている遺構と同時期にあたると思われる。一方、平安時代（8～9世紀）の建物については、過去の調査で確認されていない。これは冒頭で述べた通り、今回の調査地が扇状地の扇骨状起伏の頂部にあたることと関係しており、律令期の建物が微高地を選地している可能性を示唆する。

岡本東遺跡においては、縄文時代～弥生時代の遺跡の拡がりとは律令期の遺跡の拡がりに質的な相違が存在すると予見されるが、両者の中間となる古墳時代の遺構については、今

のところ確認されておらず、遺物包含層や河道堆積物から当該期の遺物が出土するのみである。今後の調査では、古墳時代の遺構の有無と合わせて、先史時代的な集落形態から古代的な集落選地への転換期を追求する必要がある。

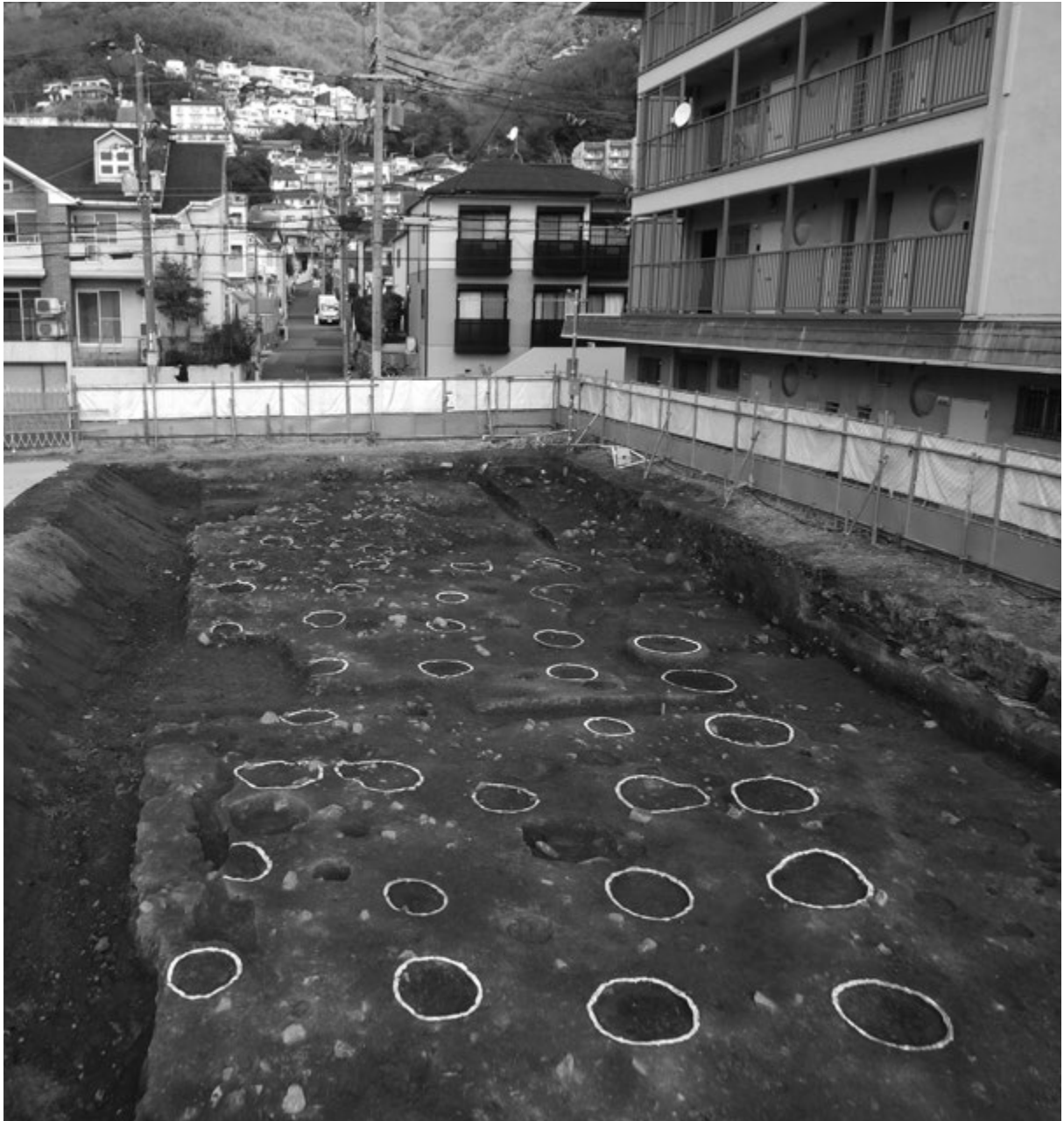


fig.26 2区遺構面全景写真（南から撮影）

4 森北町遺跡第31次調査

1. はじめに

神戸市東灘区に所在する森北町遺跡は、既往の発掘調査によって、弥生時代中期以降に集落が形成され、弥生時代後期～古墳時代に集落の盛期があることが明らかとなっている。また、飛鳥時代の水田跡や掘立柱建物、平安時代～中世後期の遺構も確認されていることから、古墳時代以降も継続的に生活されてきた場所である（fig.27）。

今回の調査は、共同住宅建設に伴うものである。発掘調査の工程上、調査範囲を4分割して順次調査を実施したが、ここでは一括して報告する（fig.28）。

2. 調査概要

発掘調査は、工事影響範囲に対して工事影響深度まで行う前提で着手したが、本体工事の都合上、発掘調査に先行して敷地全体の表土（盛土）を取り除く作業を実施した。その作業中、表土直下で南に一段大きく下がる近・現代頃の田圃の段差を埋め立てた造成土や、旧地形の谷筋を埋め立てた造成土を確認した。これらは、戦後の宅地造成に伴う客土であり、現在の森北町にひろがる住宅地のもととなった地業痕である。この客土の分布範囲から客土を取り除いた起伏が造成前の旧地形として復元することができる。埋蔵文化財を包蔵する地層は、これらの地業痕によって削平されたか、埋め立てられた状態で残存していることが判明したため、宅地造成によって埋蔵文化財が消失していることが明らかな範囲や、今回の工事影響深度以下に旧地表面が存在することが明らかな範囲については、調査

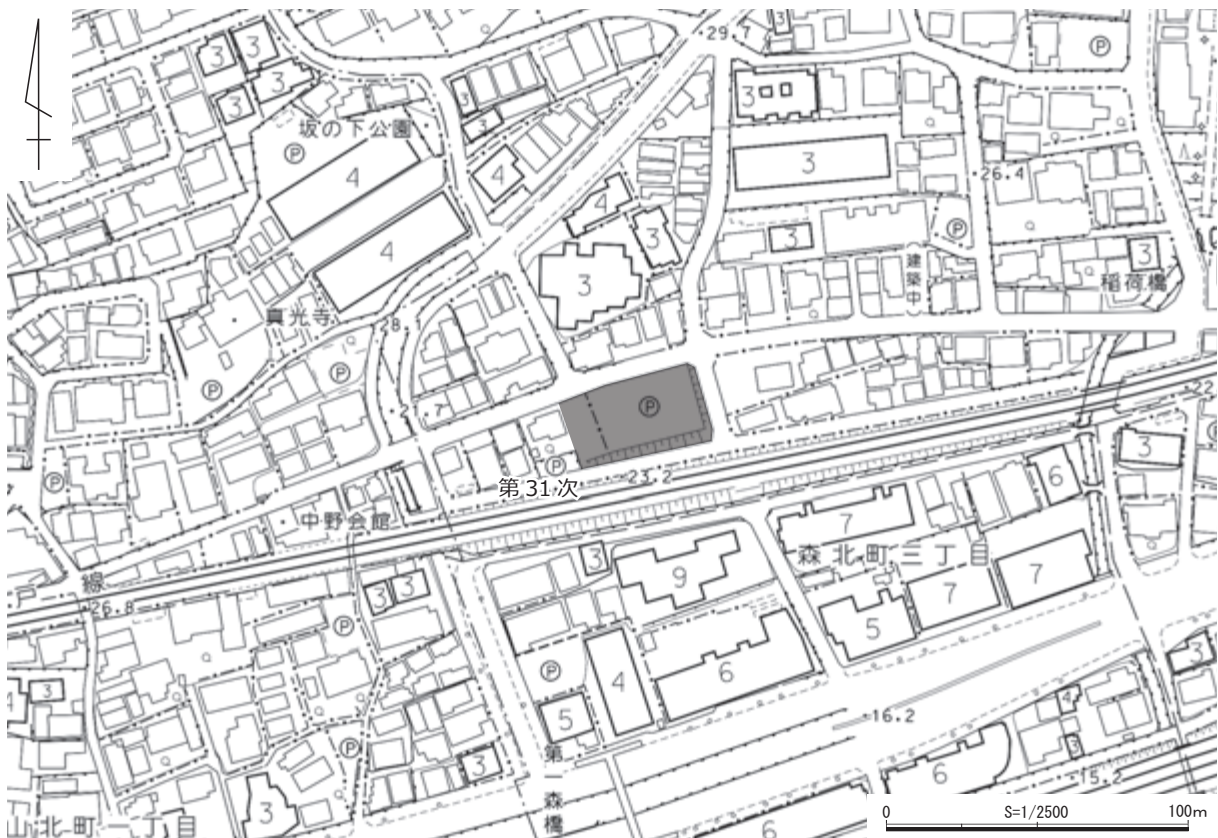


fig.27 調査地位置図

対象地から除外した。また、隣接家屋に対する安全確保の観点から掘削不可と判断された範囲も併せて除外した。これらの作業によって、最終的に確定した調査範囲が fig. 2 に示す調査区である。今回の調査対象地では、全域にわたって土砂流が堆積しており、顕著な遺構は認められなかった。

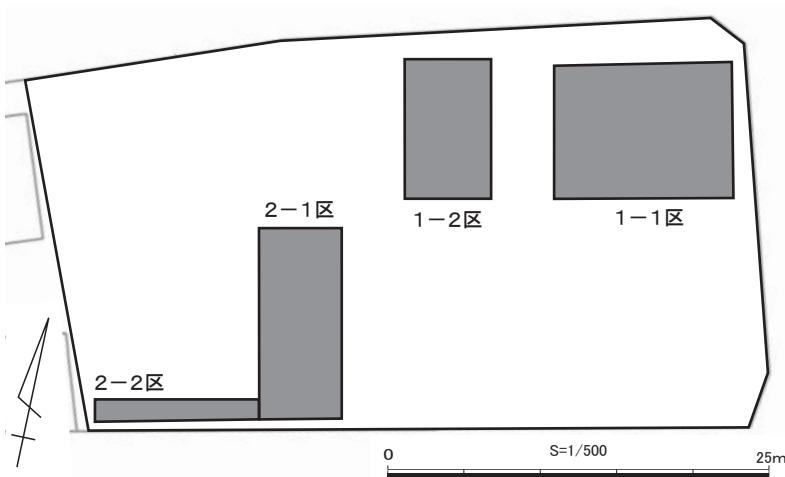
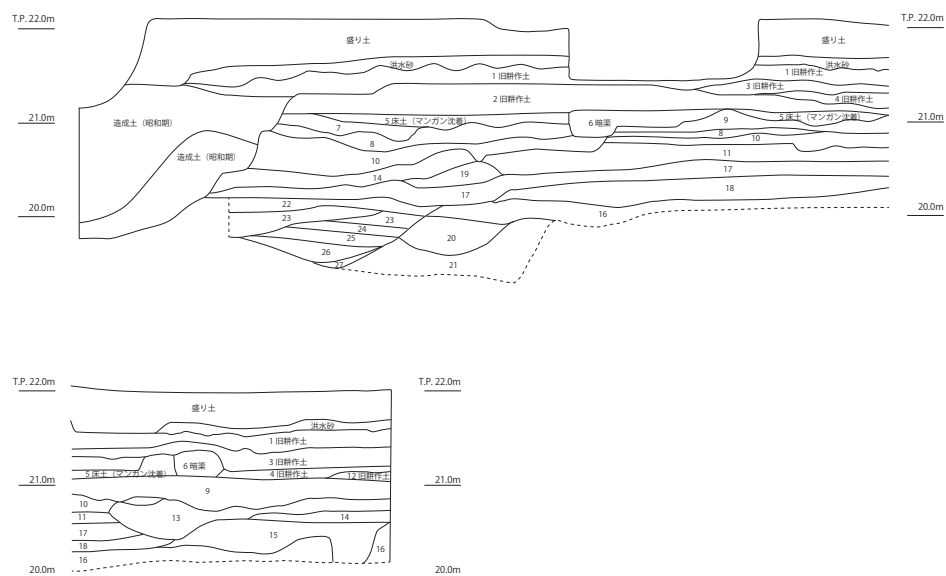


fig.28 調査区配置図

3. 基本層序

基本層序は、fig.29 に示すとおりである。

現在の地表面をなす従前建物に伴う盛土直下に、昭和時代の洪水砂にあたる可能性がある薄い砂層があり、その直下に近・現代の旧耕作土が2～3層程度堆積し、最下位に旧耕作土の床土と考えられるマンガン固着層の直下から土砂流堆積層が始まる。



- | | | |
|--------------------------|-------------------------|---------------------|
| 1. 5B6/1 青灰色粘土 | 9. 2.5Y5/3 黄褐色砂 | 18. 10YR5/6 黄褐色粘土 |
| 2. 10YR6/6 明黄色砂 | 10. 2.5Y5/1 黄灰色砂 | 19. 10YR7/1 灰白色シルト |
| 3. 5G6/ 緑灰色粘土 | 11. 2.5Y6/1 黄灰色砂 | 20. N5/ 灰色粘土 |
| 4. 2.5GY6/ オリーブ灰色粘土 | 12. 10Y5/1 灰色砂 | 21. 10YR5/6 黄褐色砂礫 |
| 5. 10YR6/8 明黄褐色粘土にマンガン付着 | 13. 10YR5/8 明褐色砂 | 22. 7.5Y6/1 青灰色シルト |
| 6. 10YR6/6 明黄褐色極粗砂～礫 | 14. 2.5Y5/1 黄灰色砂礫 | 23. 10YR6/8 明黄褐色砂礫 |
| 7. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂 | 15. 10YR4/1 褐灰色粘質砂に礫混じり | 24. 10YR5/8 黄褐色砂礫 |
| 8. 2.5Y6/2 灰黄色砂 | 16. 7.5Y6/1 灰色粘土 | 25. 2.5Y6/1 青灰色シルト |
| (9層以下土砂流堆積物) | 17. 10YR6/1 褐灰色砂 | 26. 10YR6/8 明黄褐色砂礫 |
| | | 27. 10YR6/1 褐灰色砂シルト |

fig.29 1区南壁土層断面図 (S = 1 / 80)

土砂流は、粗砂層、礫層、シルト層等が5～10 cm程度の厚さで互層をなし（局所的に30 cmを超える厚さを示す場合もある）、2 m以上にわたって堆積していた。工事影響深度まで掘削したが、土石流の最下層は、確認できなかった。層ごとに量の多寡は認められるが、基本的には、今回確認した堆積層の最上位から最下位まで一貫して弥生時代～鎌倉時代までの時期にわたる遺物を多量に含んでいた。土砂流は、北から南へ流れており、調査対象地を超えて敷地全体に拡がると考えられる。

4. まとめ

上述の通り、今回の調査対象地全域にわたって土砂流を確認し、顕著な遺構は認められなかった。当該調査地の北側には、昭和62（1987）年度に実施された第6次調査と第7次調査、昭和63（1988）年度に実施された第9次調査地がほぼ直列する位置関係で存在する。第6次調査と第7次調査では弥生時代の流路、第9次調査では平安時代の流路という調査結果が報告されている。堆積層内に含まれる遺物の時期認定に相違がみられるものの、今回の調査も含めて、同一の土砂流を確認した可能性は高い。

土砂流堆積物から出土する遺物で最も新しい時期のものが土砂流発生の時期を表すと考えられるが、調査中に近隣住民から昭和時代の水害で今回の調査地点が土砂流で一夜にして埋没したという体験談を拝聴した。表土のすき取り作業で確認できた調査地の宅地造成前の旧地形が近隣住民からの聞き取りで登場する旧地形とほぼ一致することから、今回検出した土石流は、昭和時代の水害で発生した土砂流の堆積物である可能性もある。あるいは、土砂流の発生が1回だけでなく複数回あって、今回確認した堆積層が中世から昭和時代まで度重なる土砂流がもたらした複合的な痕跡である可能性も考えられる。土砂流堆積物の上層が盛土等によって削平され、実際の堆積層最上層が失われた状態で観察していることもあり、いずれとも確言しがたい。



fig.30 1区南壁土層堆積状況（北から撮影）



fig.31 1区完掘状況（南から撮影）



fig.32 2区完掘状況（北西から撮影）

5 北青木遺跡第9次調査

1. はじめに

北青木遺跡は、六甲山南麓の海岸部に位置する縄文時代晩期から中世にかけての複合遺跡である。芦屋川と住吉川のほぼ中間に位置し、標高2～3 m 付近の各河川により形成された扇状地や海流、潮汐等の影響を受けた浜堤列と堤間湿地上に立地する (fig.33)。

今回の調査成果は、令和6（2024）年3月に『北青木遺跡第9・10次 深江北町遺跡第19・20・21次 発掘調査報告書』を刊行している。

2. 調査概要

今回の調査は、第5～8次調査と同じく阪神電気鉄道本線住吉・芦屋間連続立体交差事業に伴うもので、令和3（2021）年度も引き続き調査を実施している。調査区は、青木幹線を境に西地区と東地区を設定し、さらに工程上の都合から、西から西地区Ⅰ～Ⅵ区、東地区Ⅰ～Ⅶ区に細分して設定した。令和2（2020）年度の調査は、西地区Ⅰ～Ⅴ区、東地区Ⅰ区～Ⅲ区、Ⅴ区で行った（fig.34・35）。

3. 基本層序

現地表面の下層に盛土、中・近世耕土が存在し、その下層に西地区Ⅱ区東部からⅣ区の西部にかけて、暗灰色や黒褐色の粘質土である湿地状堆積や濘が検出されており、湿地の下層には、植物遺体や生痕が確認されている。

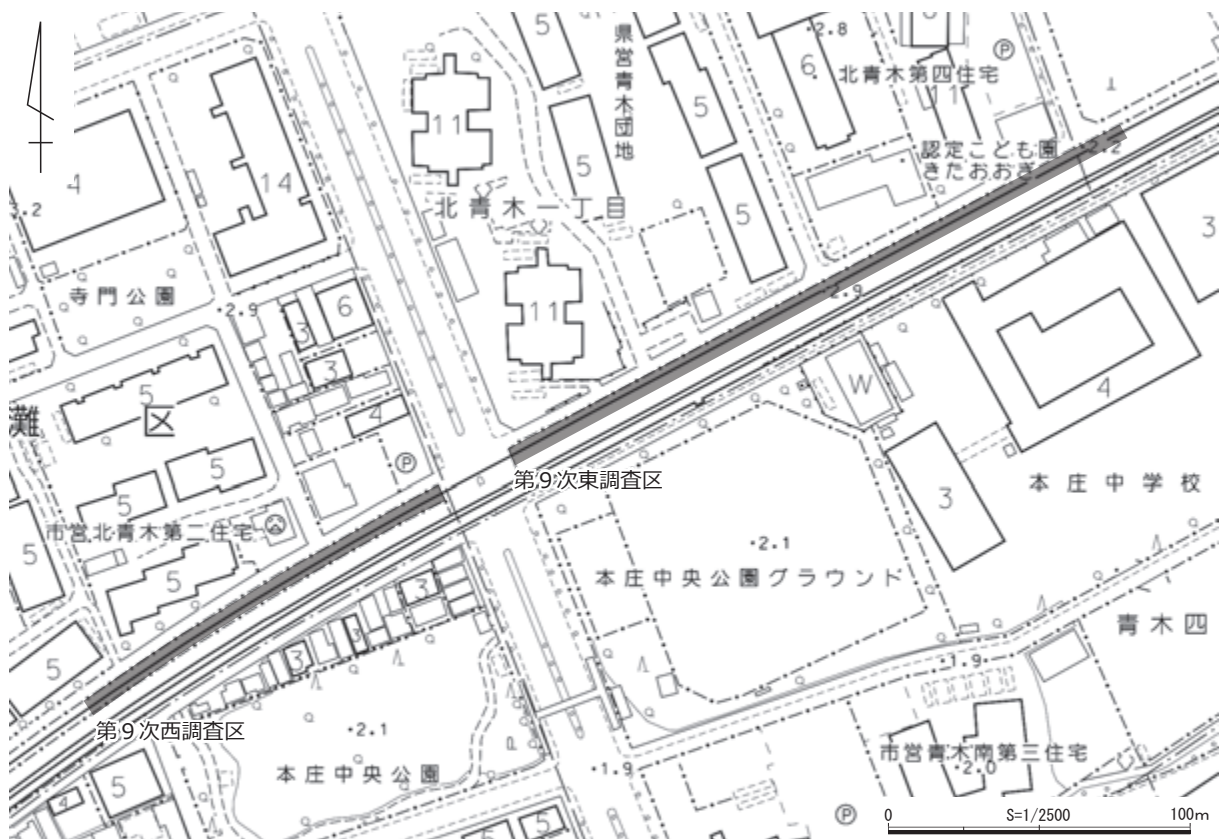


fig.33 調査地位置図

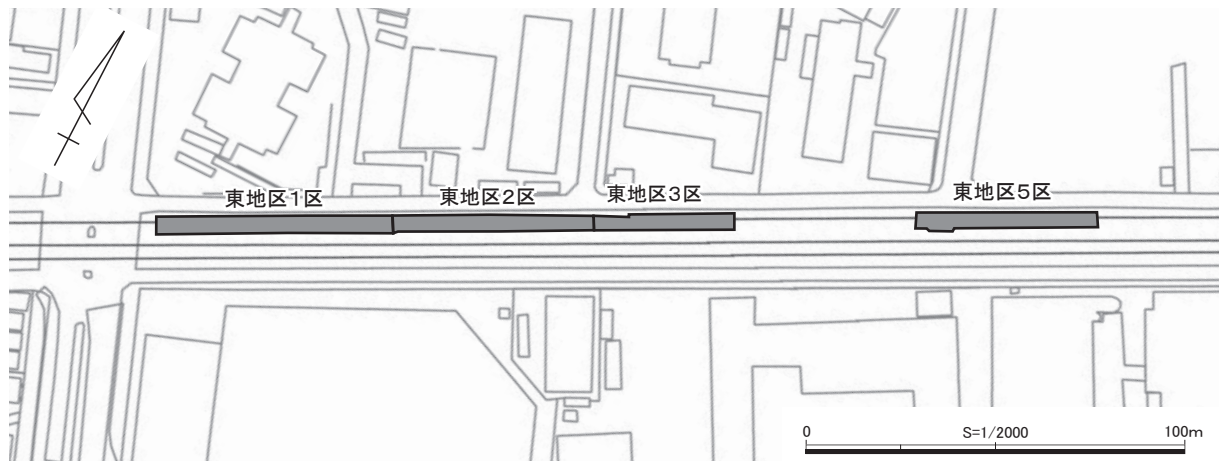


fig.34 東地区の各調査区配置図

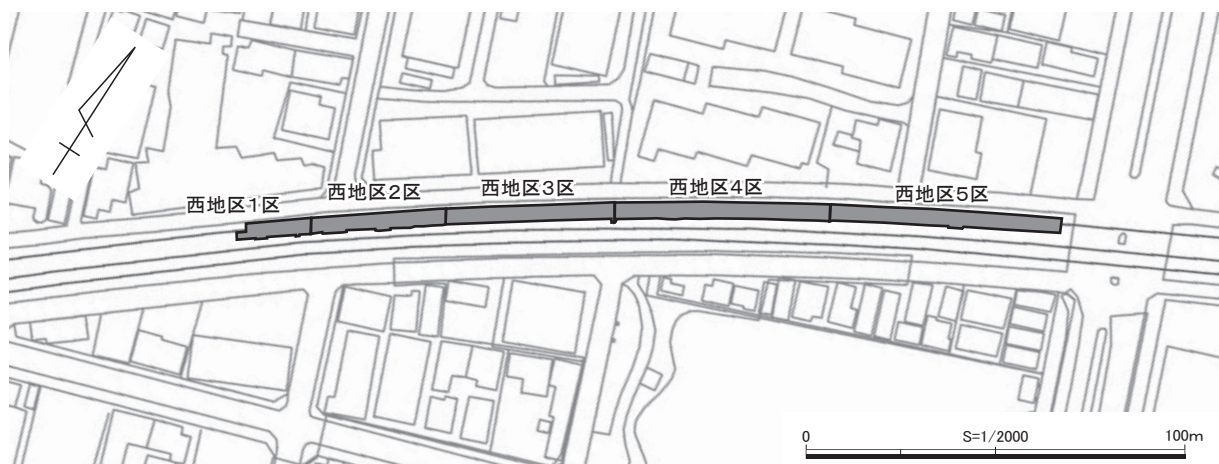


fig.35 西地区の各調査区配置図

その他の調査区では、盛土または耕土下層で遺構面となる浜堤を検出した。西地区IV区からV区、および東地区Ⅰ区からⅢ区にかけて同時期の浜堤が広がっており、東地区の浜堤は、第7・8次調査B 55区～B 57- B区で検出した浜堤へ続くとみられる。浜堤の標高は、西地区Ⅰ区からⅡ区で1.1～1.4 m、Ⅳ区の東部から中央部で約1.2m、東地区のⅠ区で約1.2 m、Ⅱ区からⅢ区で1.0～1.2 m、V区で約1.0 mとなり、これは現代の削平により本来の標高よりも低くなっていると思われる。浜堤は黄灰色から白色系の細砂から中砂の風性堆積で形成されており、下層では礫混じりの砂層が堆積し、激しい湧水が確認された。

4. 西調査区の概要

① 西地区Ⅰ区

西地区の最西端に位置し、盛土直下の遺構面は大きく削平を受けていた。遺構は、溝（SD）1条、土坑（SK）1基、ピット（SP）1基を検出している（fig.36・37）。

② 西地区Ⅱ区

第7・8次調査において、方形周溝墓および埋葬施設が確認されたB 47調査区の北側に位置する。同調査では、周溝墓の東の区画溝であるSD201、および西の区画溝であるSD202が第7次調査B 47西調査区で検出された。今回の調査では、方形周溝墓の区画溝と

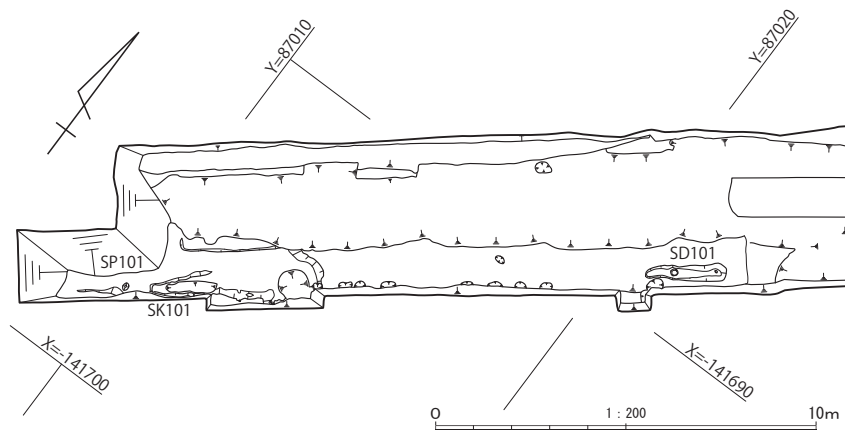
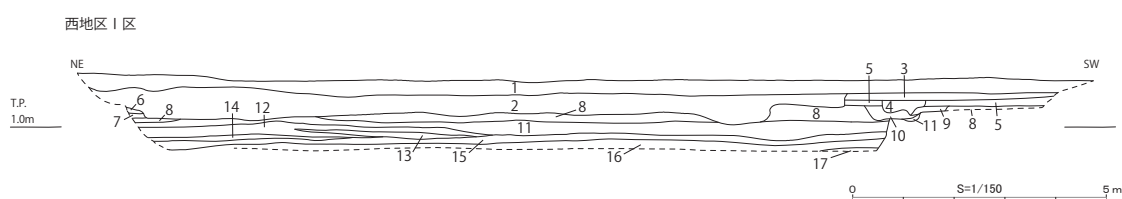


fig.36 西地区Ⅰ区遺構配置図



- | | | |
|----------------|-----------------------|---------------|
| 1. 碎石 | 7. 褐灰色土 (旧耕土) | 13. 淡灰茶色細砂 |
| 2. 改良土 | 8. 暗灰白色細砂 | 14. 淡褐色細砂 |
| 3. 盛土 | 9. 灰褐色砂質土 (SK101 埋土) | 15. 暗灰褐色中砂～細砂 |
| 4. 攪乱 | 10. 淡灰色砂質土 (SK101 埋土) | 16. 褐色中砂 |
| 5. 明茶褐色土 | 11. 淡灰褐色細砂 | 17. 灰黄褐色細砂 |
| 6. 明褐灰色土 (旧耕土) | 12. 淡黄褐色細砂 | |

fig.37 西地区Ⅰ区南壁土層断面

思われる溝3条、ピット (SP) 3基を検出している (fig.38・39)。

溝 (方形周溝墓区画溝) 第9次調査では、第7・8次調査におけるSD201から続く溝SD201、およびB 47西調査区で確認されたSD202の北側でSD202、そして調査区中央部で東西方向に延びるSD203を検出した。

SD201 最大幅1.2m、深さ約50cmを測る溝である (fig.51)。

SD202 最大幅1.5m、深さ約40cmを測る溝である。北端は攪乱によって削平されているが、北へ向け浅くなるため、SD201同様にSD203とは分離していると思われる。

SD203 幅2.7m以上、深さ約50cmを測る溝である。

今回の調査で確認した3条の溝は、いずれも繋がっていないことが明らかとなった。過去の調査でも、南北溝・東西溝が分離している周溝墓が確認されている。周溝の埋土は、暗黒灰色粘性シルト層または暗褐色細砂を挟んで上下2層に分かれており、上層は弥生時代後期、下層は弥生時代中期後半と思われる土器が出土している。過去の調査においても同様の時期の土器が出土しており、今回の調査で出土した遺物の時期も前調査での時期と相違は無いと思われる。

③ 西地区Ⅲ区

西地区の中央部に位置する。Ⅱ区の東部および南に隣接する第8次調査B 48- B区の北部から続く湿地状堆積を確認した。また、湿地上面でヒトの足跡を、調査区中央部の湿地内で

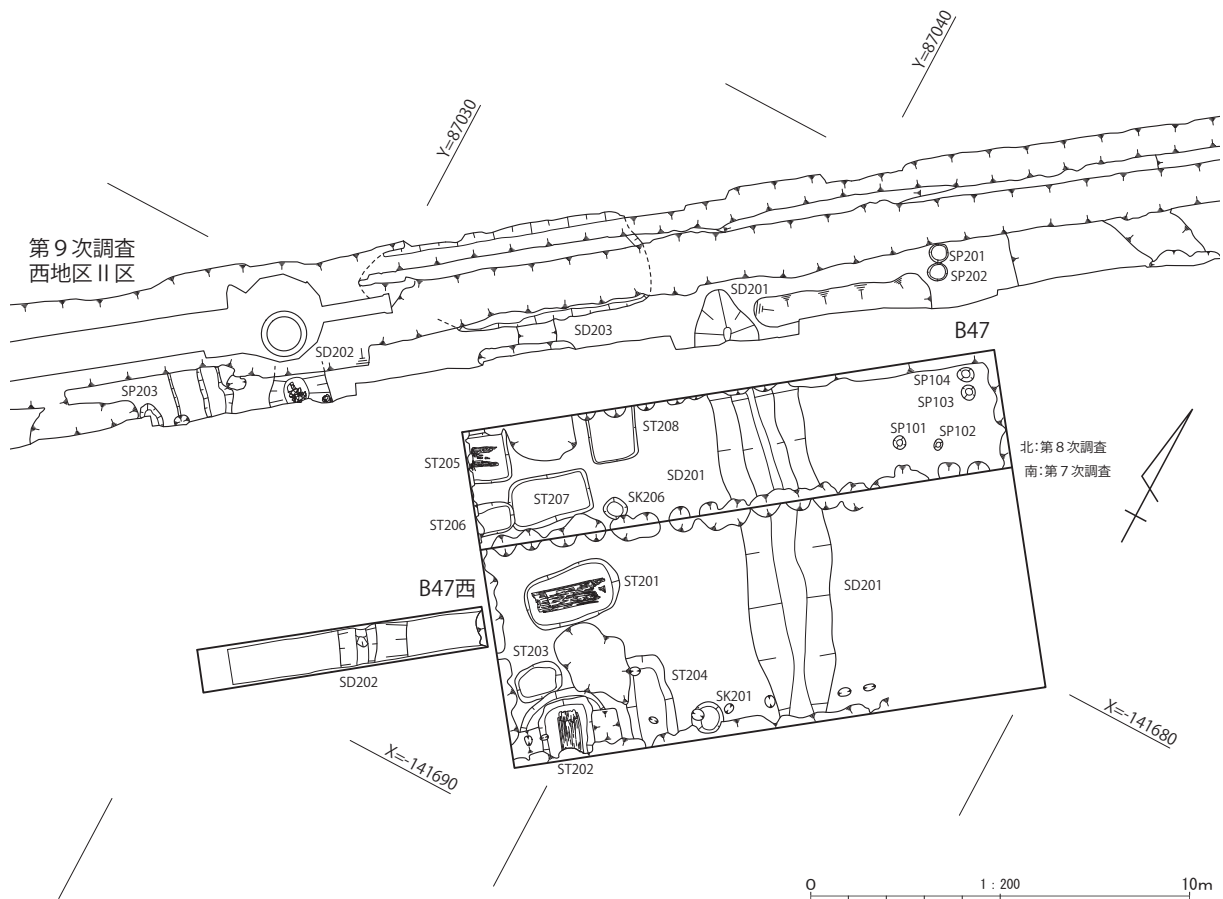
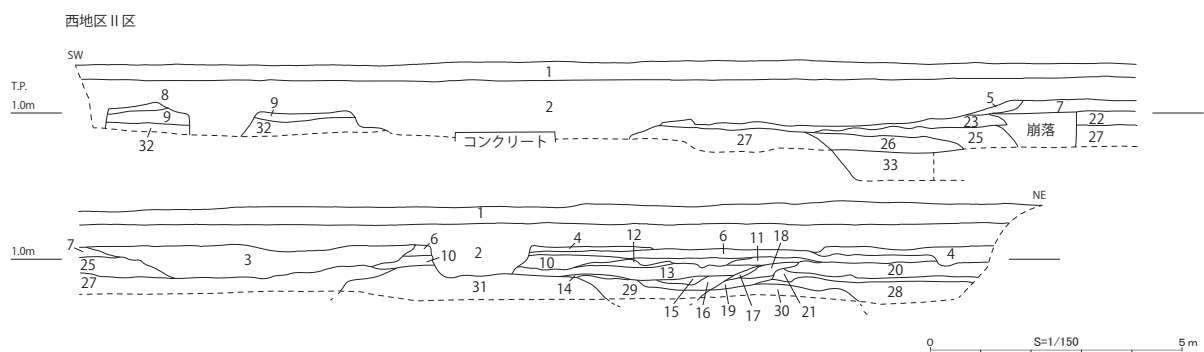


fig.38 西地区II区遺構配置図



- | | | |
|-------------------------------------|-----------------------------------|--|
| 1. 碎石 | 13. 黒褐色粘質土
(径 10 cm粗砂ブロック混じり) | 23. 灰白色シルト (暗褐色・明黄橙色
シルトブロック多量に混じる) |
| 2. 盛土 | 14. 茶褐色シルト | 24. 灰白色シルト |
| 3. 攪乱 | 15. にぶい黄褐色粗砂 | 25. 黒褐色シルト |
| 4. にぶい黄褐色砂質土 | 16. 黒色粘質土 | 26. 灰白色細砂 |
| 5. にぶい黄褐色砂質土 | 17. (にぶい黄橙色シルト混じり) | 27. にぶい黄橙色細砂 |
| 6. 黒褐色粘質土 | 18. 黒色粘質土 | 28. 灰白色～青灰色シルト
(にぶい黄褐色シルト混じり) |
| 7. 灰白色～にぶい黄橙色粗砂
(礫混じり) | 19. 灰褐色細砂混じりシルト
(にぶい黄橙色シルト混じり) | 29. 灰色粘質土 |
| 8. 黄灰白色細砂 | 20. 黄橙色粗砂 | 30. 灰色細砂混じりシルト
(灰白色シルト混じり) |
| 9. にぶい黄橙色細砂 | 21. 暗褐色粘質土 | 31. 灰黄褐色細砂 |
| 10. 黄褐色粗砂 | 22. 黒褐色粘質土 | 32. 灰褐色粗砂 |
| 11. 暗褐色粘質土・明茶褐色細砂
混じりシルト (斑に混じる) | | |
| 12. 暗褐色粘質土 | | |

fig.39 西地区II区北壁土層断面

数か所の土器溜まりを検出した (fig.40)。

④ 西地区Ⅳ区

西地区の中央に位置する。遺構は溝4条、土坑2基、ピット1基を検出した。また、調査区の西側でⅡ区から広がる湿地状堆積の東端を検出し、湿地上面でヒトの足跡を、湿地の東端では滯筋と思われる堆積を確認した。調査区の中央でも西に続く湿地状堆積を検出しており、最下層で木製品が出土した (fig.41～43)。

SD404 調査区の西半で検出した幅0.8m～1.2m、長さ4.5m、深さ約30cmの溝である。埋土は上層より灰褐色粘性シルト(黄褐色粘性ブロックまじる)、黒褐色細砂質土、

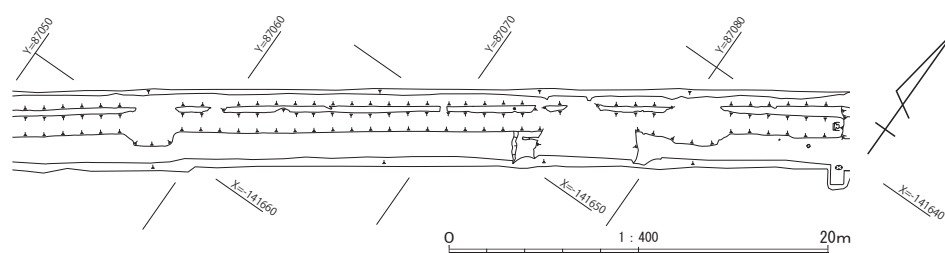


fig.40 西地区Ⅲ区遺構配置図

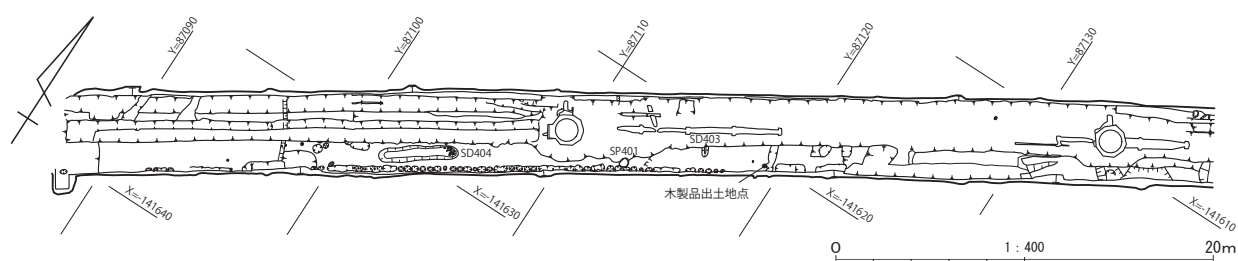
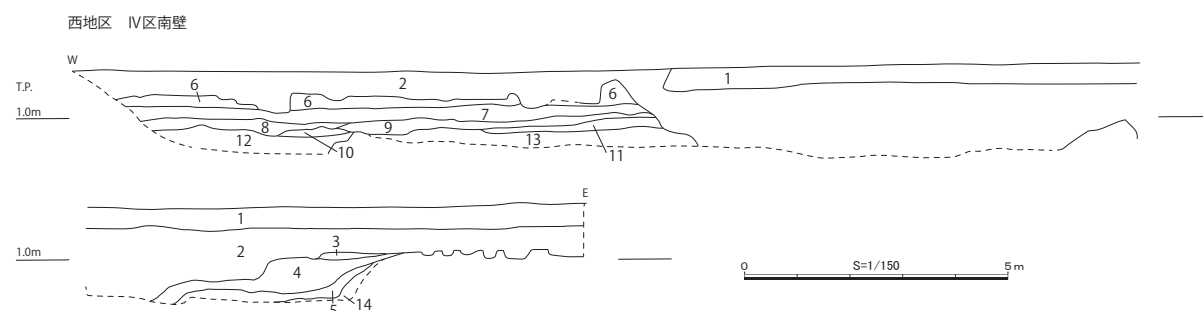


fig.41 西地区Ⅳ区遺構配置図



- | | | |
|-------------------|------------------------|--------------------|
| 1. 碎石 | 12. 暗灰褐色砂(暗褐色粘性シルト混じり) | 22. 黒色極細砂混じりシルト |
| 2. 盛土 | 13. 暗褐色粘性シルト | 23. 灰白色シルト |
| 3. 攪乱 | 14. 黒褐色粘性シルト混じり細砂 | (暗灰色シルト混じり) |
| 4. 黄褐色細砂 | 15. 暗灰色シルト混じり細砂 | 24. 灰褐色粘性シルト混じり細砂 |
| 5. 暗灰褐色粘質土 | 16. 暗灰色粗砂 | 25. 灰褐色砂利 |
| 6. 暗褐色粘質土 | 17. 灰黄褐色細砂細砂質土+暗褐色粘性細砂 | 26. にぶい黄褐色細砂 |
| 7. 暗褐色粘性細砂(鉄分混じり) | 18. 黒色粘性シルト | 27. 淡灰色砂 |
| 8. 暗褐色粘性シルト | 19. 黒褐色粘性細砂混じりシルト | 28. 黄橙色～灰白色細砂 |
| 9. 黒褐色粘質土 | 20. 灰白色細砂 | 29. 黒褐色粘性極細砂混じりシルト |
| 10. 暗褐色粘性シルト | 21. 暗褐色細砂混じりシルト | 30. にぶい黄褐色細砂 |
| 11. 灰褐色粘性細砂 | (黒色粘土ブロック混じり) | 31. 灰褐色砂 |
| (黄褐色細砂質土混じり) | | |

fig.42 西地区Ⅳ区南壁土層断面図

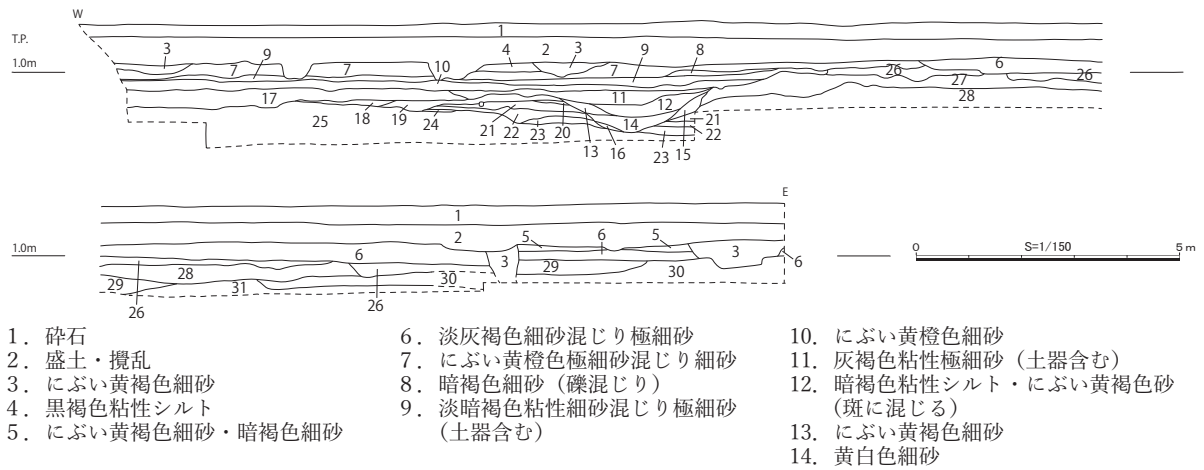


fig.43 西地区Ⅳ区北壁土層断面図

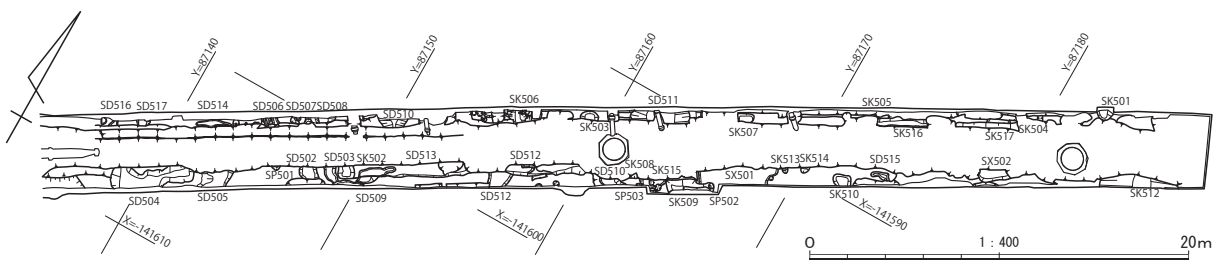
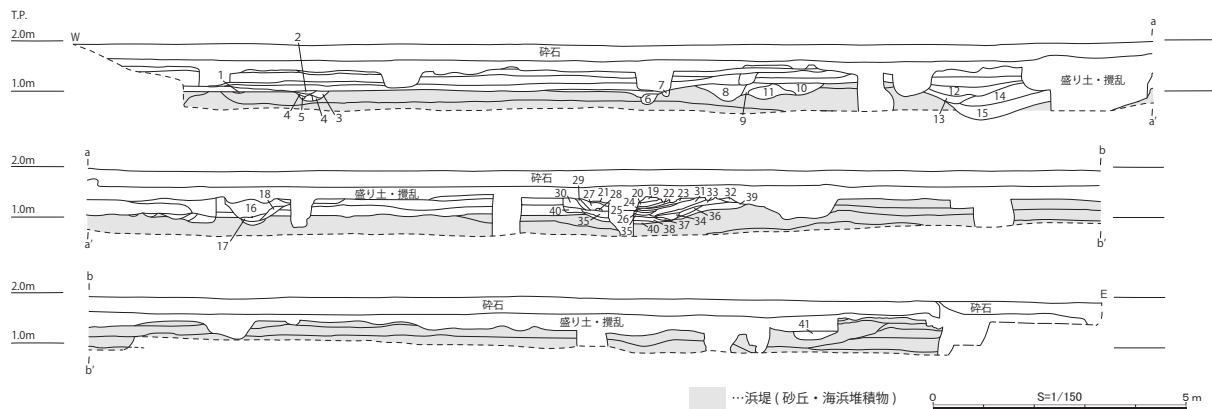


fig.44 西地区Ⅴ区遺構配置図



1. 淡褐色粗砂 (SD16 埋土)
2. 黄褐色細砂 (SD17 埋土)
3. 黄褐色中砂と黒色中砂 (SD17 埋土)
4. 黄褐色粗砂 (SD17 埋土)
5. 暗灰褐色シルト (SD17 埋土)
6. 暗灰褐色粘質細砂 (SD506 埋土)
7. 暗灰色粘質細砂 (SD507 埋土)
8. 暗灰褐色シルトがブロック状に混じる暗灰色中砂 (SD508 埋土)
9. 暗灰色粘質細砂がブロック状に混じる灰白色細砂 (SD508 埋土)
10. 暗灰褐色シルトがブロック状に混じる灰白色細砂 (SD508 埋土)
11. 暗灰色中砂 (SD508 埋土)
12. 暗褐色粘質細砂がブロック状に混じる灰白色中砂～細砂 (SD510 埋土)
13. 暗褐色粘質細砂 (SD510 埋土)
14. 灰白色中砂～粗砂 (SD510 埋土)
15. 灰白色中砂と暗灰色シルトの互層 (SD510 埋土)
16. 暗灰～暗灰褐色粘質中砂 (SK506 埋土)
17. 灰白色細砂と暗灰色中砂の互層 (SK506 埋土)
18. M g 混じり黒灰色中砂 (SK506 埋土)

19. 淡灰色中砂 (SD511 埋土)
20. 褐色中砂混じり淡灰色中砂 (SK506 埋土)
21. やや暗い灰白色中砂 (SD511 埋土)
22. M g 混じり灰白色中砂 (SD511 埋土)
23. 褐色中砂混じり淡灰色中砂 (SD511 埋土)
24. M g 混じり灰白色中砂 (SD511 埋土)
25. 褐色中砂混じり淡灰色中砂 (SD511 埋土)
26. 淡灰色中砂 (SD511 埋土)
27. 褐色中砂混じり暗灰色中砂 (SD511 埋土)
28. 暗黄褐色粗砂 (SD511 埋土)
29. 黄褐色シルトブロック混じり暗灰色中砂 (SD511 埋土)
30. 黄褐色パイラン混じり暗灰色中砂 (SD511 埋土)
31. M g 混じり灰褐色中砂 (SD511 埋土)
32. 黄褐色中砂混じり暗灰色中砂 (SD511 埋土)
33. やや暗い灰白色中砂 (SD511 埋土)
34. 暗灰褐色中砂 (SD511 埋土)
35. パイラン混じり灰色細砂 (SD511 埋土)
36. 暗灰色中砂 (SD511 埋土)
37. 灰白色（有）さと暗灰色シルトの互層 (SD511 埋土)
38. 褐色中砂混じり暗灰色中砂 (SD511 埋土)
39. 灰白色中砂 (SD511 埋土)
40. 暗褐色中砂 (SK501 埋土)

fig.45 西地区Ⅴ区南北壁土層断面

黒褐色粘性細砂質土、黒褐色細砂質土（炭化物まじる）、灰黄褐色細砂質土の順で堆積している。

⑤ 西地区Ⅴ区

西地区の最東端に位置する。遺構は溝 17 条、土坑 17 基、ピット 3 基、用途不明遺構（SX）2 基を検出した（fig.44・45）。

SK501 調査区の東端で検出した直径約 80cm、深さ約 25cm の土坑である。攪乱により一部が削平されており、埋土は褐色中粒砂が堆積している。弥生時代中期の壺が出土しており、土器埋納遺構と考えられる。

5. 東調査区の概要

① 東地区Ⅰ区

南側には第 7・8 次調査の B 52 区、B 53- A 区、B 53- B 区および 54- A 区の西半が隣接する。市道を挟んで北側には、北青木銅鐸が発見された第 5 次調査 1 区が並行する。溝 2 条、土坑 2 基、ピット 2 基を検出した（fig.46）。

SD601 調査区東側で検出した、幅約 2.9 ～ 3.8m、深さ約 80cm の溝で、位置と埋土から第 8 次調査で検出された B 53- A 区の SD202 に対応する溝と考えられる。遺構埋土は第 7・8 次調査同様洪水砂の堆積がみられるが、遺構の大半が現代の地下埋設物によって破壊されているため、年代の判別ができる遺物は出土しなかった。しかし、過去の調査により弥生時代後期から 8 世紀後半頃の溝と考えられる。なお、第 8 次調査では B 53- A 区 SD202 の両側でそれぞれ 1 条ずつ溝が検出されていたが、今回の調査ではそれに対応する溝は確認されなかった。

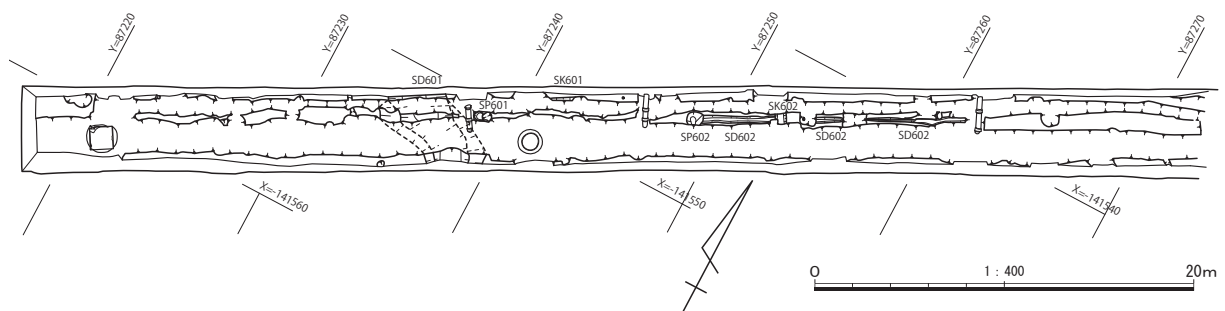


fig.46 東地区Ⅰ区遺構配置図

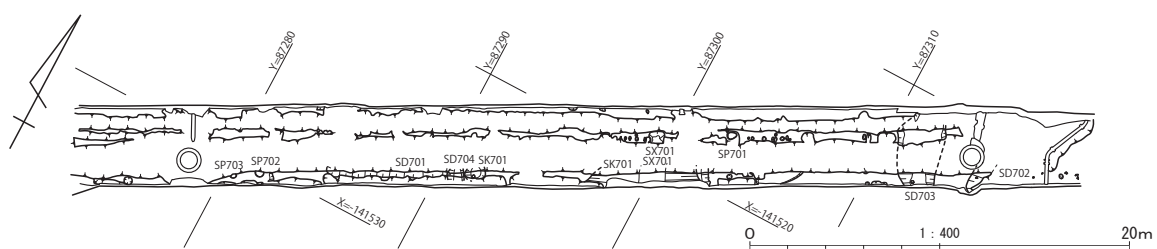


fig.47 東地区Ⅱ区遺構配置図

② 東地区Ⅱ区

溝4条、土坑1基、ピット3基、落ち込み(SX)1基を検出した(fig.47)。

SK701 調査区中央部やや西よりで検出した長径約1.0 m以上、深さ約15cmの土坑である。埋土からは弥生時代後期の土器が出土している。

SX701 調査区中央部で検出した幅約6.6 m、深さ約1.0 mの落ち込みである。南側は調査区外へ続くが、B 54- B区で西肩を検出したSK107が対応する可能性がある。

③ 東地区Ⅲ区

掘立柱建物(SB)1棟、溝1条、ピット1基、落ち込み1基を検出した(fig.48)。

SB801 調査区東側で検出した掘立柱建物である。3基の柱穴は直径35～50cmで深さ約5cm、SB801- P3のみ深さ約24cmである。いずれも長径15～20cmの礎盤を備える。SB801- P3の礎盤の一つはほぼ直立状態で検出した。周囲の遺構面が後世の攪乱で改変されているため、確認された柱穴列に直交する柱穴は見つかっていない。しかし、南側の第8次調査B 55- B区で柱穴に礎盤を備える掘立柱建物が確認されているため、この柱穴列も東西方向2間以上の掘立柱建物の可能性が高い。

④ 東地区Ⅴ区

東地区の最東端に位置する。遺構は落ち込み3基、河道1条を検出した(fig.49・50)。

SX1002 調査区西側で検出した、東西約13.1 m、南北約1.7 m以上、深さ約90cmの河川状の落ち込みである。西辺から北辺の角と東辺を検出した。南側は調査区外へと続いており、北辺から東辺の角は後世の攪乱で消滅している。

落ち込みの斜面から底面にかけて、斜面に沿うように直径5 cmほどの杭が打ち込まれている。また西辺から北辺の角では落ち込み斜面に人工的な集石が存在する。礫は長軸方向に5～20 cmほどの大きさで、川原石のような角が摩耗した礫を用いている。集石は上層と下層の2層を確認した。標高は、下層の礫上面の斜面上部で0.75 m、底面と接する斜面下部で0.

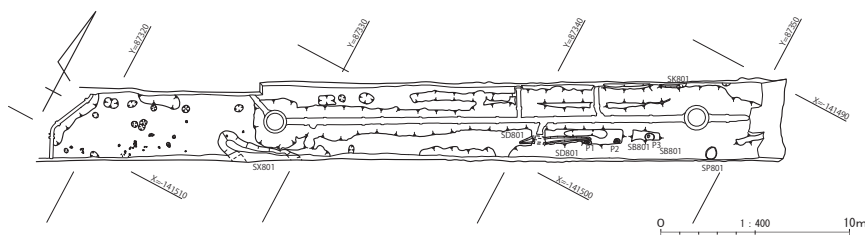


fig.48 東地区Ⅲ区遺構配置図

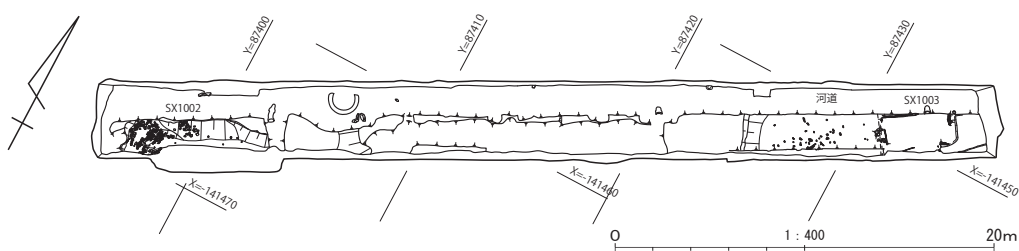


fig.49 東地区Ⅴ区遺構配置図

3 mである。上層の礫は下層の礫上に5～20 cmほど土を盛り、その上に礫を施し、隙間を粘土で埋めている。遺物は須恵器・土師器が出土している。堆積状況や杭、集石の存在、出土遺物から古代の河道にあたる可能性がある。

SX1003 調査区東側で検出した、東西約4.1 m、南北1.8 m以上、深さ約20 cmの枡形の遺構である。直径2 cmほどの枝をしがらみのように横方向に積み重ねた柵で、遺構の四辺を囲っている。遺物は土師器、須恵器、磁器が出土している。後述の河道を切るため、近世以降の遺構とみられる。

河道 調査区東側で検出した、東西約7.5 m以上、深さ約1.0 m以上の流路である。第7・8次調査では流路の東肩を検出したが、今回の調査では東肩はSX1003に切られているため、検出できたのは西肩のみである。既往の調査同様、流路内には多数の杭が打ち込まれていたが、流路を横断するように打ち込まれているため、護岸を目的とした杭ではない可能性がある。杭は多くが標高-0.4

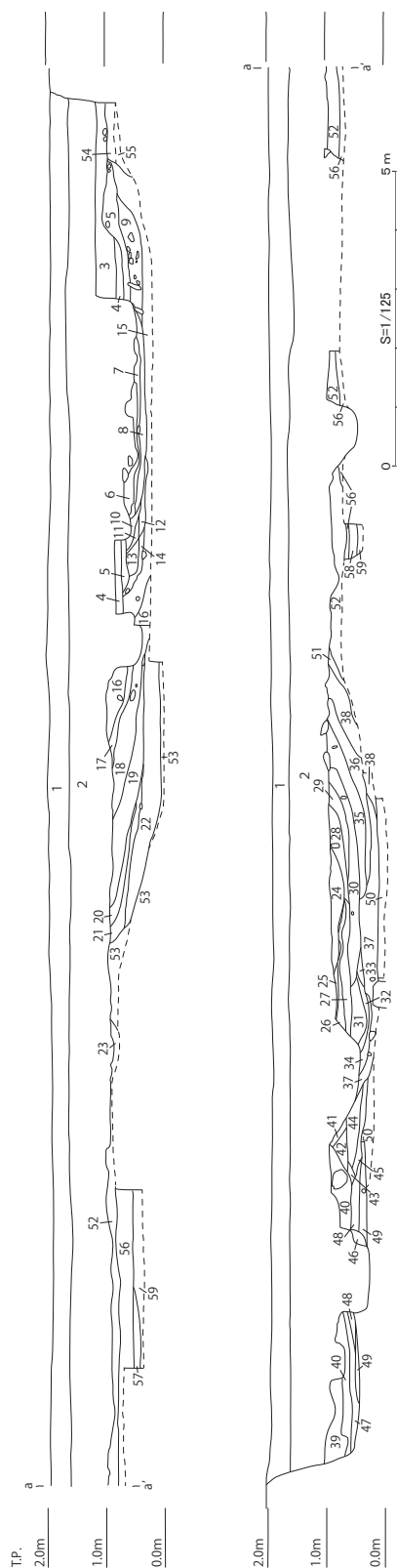


fig.50 東地区V区南壁土層断面

～-0.2 mまで打ち込まれており、最も深いものでは-0.7 mに達している。既往の調査では近世の河道と報告されていたが、出土した遺物から古代から中世にも流れていた可能性がある。

- | | | |
|--------------------|-----------------------------|-----------------------|
| 1. 碎石 | 31. 淡灰黄色中砂～粗砂と灰色中砂と暗褐色細砂～中砂 | 45. 暗褐色細砂～中砂 |
| 2. 盛土・整地土 | 32. 暗灰色シルトの互層 | 46. 暗灰黄色中砂 |
| 3. 近代水路地業 | 33. 黒褐色粘質中砂 | 47. 暗褐色中砂 (45より暗い) |
| 4. 灰白色粗砂 | 34. 黄褐色中砂～粗砂 | 48. 灰黄色中砂 |
| 5. 暗灰色中砂と灰白色中砂の互層 | 35. 暗黄褐色中砂～粗砂 | 49. 黒褐色中砂と灰色中砂 (礫混じり) |
| 6. 暗褐色中砂と黄灰色中砂 | 36. 暗黄褐色中砂～中砂 | 50. 暗灰色細砂～中砂 |
| 7. 暗黄灰色細砂～中砂 | 37. 暗褐色中砂 | 51. 暗黄褐色中砂～粗砂 |
| 8. 暗褐色中砂と暗灰色中砂 | 38. 暗灰黄色中砂 | 52. 淡灰黄褐色中砂 |
| 9. 暗黄灰色中砂と暗褐色中砂の互層 | 39. 暗灰色中砂と暗褐色細砂 | 53. 淡灰褐色中砂 |
| 10. 暗褐色中砂 | 40. 暗灰色中砂と灰色細砂 | 54. 黄褐色中砂 (やや暗い) |
| 11. 暗黄褐色中砂 | 41. 灰色中砂 (やや黄色い) | 55. 淡黄褐色中砂 |
| 12. 暗灰色中砂 (やや黄色い) | 42. 暗褐色粘質中砂 (鉄分混じり) | 56. 黄褐色中砂 |
| 13. 暗灰色中砂 (やや黄色い) | 43. 灰色中砂 | 57. 灰黄色細砂と灰褐色細砂の互層 |
| 14. 暗黄灰色中砂 | 44. 淡黄灰色中砂と黄灰色粘質中砂 (若干礫混じり) | 58. 淡灰黄色細砂～中砂 |
| 15. 黄灰色中砂 (やや暗い) | | 59. 灰黄色中砂 |

6. まとめ

第9次の調査は、従前が道路であったことから、上下水道やガス等の埋設管をはじめ水路等の地中埋設物、さらには仮軌道敷設時の地盤改良によって大きく削平され、調査区の遺構面は寸断されている状況であった。

しかし、このような中でも西地区Ⅱ区では、周溝墓の北側の溝とコーナーの陸橋部、西地区Ⅴ区においては、弥生中期の土器埋納遺構を確認することができた。これらの成果は、これまでの調査によって想定されている墓域や祭祀空間の存在について追認するものと考えられる。さらに東地区Ⅴ区においては、古代の河道の護岸と考えられる集石が部分的にはあるが検出された。

このような遺構は今までの調査では確認されておらず、奈良から平安時代にかけての北青木遺跡の性格を探り、また今後周辺の調査を行っていく上で、貴重な成果である。さらには、遺跡内の堆積状況を東西に連続して確認することが可能となったため、これまで断続的な調査部分から推定していた浜堤と堤間湿地の状況の資料を得ることができた。



fig.51 西地区Ⅱ区方形周溝墓 SD201 西下層遺物出土状況（北から撮影）

6 深江北町遺跡第18次調査

1. はじめに

深江北町遺跡は、六甲山南麓の市域東端海浜部に位置する。芦屋川による扇状地扇端と、大阪湾を巡る沿岸流によって形成された浜堤上および堤間湿地に立地する遺跡である。昭和59年（1984）の県営住宅建設に伴う発掘調査以来、現在までに17回の発掘調査が行われてきた。その結果、弥生時代後期の溝や柱穴、古墳時代初めの周溝墓、飛鳥時代～奈良時代以降の水田等が確認されている。特に第7・12・14次調査では、「驛」と書かれた奈良時代～平安時代の墨書土器や木簡等が出土し、官衙に関係する可能性がある遺構も検出されていることから、「葦屋驛家」に関連する施設が付近に存在していたとみられる。

今回の発掘調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事によって埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲を調査した。今回の調査地点は、第13次調査の南50m、第16次調査の南30mに位置するため（fig.52）、付近で確認されている古墳時代～古代の遺構が拵がると想定された。

2. 調査概要

試掘調査では、埋蔵文化財を現地表下1.7mで検出している。発掘調査は、工事によって埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲を対象としたが、安全面に配慮して発掘調査を行った（fig.53）。調査は、遺物包含層上面まで重機掘削し、それ以下は、人力掘削で検出した。遺構と遺物の記録は、調査地内に設置した測量用基準点をもとに図化し、35mmカメラ・120mmカメラ・コンパクトデジタルカメラを用いて撮影した。



fig.52 調査地位置図

3. 基本層序

調査地は、東に隣接する道路面より 60 cm 低く、現況地表面の標高は、T.P.3.9 m を測る。層序は、上層より盛土・攪乱土→灰色シルト質砂→灰黄色砂→灰色砂→灰色砂→粗砂→黒色粗砂混じりシルト→灰白色砂の順で堆積している (fig.54・56・58)。遺物は、灰黄色砂と灰色砂から出土したが、黒色粗砂混じりシルト以下からは出土していない。現地表下 0.9 ～ 1.2 m までは盛土・攪乱土で、現地表下 1.7 m までは洪水・氾濫による砂が堆積していた。砂層の下層部は、薄く微細な植物遺体を含むシルト層をラミナ状に挟む。

4. 遺構面の概要

砂層を除去した段階の黒色粗砂混じりシルト面で畦畔を検出した (fig.60)。この畦畔は、1 区と 3 区で確認したもので、幅 45 cm、高さ数 cm ～ 10 cm である。黒色粗砂混じりシルト層は、よくしまる土質で厚さ 10 cm を測る (fig.54 ～ 59)。

水田面 (= 黒色粗砂混じりシルト上面) の標高は、1 区北半で T.P.2.05 m、1 区南半で T.P.2.1 m、2 区で T.P.2.1 m、3 区西端で T.P.2.0 m、3 区東半で T.P.2.2 m を測り、北東側が高く、南西方向へかけて徐々に低くなる。水田面では、足跡や株痕等は検出されず、水口も確認していない。

遺物は、砂層から弥生土器甕底部、古墳時代の須恵器杯身・杯蓋、奈良時代の須恵器杯蓋、土師器等が出土した。砂層に挟まれる極細砂質シルトからは、杭状の木製品も出土した。また、第 16 次調査と同様、埴輪片と考えられる遺物も出土している。

5. まとめ

今回の調査では、水田畦畔を確認した。遺物の詳細な検討を経ていないため、時期については不確実であるが、水田を構成する黒色粗砂混じりシルトは、北側の第 13 次調査における古墳時代後期の第 3 遺構面の水田 (T.P.4.0 ～ 4.3 m) と、第 16 次調査の黒灰色砂泥 (T.P.3.1 ～ 3.3 m) に相当する土層と考えられる。今回の調査で検出した水田面の標高は、T.P.2.0 ～ 2.2 m であることから、堤間湿地の深いところに当たると考えられる。湧水

も著しく、T.P.2.4 m 以下は水没する状況であった。ちなみに、第 13 次調査北東部の地表面標高は、T.P.5.0 m であり、今回の調査地東側の道路面標高は T.P.4.6 m を測る。

畦畔は、今回の調査で 3 ヶ所検出した。1 区の畦畔は、湧水が著しい状態での掘削であったため、断面による確認となった。調査区の東西両壁面で確認した水田面レベルとそれぞれの壁面での畦畔数からみて、今回検出した畦畔は、T 字状に接続していたと考えられる。1 区と 3 区の畦畔の関係性は明らかでなく、水田一区画の形状は不明である。

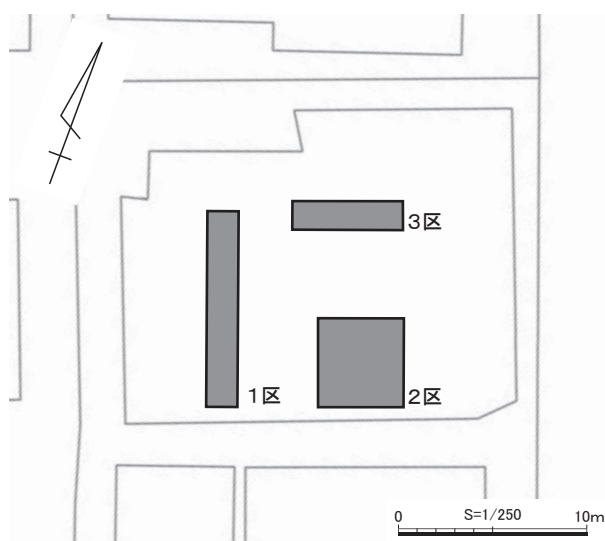
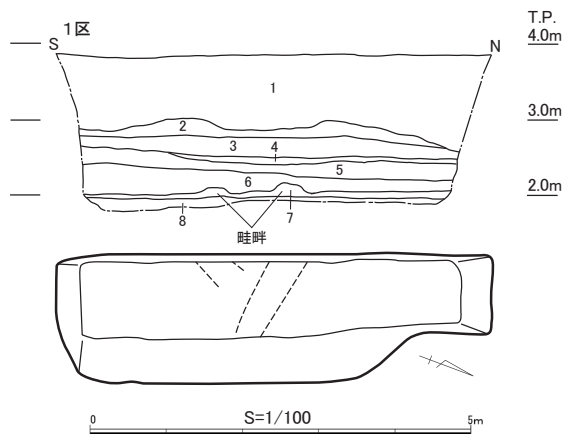
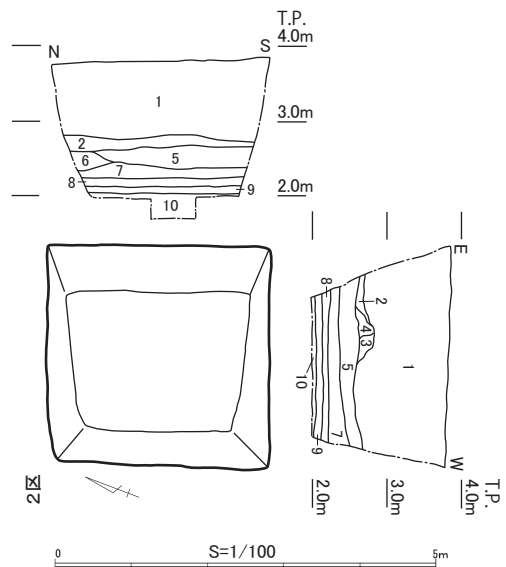


fig.53 調査区配置図



- | | |
|---------------|------------------|
| 1. 盛土 | 6. 灰色粗砂 |
| 2. 灰色シルト混じり砂 | 7. 黒色粗砂混じり粘性シルト |
| 3. 灰色粗砂 | 8. オリーブ黒色シルト混じり砂 |
| 4. 灰色シルト | |
| 5. 灰色粗砂シルト混じり | |

fig. 54 1区遺構配置図・土層断面図



- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 盛土 | 6. 淡黄色粗砂 |
| 2. 灰褐色シルト質極細砂 | 7. 灰色細砂～中砂 |
| 3. 灰色砂 | 8. 灰色粗砂 |
| 4. 灰色極細砂 | 9. 黒色シルト粗砂混じり |
| 5. 灰色砂 | 10. 灰白色砂 |

fig. 56 2区遺構配置図・土層断面図



fig. 55 1区西壁土層断面（東から撮影）



fig. 57 2区南壁土層断面（北から撮影）

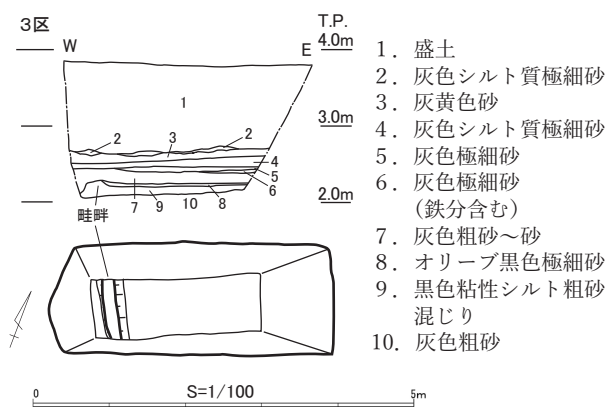


fig. 58 3区遺構配置図・土層断面



fig. 59 3区南壁土層断面（北から撮影）

以上のように、本調査では、深江北町遺跡の土地利用を知るうえで重要な成果を得ることができた。深江北町遺跡は、飛鳥時代～奈良時代の遺物と遺構が多数発見されており、古代山陽道ならびに葦屋驛家と関連するものと考えられている。今回の調査では、官衙関連の遺構と遺物は確認できなかったが、周辺の調査地点同様、集落遺跡を支えた生産跡を確認することができた。

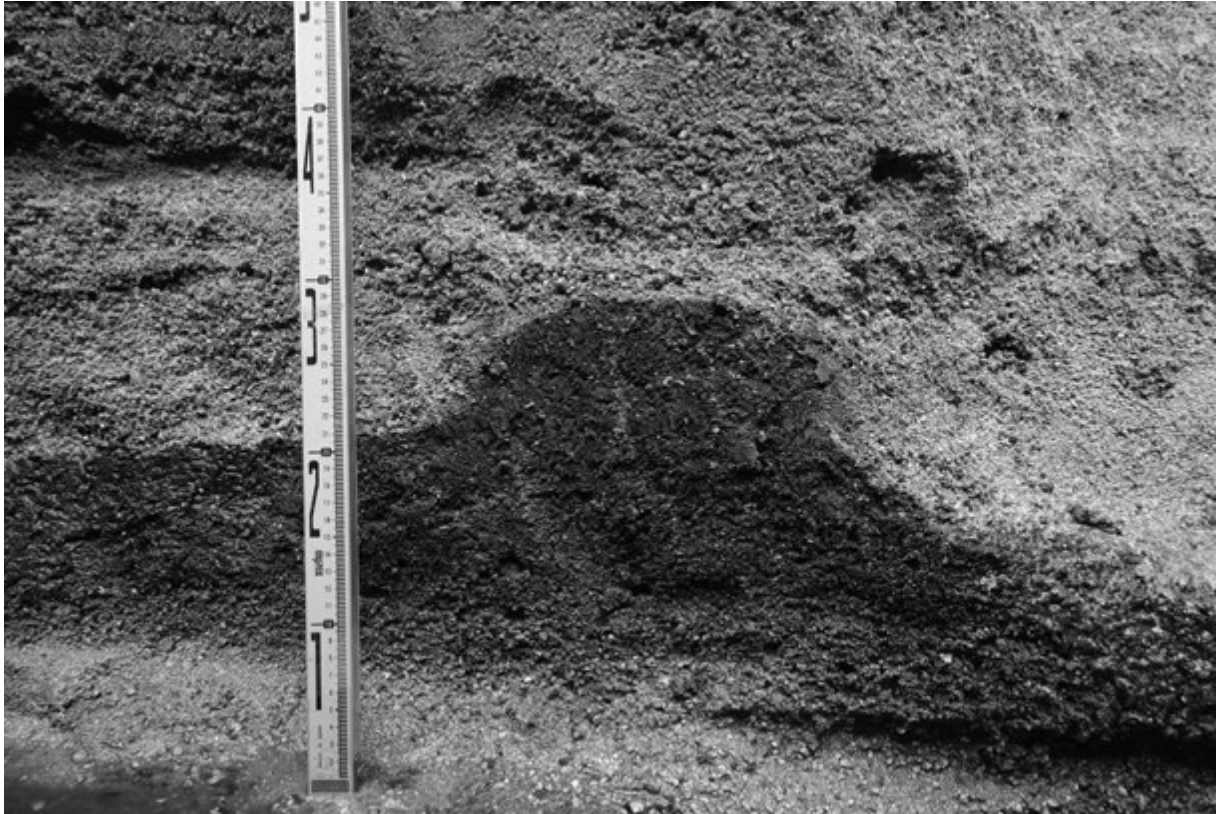


fig.60 1区東壁畦畔（西から撮影）

7 深江北町遺跡第19次調査

1. はじめに

深江北町遺跡は、六甲山南麓の標高約2～5mの海沿いに位置し、東は芦屋市との市境に近い。この地域では、六甲山麓から海へ流出した砂礫が大阪湾の沿岸流によって流され、海岸線と平行して堆積することで、複数の浜堤とそれに挟まれた低湿地が形成されてきた。深江北町遺跡は、このようにして形成された浜堤と堤間湿地上に立地している (fig.61)。

今回の調査成果は、令和6(2024)年に『北青木遺跡第9・10次 深江北町遺跡第19・20・21次 発掘調査報告書』を刊行している。

2. 調査概要

今回の調査は、第12・14・17次調査と同じく阪神電気鉄道本線住吉・芦屋間連続立体交差事業に伴うもので、令和3・4(2021・2022)年度も引き続き調査を実施している。調査区は、市道栄東線以西を西地区とし、さらに工程の都合から、西から西地区Ⅰ・Ⅱ区に分割して設定した。令和2(2020)年度の調査は、西地区Ⅰ区で行った (fig.62)。

3. 基本層序

現地表面の標高は1.9～2.1mである。基本層序は、現地表面直下に中・近世耕土が存在し、その下層に黄褐色細砂の浜堤と、黒色シルトと黒灰色粘質細砂の互層である湿地状堆積が存在する。遺構面となる浜堤面の標高は0.8～0.9mである。



fig.61 調査地位置図

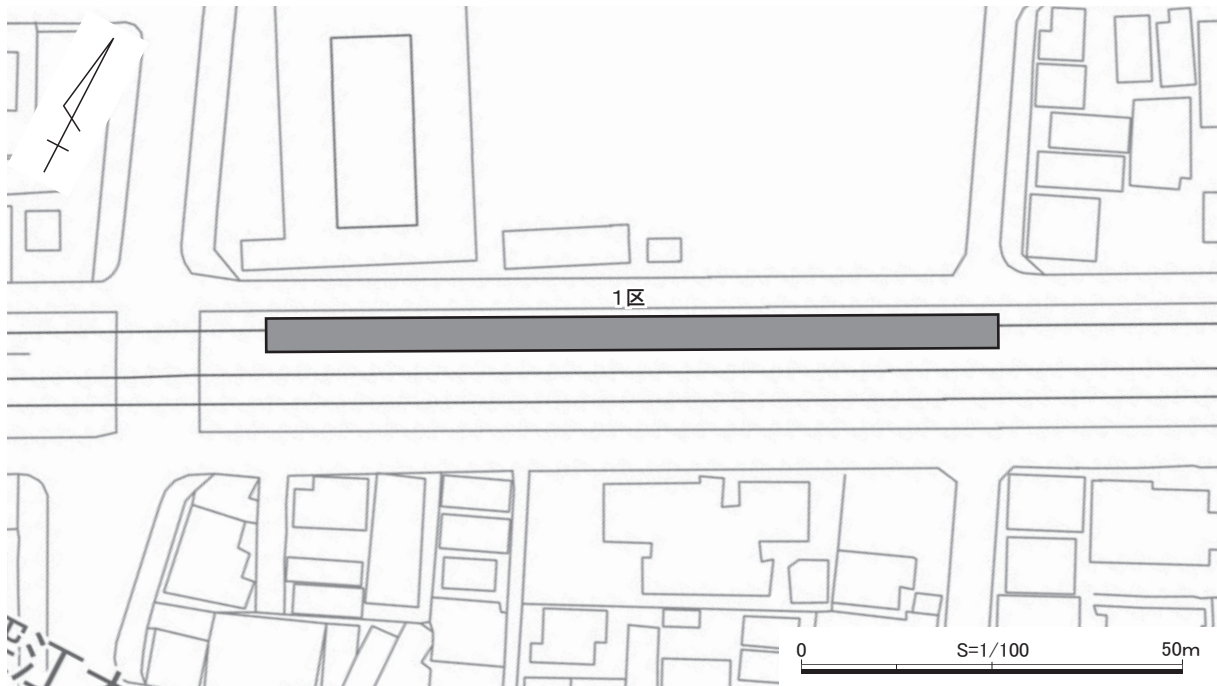


fig.62 調査区配置図

調査区東部および西部で2ヶ所の浜堤、中央部で湿地状堆積、東部の浜堤面で自然流路1条を検出した (fig.63)。

4. 遺構の概要 (fig.64)

SD101 東部で確認した浜堤の、西側斜面付近で検出した自然流路で、北西から南東方向に流れる。長さ約 3.2 m、幅約 85 cm、深さ約 25 ～ 30 cmを測る。溝の南端は調査区の南側へ続き、第 12・17 次調査で検出された流路に繋がる。埋土の上層から弥生時代後期の甕が出土しており、同時期以降に埋没したと考えられる。

浜堤 調査区の東部および西部で浜堤を検出している。

東部の浜堤は中世耕土の下層で検出した。浜堤の西側は湿地状堆積へ向け徐々に傾斜して落ち込んでいるが、北側、南側、東側は調査区外へと広がっており、南側は第 12・17 次調査 B 76- B 区で確認された浜堤へと続く。また、下層確認のため標高 -0.5 m までトレンチ掘削を行ったところ、標高 0.35 m 付近で浜堤の砂丘・海浜堆積から粘質細砂やシルト、粘土等による渦堆積へと変化していた。

西部の浜堤は、調査区内で北側に弧を描くように舌状に延びる。南側は第 12・17 次調査 B 75- A 区で確認された浜堤へと続く。上端の東西方向での検出幅は約 9.2 m である。西側斜面では弥生時代後期の甕が出土した。

湿地状堆積 調査区中央部および西部で湿地状堆積を検出している。

中央部の湿地状堆積は、黒色～黒灰色の粘質シルトと細砂が混じる粘土が交互に堆積しており、標高約 0.25 m より下層では、堆積中に多量の植物遺体を含んでいる。これらの特徴からこの湿地状堆積は、南に隣接する第 12・17 次調査 B 75- B 区・B 76- A 区で検出された、弥生時代から古墳時代前期初頭の遺物を含む湿地状堆積の続きと考えられる。第 17 次調査 B 75- B 区では浜堤と湿地状堆積の境界付近でヒトの足跡を検出しており、今回の調査でも

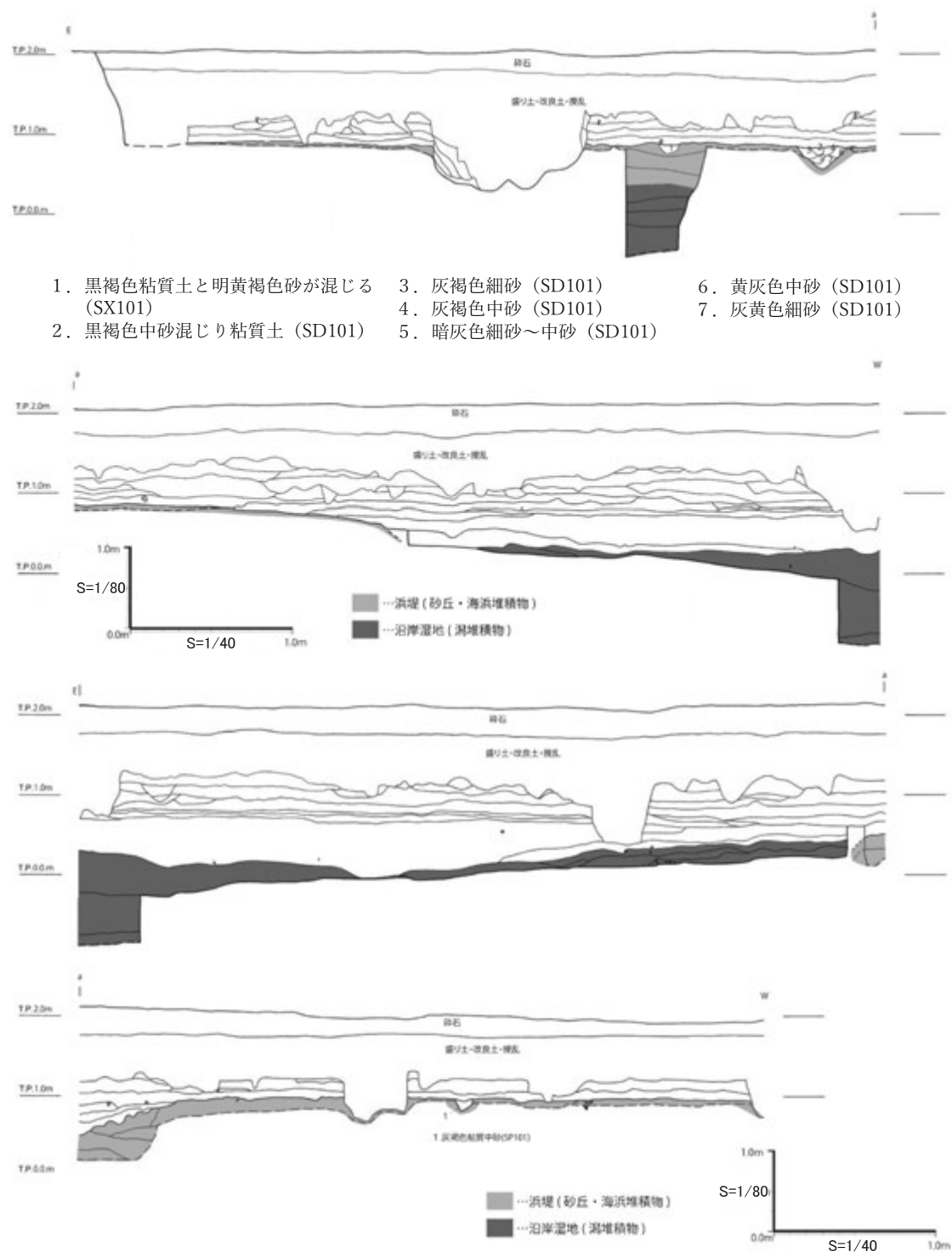


fig.63 1区南壁土層断面

足跡を検出したが、ヒトの足跡と確定できない。

西部と中央部の湿地状堆積は同時期の堆積とみられ、西側浜堤の北側を回り、浜堤を東西から挟み込む状態で検出した。湿地の西側は調査区外へと広がる。なお、調査区南西隅でわずかに浜堤を確認し、かつ南側に隣接する第17次調査B74区・B75-A区で湿地状堆積が確認されていないことから、この湿地は調査区の南側ですぐに収束するものと考えられる。

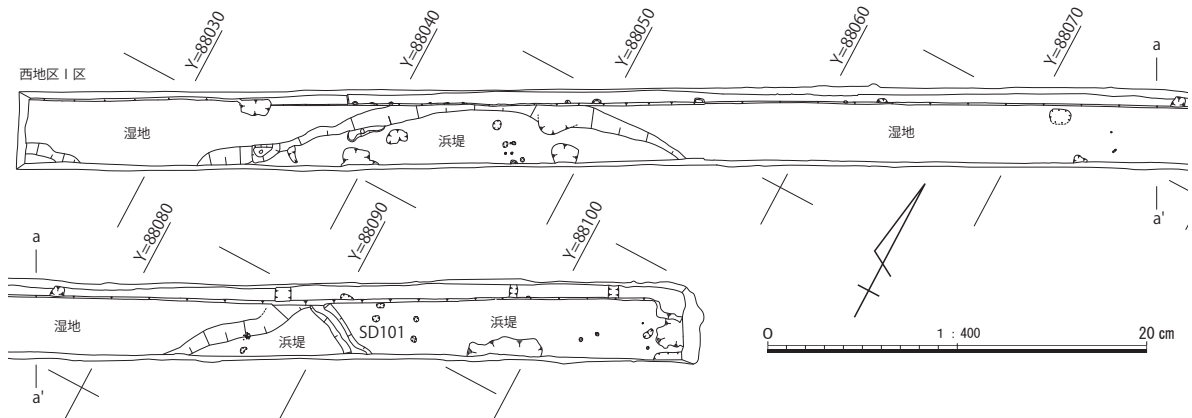


fig.64 I 区 遺構平面図



fig.65 I 区 (東) 遺構面全景 (東から撮影)

5. まとめ

今回の調査では、自然流路 1 条、浜堤、湿地状堆積を確認した。

自然流路は調査区の東部で検出した。埋土上層から弥生時代後期の甕が出土している。

浜堤は調査区の東部と西部で、湿地状堆積は西部の浜堤の東側と西側で検出した。また、堆積の状況から、西部の浜堤、湿地状堆積、東部の浜堤の順に形成された可能性があることが判明した。こうした堆積状況は、第 12 次調査時点で部分的に明らかとなっていたが、今回の調査で、東西方向での堆積の変化として明らかになった。

浜堤や湿地状堆積が形成された時期について、第 12 次調査では B 75- B 調査区で湿地状堆積の最上層から奈良・平安時代

の土器が、下層から古墳時代の土器が、浜堤と湿地の境目付近から弥生時代中期頃の壺が、B 76- B 調査区の浜堤からは古墳時代前期初頭の土器が出土しており、第 17 次調査では、B 75- B 調査区で浜堤と湿地の境界から弥生時代末期から古墳時代初頭の土器が出土している。

以上の状況から、浜堤はその後、湿地における堆積の進行によって埋没しはじめ、湿地状堆積は奈良・平安時代の頃にはほとんど埋没し半湿地状態になり、中世以降耕作地に変化したと考えられる。

8 岡本北遺跡第15次調査

1. はじめに

神戸市東灘区に所在する岡本北遺跡は、弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。当遺跡の西側に隣接する西岡本遺跡とともに、六甲山南麓地域における当該時期の主要遺跡のひとつとして知られている。

今回の調査は宅地造成に伴うもので、工程の便宜上、調査範囲を4分割して順次調査を実施した（fig.66・67）。

2. 基本層序

調査地は、六甲山南麓の傾斜地にあたるため、遺構基盤層上面の比高差は、1区と4区との間で1mある。調査地の基本層序は、①従前建物の解体に伴う盛土、②中世の遺物を含む旧耕作土、③旧耕作土の床土、④弥生時代の遺物包含層、⑤バイラン土層（地山）＝遺構面基盤層の順に堆積しており、おおむね調査地全域で共通している。調査着手前の現況は宅地で、宅地造成に際して斜面の比高差を解消する盛土が施されている。調査区南半には、従前の盛土、中世の旧耕作土とその床土の間に、昭和時代の造成土が認められる。

今回の発掘調査は、工区によって工事影響深度が異なる。発掘調査の実施範囲は、fig.67に示す通りである。これらのうち、1区と3区は、工事影響深度内に遺構面が存在したため、バイラン土層まで調査した。2区は、工事影響深度のうち、調査区南側3分の1が昭和時代の造成土であった。調査区北側3分の2は、工事影響深度内にバイラン土層が存在した



fig.66 調査地位置図

ため、この土層まで発掘調査を行った。4区は、バイラン土層上面が南に下がる地形の転換点にあり、その南端には、バイラン土層を削って流れる中世の流路が存在する。この流路に関しては、工事影響深度より深かったため、流路の底は確認できていない。4区南端の層序は、①盛土、②昭和時代の造成土、③中世旧耕作土、④床土、⑤中世流路という堆積であり、中世流路が弥生時代の遺物包含層を削平していた (fig.68)。

3. 各調査区の概要

今回の調査地では、1～4区のバイラン土層（地山）上面で遺構を確認している。以下、各遺構について報告する (fig.69)。



fig.67 調査区配置図

① 1区

SX01 と SD01 は、バイラン土層直上に堆積する弥生時代の遺物包含層を切り込む形で形成されていた。遺物包含層直上位の中世耕作土の時期に帰属する可能性が高い。

② 2区

バイラン土層上面で弥生時代後期の竪穴建物1棟 (SI01) と、それを削平して流れる弥生時代の流路を確認した。調査区の西端には、南北に流れる土砂流の痕跡があり、この範囲については、弥生時代の遺構面が削平されていた。

SI01 は、方形の竪穴建物で、ベッドまたは二重の周壁溝をもつ構造である。斜面地に位置するため南壁が流出し、西壁も後出する弥生時代の流路によって、ほとんど削平されていた。壁体が残存していたのは、北壁と西壁の一部であった。竪穴建物には中央土坑があり、これを中心にして建物規模を復元すると、一辺の長さは7.6 m、北側の壁高は20～30 cmである。

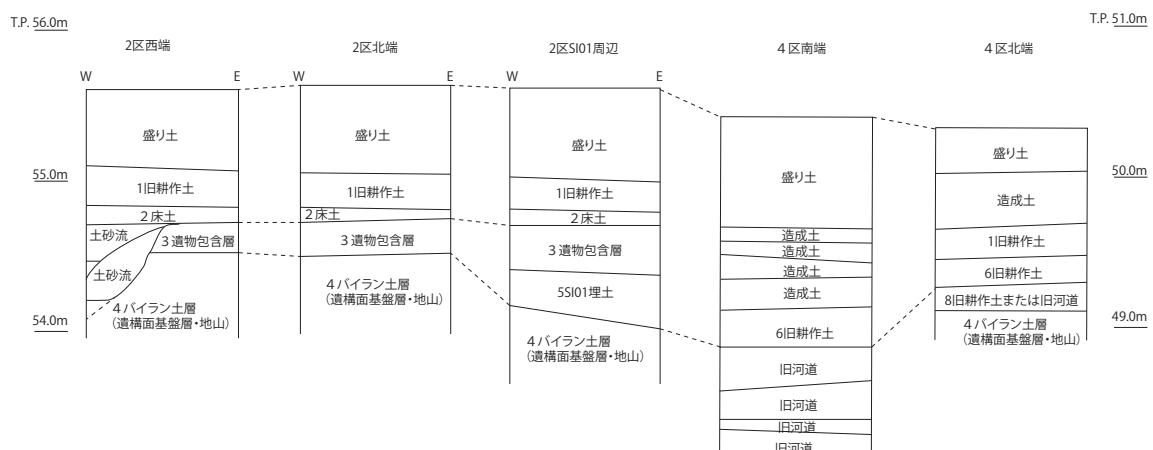


fig.68 各調査区土層断面模式図 (S = 1 / 50)

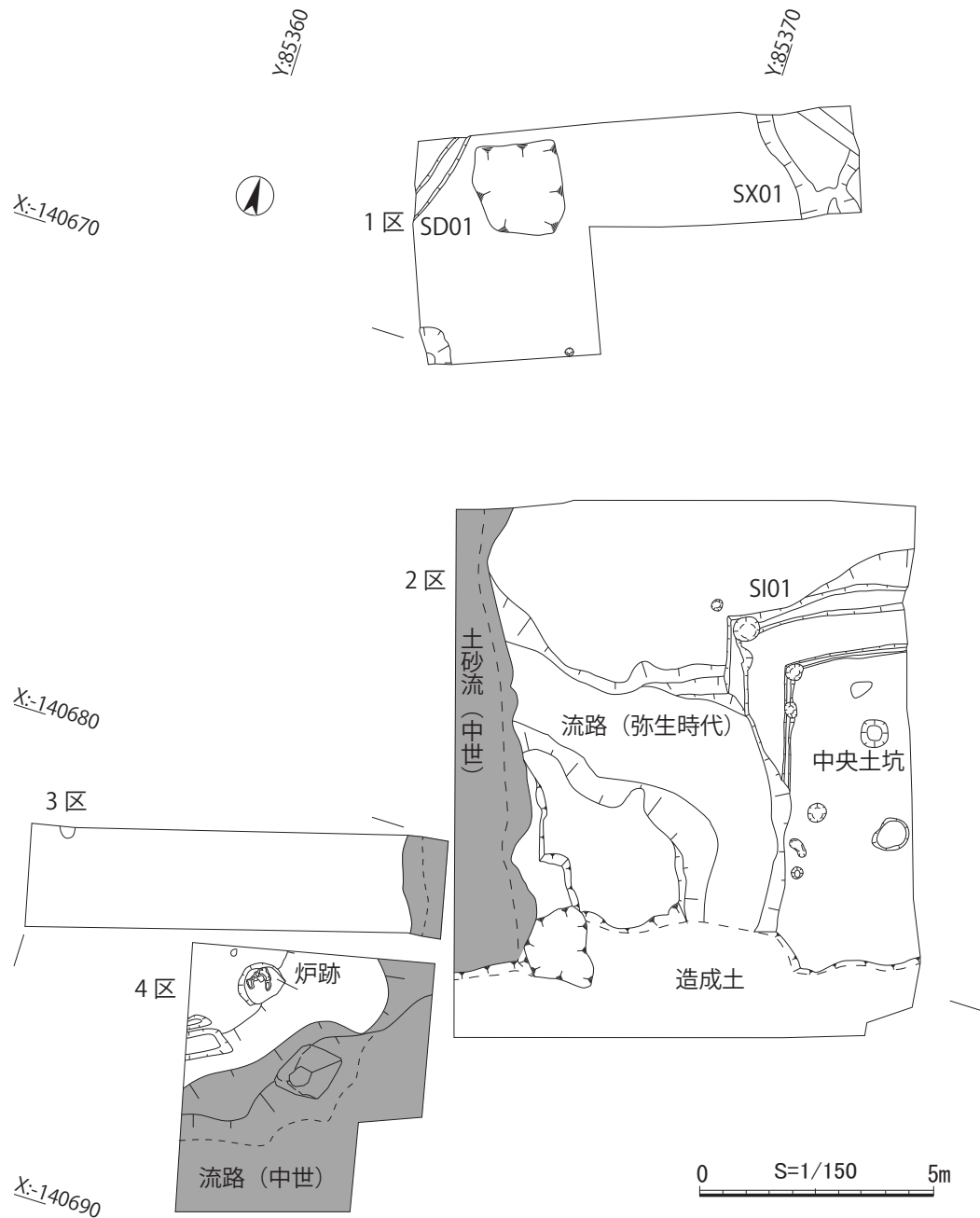


fig.69 遺構面遺構配置図

流路は、遺物包含層と同質の黒色粘質系砂を埋土とする。流路は蛇行しており、短期間の堆積ではないと考えられる。

土砂流は、弥生時代の遺物包含層を切り込む形で中世耕作土直下から認められた。土石流には、中世前期の遺物を多量に含んでいた。土石流は、幅2m以上あり、深さは前述したとおり確認できていない。この土砂流は、2区西端、3区と4区の東端で確認しており、4区の中世流路に流れ込む形で収斂しているようである。土砂流と流路の合流点は、調査対象範囲の外にくると予想される。堆積層の違いから判断して、2区と3区で検出した南北方向に流れる流路は土砂流にあたり、4区の東西方向に流れる流路は土砂流に先行する

中世段階の流路と考えられる。

③ 3区

東端に土砂流の一部を認めたほかに、顕著な遺構を確認していない。

④ 4区

竪穴建物に伴う炉跡を中世の東西流路の北側掘形で検出した。ただし、炉に付随する竪穴建物の壁体は、確認できなかった。竪穴建物の一部は、調査区外に残っている可能性があるものの、南辺については、中世の流路で削平されていた。炉の掘形は、直径 90 cm である。古墳時代の遺構である可能性が高いものの、遺物が少ないため、判断材料が少なく確言できない。

流路は、東西方向に流れる流路で、幅 4 m 以上である。工事影響深度までの掘削であったため、流路の掘削底は、確認できていない。



fig.70 2区 SI01 検出状況（東から撮影）

9 魚崎郷古酒蔵群第5次調査

1. 調査概要

個人住宅建設に伴い、工事立会で遺跡のひろがりを確認したため、工事の影響を受ける範囲のうち、調査可能な部分を対象として発掘調査を実施した。調査地点は、阪神電鉄魚崎駅南出入口から南東方向へ直線距離にして約 420 m、魚崎八幡宮から北東方向へ直線距離にして約 85 mの地点にあたる (fig.71)。発掘調査は、工事により埋蔵文化財の影響を受ける部分を対象として調査区を設定した (fig.72)。調査は、現地表面から人力で掘削した。

2. 基本層序

既存建物解体時の埋め戻し土・造成土・褐色シルトを取り除くと、コンクリート土間が現れた。コンクリート土間は、調査区の南半分には施されており、北半分には施されていない。コンクリート土間の下には、三和土で整地された遺構面があり、この三和土を除去すると、近代の遺物を含む濃褐色シルトが堆積していた (fig.74)。

3. 遺構面の概要

三和土上面を精査した結果、東西方向へのびる列石と暗渠 (SW101) を検出した (fig.73)。列石は4列分あり、外側列石の内寸幅が 85 cm、内側列石の内寸幅が 20 cmであった。列石の石材には、花崗岩が用いられている。外側列石の石材は、正方形、長方形、台形の切石が使用されているのに対し、内側列石の石材は、長方形か正方形を呈する人頭大ほどの丸



fig.71 調査地位置図

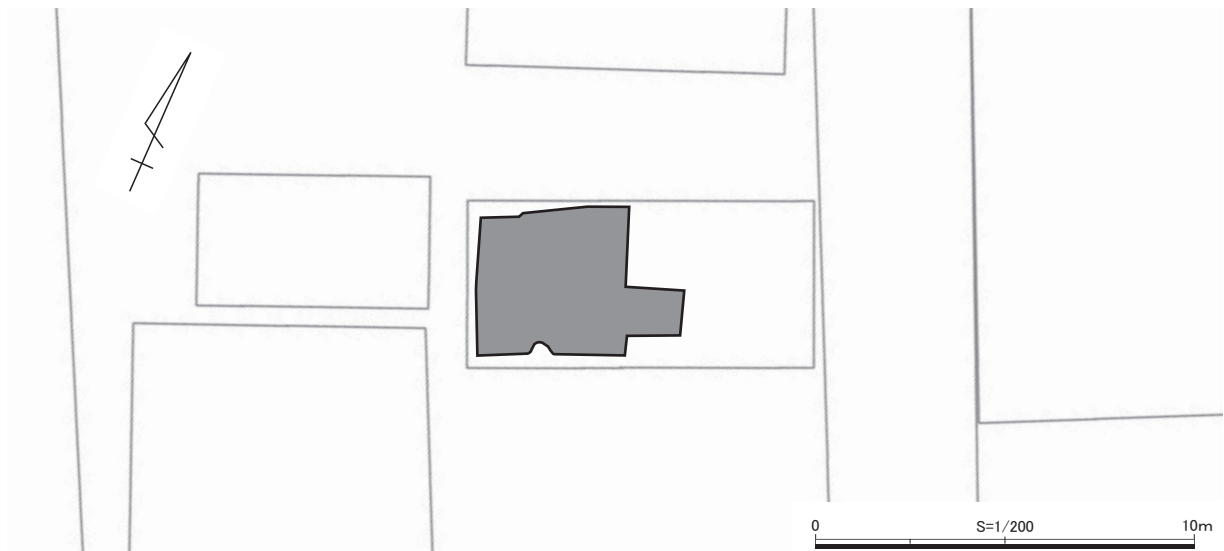


fig.72 調査区配置図

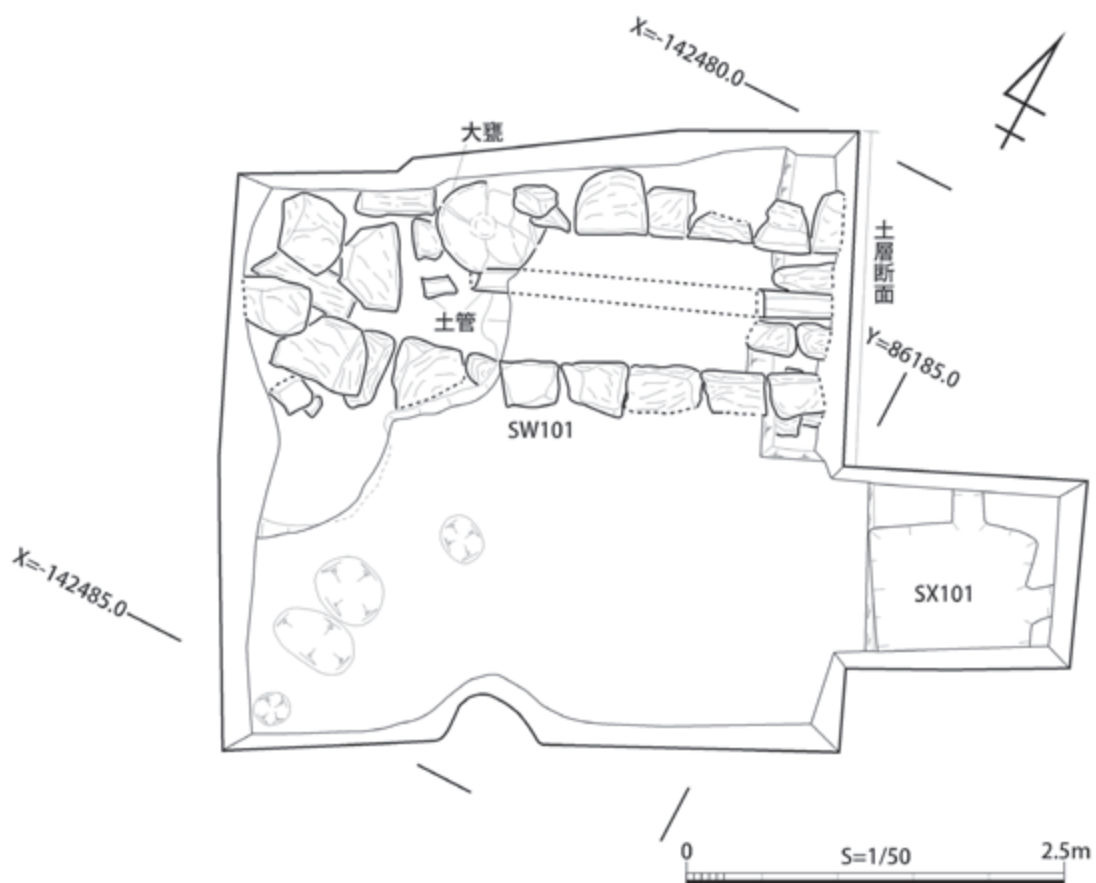


fig.73 遺構面遺構配置図

石が利用されていた。内側列石内には、直径 16 cm の土管が設置されており、列石の掘形と土管を密閉するように三和土が充填されていた。列石の西側部分は、既存建物解体時に動いてしまったものの、この部分にも列石が続いていたことから、SW101 は、今回の調査で東西約 4 m 分を検出したことになる。

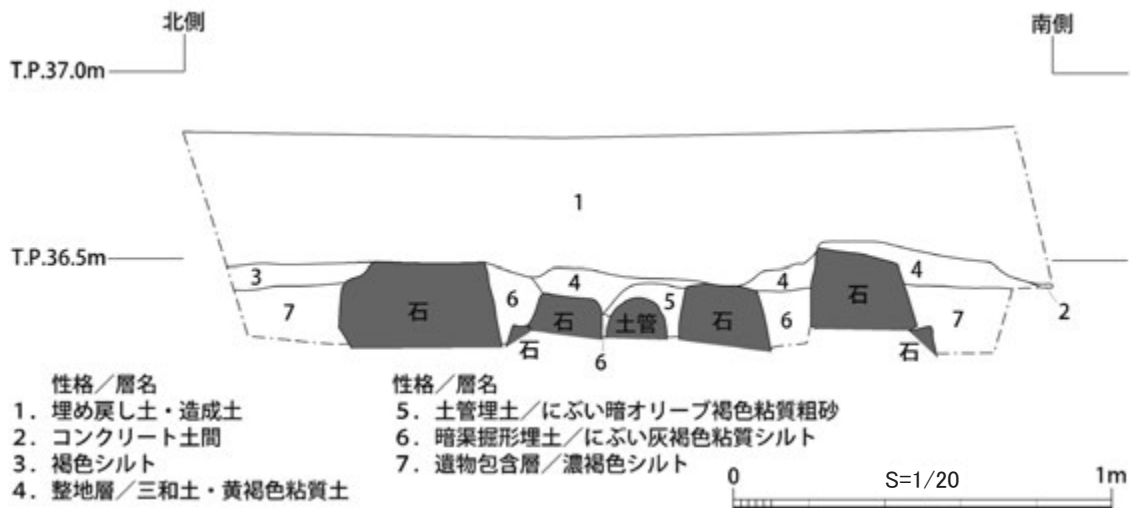


fig.74 SW01（調査区北東壁）土層断面図

なお、この列石を壊して大甕(便所甕)が1基設置されている。三和土の上には、コンクリート土間が敷設されているため、この大甕は、コンクリート土間を施した際に設置されたとみられる。

SW101の南東側は、コンクリート土間の直下に濃褐色シルトが堆積していた。コンクリート土間の直下には、三和土による整地層が施されていなかった。SX101は、濃褐色シルトを掘りこんでいたものの、影響深度の都合上、掘削することができなかった。SX101の埋土は、暗灰褐色シルトであった（fig.74）。

4. まとめ

今回の調査では、近現代の遺構面を検出した。遺構の切り合い関係から時期を区分すると下記ようになる。

- 1期 SW101 敷設以降（コンクリート土間・大甕設置期）
- 2期 SW101 敷設期（三和土による整地層）
- 3期 SW101 敷設以前（濃褐色シルト）

出土遺物の様相から1～3期は、明治～昭和時代初期の中で変遷するとみられる。三和土検出時に龍一銭銅貨が出土していることも踏まえると、2～3期は、明治時代に比定できる可能性がある。当事業地の周辺で行っている第1～3次調査でも三和土を施した整地層が明治時代にあたると報告されていることから、今回の調査で検出した整地層も当該期のものと考えられる。

今回検出した列石は、暗渠を敷設するために設置されたものである。土管は、組み合わせ方向と高低差からみて、東から西へ流れていることから、この暗渠を利用する建物が当調査地の東側に立地していた可能性が考えられる。当調査地周辺には、松尾仁兵衛商店（金正宗）の北蔵が立地していたことが予想されている（第1次調査）。今回の調査成果は、その北蔵の様相をうかがうことのできる資料として位置づけられるだろう。



fig.75 調査区西側完掘状況（東から撮影）



fig.76 調査区東側完掘状況（西から撮影）

10 篠原遺跡第41次調査

1. はじめに

篠原遺跡は、六甲川によって形成された標高 50 ～ 85 m の扇状地上に立地する。昭和 4 (1929) 年に京都帝国大学 (当時) の小林行雄氏によって弥生時代後期の遺跡として紹介された遺跡である。昭和 58 (1983) 年度に共同住宅建設に伴う第 1 次調査が行われて以来、40 回の発掘調査が実施されてきた。これまでの調査では、縄文時代中期末～後期の竪穴建物、縄文時代晩期の土器棺墓や集石等の遺構と遺物、弥生時代後期の竪穴建物や溝、多数の土器・石器のほか小形仿製鏡も出土している。特に、縄文時代晩期中頃の亀ヶ岡式系土器や遮光器土偶等の出土は、遠方との交流があったことをうかがう資料として位置づけられる。また、当遺跡から出土している縄文時代晩期中葉の土器は、「篠原式」の標識土器となっている。

今回の発掘調査は、店舗付き共同住宅建設に伴って試掘調査を実施したところ、G.L.-83 cm 以下で遺物包含層と遺構面を確認したため、工事によって埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲を対象として発掘調査を行うこととなった。本調査地点は、平成 27 (2015) 年度の第 35 次調査地の南西 40 m に位置する (fig.77)。

2. 調査概要

発掘調査は、造成工事により事業地すべてが切土される計画であったが、事業地に隣接する住宅や既存石垣等への安全を考慮して調査範囲を設定した (fig.78)。現地表面の標高



fig.77 調査地位置図

は T.P.82.7 mを測り、事業地南側に面する道路との比高差は 2 mあった。

発掘調査は、遺物包含層上面までを重機で掘削し、それ以下の遺物包含層と遺構は、人

力掘削した。遺構と遺物の記録にあたっては、調査地内に測量用基準点を設置して作図し、35 mmカメラ・120 mmカメラ・コンパクトデジタルカメラを用いて撮影した。

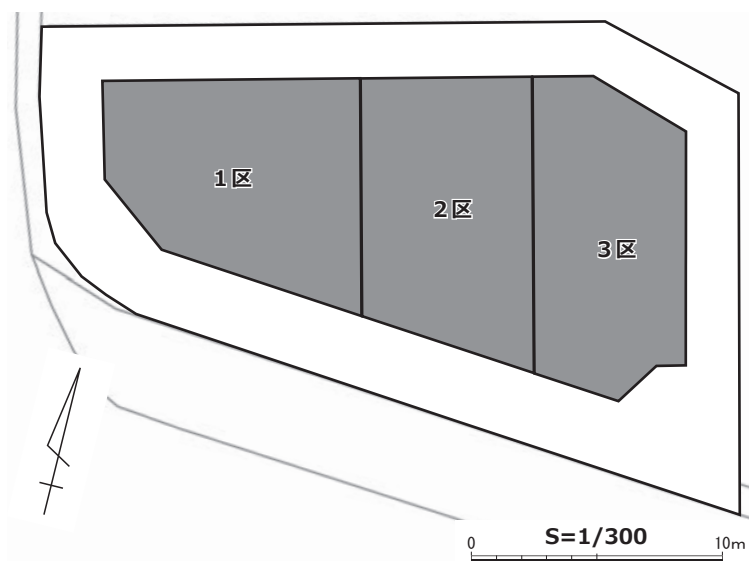
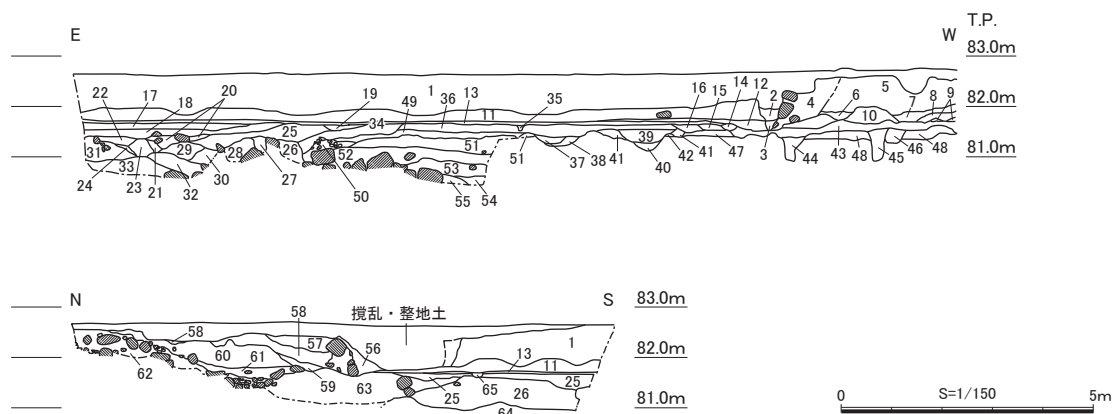


fig.78 調査区配置図

3. 基本層序

層序は、上層から表土・盛土→灰白色砂質土（旧耕土）→橙色砂質土（旧床土）→暗褐色砂質土（中世遺物包含層）→黒褐色砂質土（弥生遺物包含層・西半のみで検出）→黄褐色細砂質



- | | | |
|-------------------------|------------------------|------------------------|
| 1. 盛土 | 22. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 | 44. 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂質土 |
| 2. 2.5Y7/1 灰白色砂質土 | 23. 10YR6/4 にぶい黄褐色細砂質土 | 45. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 |
| 3. 2.5Y7/2 灰黄色砂質土 | 24. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 | 46. 10YR3/2 黒褐色砂質土 |
| 4. 2.5Y7/1 灰白色砂礫土 | 25. 2.5Y7/4 浅黄色細砂質土 | 47. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土 |
| 5. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土 | 26. 2.5Y8/4 浅黄色砂礫 | 48. 10YR3/2 黒褐色砂質土 |
| 6. 2.5Y7/2 灰黄色砂礫土 | 27. 10YR6/4 にぶい黄褐色細砂質土 | 49. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 |
| 7. 10YR6/3 にぶい黄褐色砂礫土 | 28. 2.5Y8/3 浅黄色砂礫土 | 50. 10YR2/2 黒褐色砂礫土 |
| 8. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂 | 29. 2.5Y8/3 浅黄色砂礫土 | 51. 10YR8/3 浅黄褐色砂質土 |
| 9. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂・ | 30. 10YR6/4 にぶい黄褐色細砂質土 | 52. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂質土 |
| 10YR2/1 黒色細砂質土ブロック混じる | 31. 10YR4/4 褐色砂礫土 | 53. 10YR2/2 黒色細砂質土 |
| 10. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 | 32. 10YR7/2 にぶい黄褐色砂礫土 | 54. 10YR2/1 黒色シルト質土 |
| 11. 2.5Y7/2 灰黄色砂質土（旧耕土） | 33. 10YR7/2 灰黄褐色砂質土 | 55. 10YR3/1 黒褐色砂礫土 |
| 12. 2.5Y6/2 灰黄色細砂質土 | 34. 10YR2/1 黒色細砂質土 | 56. 10YR6/1 褐灰色シルト質土 |
| 13. 7.5YR7/6 橙色砂質土 | 35. 10YR5/4 にぶい褐色砂質土 | 57. 10YR6/2 灰黄褐色砂質土 |
| 14. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 | 36. 10YR3/1 黒褐色砂質土 | 58. 10YR4/4 褐色砂質土 |
| 15. 10YR3/3 暗褐色砂質土 | 37. 10YR3/2 黒褐色細砂質土 | 59. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土 |
| 16. 10YR4/4 褐色砂質土 | 38. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 | 60. 2.5Y8/3 にぶい黄褐色砂質土 |
| 17. 10YR4/4 褐色砂質土 | 39. 10YR2/2 黒褐色砂質土 | 61. 10YR3/4 暗褐色砂質土 |
| 18. 10YR3/3 暗褐色砂質土 | 40. 10YR3/3 暗褐色砂質土 | 62. 10YR3/3 暗褐色砂礫土 |
| 19. 7.5YR6/3 にぶい褐色細砂質土 | 41. 10YR3/3 暗褐色粗砂質土 | 63. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土 |
| 20. 10YR4/2 灰黄褐色礫混じり砂質土 | 42. 10YR4/4 褐色砂質土 | 64. 10YR2/2 黒褐色細砂質土 |
| 21. 2.5Y7/4 浅黄色粗砂質土 | 43. 10YR3/2 黒褐色砂質土 | 65. 10YR6/2 灰黄褐色細砂質土 |

fig.79 上段：調査区南壁土層断面図・下段：2区東壁土層断面図

土・黄褐色砂礫（下層土石流）の順で堆積していた。ただし、北半は上層の土石流によって弥生時代の遺物包含層と遺構面が削平されていたため、土石流直上が表土・盛土となる。

調査区東端は、土石流が堆積する谷地形で、弥生時代の遺物包含層は存在せず、土石流上面に中世遺物包含層が被っていた（fig.79）。

4. 第1遺構面の概要

黒褐色砂質土上面で土坑（SK）、溝（SD）、落ち込み（SX）を検出した（fig.80）。

SK05 1・2区境で検出した直径70 cm、深さ30 cmの土坑である。埋土は灰黄褐色砂質土で、弥生時代中期後半の土器が出土している。

SK45 2区南西部で検出した長径146 cm、短径58 cm、深さ20 cmの土坑である。埋土は黒褐色砂質土で、弥生土器が出土している。

SK65 3区南東部で検出した東西方向に長い溝状の土坑である。幅90 cm、長さ235 cm以上、深さ10 cmで、埋土は灰黄褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土である。土師器羽釜と土師器小皿が出土した。

SX01 1区西端で検出した深さ10 cmの浅い落ち込みである。土石流による削平および調査区外に延びるため全体の規模は不明である。弥生土器が出土している。

SX03 2区南端で検出した長辺250 cm以上、短辺180 cmの長方形の土坑である。深さ15 cmで、埋土は黒褐色砂質土である。弥生土器が出土している。

遺物包含層からは、土師器羽釜・脚付煮炊具の脚部、須恵器碗・鉢、瓦器碗、瓦質土器羽釜等が出土している。

5. 第2遺構面の概要

調査区南西部の黄褐色細砂質土上面で土坑、溝、ピット（SP）を検出した（fig.81）。

SD01 1区東南部で検出した幅100～150 cm、深さ40 cmの溝で、断面は逆台形である。北側は土石流に削平され、南側は調査区外に延びるため、全体の規模は不明である。

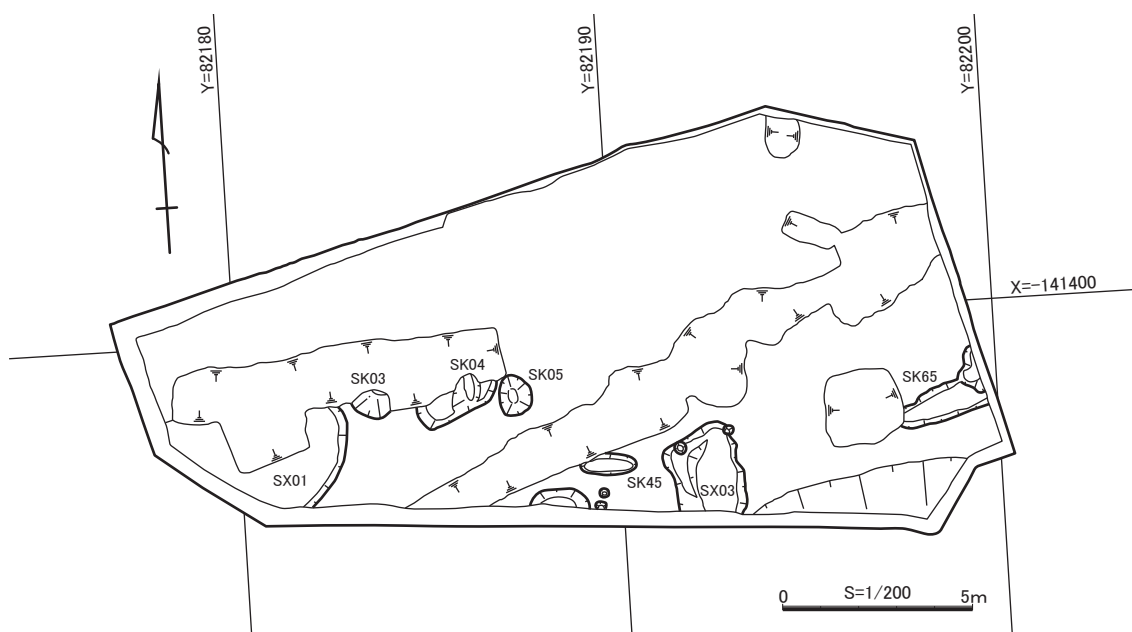


fig.80 第1遺構面遺構配置図

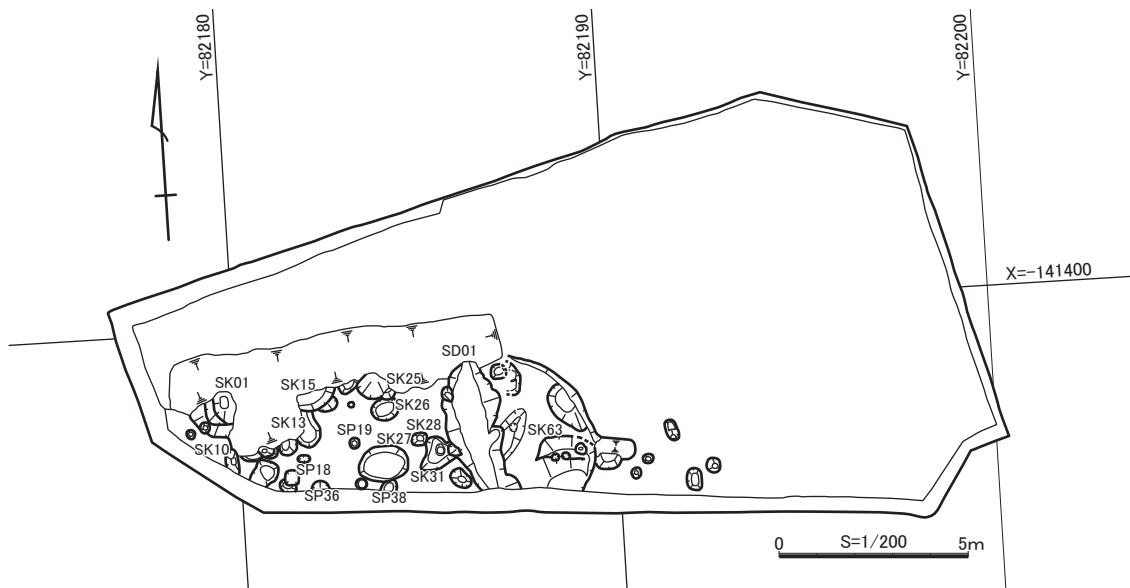


fig.81 第2遺構面遺構配置図

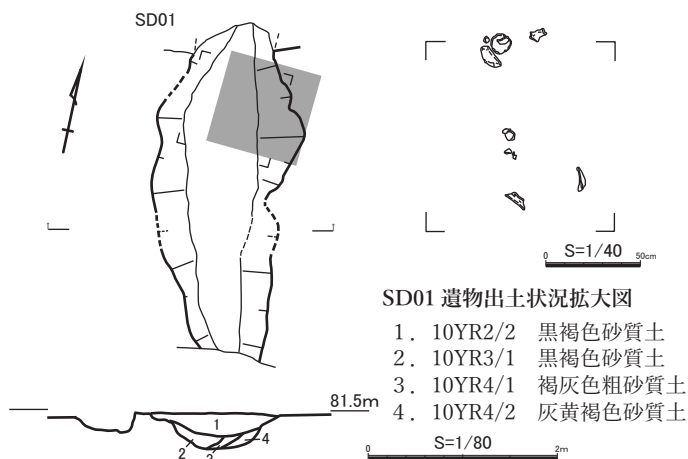


fig.82 SD01 平面図・断面図・遺物出土状況

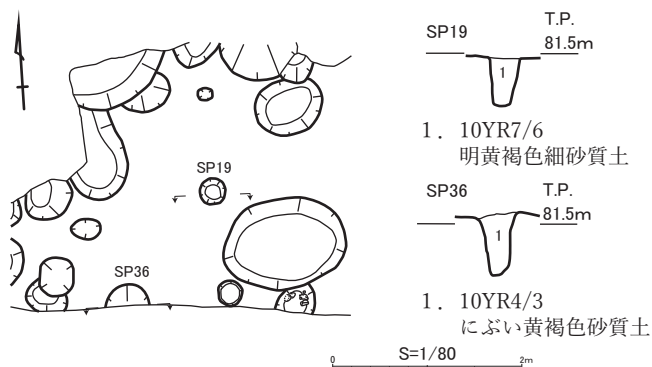


fig.83 SP19・36 平面図・断面図

底面は、ごくわずかだが南側に傾斜する。埋土は、上層が黒褐色砂質土で、下層は暗褐色砂質土である。溝内より弥生土器の壺頸部や甕底部・口縁部、鉢、高坏脚部等が出土した。中期後半～後期初頭に比定できる (fig.82)。

SP18 1区南半で検出した直径 40 cm、深さ 50 cm のピットで、埋土はにぶい黄褐色砂質土である。弥生土器の小片が出土した。

SP19 1区南半で検出した直径 30 cm、深さ 50 cm のピットで、埋土は炭混じりの明黄褐色砂質土である。弥生時代後期の土器が出土した (fig.83・84)。

SP36 1区南壁沿いで検出した直径 44 cm、深さ 65 cm のピットで、埋土はにぶい黄褐色砂質土である。弥生土器の甕口縁部と思われる小片が出土した (fig.83)。

SP38 1区南壁沿いで検出した直径 50 cm、深さ 45 cm のピット

で、埋土はにぶい黄褐色砂質土である。弥生土器の小片が出土した。

この他にも SK10・13・15・25・26・28 等から中世の土師器とみられる破片が出土していることから、第1遺構面で検出できなかった遺構を含む可能性がある。

6. まとめ

今回の調査では、中世と弥生時代の遺構面を検出した。また、調査区北半では土石流の末端を検出し、当該地の地理的変遷を追うことができた。遺物は、弥生土器・サヌカイト製石鏃・サヌカイト片、土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器等が28リットル入りコンテナで5箱分が出土している。

弥生時代の遺構面では、土坑・ピットを検出した。竪穴建物は確認できなかったが、土坑やピットは深いもので60 cmを測り、明瞭な生活痕跡を残している。しかし、前述した土石流によって調査区北半は、弥生時代の遺物包含層と遺構面が削平されていたため、遺構を確認することはできなかった。

また、調査区東端には、谷状地形が存在していたようで、弥生の遺物包含層は緩く落ち込んでいく。この谷状地形には土石流が堆積し、上層には中世の遺物包含層が堆積していた。土石流の上面礫間にも遺物が混在し、土石流によって緩い斜面が形成されていた。当該地は、第35次調査地に近接している。その調査では、弥生時代中期の土石流が確認されており、その上面で弥生時代後期の遺構面と遺物包含層が検出されている。今回の調査地では、弥生時代の遺物包含層と基盤層を土石流が削り込んでいたことから、第35次調査で確認されている土石流とは別時期に流れたものと考えられる。また、今回の調査で確認した谷状地形は、第35次調査の南西側で推定されている谷状の落ち込みと同一のものとなる可能性がある。

弥生時代の遺物は、段状口縁を有する鉢や口縁部に凹線文を施す高坏の坏部、タタキを有する甕等、中期の畿内第IV様式～後期の第V様式初頭の土器が認められる。

中世の遺物は、遺物包含層出土の資料が室町時代を中心とする時期に比定できる。

以上が今回の調査成果である。第35次調査の成果を補完するとともに、新たな知見も得ることができた。篠原遺跡における弥生時代中期の広がりを把握するうえで貴重な調査となった。



fig.84 1区 SP19 遺物出土状況（北から撮影）



fig.85 1区第1遺構面全景（北西から撮影）



fig.86 1区第2遺構面全景（北西から撮影）

11 旧三の宮駅構内遺跡第7次調査

1. はじめに

旧三の宮駅構内遺跡は、神戸市中央区に位置し、縄文海進時の海岸線にあたる段丘上と低地に立地する遺跡である。本遺跡は、昭和3年（1928）に現JR元町駅付近にかつて存在した旧三の宮駅の解体作業中に弥生土器が発見されたことで周知されるようになった。これまでに6回の発掘調査が行われており、縄文時代・弥生時代・奈良時代・中世の遺構・遺物が確認されている複合遺跡である。今回の調査は、共同住宅建設工事に伴うもので、工事立会時に遺物包含層を確認したため、工事影響範囲を発掘調査した（fig.87）。

2. 調査概要

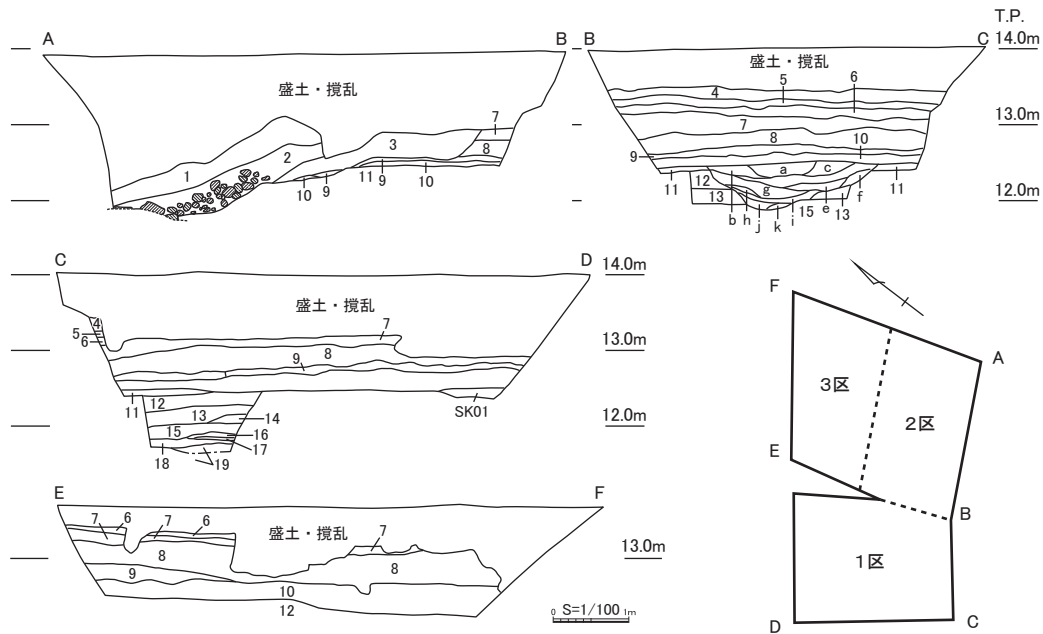
発掘調査は、遺物包含層上面までを重機で掘削し、遺物包含層と遺構の検出・掘削は、人力で行った。2カ所の調査区を設定し、2・3区は工事影響深度である現地表面から-1.7 mまでを調査対象とした（fig.88）。遺構と遺物の記録にあたっては、調査地内に測量用基準点を設置し、それをもとに作図を行い、35 mmカメラ・120 mmカメラ・コンパクトデジタルカメラで撮影した。

3. 基本層序

現地表面の標高は、14.0 m前後を測る。層序は、上層より盛土・攪乱→近代盛土→旧耕土→床土→にぶい黄褐色細砂質土→暗灰黄色中砂質土→暗褐色細砂質土→黒褐色粘性細砂



fig.87 調査地位置図



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂質土（炭化物混じり）【近代盛土】
2. 7.5YR3/2 黒褐色粘性中砂質土（粗砂混じり）【近代盛土】
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂～中砂質土【近代盛土】
4. 10YR4/2 灰黄褐色中砂～細砂質土【旧耕土】
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色中砂質土【床土】
6. 10YR4/4 褐色中砂～粗砂質土【床土】
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂質土（バイラン土微量）
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色中砂質土（バイラン土微量）
9. 10YR3/3 暗褐色細砂質土（バイラン土少量）
10. 10YR3/1 黒褐色粘性細砂質土（バイラン土少量）
【遺物包含層】
11. 7.5YR3/1 黒褐色粘性細砂～中砂質土（バイラン土多量）
【上面が遺構面】
12. 7.5YR2/2 黒褐色粘性中砂質土（バイラン土多量）
【上面が遺構面】
13. 2.5YR4/3 オリーブ褐色粗砂質土
14. 10YR7/4 にぶい黄橙色中砂～粗砂質土
15. 10YR5/2 灰黄褐色粗砂質土（バイラン土少量）
16. 7.5YR4/3 褐色中砂～粗砂質土（バイラン土多量）
17. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト質土（バイラン土少量）
18. 2.5Y5/4 黄褐色粘質土（バイラン土少量）
19. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質土（中砂～粗砂混じり）
【SR01】
- a. 10YR3/4 暗褐色細砂質土
- b. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘性細砂質土
- c. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘性中砂質土
- d. 10YR6/1 明褐色粘質土
- e. 7.5YR3/3 暗褐色粘性砂質土
- f. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘性細砂質土
- g. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
- h. 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
- i. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質土（粗砂混じり）
- j. 2.5Y3/2 黒褐色シルト質土
- k. 10YR2/2 黒褐色粘質土
【SK01】
- 10YR3/3 暗褐色中～細砂質土（バイラン土微量）

fig.88 調査区配置図および調査区土層断面図

質土（遺物包含層）→黒褐色粘性細砂～中砂質土（上面が遺構面）→オリーブ褐色粗砂質土→にぶい黄橙色中～粗砂質土→灰黄褐色粗砂質土→褐色中～粗砂質土→にぶい黄色シルト質土→黄褐色粘質土→暗灰黄色シルト質土の順に堆積する（fig.88）。

4. 遺構面の概要

遺物包含層である黒褐色粘性細砂質土には、近世の陶器・磁器・瓦、中世前半の土師器・須恵器・瓦器・陶器・緑釉陶器・白磁、古墳時代の須恵器・円筒埴輪、弥生時代後期の弥生土器もしくは古墳時代初頭の土師器等が出土している（fig.89）。

遺構面は、黒褐色粘性細砂～中砂質土上面で検出した。地形は、北西側から東側に向けて下っており、2・3区の中央付近から急落する。検出した遺構は、土坑（SK）1基、ピット（SP）9基、流路状堆積遺構（SR）1基を検出した。また、斜面地で近代の集石も確認している。遺構面の時期は、遺物から平安時代後期～鎌倉時代にあたりと考えられる。

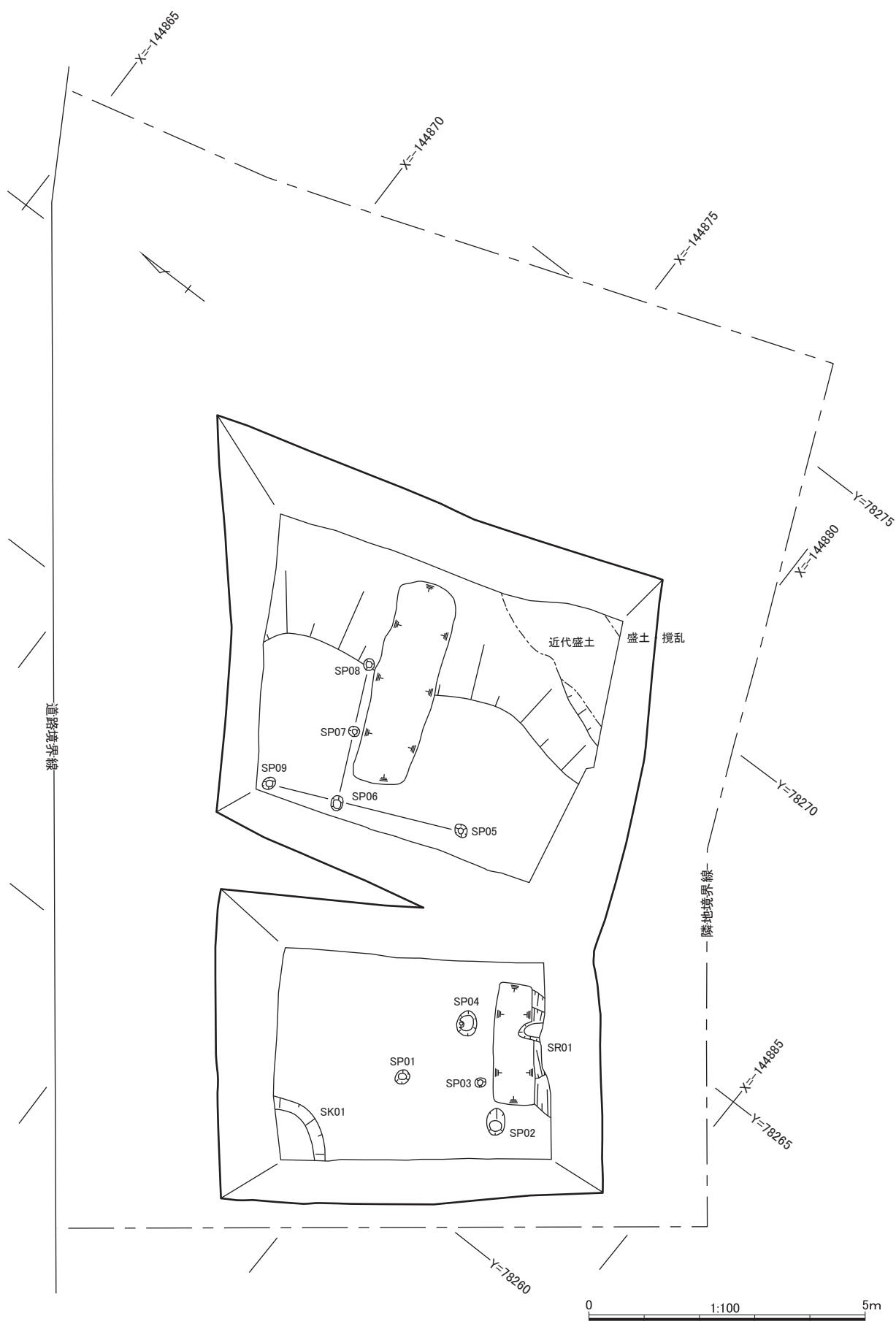


fig.89 遺構面遺構配置図

SK01 1区西側で検出した土坑である。遺構の大部分が調査区外へ広がるため全容は不明であるが、残存長 1.2 m、深さ 0.1 mを測る。遺構内からは須恵器の小片が出土している。

SP05～09 2・3区で検出したピット群である。径 0.2～0.3 m、深さ 0.2 m前後を測る。SP05・06・08・09の埋土は暗褐色細砂質土、SP07の埋土は黒褐色細砂質土がそれぞれ堆積している。SP06～09は 1.3～1.4 mの間隔を測り、SP05とSP06間は約 2.3 mを測る。これらは、T字状に配列したような位置関係で検出されていることから、同一の掘立柱建物か柵列を構成したピット群と推測される。検出状況や地形的な制約を踏まえると、後者の可能性が高い。SP05～07・09からは、土師器片や須恵器片が出土した。SP08から出土した青磁皿は、12世紀後半～13世紀前葉の所産と考えられる。

SR01 1区東側で検出した流路状堆積遺構である。本遺構は、攪乱の南東側壁面の清掃中に検出したものであるが、1区北西側では確認されなかった。検出幅 2.0 m、深さ 0.6 mを測る。埋土は上層が砂質土、下層がシルト質土および粘質土の堆積であることから、流水性の堆積によって埋没したと推測される。本調査地の南東側は急落していることから解析谷の最奥部と推定される。遺構内からは、時期不明の土師器片が出土している。

5. まとめ

今回の調査では、平安時代後期～鎌倉時代の遺構面を確認した。この時期の遺構面は、第1～4・6次調査でも検出されていることから、当該期の集落域が東側の段丘間際にまで及んでいたことを示している。また、本調査地の東側で実施されている第5次調査では、縄文時代～弥生時代の遺構が確認されているが、今回の調査では確認されなかった。

特筆すべき遺物としては、遺物包含層中から出土した古墳時代の円筒埴輪片が挙げられる。遺物包含層には、複数の時代の遺物が含まれていたが、出土した円筒埴輪片は、表面調整の特徴や遺物包含層から古墳時代後期の須恵器が出土していることから、古墳時代後期のものと推測される。こういった点から本調査地周辺に古墳時代の遺構が存在した可能性が指摘できる。

以上のように、今回の調査は、従前の調査成果を補強するだけでなく、新たな知見を得ることができた点で重要な成果を得ることができた。



fig.90 1区遺構面全景（北から撮影）



fig.91 2区積石遺構堆積状況（北から撮影）



fig.92 3区遺構面全景（北東から撮影）



fig.93 3区 SP08 遺物出土状況（南西から撮影）

1. はじめに

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事によって遺跡に影響が及ぶ範囲を対象として、発掘調査を行った。今回の調査地は、雲井遺跡の北端にあたる。第34次調査の北側に隣接していることから、古墳時代の竪穴建物や平安時代の掘立柱建物等の検出が想定された (fig.94)。

発掘調査は、柱状改良等で埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲を対象に調査区を設定した (fig.95)。調査は、遺物包含層上面まで重機掘削を行い、それ以下を人力で掘削した。遺構と遺物の記録にあたっては、調査地内外に測量用基準点を設置し、それをもとに図化し、35 mmカメラ・120 mmカメラ・コンパクトデジタルカメラで撮影した。



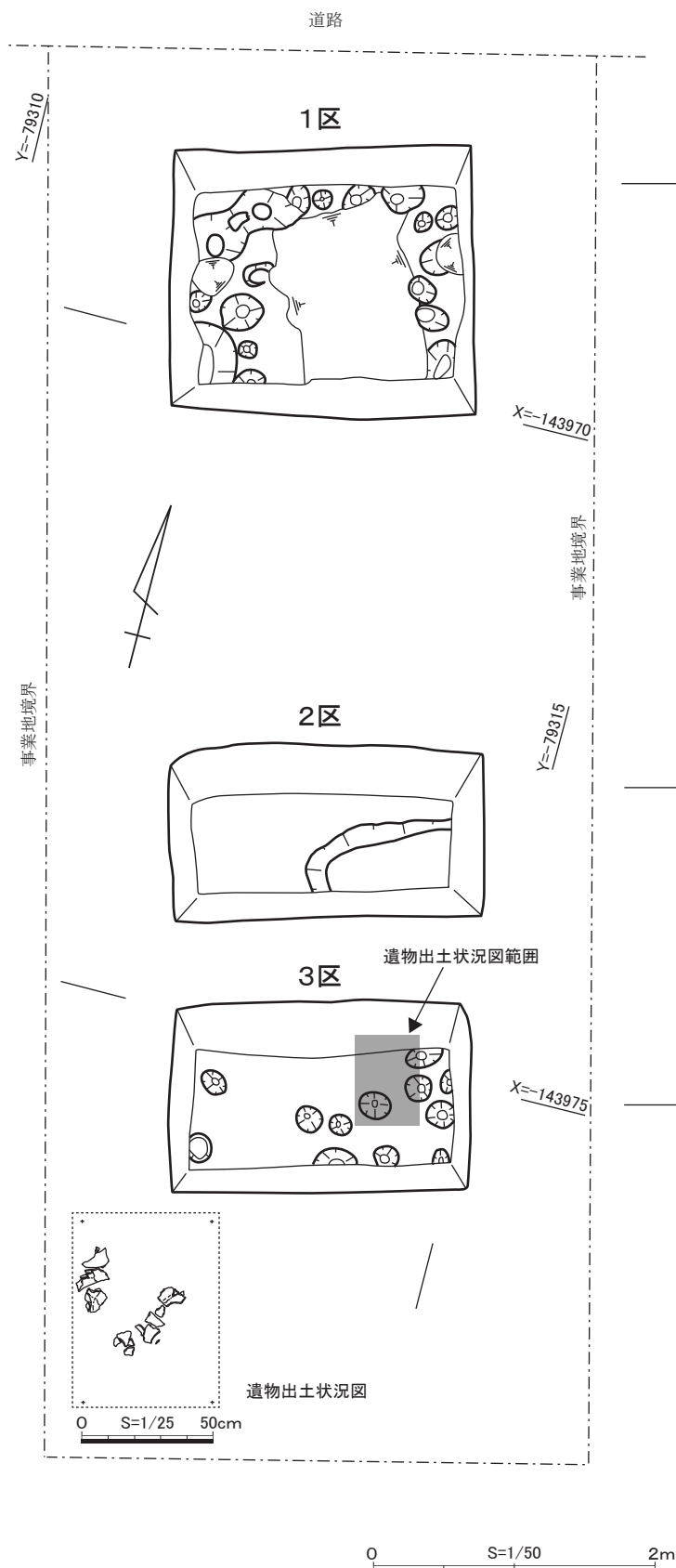


fig.95 1～3区第2遺構面遺構配置図

3. 基本層序

層序は、上層より盛土・攪乱土（現地表の標高 T.P.18.3 m）→黄灰色粘性砂質土（旧耕土）→黄灰色粘性砂質土（旧耕土で上層よりやや暗い）→黄褐色粘性砂質土（旧床土）→黒色粘性砂質土（遺物包含層）→黒褐色粘性砂質土粗砂混じり（遺物包含層）→褐灰色砂質土→黒褐色砂質土バイラン土混じり→暗褐色砂の順に堆積する。遺物は、黒色粘性砂質土と黒褐色粘性砂質土粗砂混じり層から出土した。遺構面は、黒色粘性砂質土上面で第1遺構面（T.P.17.60～17.65 m）、褐灰色砂質土上面で第2遺構面（T.P.17.40～17.45 m）となる（fig.96）。

4. 各調査区の概要

① 1区

調査区中央部は攪乱のため、遺構面の残存状況は良好でなかった。遺構面は、灰黄褐色粗砂質土上面で第1遺構面を検出し、ピットを2基検出した。その下層のにぶい黄色粗砂質土上では第2遺構面を検出し、ピットを検出した。遺物包含層からは、須恵器と土師器の小片が出土した。遺構内から遺物は出土しなかった（fig.95・96）。

② 2区

遺物包含層上面で第1遺構面を確認し、東西方向の溝を検出した。この東西溝は、調査区外に延びている。深さは15 cmであった。第2遺構面では、南東隅で土坑を検出した。土坑の規

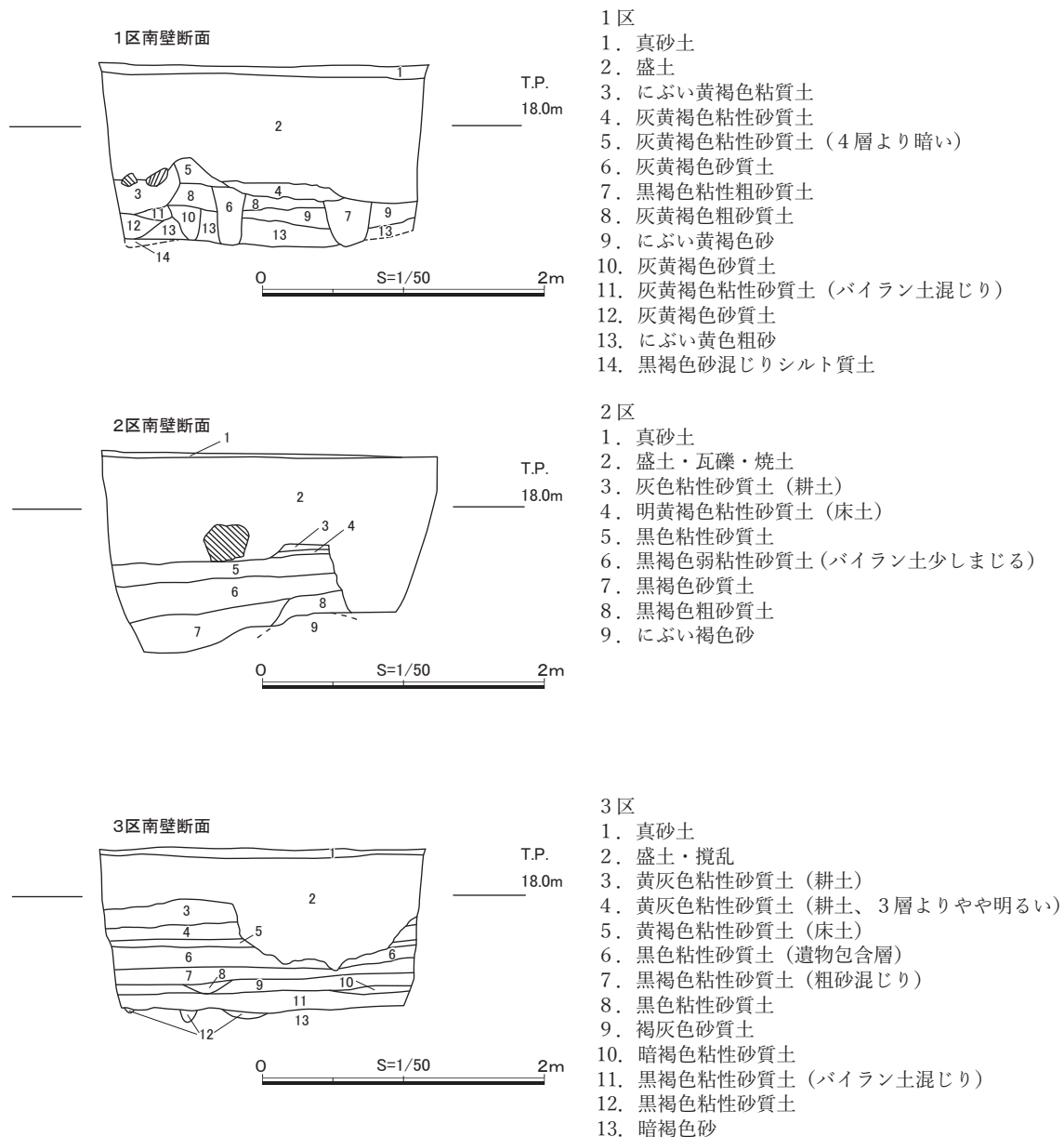


fig.96 1～3区土層断面図

模は、東西 1.1 m 以上、南北 50 cm 以上、深さ 30 cm であった。遺物包含層からは、土師器甕や土鍾、須恵器等が出土している (fig.95・96)。

③ 3区

上層の遺物包含層を掘削した段階で、土師器甕片が集中して出土した。第1遺構面の遺構が検出できていなかった可能性がある。第2遺構面上では、ピットを検出した。遺物包含層からは、土師器と須恵器が出土している (fig.95・96)。

5. まとめ

今回の調査では、調査範囲が狭小であったため、堅穴建物や掘立柱建物は確認されなかった。しかし、出土遺物には、平安時代と考えられる土師器煮沸具や古墳時代後期の須恵器坏が出土する等、第34次調査と同様の成果が得られた。

1・3区で検出したピットは、基盤層が軟弱であった。集落の立地としては、条件が劣る地区に近い可能性がある。



fig.97 1区第2遺構面全景（南から撮影）



fig.98 3区第2遺構面全景（北から撮影）

13 雲井遺跡第43次調査

1. はじめに

雲井遺跡は、六甲山系南麓から流れる生田川によって形成された複合扇状地の末端付近にある緩斜面地に立地している。

当遺跡周辺は、早い時期から市街地化が進み、遺跡の存在が明らかではなかった。昭和62（1987）年度に市街地再開発ビル建設事業に伴い埋蔵文化財が確認され、発掘調査を実施したところ、縄文時代前期の炉跡、縄文時代晩期～弥生時代前期の土坑と落ち込み、弥生時代中期の周溝墓・木棺墓・溝・土坑等が確認された。平成9（1997）年度に実施した第10次調査は、今回の調査地東隣に位置しており、古墳時代後期の竪穴建物・掘立柱建物・溝・ピットが検出されている。

2. 調査概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、工事計画が埋蔵文化財に影響を与えることから、発掘調査を実施することとなった（fig.99）。今回の調査は、調査地を3つに区分して北側から調査を行った（fig.100）。

3. 基本層序

基本層序は、現地表面が T.P.14.1 m で、盛土（攪乱土）→黄灰色砂質土（整地層）→黒色粘性砂質土（遺物包含層）→明黒色粘性砂質土（上面が遺構面・T.P.13 m）→茶褐色粗砂（上



fig.99 調査地位置図

面が T.P.12.6 m) となっている (fig.101)。

遺構面基盤層は遺構埋土と類似しており、遺構検出が困難であった。そのため、茶褐色粗砂まで掘り下げて遺構検出を試みたことから、今回検出した遺構は、本来、明黒色粘性砂質土上面から掘りこまれたものと考えられる。

4. 遺構面の概要

検出した遺構は、飛鳥時代の溝 (SD) 2 条と竪穴建物 (SB) 1 棟、古墳時代以降の土坑 (SK) 12 基とピット (SP) 2 基である (fig.102)。

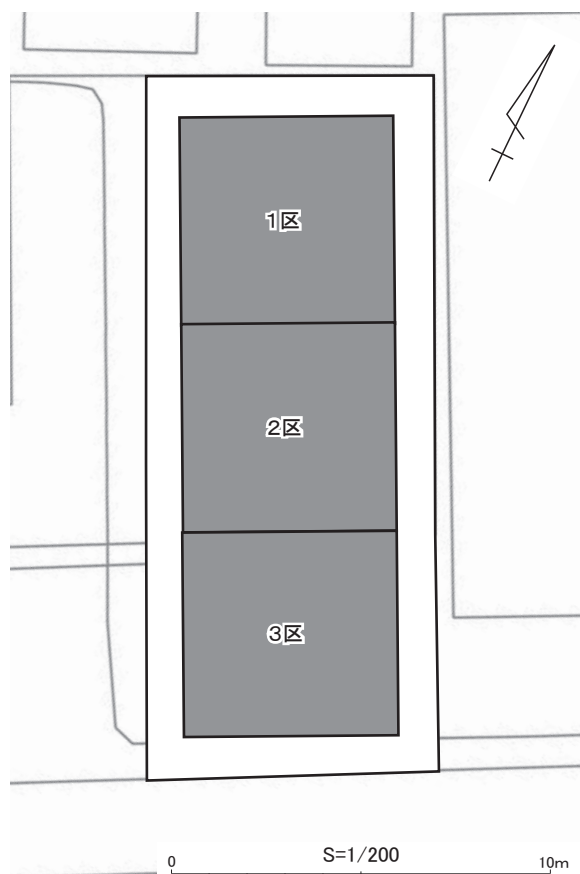


fig.100 調査区配置図

SD101 北東から南西へ延びる溝で、SD102 とほぼ平行している。幅 50 ～ 60 cm、検出面からの深さで 10 ～ 20 cm あった。溝の断面は U 字型を呈しており、埋土からは須恵器や土師器の破片が出土した。飛鳥時代のものと考えられる。

SD102 北東から南西に延びる溝で、幅 50 ～ 60 cm、検出面からの深さで 20 ～ 60 cm あった。溝の断面は U 字型を呈しており、埋土からは須恵器や土師器の破片が出土した。飛鳥時代のものと考えられる。

土坑 全部で 11 基の土坑を検出した。いずれも円形で、直径 40 ～ 80 cm、深さ 13 ～ 38 cm であった。遺物は、古墳時代以降と考えられる土師器の破片が出土している。SK110 は、SB101 の床面で検出した円形の土坑である。直径 40 cm で、遺構面からの深さは 8 cm であった。遺物は、出土しなかったため古墳時代以降のものと考えられる。SB101 に伴うものかは判断できなかった。

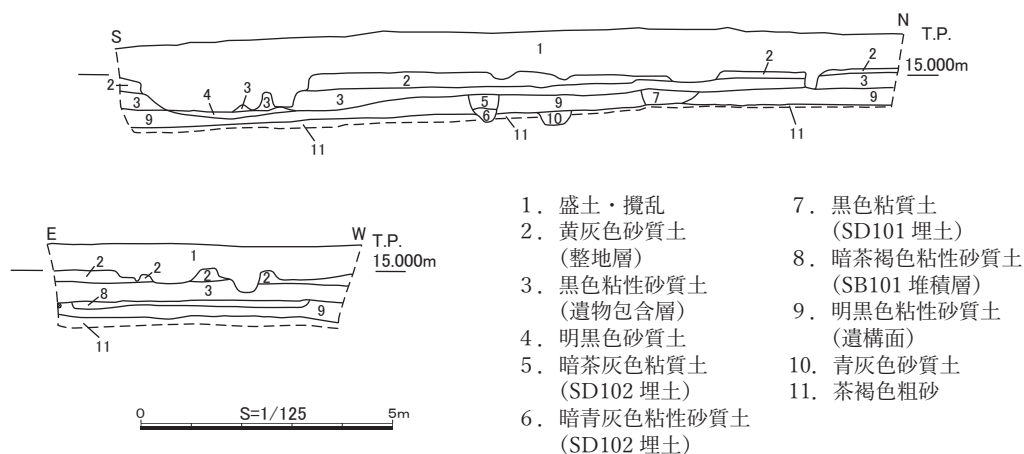


fig.101 上段：調査区西壁土層断面図・下段：調査区南壁土層断面図

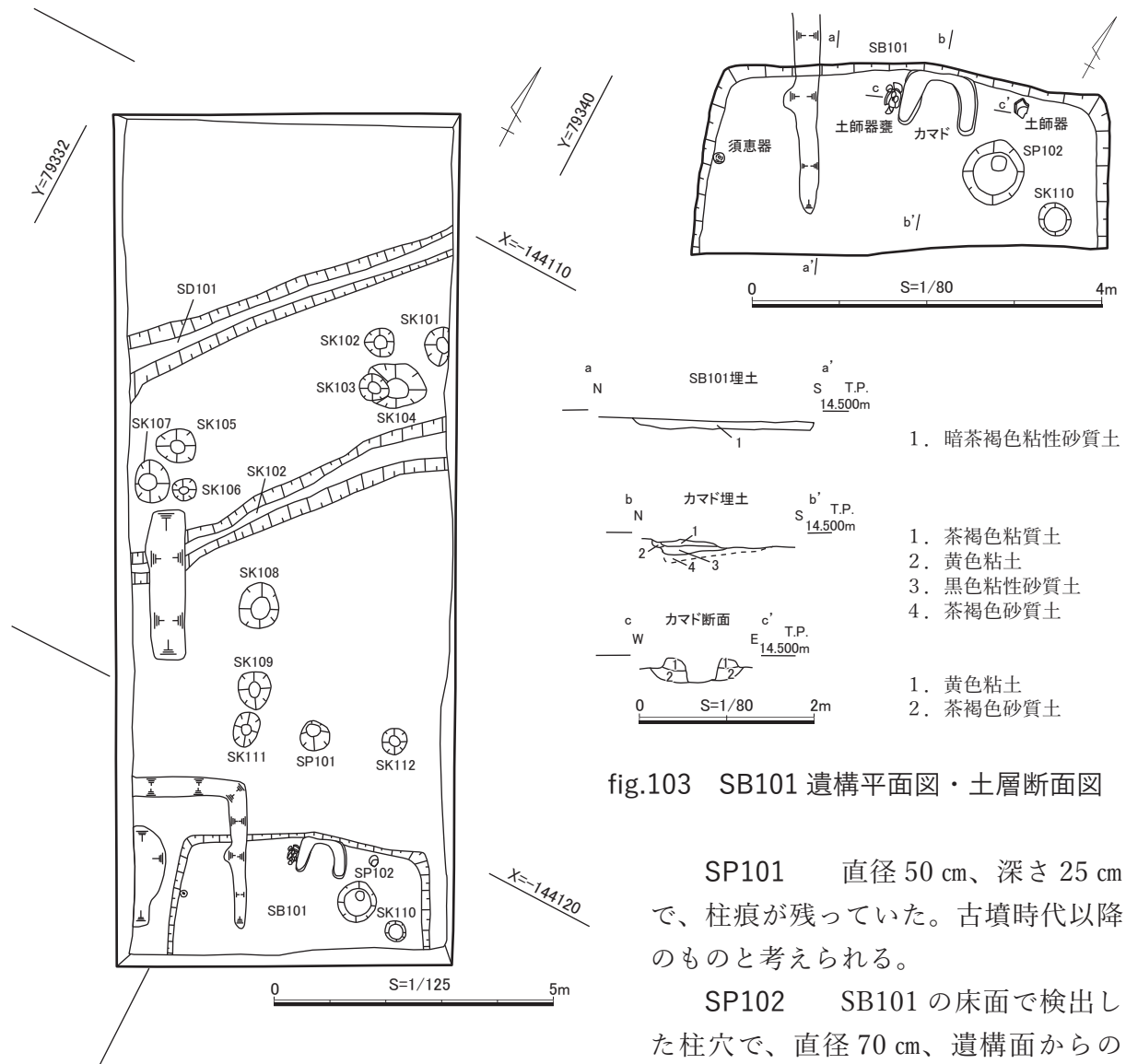


fig.103 SB101 遺構平面図・土層断面図

fig.102 遺構面遺構配置図

不明である。SB101 に伴うものかは不明である。

SB101 一部が調査区外へ続くため、全形は不明だが、一辺 4.4 m の方形を呈するとみられる。遺構面からの深さは 10 cm である。遺構の遺存状態が悪く、柱穴は 1 基のみ確認出来た。遺物は、TK217 型式の須恵器坏身、坏蓋、土師器甕 A が出土している。遺物全体の出土量は少ないが、7 世紀中頃のものと考えられる坏蓋が建物の床面から出土していることから、飛鳥時代に当たると考えられる。北壁中央にはカマドがあり、カマドの西隣から飛鳥時代とみられる甕が床面から出土している (fig.103)。

5. まとめ

今回の調査では、飛鳥時代の遺構を検出し、当該期における集落の広がりを確認した。雲井遺跡は、西から東へ高くなる地形上にあり、今回の調査地付近は、急激に高くなる地点にあたる。縄文時代～弥生時代の堆積層は、古墳時代後期～飛鳥時代には削平されていたとみられる。また、雲井遺跡は、縄文時代～弥生時代の遺構と遺物に特徴が表れているが、

今回の調査で当該期の遺構が確認できなかったのは、以上の理由によると考えられる。



fig.104 3区第1遺構面全景（北から撮影）

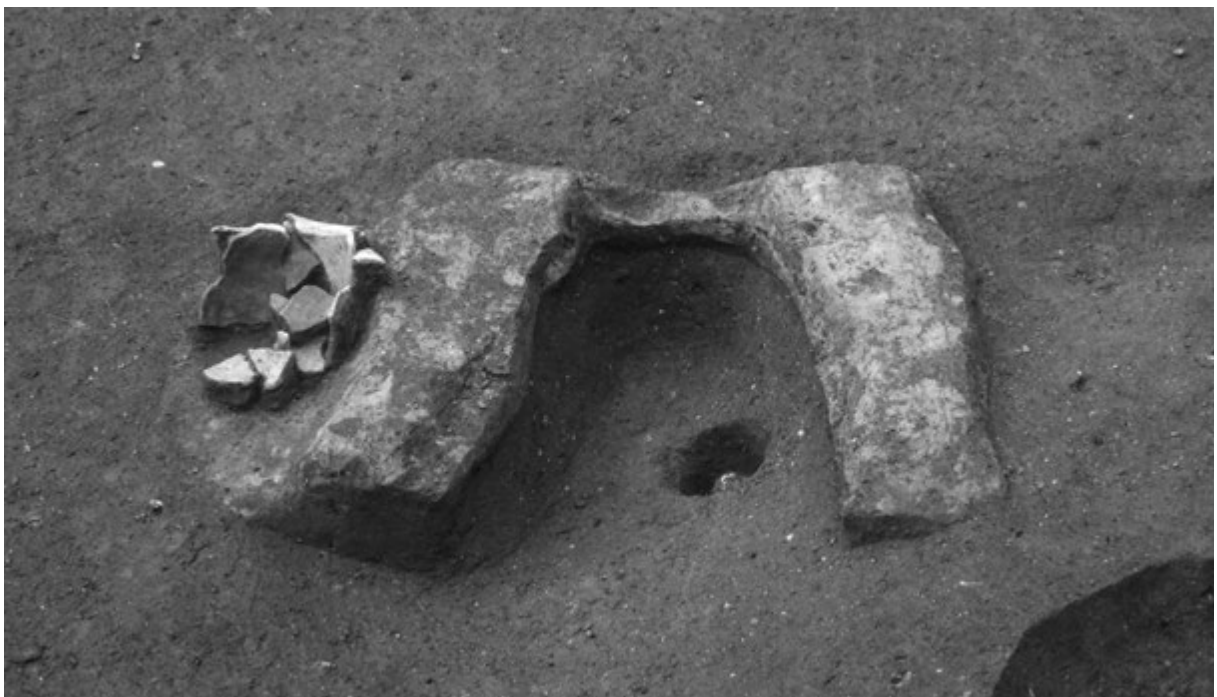


fig.105 3区S B 101内カマド（南から撮影）

14 日暮遺跡第 49 次調査

1. はじめに

日暮遺跡は、六甲山系南麓の狭長な平野に位置し、中小河川によって形成された沖積地の末端付近に立地する。当遺跡での発掘調査は、昭和 61（1986）年度に日暮通 1 丁目で実施した第 1 次調査以来、今回で 49 回目を数え、これまでの調査によって弥生時代後期～中世に至る遺構と遺物が確認されてきた。遺跡としては、古墳時代と平安時代に集落が盛行することが明らかとなっている。

近隣の調査成果を概観すると、当調査地の北西側に位置する平成 20（2008）年度に実施した第 33・34 次調査では、平安時代末～鎌倉時代初頭の集落が検出されている。その調査では、輸入陶磁器や土錘等が出土していることから、漁業に関連する集落であることが指摘されている。当調査地の西側に位置する平成 24（2012）年度に実施した第 35 次調査では、奈良時代～平安時代の掘立柱建物、杭列、溝等が検出されており、須恵器・土師器・瓦等の遺物が出土しており、当該期の集落が近隣に展開していたとみられる（fig.106）。

2. 調査概要

3 つの調査区と、2 区と 3 区を繋ぐトレンチを 2 つ設定して調査を行った。造成土と攪乱土は重機により掘削し、それ以降の土層は人力で掘削した。従前建物等による攪乱が著しく、特に 2 区は調査対象面積の約 70% が攪乱されていた。



fig.106 調査地位置図

3. 基本層序

基本層序は、現地表面 T.P.13.4 mから造成土→灰黄褐色砂質土（旧耕作土）→暗褐色砂質土（上面が第1遺構面）→暗茶褐色砂質土（上面が第2遺構面）→暗黄褐色砂質土（上面が第3遺構面）→明黄褐色砂質土（地山）の順で堆積している（fig.107）。

4. 第1遺構面の概要

耕作による削平の影響が少なかった1区では、壁面観察によって暗褐色砂質土上面が遺構面になることを確認した。検出した遺構はピット（SP）2基で、調査区壁面で確認した。

SP101 直径30 cm、深さ40 cmのピットである。埋土から土師器が出土したが、細片のため時期は不明である。

SP102 直径35 cm、深さ40 cmのピットである。遺物は出土しなかった。

5. 第2遺構面の概要

2・3区では、近世の耕作土直下で遺構面（暗茶褐色砂質土上面）を検出した。検出した遺構は、掘立柱建物（SB）1棟、溝状遺構（SD）3条、土坑（SK）5基、用途不明遺構（SX）1基、ピット34基である（fig.108）。

SB201 3区で北西-南東方向に約2 m間隔で連なるピットを4基（SP213・209・210・211）検出した（fig.109）。掘立柱建物に伴う柱列と考えられる。ピットの大きさは、直径36～45 cm、深さ18～38 cmである。埋土から土師器と須恵器の破片が出土している。

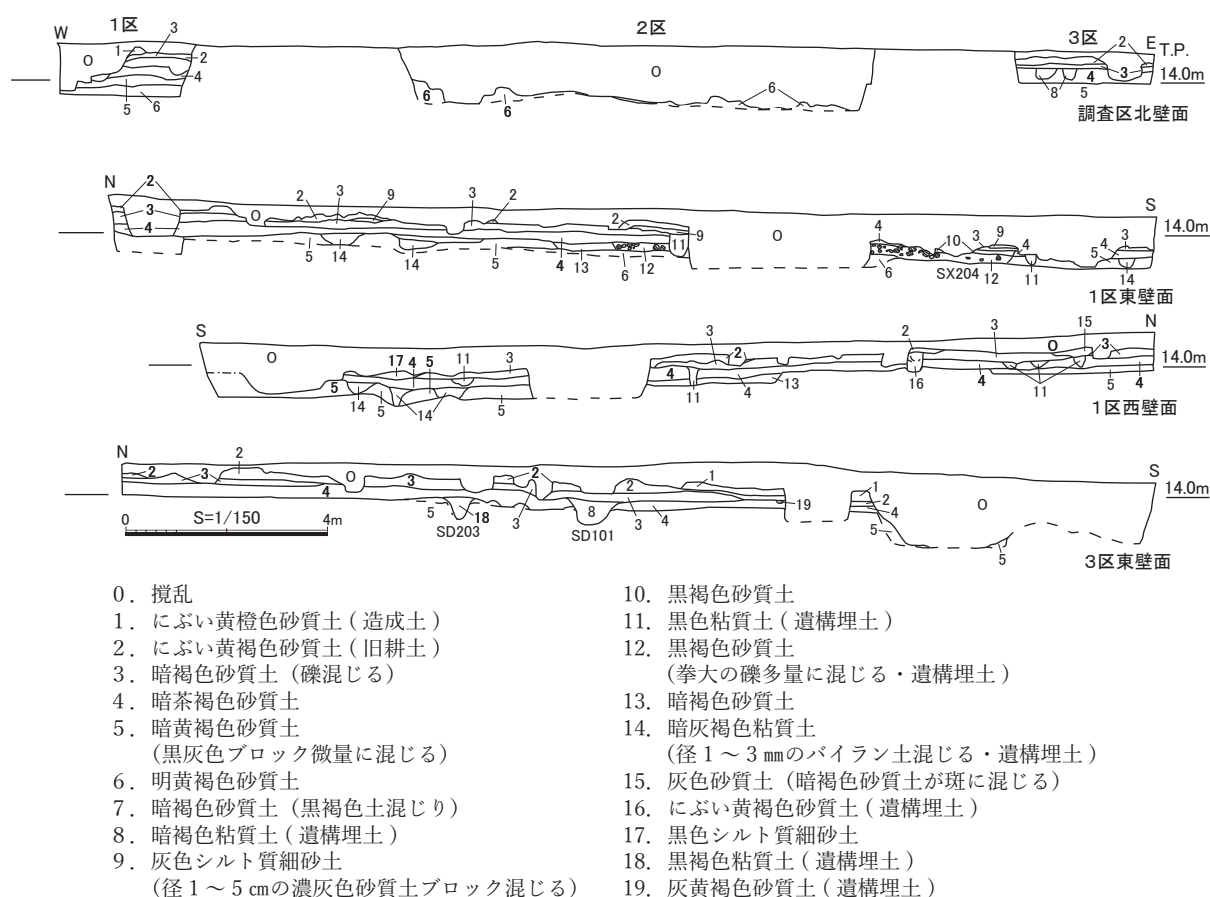


fig.107 各区土層断面図

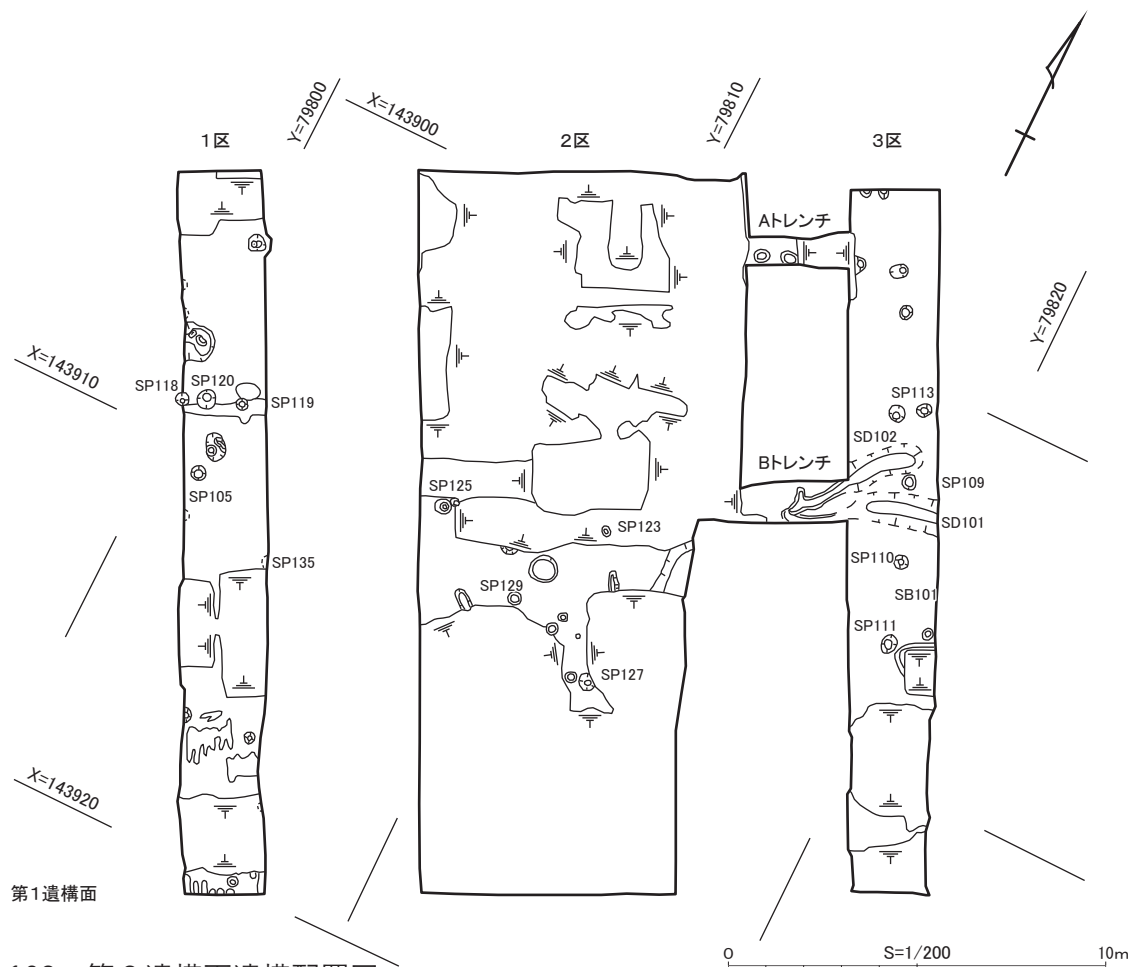


fig.108 第2遺構面遺構配置図

SD201 3区中央部からBトレンチで北東-南西方向に延びる不整形な溝状遺構である。幅1.0m、深さ42cmを測り、東側は調査区外に延びる (fig.109)。

SD202 SD202は、幅約60cm、深さ10cmである。幅を狭めて西側へ延びていくが、2区までは続かなかった (fig.109)。

ピットは、直径12～50cmを測り、大きさの違いはあるものの、深さはいずれも20cmであった。

SP205 直径40cm、深さ50cmで、東播系須恵器甕の体部片と、壺の底部片が

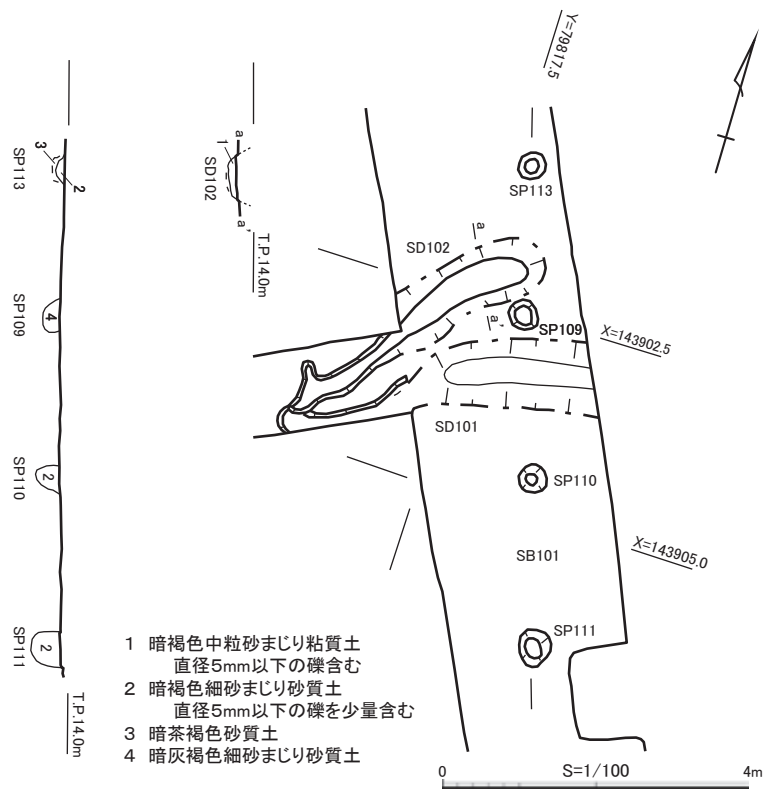


fig.109 SB201・SD201・SD202 平面図・断面図

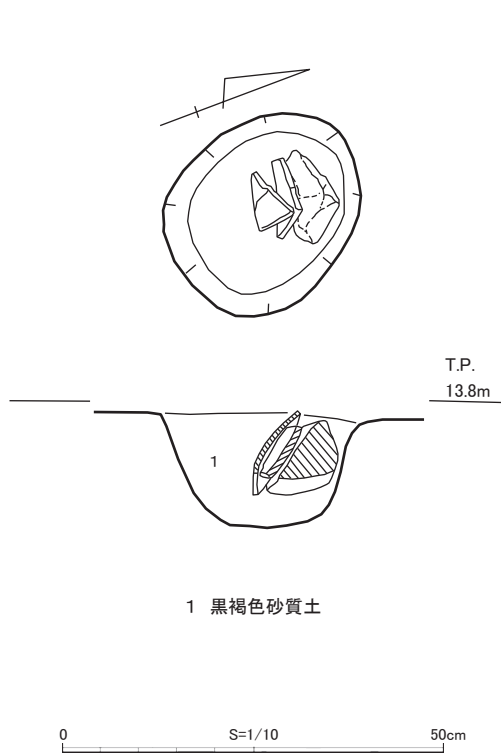


fig.110 SP223 平面図・断面図

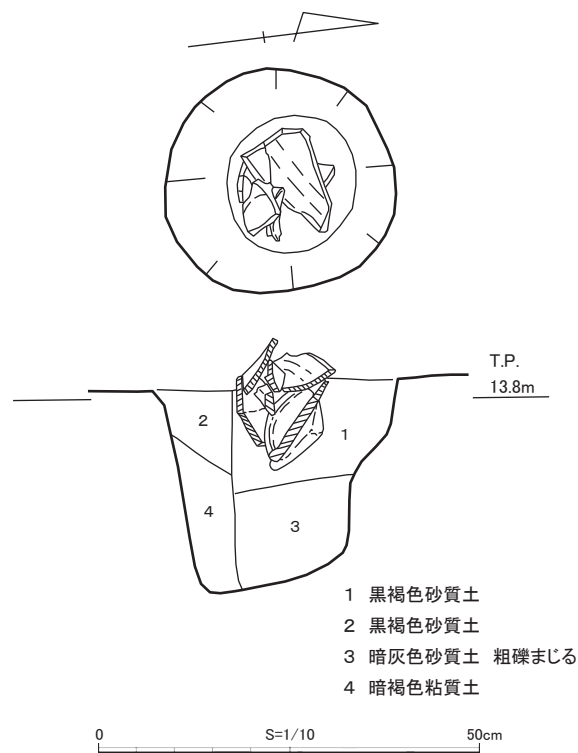


fig.107 SP229 平面図・断面図

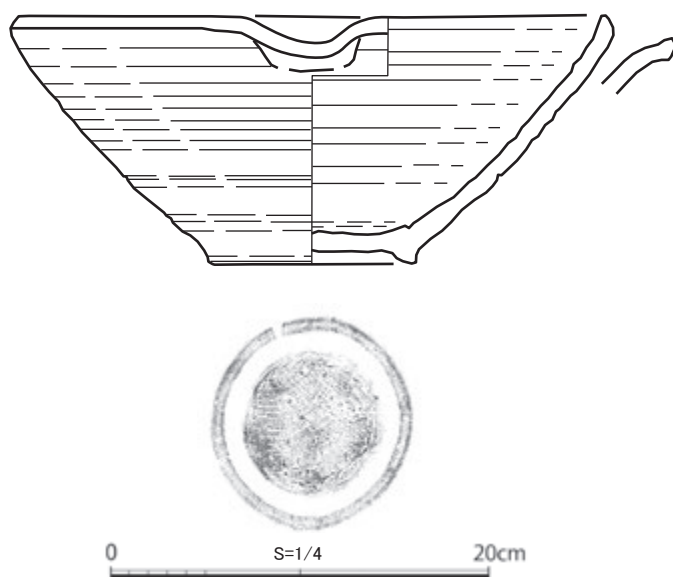


fig.112 SP229 出土遺物実測図

出土している。時期は11世紀後半と考えられる。

SP223 直径26cm、深さ15cmで、埋土から土師器と拳大の石が出土した (fig.110)。

SP229 直径30cm、深さ22cmで、柱を抜き取った後、破碎した須恵器鉢、土師器鍋、白磁碗を投棄していた (fig.111)。須恵器鉢は東播磨系で片口を有しており、口縁部の2/3を失っている。体部は、ゆるやかに内湾して立ち上がり、口縁部は内側を強めになで、端部がわずかに内側へ屈曲する。底部は輪高台を持つ。糸切り痕が明瞭に残り、高

台を張り付ける際、接着性を高めるために爪で付けたと考えられる凹みが多く確認できる。11世紀後半の資料と考えられる (fig.112)。白磁碗は2個体分出土した。須恵器鉢と同時期の資料である。

6. 第3遺構面の概要

暗黄褐色砂質土上面で検出した遺構面である。溝状遺構2条、土坑3基、用途不明遺構

5基、ピット 23基を検出した。ピット埋土より土師器の破片が出土している (fig.113・114)。

SD301 2区中央部で検出された南北方向に延びる不整形な溝状遺構で、幅 1.1 m、深さ 18 cmを測る。遺物は出土していない。

SD302 3区中央部で検出された東西方向に延びる溝で、幅 45 cm、深さ 30 cmを測る。遺物は出土していない。

土坑 いずれも残存状況は悪い。SK303 は、南北に長い楕円形の土坑で、長さ 75 cm、幅 30 cm、深さ 10 cmを測る。遺物は出土していない。

用途不明遺構 SX304 以外は、不整形な落ち込みで残存状況は悪い。いずれの遺構からも遺物は出土していない。

SX304 調査区外に延びるため、全体の形状は不明だが、南北方向で 6.5 ～ 7.0 m、深さ 20 cmの落ち込み状の遺構である。埋土は暗褐色砂質土であり、拳大から人頭大の礫を多く含んでいる。この礫群は、出土状況から自然堆積ではないと判断した。石材は、地山層にも含まれており、整地や建物建築時の掘削に伴って出土した石を窪地へ投棄したものと思われる。

ピット 直径 12 ～ 35 cm、深さ 10 ～ 30 cmである。SP303・305・308・309 ～ 313、315 には柱痕が確認されていることから、これらのピットが建物に伴う可能性がある。

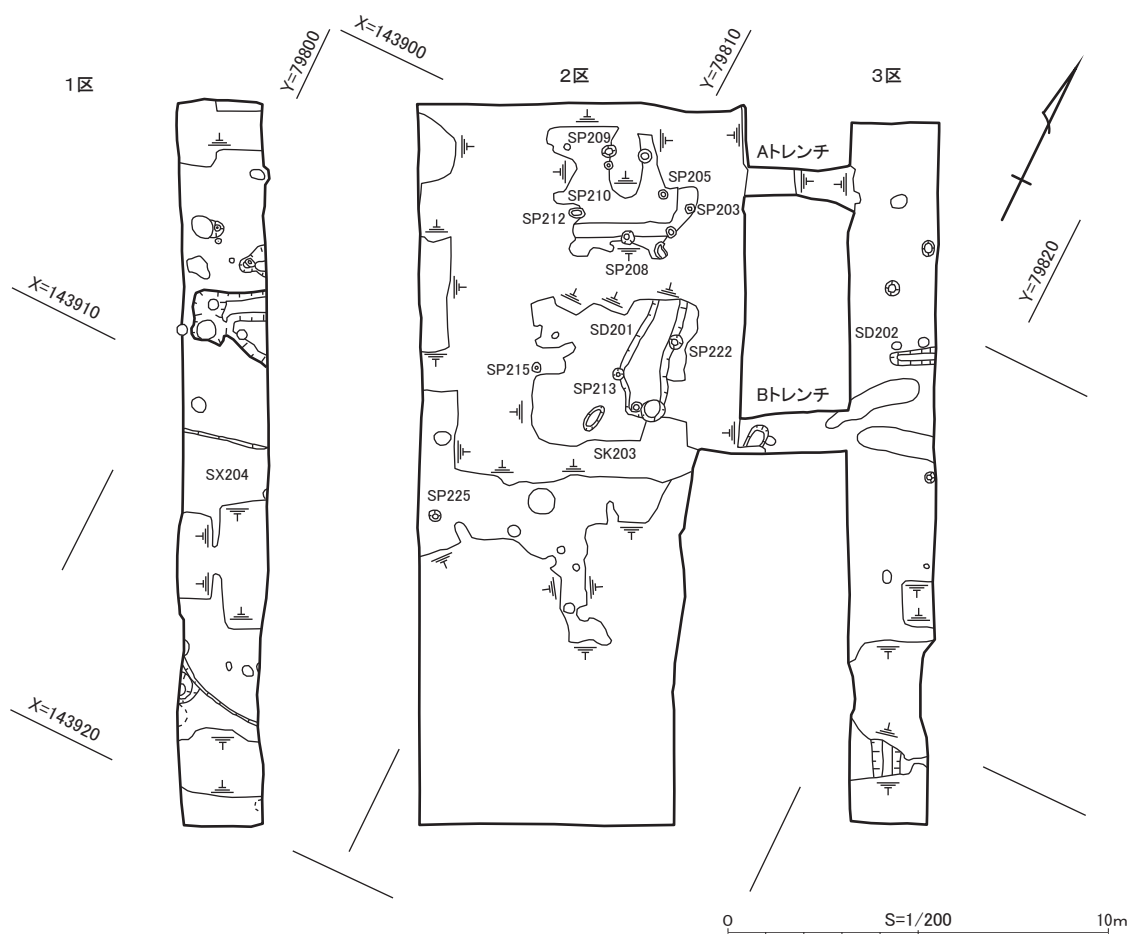


fig.113 第3遺構面遺構配置図

7. まとめ

今回の調査では、3面の遺構面を確認した。第1遺構面では、後世の削平による影響が少なかった1区のみで遺構を検出した。第1遺構面は、本来、調査区全域に存在したと考えられ、2・3区の第2遺構面で検出した遺構の中には、第1遺構面の遺構が含まれている可能性がある。遺物が出土していないため、遺構面の時期を特定するまでには至っていない。第2遺構面では、掘立柱建物、柱穴等を検出した。柱穴が多く検出されていることから、1・2区にもSB201と同時期の掘立柱建物が存在したとみられる。第2遺構面の時期は、SP129出土遺物から11世紀後半にあたると考えられる。第3遺構面は、第2遺構面より検出遺構の数が減るものの、20基以上の柱穴を検出していることから、この遺構面にも掘立柱建物が存在していた可能性がある。遺構面の時期は、11世紀後半以前とみられるが、時期を特定できる遺物が少ないため、詳細は不明である。

日暮遺跡における平安時代の遺構と遺物は、10世紀～11世紀前半と12世紀後半の資料が多い。今回の調査で、その間を埋める時期の遺構と遺物が確認できたことから、当遺跡における平安時代の集落の変遷を考える上で意義のある調査成果が得られた。



fig.114 2区南半第3遺構面全景（南東から）

15 日暮遺跡第 50 次調査

1. はじめに

日暮遺跡は、古墳時代、奈良時代～平安時代、鎌倉時代等で集落が確認されている遺跡である。特に平安時代の集落跡では、多数の掘立柱建物が確認されている。今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事計画で埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲を対象として発掘調査を実施する事となった (fig.115)。発掘調査は、作業工程上、調査区を 2 分割して進めた。遺物包含層上面までは重機で掘削し、それ以下の土層は、人力で掘削した (fig.116)。

2. 遺構面の概要

遺物包含層と検出した遺構から、8 世紀～9 世紀の須恵器の破片が出土している。検出した遺構は、溝 (SD)、落ち込み (SX) である。遺構面の標高は、T.P.11.1m であった (fig.117)。

SD01 幅 45 cm、深さ 10 cm で、北西から南東方向へ伸びる。遺物は、8 世紀～9 世紀の緑釉陶器の破片や、須恵器・土師器の破片が出土している。

SD03 幅 55 cm、深さ約 10 cm で、北西から南東方向へ伸びる。遺物は、須恵器と土師器の破片が出土している。

SX01 長軸 4.2 m、短軸 1.7 m 以上で、深さ 45 cm を測る不整円形の落ち込みである。遺物は、9 世紀に比定できる須恵器の破片が出土している。

SX02 長軸 2.3 m 以上で、深さ 16 cm を測る不整円形の落ち込みである。遺構の西側は SX01 に削平されている。遺物は、9 世紀に比定できる須恵器の破片が出土している。



fig.115 調査地位置図

SX03 方形に近い不整形の落ち込みである。長軸 2.1 m、短軸 2.0 m で、深さ 30 cm を測る。遺物は、9 世紀の須恵器と 8 世紀～9 世紀の土師器甕が出土している。

SX04 長軸 2.2 m、短軸 1.5 m 以上で、深さ 30 cm を測る不整形の落ち込みである。須恵器と土師器が出土している。

3. まとめ

今回の調査では、8 世紀～9 世紀の遺構と遺物を確認した。この成果は、近隣の調査で確認している遺構面と同一の時期に比定できることから、当該期の集落が今回の調査地にも展開していたことが伺える。ただし、検出した遺構からみて、当該期の遺構密度は低いといえる。これは、今回の調査地が集落の縁辺部に位置するためか、集落の中でも遺構の希薄な場所にあたるためと考えられる。近隣での調査成果も含め、今後の検討材料として、本調査の成果が一助を果たすことが期待される。

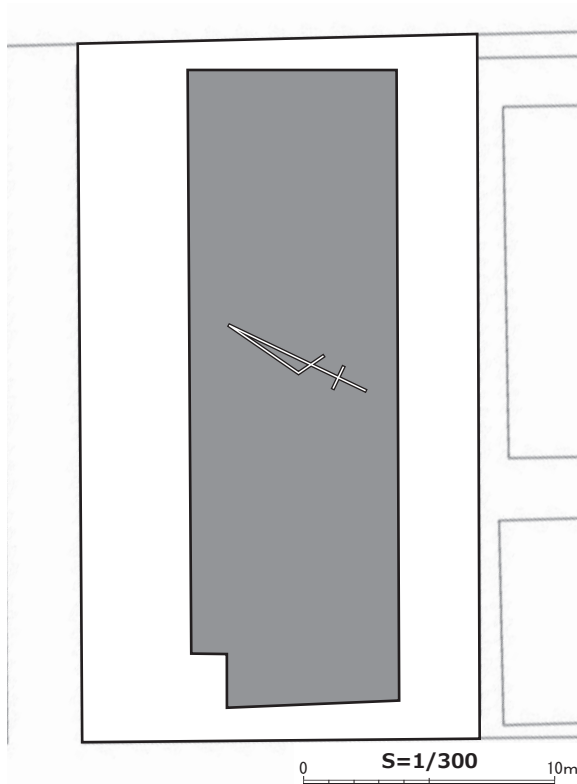


fig.118 調査区配置図

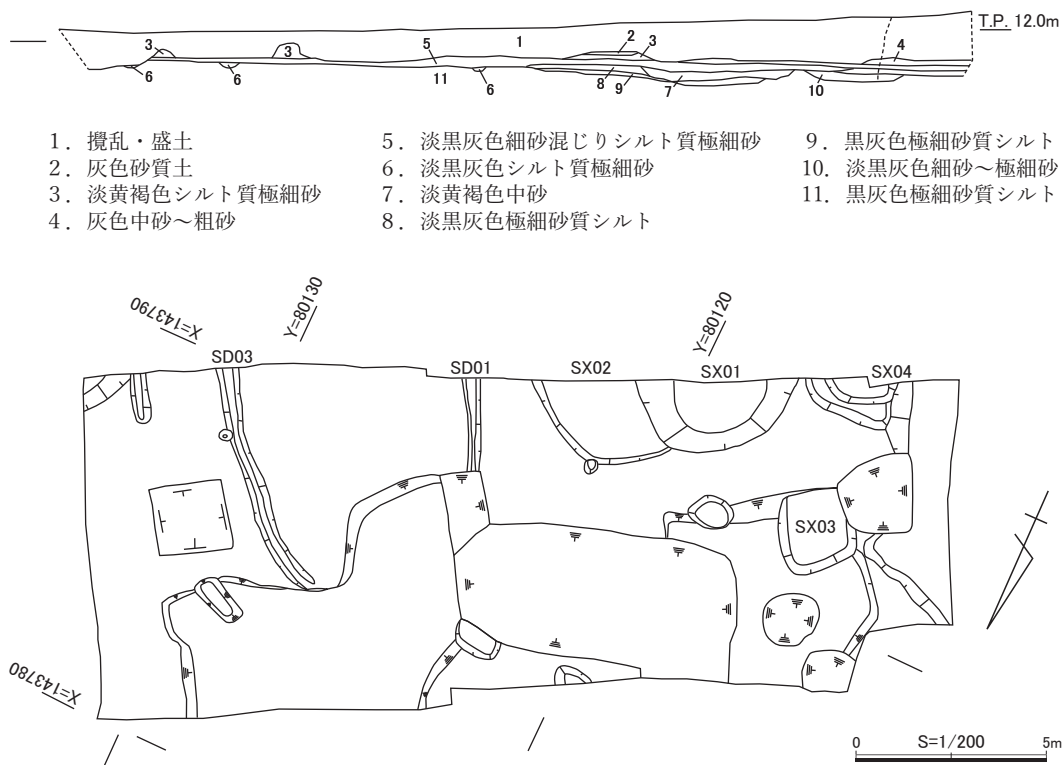


fig.119 遺構面遺構配置図・調査区南壁土層断面図



fig.120 調査区東半全景（西から撮影）



fig.121 調査区西半全景（東から撮影）



fig.122 SX 01 (北から撮影)



fig.123 西半西端部落ち込み (北から撮影)

16 下山手遺跡第7次調査

1. はじめに

下山手遺跡は、宇治川と鯉川に挟まれた標高 20 m 前後の段丘上に立地する。本遺跡は、平成 2（1990）年度に共同住宅建設に伴い試掘調査が実施されて遺跡の存在が明らかとなった。第 1 次調査では、古墳時代後期の掘立柱建物をはじめ、中世の鋤溝、近世～近・現代の瓦積みや煉瓦積みの建物構造物が検出されている。第 1 次調査地の周縁部で実施された第 3 次調査では、古墳時代後期と考えられる掘立柱建物が検出されている。第 6 次調査では、古墳時代後期の造り付けカマドをもつ竪穴建物や掘立柱建物が検出されている。古墳時代後期の下層には、弥生時代後期の竪穴建物が確認されており、弥生時代の遺跡が拡がることも確認されている。第 5 次調査では、祭祀遺構とされる 12 世紀の土師器皿を多量に投棄した土坑や鎌倉時代の柱穴が検出されている。このような調査成果から、下山手遺跡は、弥生時代後期～近代の遺跡であり、その中でも古墳時代後期に盛期があることが明らかとなっている。

2. 調査概要

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、調査地の北側には第 6 次調査地、南側には第 5 次調査地がある。調査地北側の道路面が標高 20.0 m、調査地南西の道路面が標高 19.20 m で、北から南に下る傾斜地に遺跡が立地している（fig.124）。

発掘調査は、作業工程の関係から調査対象範囲を南北に 2 分割して実施した。また、試



fig.124 調査地位置図

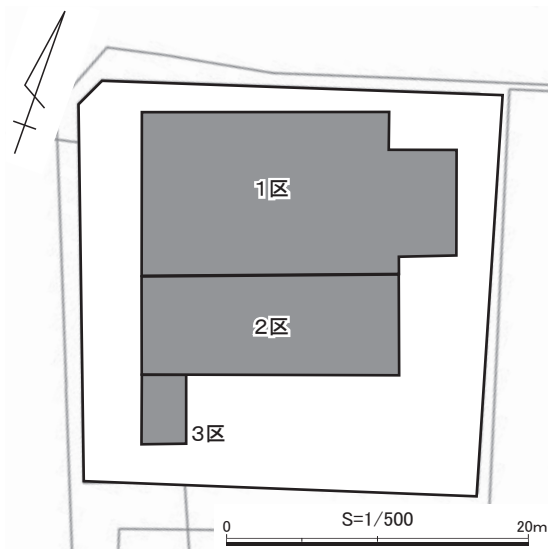


fig.125 調査区配置図

掘調査の結果から、当初は計画建物の掘削深度が埋蔵文化財に抵触しないと想定されていた調査地南側についても、2区の調査結果によって、遺構検出面が当初の想定よりも浅い位置で検出されたため、攪乱の影響が少ない南西部にトレンチを設定した。盛土・攪乱層は重機で掘削し、それ以下の土層と遺構面検出、遺構掘削は人力で行った (fig.125)。

3. 基本層序

調査区内は、従前建物の基礎によって、ほとんどの部分が攪乱を受けていた。また、従前建物の基礎による影響がなかった部分にも盛土が厚く堆積していた。これらを取り除くと、調査

区内の多くが地山面となる。盛土の下で近世～近代の旧耕土層と考えられる灰色砂質土の堆積を一部確認したが、その土層が残っていた範囲と厚みは僅かであった。現況地盤がほぼ同一である南側隣地の第5次調査で検出している遺構面の標高と、今回の調査地で検出している遺構面（地山面）の標高を比較すると、今回の調査地の一部は、0.2 m以上、遺構面が削平されていたと考えられる。遺跡が立地する段丘の傾斜地形を考えると、調査区の北側では、さらに削平の度合いが高いと推測される。やや下がり地形となる調査地の東半でも旧耕土層を検出しており、その下層に遺構が残っていることを期待したが、地山面の状況は、削平を受けていた。

今回の調査では、周辺の発掘調査で確認されている弥生時代～鎌倉時代の遺構・遺物の残存状況と、合わせて近世～近・現代の土地改変についての状況把握に努めた。

4. 遺構の概要

地山面で検出した遺構は、土坑 (SK)、ピット (SP)、浅い落ち込み、井戸である (fig.126)。遺物は、耕土層や整地層、遺構の一部から幕末～明治時代の陶磁器類と瓦が出土しており、それ以外の遺物として、古墳時代の須恵器片、時期不明の土師器と考えられる破片がわずかに出土している。明治時代以降のものを除いて、遺構の詳細な時期は不明なものが多い。

土坑 1区南西部で検出したSK01は、長径0.8 m、短径0.5 m、深さ0.2 mを測り、平面楕円形を呈する。埋土は灰褐色砂質土と褐色砂質土が堆積し、中から拳大ほどの大きさの花崗岩が積み重なって出土した。石を集積したものと考えられるが、一部は石質や石の形状が全く同じであることから、自然節理で割れたまま風化したものを含む可能性がある。石の周囲の土壌は遺構面と異なっていたため、人の手によって掘削を行ったことは確かであることから、石の抜き取り痕跡という可能性も考えられる。土坑からの出土遺物はなく、いつ頃掘削されたものかは明らかでない。

この他に1区では、調査区西壁際で径2.0 m以上、深さ0.1 mほどの浅い落ち込み (SK02・SK03) を検出した。攪乱の影響や調査区外に続くため全容は明らかでなく、遺物の出土もない。

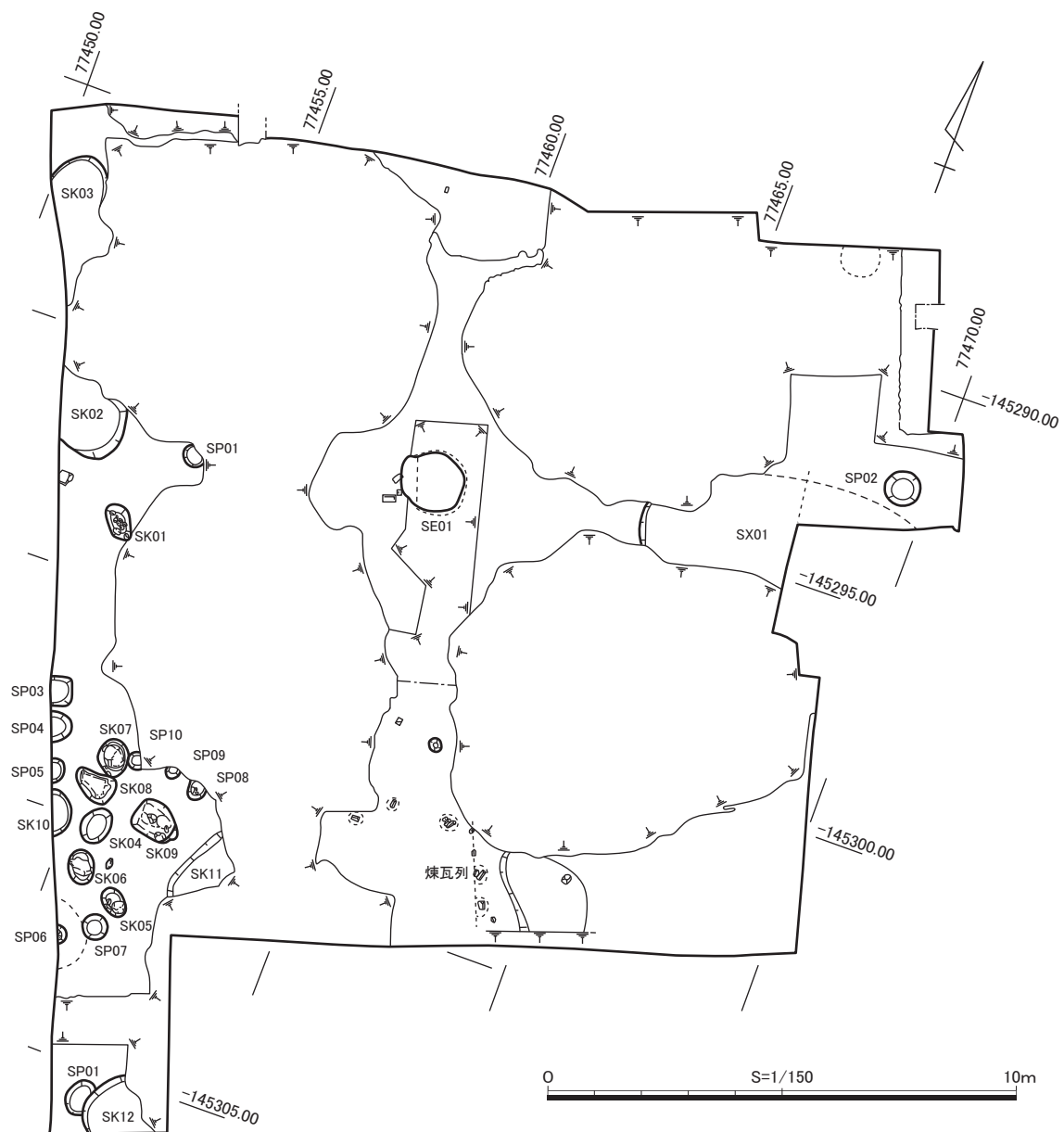


fig.126 遺構配置図

2区南西部では、SK04～12の土坑を検出した。これらの土坑からは、一辺60cmを超える大型の石が出土した。このうちSK05～07から煉瓦や瓦が出土している。これらの出土遺物は、明治時代以降のものであり、SK04・10・11・12は、埋土の違いから近世か、それ以前の時期の遺構にあたる可能性がある。

ピット 1区で検出したSP01は、径0.4m、深さ0.1m、埋土は暗褐色砂質土である。SP02は、径0.7m、深さ0.1m、埋土は灰白色砂質土である。この他に1区では、北東部で暗褐色砂質土を埋土とする径0.5mほどの掘形を検出しており、深さ0.1mほどで、出土遺物はなかった。遺構となるかは明確でない。

2区南西部で検出したSP06・08は、径0.3m、深さ0.1mで、平面形は円形である。埋土は灰色砂質土で、掘削底から拳大の石が2～3個出土していることから、根石の可能性はある。南側隣地の第5次調査でも鎌倉時代の柱穴が検出されており、遺物の出土はないが、

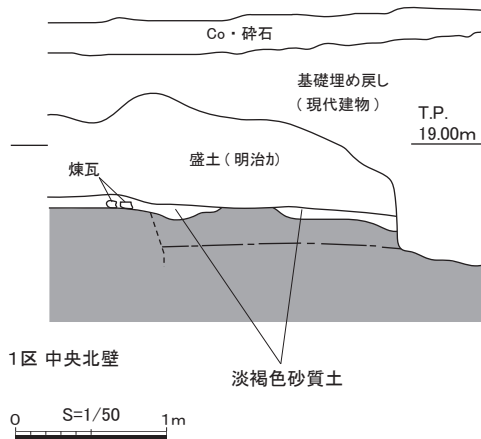


fig.127 1区中央北土層断面図

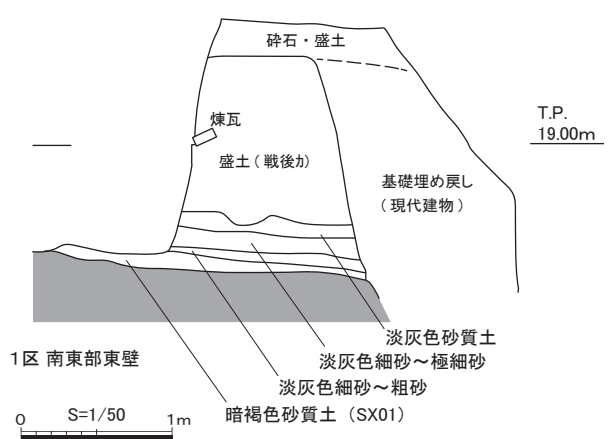


fig.128 1区南東部東壁土層断面図

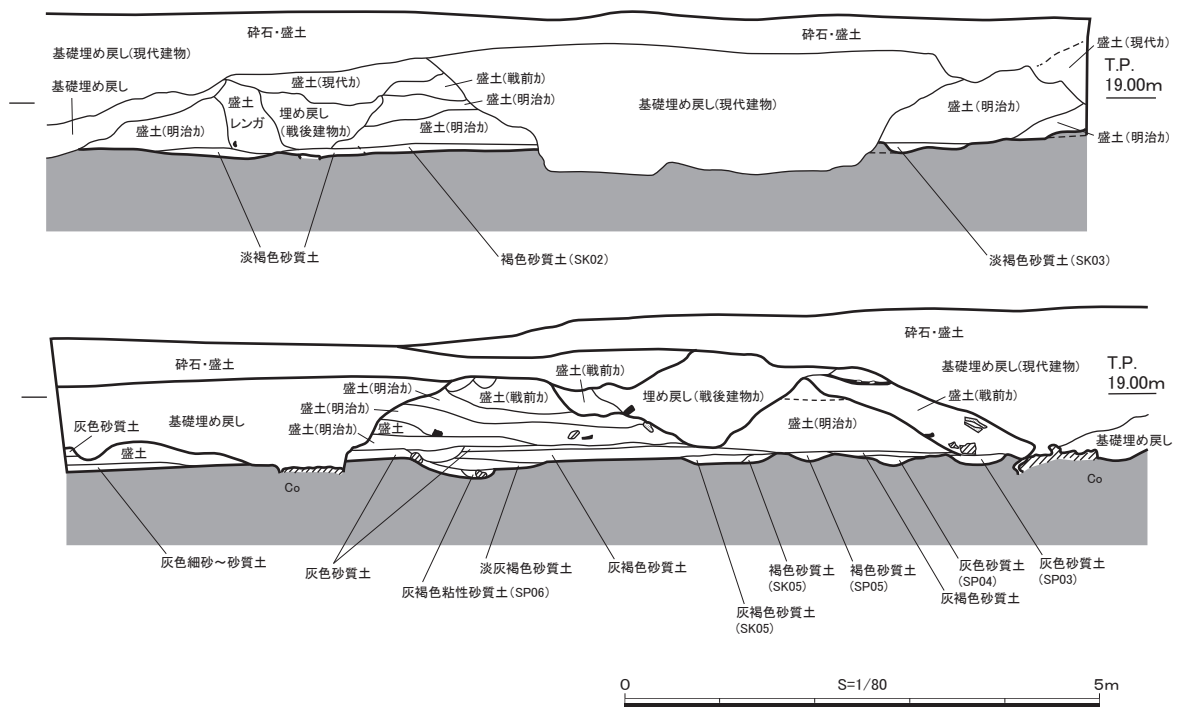


fig.129 調査区西壁土層断面図

関連する遺構の可能性がある。この他に検出しているピットは、いずれも浅く、遺物の出土もないため、詳細は不明である。

落ち込み 1区南東部で径 7.0 m、深さ 0.1 m ほどの落ち込み (SX01) を検出した。埋土は暗褐色砂質土で、堆積の規模と床面が平らなことから竪穴建物の可能性を想定したが、遺物の出土もなく、床面で柱穴等も確認していないため、確証がない。

4. まとめ

調査地周辺では、弥生時代後期、古墳時代後期～奈良時代、平安時代～鎌倉時代の遺構と遺物が確認されている。今回も近隣の調査成果と同様の成果が期待されたが、従前建物

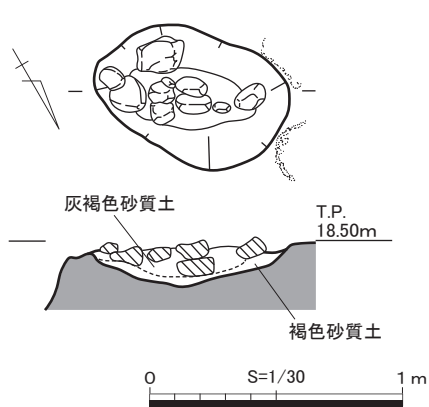


fig.130 SK01 平面図・断面図

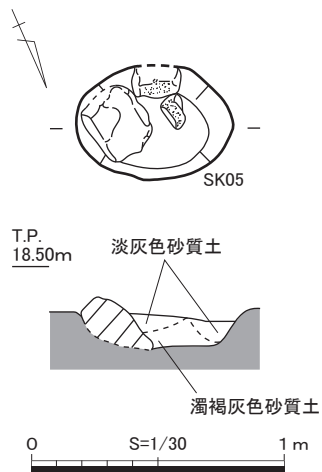


fig.131 SK05
平面図・断面図

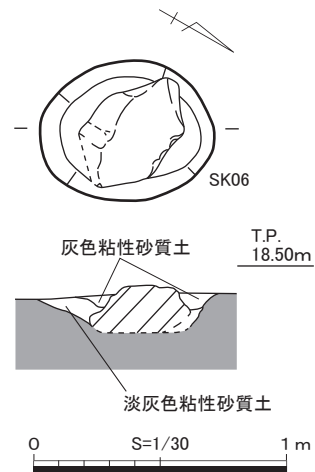


fig.132 SK06
平面図・断面図

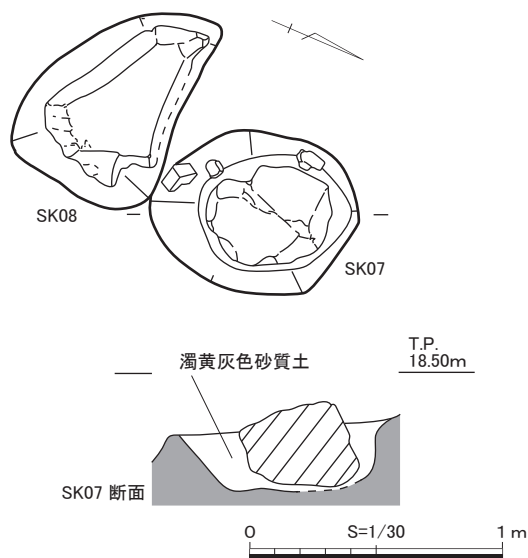


fig.133 SK07 平面図・断面図
(石の抜き取り痕)

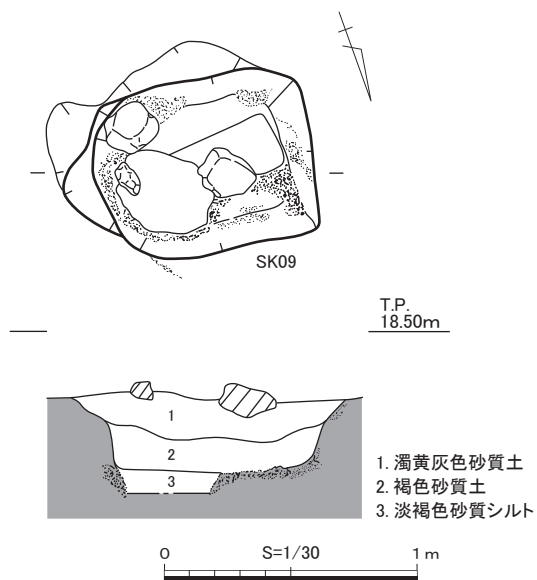


fig.134 SK09 平面図・断面図

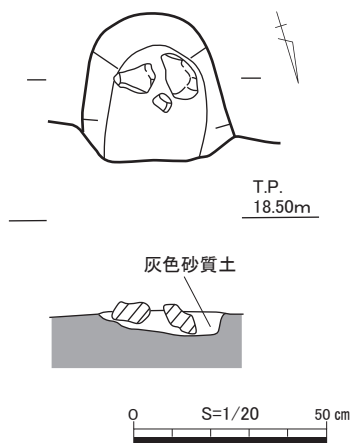


fig.135 Pit08 平面図・断面図

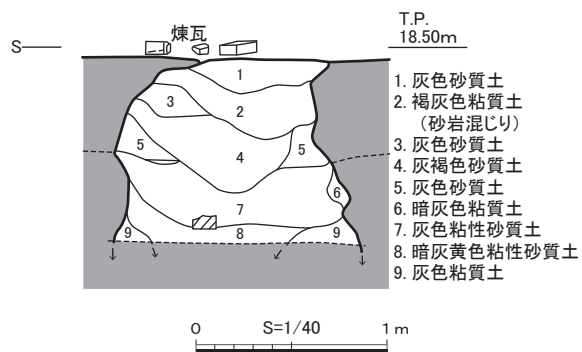


fig.136 SE01 断面図



fig.137 調査地周辺土地変遷図（縮尺不同）

どであった。ただし、ほとんどの土坑は、石の大きさゆえに抜き取られず放置されていた。SK09 では、土坑の壁面に削られた花崗岩が露呈する状況も看守できた。風化が進み、脆くなった部分は抜き取られたと考えられる。

2区中央では、1.5 m間隔で煉瓦を1～3個据えた穴が並んでいた。この列の北側には井戸があり、列の周囲には煉瓦を据えた径0.3 mの柱穴も検出している。第1次調査でも煉瓦積みの建物基礎等が検出されていることから、調査地の周辺は、明治時代から市街地化が進んでいた地域といえる。これに関して、明治時代と戦前の地図を参照すると、明治14（1881）年の地図には、調査地の南側に現在の神戸大学附属病院の前身である神戸病院が描かれている（fig.137）。病院の建設は明治2（1868）年で、調査地の西側道路が病院中央の道路を踏襲している。今回の調査地は、病院の北側入口東縁にあたり、地図には家屋の表記がある。建設時に何らかの影響を受けていた可能性も考えられる。戦前の昭和12（1937）年の地図には、調査地に新たな小区画が描かれている。遺構が検出されている南側隣接地の第5次調査地とは、旧地形の削平の度合いが異なっていた可能性が考えられる。

下山手通一帯は、明治時代から市内の中心地として官公庁、学校、病院等の公共機関・住宅地が形成されていた。個々の土地区画で遺構と遺物の遺存状況が異なる状況を明らかにしたことから、今後は、都市・神戸の変遷を窺える資料の発見が期待されるであろう。

による攪乱の影響が大きく、それ以前に幕末～明治時代頃に耕地化・宅地化されていたことから、大規模に地面を削平していた状況が確認できた。

調査区北側から東半では、土坑等の遺構が僅かに確認されたのみで、顕著な遺構は少なかった。第5次調査地に近接する2区南西部と3区では、詳細な時期は不明ながら、土坑や柱穴を検出した。先の調査で検出されている平安時代～鎌倉時代の遺構検出レベルと比較すると、遺構の底部付近がろうじて残っている状況と推測される。

調査区南西部では、整地に伴って露頭した石を抜き取ったと考えられる土坑を検出した。石を抜き取っている土坑は、径1.0 mほ



fig.138 1区遺構面全景（南西から撮影）



fig.139 1区南東東壁土層断面・SX01 土層断面（西から撮影）



fig.140 2区西遺構面全景（北東から撮影）



fig.141 3区遺構面全景・SK11 検出状況（南東から撮影）

17 雪御所遺跡第5次調査

1. はじめに

雪御所遺跡は、石井川と天王谷川によって形成された複合扇状地扇頂部に立地する。当遺跡周辺は「平野」とよばれており、「雪御所」や「都由乃町」等の地名も残っていることから、この地は平安時代後期に平清盛が別業を築いた場所と考えられている。

当遺跡は、明治39(1906)年に湊山小学校の校地造成中に花岡岩の巨石と共に多くの瓦と土器が出土したことから、福原京関連の遺跡として注目を集めた。昭和61(1986)年に行った湊山小学校校舎改築に伴う第1次調査では、3条の石垣と石列を検出している。平成24(2012)年に行った第2次調査では、第1次調査で確認した石垣の延長部分が検出され、この石垣が南へ延びることが明らかとなった。第3次調査では、12世紀後半の遺構と古墳時代前期初頭の竪穴建物が確認されており、その西隣で平成25(2013)年に行った第4次調査では、古墳時代前期の竪穴建物4棟、古墳時代中期の竪穴建物3棟が検出されている。

平安時代後期の遺構の拡がりや、当遺跡の東側に隣接する祇園遺跡でも確認されている。祇園遺跡では、これまでの調査によって、12世紀後半の掘立柱建物や井戸、園池状遺構が検出されており、京都系土師器皿や山城系瓦等が多数出土している。遺構と遺物の内容から平氏に関連する遺跡として知られており、雪御所遺跡も含め、近隣一帯に平安時代後期の集落が展開していたと考えられる (fig.142)。

今回の調査成果は、令和4(2022)年刊行の『雪御所遺跡第5次調査発掘調査報告書』で報告している。

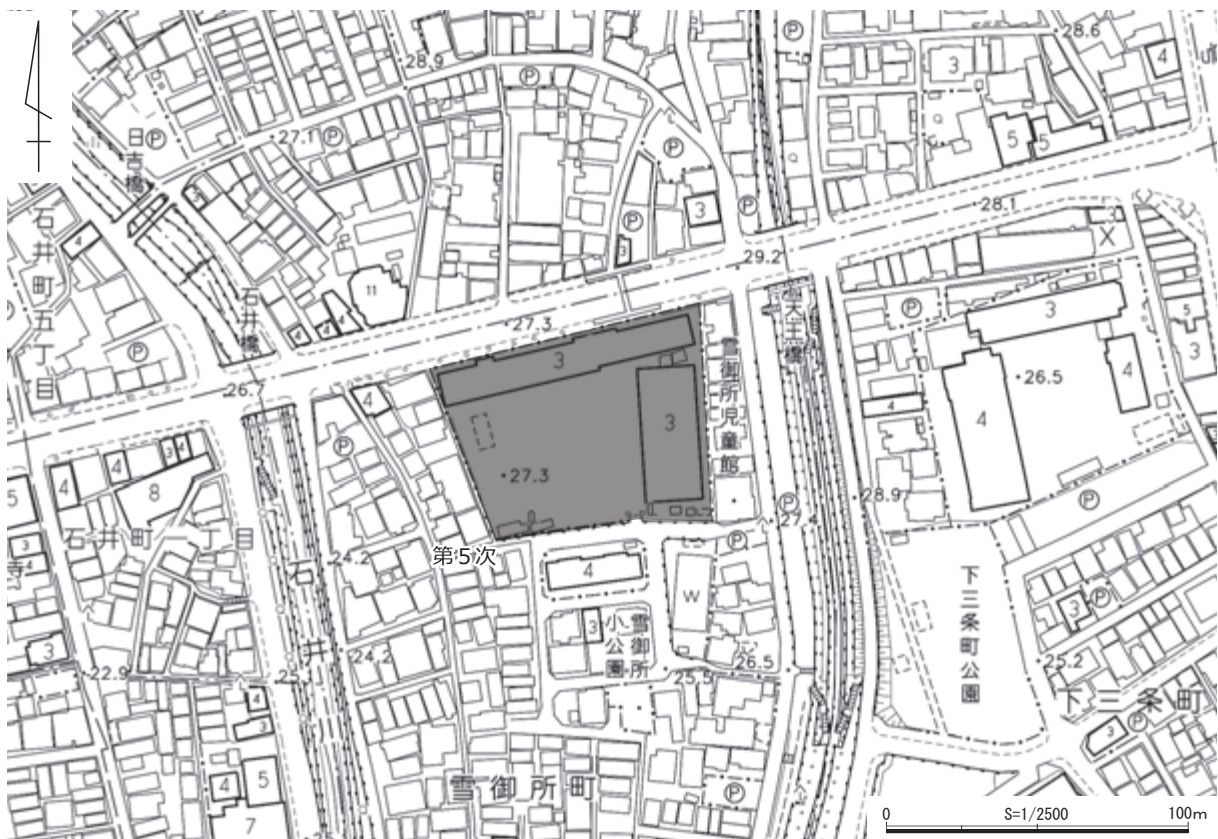


fig.142 調査地位置図

2. 調査概要

今回の調査は、湊山小学校跡地利活用事業に伴うもので、新たに建物が建築される範囲を対象に発掘調査を行った。解体工事の工程により、調査期間と調査対象区を都合3回に分けて行った。その内訳は、5次-1が1～8区、5次-2が9～12区、5次-3が13・14区となる (fig.143)。

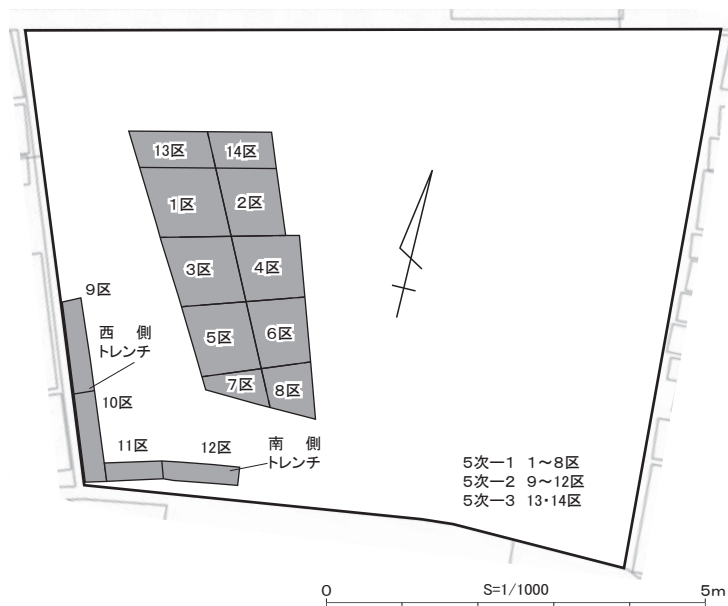


fig.143 調査区配置図

3. 基本層序

1区西壁北端部の基本層序は、現地表面がT.P.17.3 mで、上層から現グランド整地層→黄灰色砂質土（上面が第1遺構面・T.P.16.9 m）→灰色砂質土（古墳時代遺物包含層）→淡灰色砂質土（上面が第2遺構面・T.P.16.4 m）の順に堆積している。7区西壁南端部の淡灰色砂質土上面は、1区より10 cm低くなっていることから、古墳時代の遺構面は、北西から南東へと傾斜していたとみられる (fig.144)。

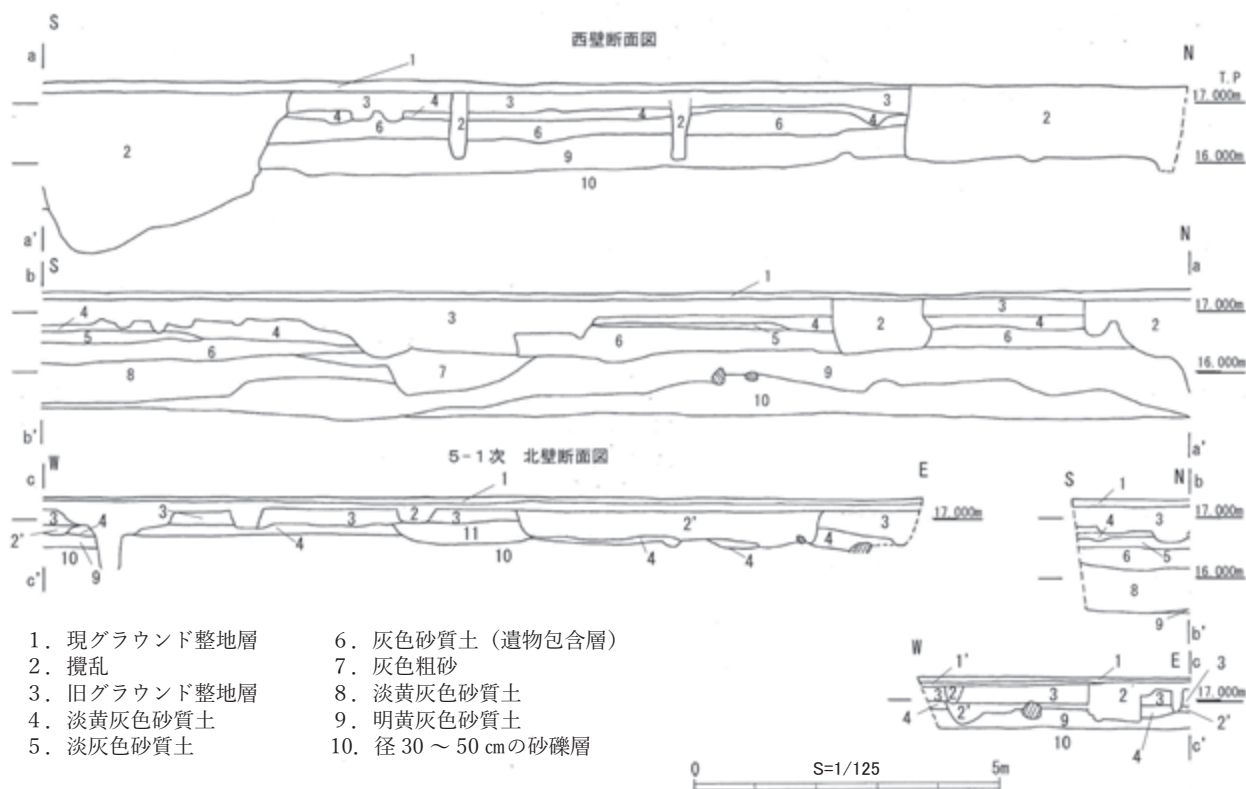


fig.144 調査区土層断面図

4. 第1遺構面の概要

第1遺構面では、南北溝（SD）1条、土師器皿を70枚以上投棄した土坑（SK）1基を検出した（fig.145）。

SK101 直径75cm、検出面からの深さは8cmとなる円形の土坑で、土坑内から土師器皿が70枚以上出土した。土師器皿の年代は、京都Ⅶ期古段階にあたるとみられ、その実年代は、12世紀末～13世紀初頭頃と考えられている。同様の遺構は、祇園遺跡でも確認

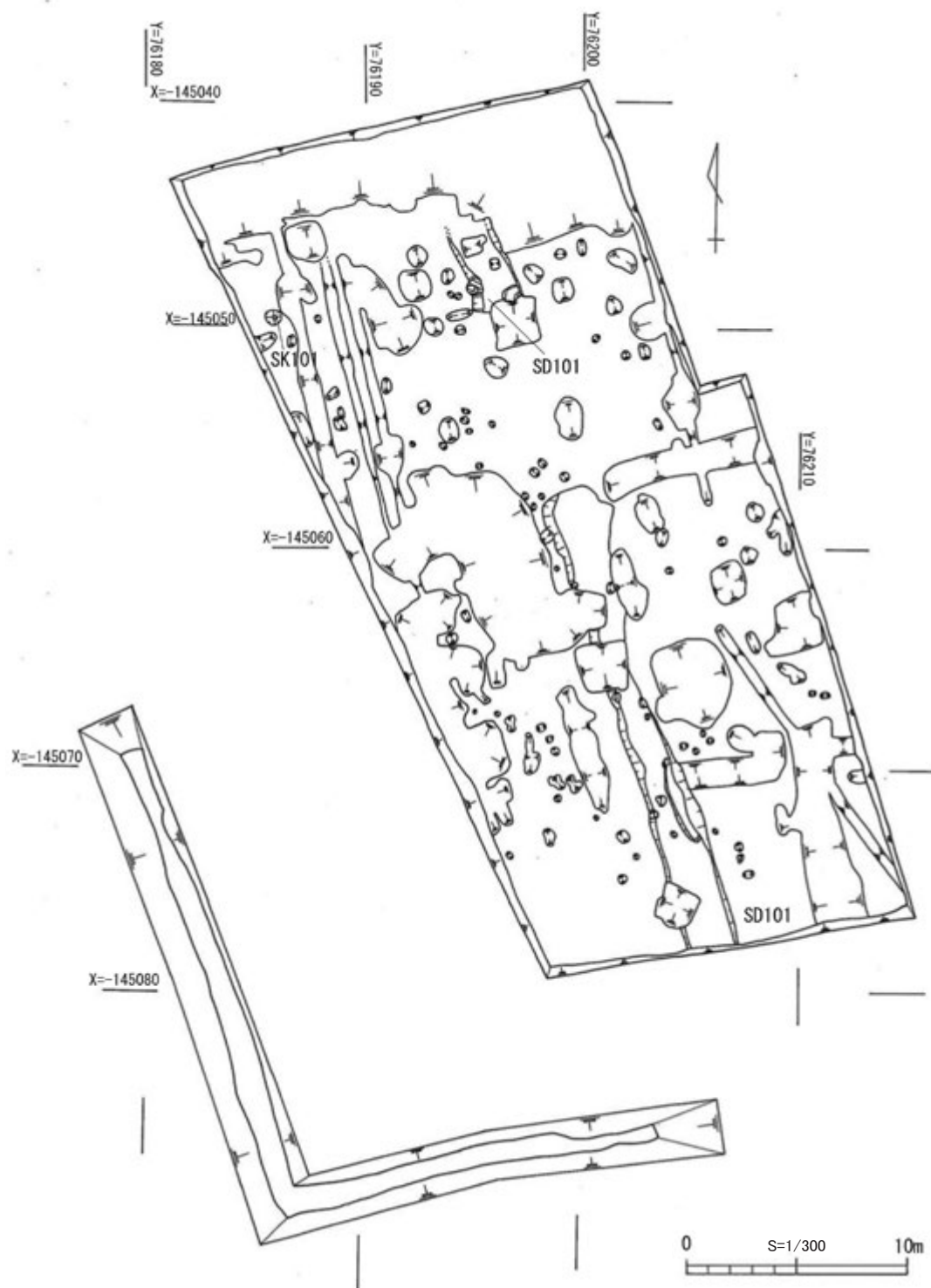


fig.145 第1遺構面遺構配置図

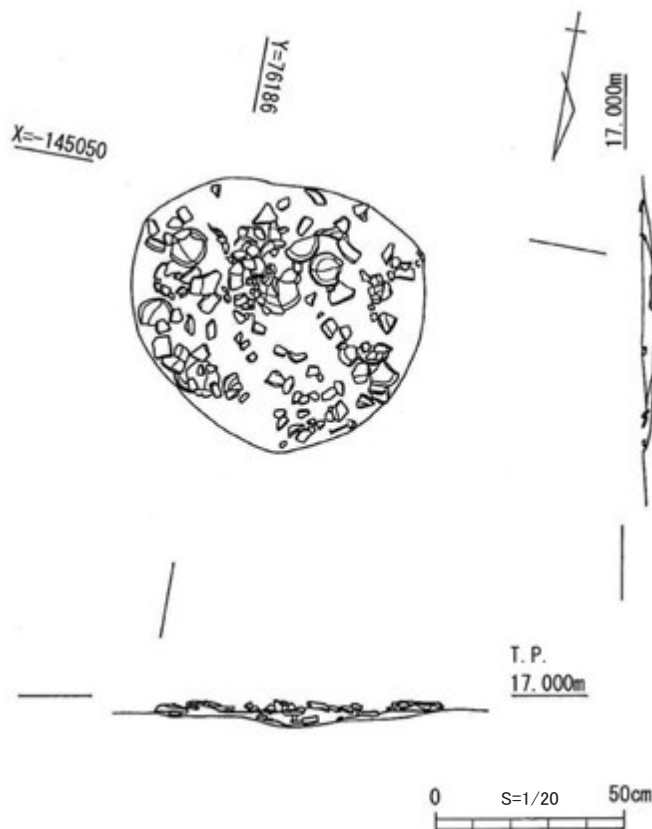


fig.146 SK101 平面図・断面図

されている (fig.146)。

SD101 幅 2.5 m、検出面からの深さは 20 cm となる南北溝である。溝内からは、12 世紀末の遺物が少量出土している。

5. 第 2 遺構面の概要

第 2 遺構面では、竪穴建物と考えられる遺構 (SB) 2 棟、東西溝 (SD) 1 条、柱穴 (SP) 10 基、土坑 3 基、性格不明遺構 (SX) 6 基を検出した (fig.147・148)。

SB201 一辺 3.6 m 以上、検出面からの深さが 10 cm となる方形の遺構で、竪穴建物と考えられる。全体の規模は、東側が調査区外へ続き、北側部分が性格不明遺構に切られていることから不明である。遺構の南側からは、弥生時代後期の甕が出土していることから、当該期の遺

構と考えられる。

SB202 東西 4 m、南北 5 m、検出面からの深さ 50 cm となる方形の遺構である。北辺中央部に被熱痕を確認したが、カマドは確認できなかった。また、北端部から 5 世紀中頃 (TK208 期) の甕が出土している。周壁溝、柱穴は確認できなかった。

SD201 調査区南半部で、幅 3.8 m、検出面からの深さ 55 cm となる東西溝である。6 区からは、6 世紀後半 (TK43 期) の須恵器の坏身と坏蓋が各 1 点出土した。時期を特定する遺物は少ないが、5 区における最終埋土から 7 世紀前半～中頃 (TK217 期) の須恵器の坏身が出土しているため、この溝は、飛鳥時代に埋没していたと考えられる。なお、この遺構は 9 区でも検出されているため、西側に延びることを確認した。

柱穴 直径 30～60 cm、検出面からの深さ 10～35 cm となる柱穴を 10 基確認した。いずれの柱穴からも出土遺物が少なかったため、詳細な時期は不明である。なお、これらの柱穴が建物や柵列等を構成する状況は確認できなかった。

土坑 直径 40～100 cm、検出面からの深さ 5～25 cm となる円形の土坑を 3 基確認した。SK203 からは、古墳時代前期の高坏が出土している。他の 2 基からは、遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

性格不明遺構 6 基確認している。遺構内からは、古墳時代の遺物が出土している。

6. まとめ

今回の調査地は、全体的に攪乱が多く、5 次 - 3 は後世の削平によって旧地形が残っていないかった。また、遺物の大半が自然堆積層からの出土であり、弥生時代～平安時代後期

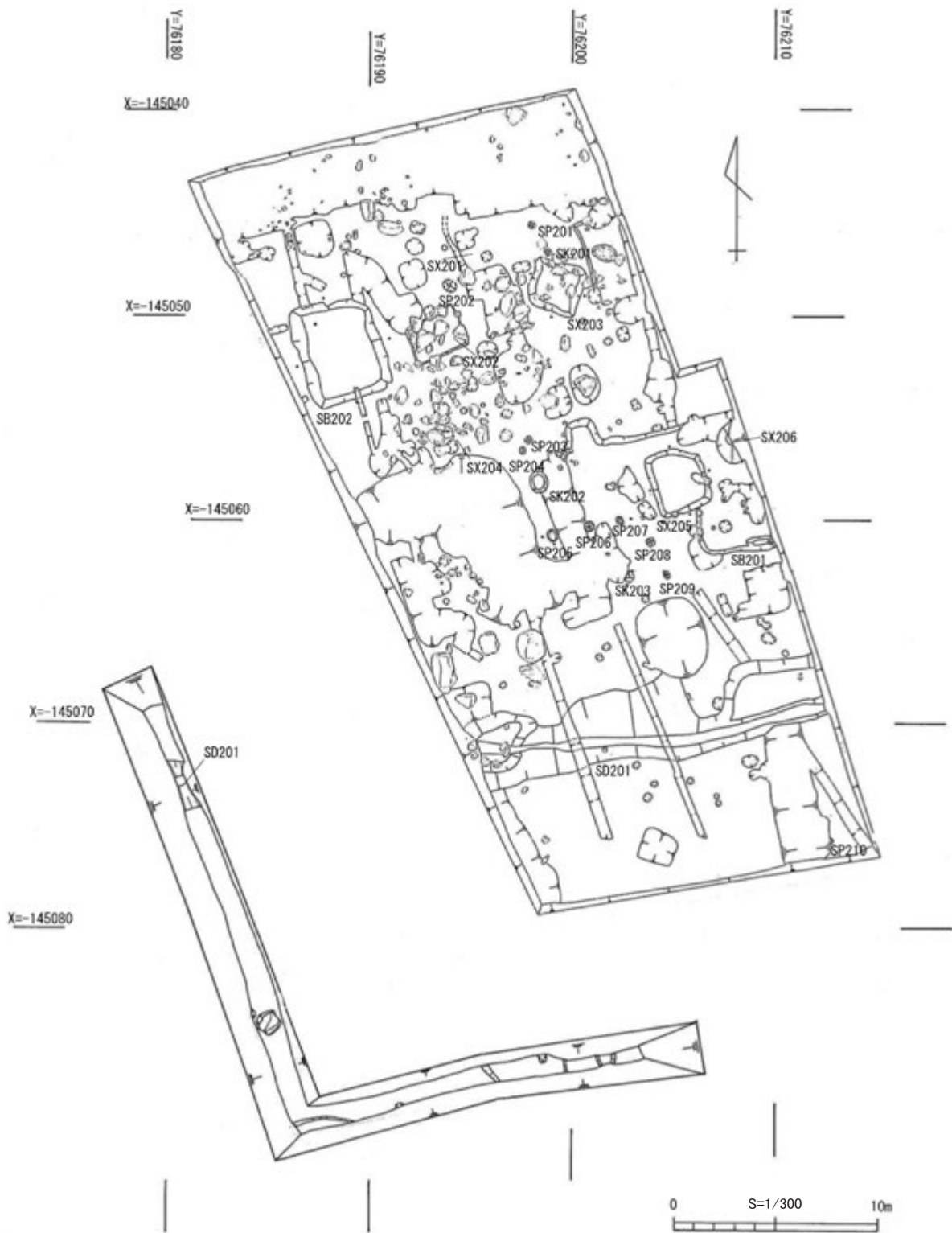


fig.147 第2遺構面遺構配置図

の遺物が混在する状況であった。

今回の調査では、平安時代後期（12世紀末）と弥生時代後期～古墳時代中期中葉の遺構を確認することができた。弥生時代後期～古墳時代中期中葉（5世紀中頃）の竪穴建物と考えられる遺構は、第3・4次調査で確認されている古墳時代の竪穴建物との時期的変遷や集落内の構造を検討する上で、新たな情報を得ることができた。平安時代後期の遺構は、

SK101 や SD101 等で確認したことから、当該期の集落が今回の調査地にも及んでいることが想定できる。



fig.148 第2遺構面全景写真（北西から撮影）

18 楠・荒田町遺跡第64次調査

1. はじめに

当遺跡は、縄文時代～安土・桃山時代までの複合遺跡である。遺跡の標高は6.5～29.5 mで、その立地は、大倉山（旧安養寺山）西側から南へ向かってなだらかな勾配を形成している段丘と、その段丘を開析して南東へ向かって流れ出る旧湊川が形成した自然堤防と扇状地上にある。遺跡の範囲は、東西が約 850 m、南北が約 980 mの間にひろがる。

当調査地周辺では、縄文時代～平安時代の遺構面がこれまでの発掘調査によって確認されている。縄文時代後期後葉の土坑や弥生時代前期～中期の拠点集落、銅鐸・銅鋳型も出土していることから、青銅器の生産も担う集落が展開していたことがうかがえる。古墳時代は、前期初頭の集落や後期の竪穴建物等がみつまっている。平安時代以降は、掘立柱建物や土坑、溝等が確認されているが、当該期の集落は、大倉山の西側を中心に展開すると考えられるため、当調査地周辺は、その縁辺部にあたることが予想された。

2. 調査概要

共同住宅建設に伴い、令和2（2020）年7月1日に実施した試掘調査で遺跡のひろがりを確認したため、工事の影響を受ける範囲のうち、埋蔵文化財が残存しているとみられる部分を対象として発掘調査を実施した。調査地点は、荒田公園から南東へ直線距離にして約 150 mの地点にあたる（fig.149）。



fig.149 調査地位置図

発掘調査は、柱状改良部分を中心に調査区を2か所設定した（fig.150）。調査は、現地表面～耕作土までを重機で掘削したのち、遺構面を人力で掘削した。遺構の記録は、調査地内に測量用基準点を設けて図面を作成し、マニュアルカメラとデジタルカメラを使用して遺構の撮影を行った。

3. 基本層序と遺構面の概要

盛土の下に近・現代の耕作土が複数層堆積しており、バイランと雲母を含む灰色粗砂（耕作土）を取り除くと、試掘調査で確認した遺構面（灰褐色中砂）を検出した（fig.150・151）。試掘調査では遺構（土坑か）も確認しており、その埋土は黒褐色中砂であった。今回検出した遺構面は、鎌倉時代～室町時代の遺構面を検出している第36次調査の土層の特徴と類似しており、出土遺物も同時期のものを含むことから、鎌倉時代～室町時代の遺構面にあたる可能性がある。

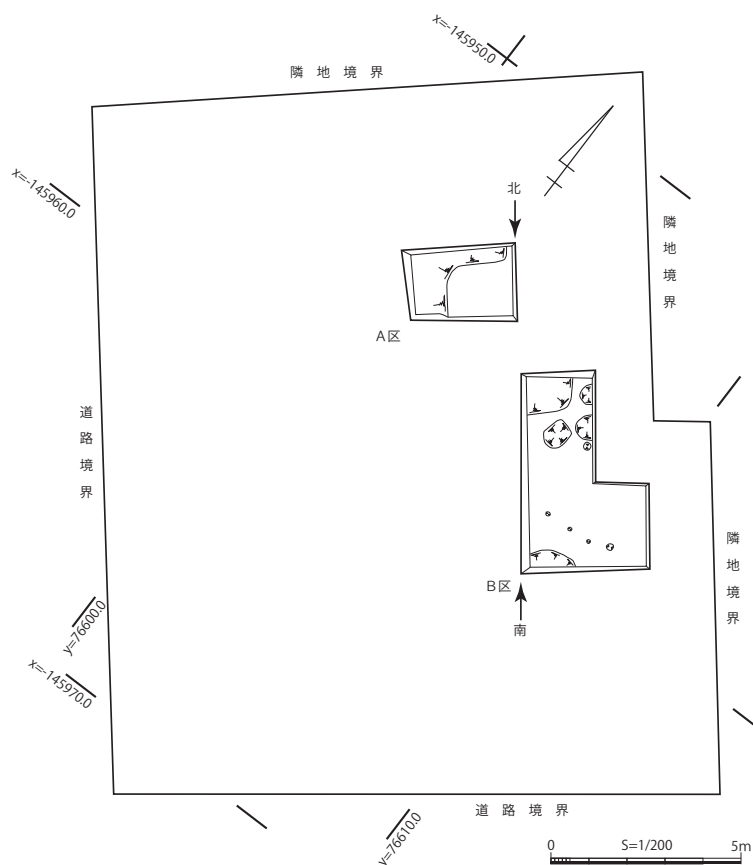


fig.150 調査区および遺構配置図

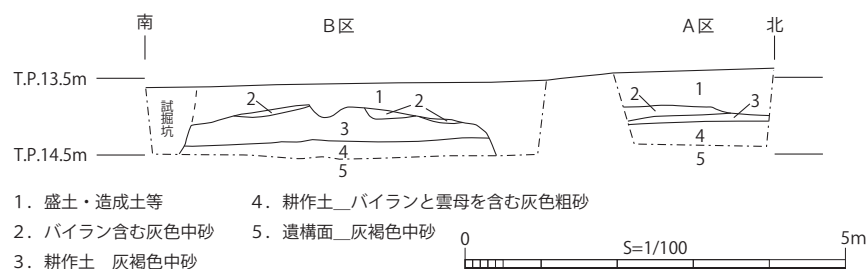


fig.151 調査区東壁土層断面図

4. まとめ

今回設定した調査区から遺構は確認できなかったが、鎌倉時代～室町時代の遺構面とみられる土層を確認することができた。今回の調査地は、当該期の集落縁辺部分にあたとみられることから、遺構の分布も希薄になるとみられる。

また、当調査地の周辺では、弥生時代の遺構面が確認されているが、今回の調査では、確認できなかった。これは、中世の段階で弥生時代の遺構面が削平された可能性も考えられるが、旧地形を観察すると、今回の調査地と弥生時代の遺構面が確認されている調査地とで大きな比高差がある。崖上に立地する今回の調査地まで弥生時代の居住域は広がらなかったと考えられる。

19 兵庫津遺跡第 84 次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、古湊川により形成されたと推定される扇状地末端から砂州の臨海部に立地し、南北約 2 km、東西約 1.5 km の範囲に広がる奈良時代～近世の複合遺跡である。

当遺跡は、和田岬から吹きつける西風を避けることができる位置にあり、古くから港湾施設が整備されてきた。その記述は、『行基年譜』や『教言卿記』、『兵庫北関入船納帳』等、様々な文献でも確認することができる。港湾都市から転機を迎えるのは、天正 9（1581）年に築かれた兵庫城である。天正 8（1580）年に荒木村重の謀反を鎮めた池田恒興らによって兵庫城が築城され、明治時代には初代兵庫県庁として機能し、栄えるようになる。江戸時代に形成された城下町は、現在の町割りにも残っており、随所に兵庫津遺跡の来歴を伺うことができる。兵庫津遺跡には、このような土地の変遷があり、いにしえから現代まで人間の活動痕跡が追える稀有な遺跡として位置づけられる。

今回の調査地を元禄 9（1696）年に作成された『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』（以下、元禄絵図と称す）で確認すると、西ミヤ町辺りに位置している。この事から元禄年間（1688～1704 年）には、西国街道の宿場町であり、寺町に囲まれた場所に位置していたことが伺える。

今回の発掘調査は、共同住宅建設に伴うもので、試掘調査で中世～近世の遺物と遺構が確認されたことにより、工事によって遺跡が破壊される範囲を対象に発掘調査を実施した（fig.152・153）。



fig.152 調査地位置図

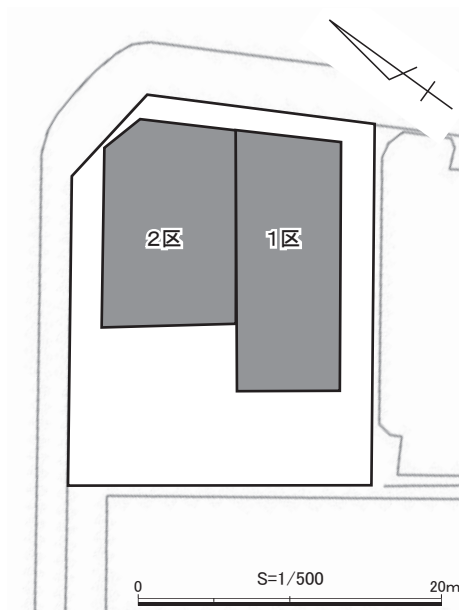


fig.153 調査区配置図

今回の調査成果は、令和3（2021）年刊行の『兵庫津遺跡第84次発掘調査報告書』として報告している。

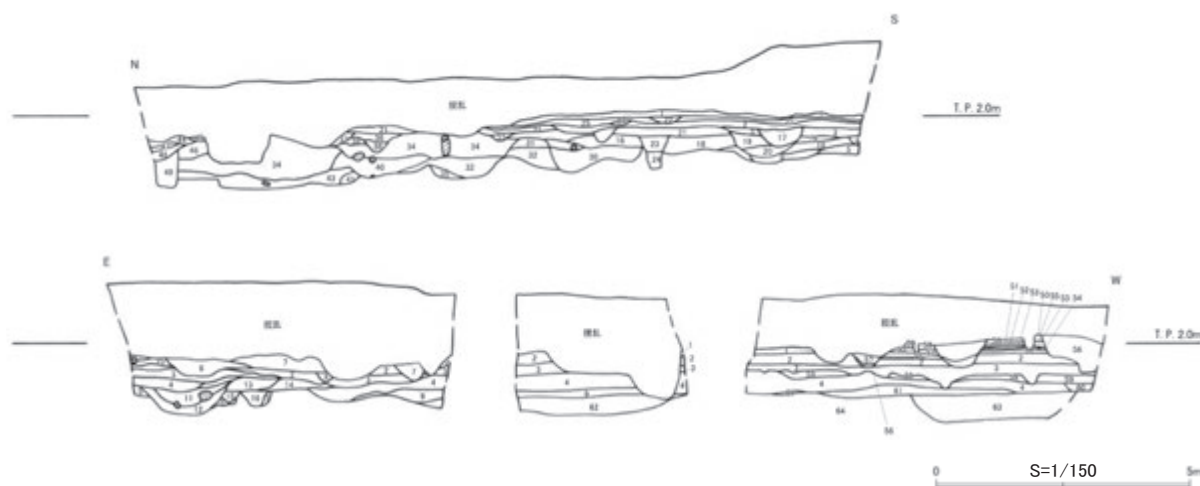
2. 基本層序

調査地の標高は、2.5 m～3.5 mである。ただし、標高2.0 m付近まで盛土と攪乱によって削平を受けていた。

遺構面は、1区で5面、2区で6面を確認している。基本層序は、以下の通りである（fig.144）。

- 第1遺構面 明灰黄色砂質土上面（標高2.0 m）
- 第2遺構面 黄色砂質土上面
- 第3遺構面 明黒灰色砂質土・灰色砂質土上面
- 第4遺構面 灰色砂質土上面
- 第5遺構面 黄色粗砂上面
- 第6遺構面 明黄色粗砂上面（標高1.0 m）

第6遺構面を形成する明黄色粗砂から落ち込んだ遺物を含む茶灰色砂質土は、自然地形の落ち込みとみられる。第6遺構面は湧水が激しかったため、下層確認は、標高0.5 mまでトレンチを入れて調査を実施したが、出土遺物は得られなかった。



- | | | | | |
|--------------|-------------|-------------|------------|-------------|
| 1. 黒色砂質土 | 12. 淡灰色砂質土 | 26. 淡茶色砂質土 | 37. 白色砂質土 | 50. 明紫色砂質土 |
| 2. 淡茶色砂質土 | 13. 淡茶色砂質土 | 27. 茶色砂質土 | 38. 明灰色砂質土 | 51. 明黄色砂質土 |
| 3. 明灰色砂質土 | 14. 明茶色砂質土 | 28. 黒色砂質土 | 39. 茶白色砂質土 | 52. 明黄灰色砂質土 |
| 4. 灰色砂質土 | 15. 明灰色砂質土 | 29. 黒色砂質土 | 40. 暗茶色砂質土 | 53. 明灰色砂質土 |
| 5. 白色粗砂 | 16. 暗灰色砂質土 | 30. 青灰色砂質土 | 41. 褐色砂質土 | 54. 暗灰色砂質土 |
| 6. 黒色砂質土 | 17. 黒色砂質土 | 31. 濃茶色砂質土 | 42. 黄色砂質土 | 55. 灰白色砂質土 |
| 7. 明黄色砂質土 | 18. 淡明灰色砂質土 | 32. 茶褐色砂質土 | 43. 明茶色砂質土 | 56. 赤褐色砂質土 |
| 8. 茶色砂質土 | 19. 茶灰色砂質土 | 33. 暗青灰色砂質土 | 44. 橙色シルト | 57. 白色砂質土 |
| 9. 暗灰色砂質土 | 20. 灰色砂質土 | 34. 明青灰色砂質土 | 45. 青黄色砂質土 | 58. 灰白色砂質土 |
| 10. 灰色シルト | 21. 淡明灰色砂質土 | 35. 明灰色砂質土 | 46. 青灰色砂質土 | 59. 明黒灰色砂質土 |
| 11. 黒色明茶色シルト | 22. 茶色シルト | 36. 暗灰白色砂質土 | 47. 黄灰色砂質土 | 60. 暗黒灰色砂質土 |
| 混じり砂質土 | 23. 濃明灰色砂質土 | | 48. 明青色砂質土 | 61. 黄色粗砂 |
| 24. 青灰色砂質土 | | | 49. 茶褐色砂質土 | 62. 暗黒灰色砂質土 |
| 25. 明青灰色砂質土 | | | | 63. 黄色砂質土 |
| | | | | 64. 明黄色粗砂 |

fig.154 調査区土層断面図

3. 第1遺構面の概要

① 検出した遺構

18世紀頃～幕末までの遺構面である。一部、近代の遺構も検出した（fig.155）。

SK103 幅 115 cm × 40 cm以上の土坑で、深さ 30 cmを測る。黒色細砂が堆積し、土坑底部は焼土化している。

SK104 幅 140 cm × 120 cmの土坑で、深さ 30 cmを測る。上層に茶褐色砂質土、灰色砂質土が堆積し、下層に黄褐色極細砂が堆積する。底部直上には、赤褐色極細砂と黒色粗砂が堆積し、底部は焼土化している。備前焼甕、肥前磁器、土師器が出土した。

SK105 幅 155 cm × 74 cm以上の土坑で、深さ 74 cmを測る。土層は、上層に灰色砂質土と明茶色砂質土、中層に黒色砂質土、下層に茶灰色砂質土、暗灰色砂質土が堆積する。備前焼播鉢、土師器が出土した。

SK106 幅 130 cm × 110 cmの土坑で、深さ 170 cmを測る。土層は、最上層に茶褐色砂質土が薄く堆積し、上層に炭混じり灰褐色砂質土、中層に青灰色砂質土、下層に明灰色砂質土が堆積する。土師器が出土した。

SK107 幅 120 cm × 108 cmの土坑で、深さ 14 cmを測る。土層は、上層に茶褐色砂質土、中層に黒色砂質土、下層に茶灰色砂質土が堆積する。焼土塊が出土した。

SK108 幅 113 cm × 134 cmの土坑で、深さ 48 cmを測る。土層は、灰白色砂質土が堆積し、下層に緑灰色砂質土が堆積している。備前焼甕、肥前陶器、焙烙が出土した。

SK109 幅 68 cm × 97 cmの土坑で、深さ 14 cmを測る。暗灰色砂質土が堆積している。肥前陶器等が出土した。

SK110 幅 124 cm × 123 cmの土坑で、深さ 58 cmを測る。土層は、上層に黄灰色砂質土と灰色砂質土が堆積し、灰色砂質土下部付近で遺物が集中して出土した。遺構の大部分を占める下層は、暗灰色砂質土が堆積している。肥前陶器、焙烙が出土した。

SK113 南側を攪乱により削平されている。幅 105 cm × 40 cm以上の土坑で、深さ 35 cmを測る。土層は、上層に茶灰色砂質土、下層に青灰色砂質土が堆積している。

SK116 幅 170 cm × 44 cm以上の土坑で、深さ 48 cmを測る。堆積層は、上層から暗灰色砂質土、灰色砂質土、明灰色砂質土、淡灰色砂質土、茶灰色砂質土、暗茶灰色砂質土と水平堆積に近い状況が観察できる。最上層に再掘削とも見える黄色粗砂が堆積している。肥前陶器が出土した。

SK118 東側を攪乱された土坑である。幅 180 cm × 110 cm以上の土坑で、深さ 50 cmを測る。土層は、上層に茶灰色砂質土、中層に黒色砂質土、下層に灰色砂質土と堆積している。焙烙が出土した。

SK120 幅 66 cm × 94 cmの土坑で、深さ 10 cmを測る。コンニャク印判で五弁花が描かれた肥前皿等が出土した。

SK122 コ字状集石遺構の下面で確認した土坑である。幅 160 cm × 120 cmで、深さ 50 cmを測る。

SX102 コ字状の石敷き遺構である。建造物の基盤とみられる。石敷き下面からは幕末頃の遺物が出土したが、上面からは近代以降の遺物も出土していることから、幕末～近代頃の建造物に伴う遺構と想定する。石敷きの幅は 40 cmで、一辺の長さは、370 cm × 370 cm × 210 cmである。

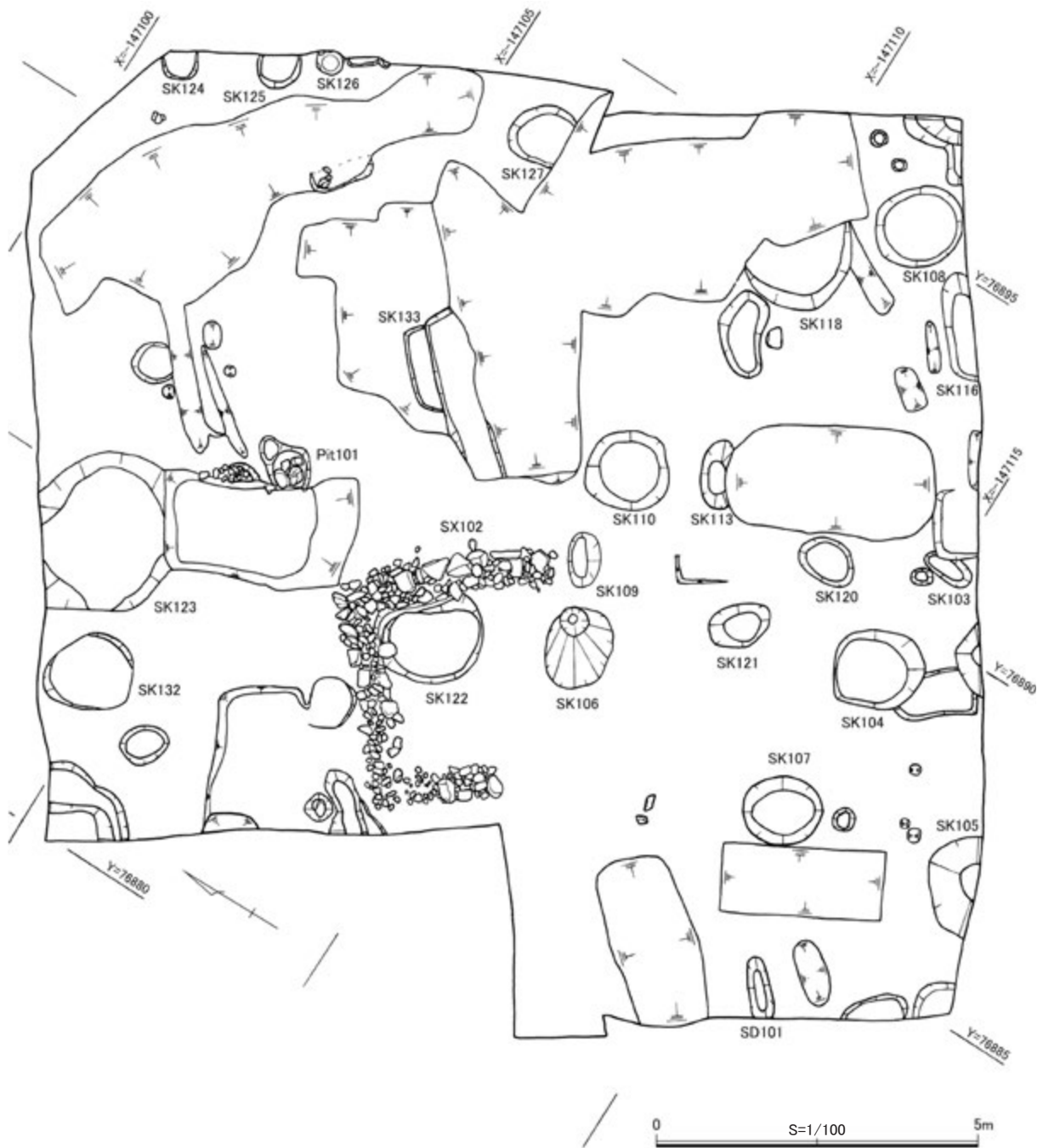


fig.155 第1遺構面遺構配置図

SK123 幅 250 cm × 200 cm 以上の土坑で、深さ 80 cm を測る。ロクロ土師器、焙烙、焼土、鉄滓が出土した。

SK124 幅 54 cm × 46 cm 以上の土坑で、深さ 47 cm を測る。

SK125 幅 67 cm × 53 cm 以上の土坑で、深さ 12 cm を測る。コンニャク印判で五弁花が描かれた肥前皿等が出土した。

SK126 幅 43 cm × 40 cm 以上の土坑で、深さ 5 cm を測る。備前焼の甕底部が土坑内に据えられていた。

SK127 南側を攪乱により削平されている。幅 98 cm × 88 cm 以上で、深さ 20 cm を測る。

SK132 幅 130 cm × 135 cm の土坑で、深さ 41 cm を測る。

SK133 南側を攪乱されているが、長方形の土坑状の落ち込みとして掘削した。遺構本体は、幅 75 cm × 275 cm 以上で、深さ 45 cm を測る。土層は、上層から灰白色砂質土、黄色砂質土、赤褐色砂質土、暗灰白色砂質土、赤褐色砂質土、茶黄色砂質土と水平堆積していた。

Pit101 幅 40 cm のピットで、深さ 18 cm を測る。底部に幅 20 cm の根石を確認している。柱穴の列は確認していない。

SD101 18 世紀の肥前磁器が多数出土している溝である。

② 小結

第 1 遺構面では、幕末～近代にかけての建造物基礎や掘削底が焼土化している土坑等を検出した。このような焼土坑は、近隣の調査で 18 世紀に比定されている焼土坑を含む土坑が多く確認されていることから、調査地周辺に廃棄土坑が形成されていた可能性がある。

4. 第 2 遺構面の概要

18 世紀頃～幕末を主体とする遺構面である。1 区の第 1 遺構面が 2 区では 2 層に分層することができたため、第 2 遺構面を検出しているのは、2 区のみである (fig.156)。

① 検出した遺構

SK206 幅 190 cm × 65 cm 以上の土坑で、深さ 26 cm を測る。

SK209 幅 180 cm × 133 cm の土坑で、深さ 41 cm を測る。南半に集石が確認できる。

SK211 幅 57 cm × 68 cm の土坑で、深さ 13 cm を測る。焙烙が出土した。

SD201 西端部で検出した東西溝である。幅 50 cm、深さ 15 cm を測る。西側の調査区外へと続いている。

② 小結

出土遺物から見ると、第 1 遺構面と第 2 遺構面に時期差は認められなかったため、2 面とも 18 世紀代の遺構面と考えられる。このことから、短期間に 2 つの遺構面が形成されたとみられる。

5. 第 3 遺構面の概要

15 世紀～16 世紀を主体とする遺構面だが、17 世紀の遺構も一部含む (fig.157)。

① 検出した遺構

SK301 西側を攪乱により削平されている土坑である。幅 253 cm × 195 cm で、深さ 52 cm を測る。16 世紀の土師皿が多数出土している。

SK302 南側の一部が攪乱で削平されている土坑である。幅 334 cm × 170 cm で、深さ 53 cm を測る。16 世紀の土師皿と備前焼の大甕胴部が出土している。

SK303 SK301 の埋没後に掘削された土坑である。幅 83 cm × 57 cm で、深さ 20 cm を測る。

SK304 西側を攪乱されている土坑である。幅 355 cm × 290 cm で、深さ 50 cm を測る。16 世紀の土師皿、備前焼甕、羽釜、平安時代とみられる滑石製巡方が出土している。

SK305 幅 97 cm × 114 cm の土坑で、深さ 35 cm を測る。16 世紀頃の土師皿や備前焼の大甕片・播鉢が出土している。

SK312 幅 314 cm × 266 cm 以上の土坑で、深さ 44 cm を測る。多数の礫と共に、肥前

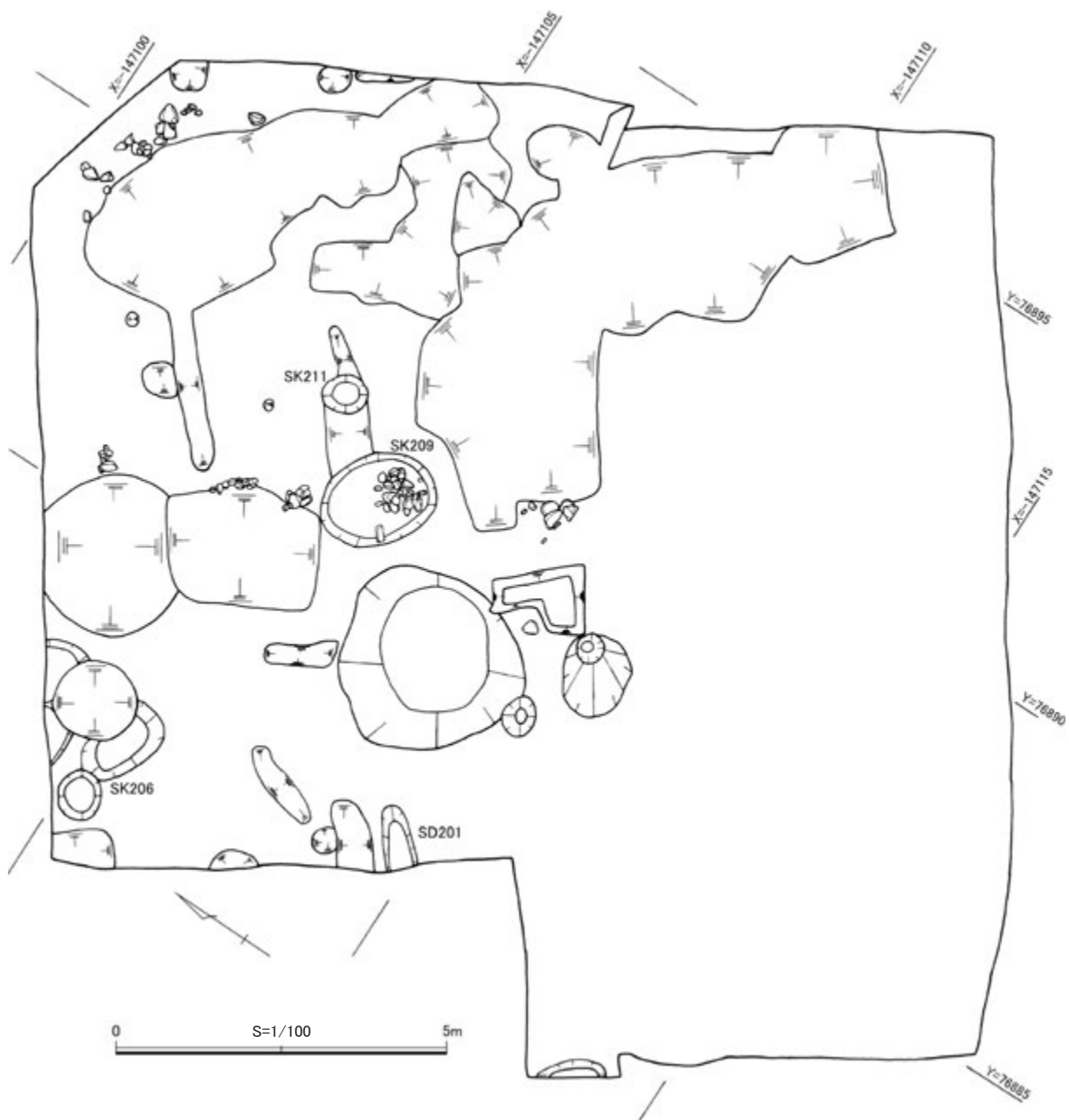


fig.156 第2遺構面遺構配置図

陶磁器、備前焼の播鉢、羽釜等が出土している。

SK315 幅 182 cm × 142 cm の土坑で、深さ 31 cm を測る。備前焼の播鉢、土師皿が出土している。

SK317 幅 152 cm × 288 cm の土坑で、深さ 51 cm を測る不定形の土坑である。礫が多数混入していた。15 世紀の備前焼播鉢が出土している。

SD301 幅 85 cm、深さ 14 cm を測る南北溝である。南北方向に 430 cm まで伸び、南側が攪乱で削平されている。両掘形には石列が並んでおり、何らかの遺構に伴う側溝と考えられる。

SD302 幅 40 cm、深さ 5 cm を測る南北溝である。SD301 とやや方向を違い、南北方向に 230 cm まで伸びている。両掘形に石列が並んでいる。SD301 と同じく削平を受けて

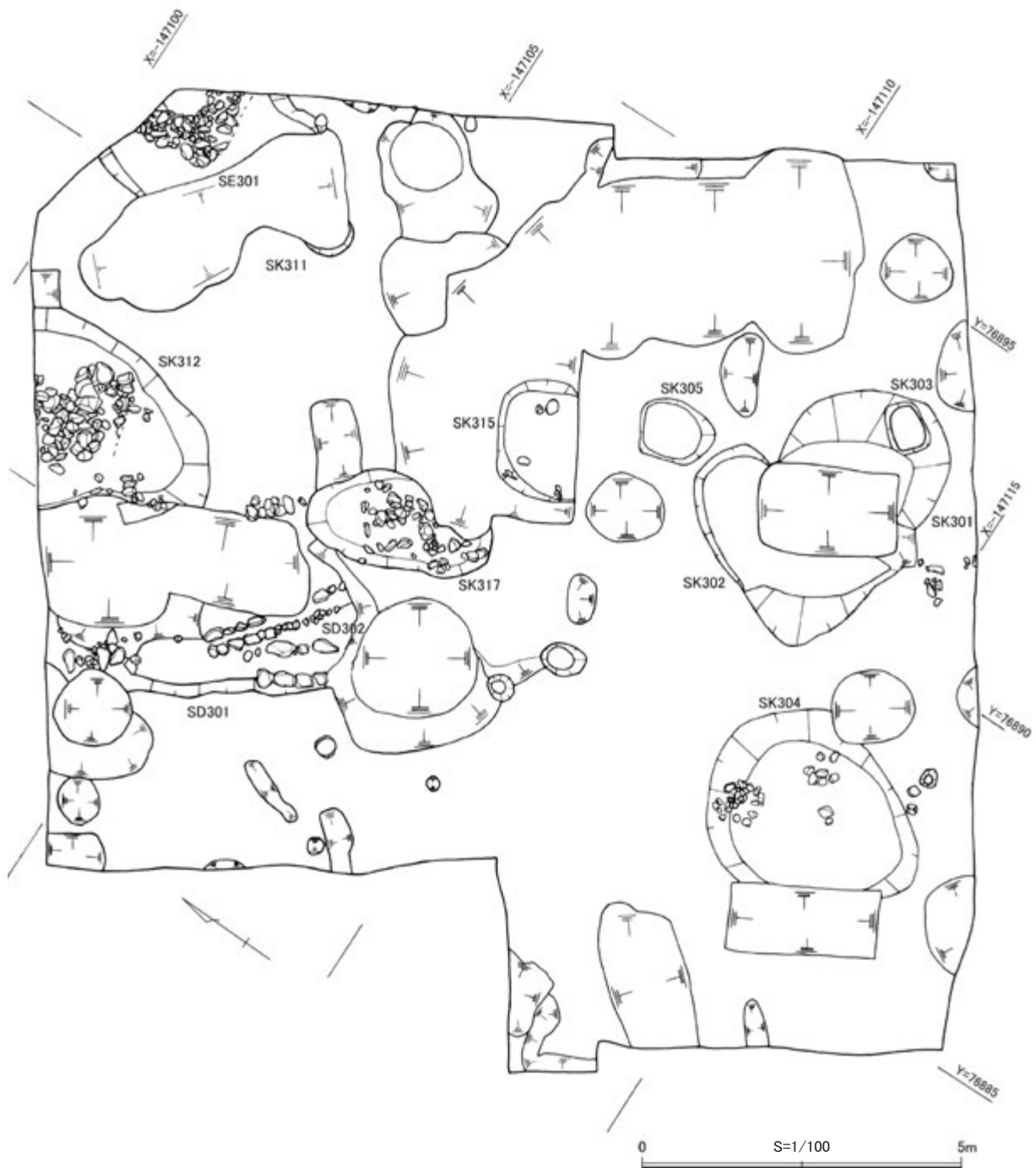


fig.157 第3遺構面遺構配置図

おり、何らかの遺構の側溝となる可能性も考えられるが、詳細は不明である。

SE301 掘形幅 310 cm、井戸枠内で幅 185 cmを測る石組井戸である。工事影響深度を超える深さまで掘削されていたため、遺構の完掘はしていない。16 世紀の土師皿が多数出土している他、備前焼甕等も出土している。

② 小結

土坑が主体で、井戸も確認することができた。土坑から多量の土師皿や礫が出土している遺構も多く確認していることから、これらの遺構が廃棄土坑として機能していた可能性が考えられる。小溝に石列を伴う遺構は、何らかの遺構の側溝とみられ、上層の遺構面で

検出している石列とは、構造が異なる部分もある。小溝から西側の第3遺構面には、黄褐色砂質土が堆積しており、遺構が希薄となる。詳細は不明だが、この黄褐色砂質土の存在する位置に何らかの構造物があり、その構造物に伴う側溝の可能性も考えられるが、小溝は削平されて、部分的に残存する状況であるため、詳細は不明である。

6. 第4遺構面の概要

15世紀～16世紀の遺構面である (fig.158)。

① 検出した遺構

SK401 西側と北側を攪乱により削平されている。幅 160 cm × 130 cm 以上で、深さ 60 cm を測る土坑である。多数の土師皿と共に羽釜が出土している。

SK402 幅 160 cm × 90 cm 以上の土坑で、深さ 48 cm を測る。上層に暗灰褐色砂質土が堆積し、下層に黒灰色シルトが堆積する。備前焼の大甕と播鉢が出土しており、上層からの出土量が多い。

SK403 SK402 に西側を削平されている土坑である。幅 100 cm × 110 cm で、深さ 22 cm を測る。暗灰褐色砂質土が堆積している。備前焼甕や土師皿が出土している。

SK404 幅 90 cm × 75 cm の土坑で、深さ 18 cm を測る。上層に暗灰褐色砂質土、下層に暗茶褐色砂質土が堆積している。備前焼甕や土師皿が出土しており、土師皿は上層からの出土量が多い。

SK405 幅 120 cm × 88 cm 以上の土坑で、深さ 30 cm を測る。上層に灰褐色砂質土、下層に淡灰褐色砂質土が堆積している。15～16世紀の土師皿が出土している。

SK406 幅 105 cm × 90 cm で、深さ 94 cm を測る。上層に淡褐色砂質土が堆積し、中層に薄く暗褐色砂質土を挟み、下層に灰褐色砂質土が堆積している。土師器や土錘が出土している。

SK407 西側を攪乱により削平されている土坑である。残存幅 105 cm × 35 cm で、深さ 30 cm を測る。灰褐色砂質土が堆積している。備前焼甕や土師器が出土している。

SK408 北側を攪乱により削平されている土坑である。残存幅 95 cm 以上 × 64 cm 以上で、深さ 36 cm を測る。上層に白灰色シルト混じり灰褐色砂質土が堆積し、下層に灰褐色砂質土が堆積している。土師器や瓦質碗が出土している。

SK409 北側を SK406 により削平された土坑である。幅 135 cm × 140 cm で、深さ 29.5 cm を測る。備前焼大甕や土師皿が出土している。長さ 120 cm、高さ 20 cm の木質遺物の痕跡が土層断面で確認することができるため、土坑内に木枠が設置されていた可能性がある。上記した遺物は、この木枠内から出土した。

小溝群 (SD401～405) 1区から2区にかけて等間隔に南北方向へ伸びる小溝群である。小溝間は、8～15 cm を測る。小溝の幅は 30～50 cm である。溝内の埋土は、すべて茶灰褐色砂質土が堆積しており、SD405 から備前焼の播鉢と土師皿が出土している。

SE401 最上層に石列が残存している井戸である。掘形幅 200 cm × 180 cm 以上で、井戸内は径 142 cm × 145 cm を測る。深さ 50 cm まで掘削したが、底部までは工事影響範囲により掘削できなかった。井戸枠の構築材は残存していなかった。15～16世紀の土師器や備前焼甕が出土している。

SE402 石組井戸である。掘形幅 350 cm × 410 cm、深さ 200 cm まで掘削したが、工

事影響範囲により底部は確認できていない。石組内は、幅 320 cm × 350 cm を測る。土師器や備前焼甕が出土している。

SX401 長方形の石組遺構である。掘形幅 645 cm × 750 cm、石組内の幅 300 cm × 510 cm、深さ 160 cm を測る。石組は 3 ～ 4 段を確認したが、北面の石組は崩落した状態で検出した。備前焼の大甕と播鉢、土師器鍋や土師皿が出土している。

SX403 攪乱によって掘形東側付近だけが残存している遺構で、土坑となる可能性が高い。遺構内からは、多くの礫が出土している。幅は削平により不明だが、深さ 14 cm を測る。



fig.158 第4遺構面遺構配置図

② 小結

他の遺構面と同じく、土坑と井戸が主体の遺構面であった。鋤溝の可能性のある小溝群も確認したことから、小規模な耕作地や廃棄土坑等が形成された場所であったと考えられる。

7. 第5遺構面の概要

15世紀を主体とする遺構面だが、16世紀の遺構も含む。第5遺構面覆土からは15世紀の備前焼の播鉢や瀬戸美濃産天目茶碗、石製硯等が出土している（fig.159）。

① 検出した遺構

SK501 幅 245 cm × 70 cm 以上、深さ 28 cm の土坑である。炭を含む暗灰色砂質土が堆積している。備前焼大甕や15世紀の土師皿が出土している。

SK503 幅 105 cm × 40 cm 以上で、深さ 17 cm を測る土坑である。土師器が出土している。

SK504 西側を攪乱により削平されている。幅 130 cm × 120 cm 以上で、深さ 28 cm を測る土坑である。暗茶灰色砂質土が堆積し、礫が多数出土している。土師器や備前焼播鉢等が出土している。

SK505 西側を攪乱により削平されている。幅 195 cm × 165 cm で、深さ 20 cm を測る土坑である。土師器が多数出土している。

SK507 東側を攪乱で削平されている土坑である。幅 50 cm × 40 cm 以上で、深さ 15 cm を測る。暗茶色砂質土が堆積し、瓦質火舎が出土している。

SK508 調査区南端部で検出した土坑である。東側は攪乱により削平されている。現存幅 78 cm × 30 cm、深さ 16 cm を測る。土師器が出土している。

SK509 幅 190 cm × 139 cm で、深さ 21 cm を測る土坑である。茶褐色シルト混じり砂質土がほぼ全面に堆積し、底部に薄く灰色砂質土が堆積する。15世紀の土師皿が多数あり、羽釜や備前焼大甕片も出土している。

SK510 東側を削平されている土坑である。幅 230 cm × 95 cm 以上で、深さ 27 cm を測る。溝底部に石列を確認したが、その性格は不明である。暗灰色砂質土が堆積している。

SK511 幅 150 cm × 180 cm で、深さ 40 cm を測る土坑である。上層に茶灰色砂質土が堆積し、下層に青灰色砂質土が堆積している。

SK512 幅 90 cm × 110 cm で、深さ 21 cm を測る土坑である。黒色砂質土が堆積し、備前焼の大甕胴部片や土師皿が出土している。

SK513 幅 50 cm × 60 cm で、深さ 41 cm を測る小土坑である。西側を SK517 により削平されている。暗茶灰色砂質土が堆積し、土師皿が多数出土している。

SK514 幅 65 cm × 45 cm で、深さ 19 cm を測る土坑である。上層に青灰色砂質土が堆積し、下層に茶褐色砂質土が堆積している。土師器が出土している。

SK515 幅 88 cm × 84 cm で、深さ 21 cm を測る土坑である。茶灰色砂質土が堆積している。土師器が出土している。

SK516 幅 55 cm × 60 cm で、深さ 29 cm を測る土坑である。茶灰色砂質土が堆積し、土師皿多数と共に備前焼播鉢も出土している。

SD501 東西方向に伸びる小溝で、幅 70 cm、深さ 12 cm を測る。溝底部に柱穴列が

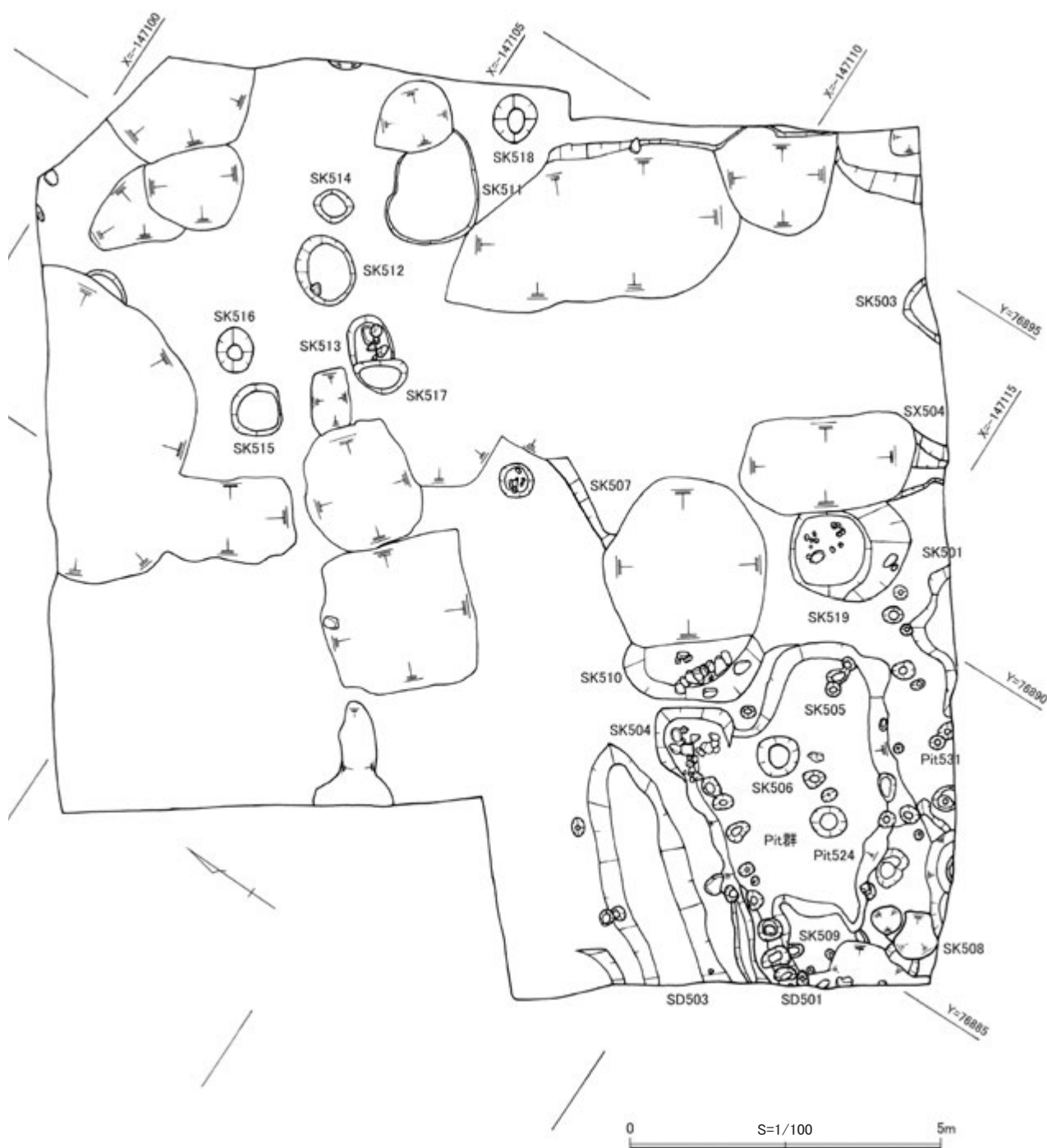


fig.159 第5遺構面遺構配置図

あるものの、溝との前後関係は判断できなかった。柱穴列は8列分確認している。柱穴間は15～47 cm、柱穴の深さは10～45 cmを測る。土師器等が出土している。

SD503 東西方向に伸びる溝である。幅140 cm、深さ39 cmを測る。備前焼播鉢や土師器等が出土している。

SX504 調査区東半にある規模の大きな落ち込みである。人為的に掘削したか、自然地形の落ち込みか判断できない。幅450 cm×600 cm以上で、深さ50 cmを測る。灰褐色砂質土が堆積し、土師皿や備前焼大甕の胴部片等が出土している。

Pit 群 調査区南西側で多数のピットを検出した。径27～65 cmで、深さ10～45

cmを測る。このピットが建物を構成する並びとなるかは確認できなかった。土師皿、備前焼の大甕片が出土している。

② 小結

この遺構面では、建物等を構成すると考えられる柱穴を多数検出することができた。他の遺構面と比べると、土坑の数も少ないのが特徴として挙げられる。このような状況から第4遺構面と第5遺構面とでは、土地利用に違いが認められる。15世紀～16世紀の間に土地利用の変化が生じているようである。

8. 第6遺構面の概要

14世紀～15世紀の遺構面である (fig.160)。

① 検出した遺構

SK601 調査区東端部付近で検出した土坑である。幅 60 cm × 45 cm、深さ 18 cmを測る。青灰色細砂が堆積している。

SK602 径 150 cm × 135 cm以上、深さ 20 cmを測る土坑である。

SK603 径 125 cm × 140 cm、深さ 25 cmを測る土坑である。

SK605 集石遺構に接した北側に位置する土坑である。幅 100 cm × 140 cm以上、深さ 26 cmを測る。東側を SK607 に削平されている。暗灰褐色砂質土が堆積している。

SK606 径 70 cm × 85 cm、深さ 34 cmを測る土坑である。上層に黄褐色砂質土が堆積し、下層に灰色粗砂が堆積している。土師器皿が多数出土した他、備前焼の播鉢片も出土している。

SK607 径 220 cm × 220m、深さ 28 cmを測る土坑である。暗灰色砂質土が堆積している。

SK608 径 170 cm × 150m、深さ 11 cmを測る土坑である。暗灰色砂質土が堆積している。

SK610 径 50 cm × 50 cm、深さ 12 cmを測る土坑である。

SK615 径 110 cm × 90m、深さ 15 cmを測る土坑である。暗灰色砂質土が堆積している。

SK616 調査区北端で検出した集石土坑である。径 110 cm × 58 cm以上で、深さ 4 cmを測る。

SK617 径 73 cm × 88 cm以上で、深さ 11 cmを測る土坑である。東側を削平されている。暗灰褐色砂質土が堆積している。

SK618 北側を攪乱により削平されている土坑である。径 110 cm × 75 cmで、深さ 21 cmを測る。上層に暗灰褐色砂質土が堆積し、下層に暗黄灰褐色砂質土が堆積する。

SK619 径 25 cm × 42 cm以上で、深さ 18 cmを測る土坑である。西側を SK607 により削平されている。土師皿が出土している。

SK622 SK 604・605 を削平する土坑である。径 82 cm × 70 cmで、深さ 31 cmを測る。上層に暗黄灰褐色砂質土が堆積し、下層に暗灰褐色砂質土が堆積している。

SK623 径 95 cm × 113 cmで、深さ 40 cmを測る集石土坑である。暗灰褐色砂質土が堆積する。

SK624 径 90 cm × 92 cmで、深さ 41 cmを測る土坑である。暗灰褐色砂質土が堆積している。

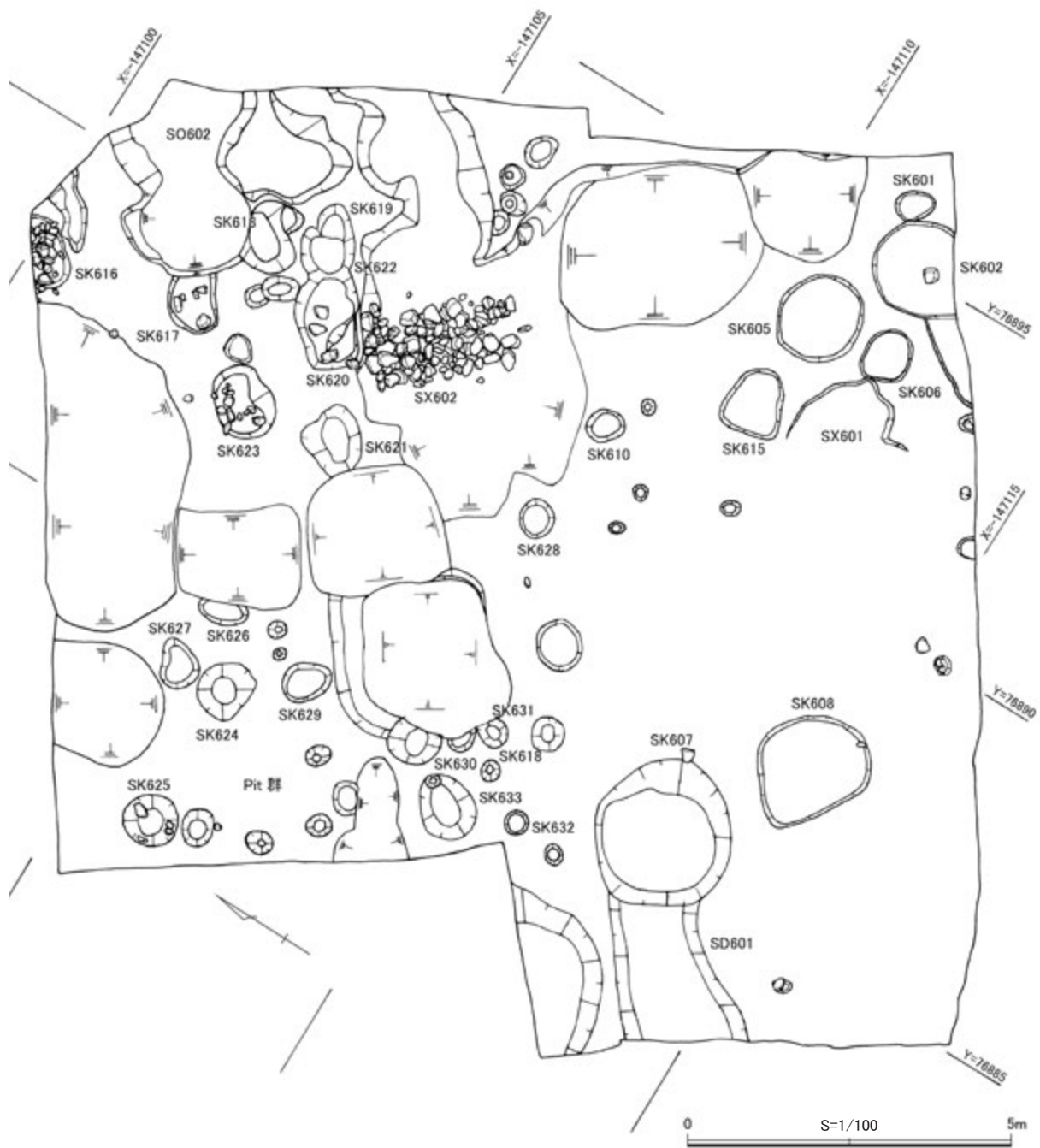


fig.160 第6遺構面遺構配置図

SK625 径 76 cm × 82 cm で、深さ 35 cm を測る土坑である。上層に暗灰褐色砂質土が堆積し、下層に灰褐色砂質土が堆積する。

SK626 東側を攪乱により削平されている土坑である。径 76 cm × 35 cm 以上で、深さ 21 cm を測る。

SK627 径 83 cm × 70 cm で、深さ 17 cm を測る土坑である。暗灰色砂質土が堆積している。

SK628 径 55 cm × 48 cm で、深さ 11 cm を測る土坑である。暗灰色砂質土が堆積している。

SK629 径 59 cm × 81 cm で、深さ 19 cm を測る土坑である。上層に灰色砂質土が堆積

し、下層に黄色粗砂が堆積する。

SK630 東側を攪乱により削平されている。幅 74 cm× 69 cm以上で、深さ 41 cmを測る土坑である。上層に暗灰褐色砂質土が堆積し、下層に黄灰色砂質土が堆積する。

SK631 径 43 cm× 50 cm以上で、深さ 10 cmを測る土坑である。暗灰褐色砂質土が堆積している。

SK633 径 70 cm× 108 cmで、深さ 29 cmを測る土坑である。暗灰色砂質土が堆積している。

SD601 幅 130 cm、深さ 25 cmを測る溝状の落ち込みである。主に暗灰色砂質土が堆積している。

SD602 幅 135 cm～ 235 cm、深さ 37 cmを測る溝である。東西方向に伸び、攪乱により削平されている。

SX601 幅 110 cm× 90 cm以上、深さ 20 cmを測る落ち込みである。青灰色砂質土が堆積している。

SX602 130 cm× 240 cmの範囲で長方形に敷石が認められる遺構で、建物基礎にあたる可能性がある。

Pit 群 調査区西端部付近で多数のピットを確認した。ほとんどが径 30 ～ 40 cmで、深さ 6 ～ 39 cmに収まる。柱穴の可能性が高いが、建物を構成する並びとなるかは確認できなかった。

自然地形の落ち込み 第 6 遺構面を形成する淡黄灰褐色細砂に灰褐色細砂が堆積する形で検出した落ち込みを確認した。この落ち込みからは、14 ～ 15 世紀の遺物が出土している。おそらく自然地形の落ち込みとみられる。

② 小結

この遺構面では、14 ～ 15 世紀の遺物を含む土坑とピットを確認した。また、第 6 遺構面を形成する自然地形の覆土中に 14 ～ 15 世紀の遺物が含まれていた。灰色粗砂が堆積する大きな自然地形の落ち込みが数か所に存在し、その中に遺物が含まれていた。

なお、第 6 遺構面より下の土層堆積状況を確認するために入れたトレンチでは、出土遺物がなく、湧水も激しかったため、T.P.-0.5 mまで掘削し、調査を終了した。

9. まとめ

① 調査地周囲の状況について

今回の調査では、室町時代～安土・桃山時代と、近世の遺構・遺物を確認することができた。確認できた遺構面の数は 6 面であった。今回の調査地は、「元禄兵庫津絵図」でいうと、西ミヤ町辺りに位置しており、西国街道の宿場町と寺町に囲まれていたことがわかる。

調査の結果、第 3 ～ 第 4 遺構面では、井戸や廃棄土坑が主体を占めていた。15 世紀を主体とする第 5 遺構面では、柱穴を多数確認しているが、これらは、建物等を構成する柱穴と考えられる。14 世紀～ 15 世紀に比定される第 6 遺構面では、都市化に伴う生活痕跡を確認することができた。第 6 遺構面より下層からは、灰褐色細砂が堆積する自然地形の落ち込みを検出した。この落ち込みからは、14 ～ 15 世紀の遺物が出土しているため、近隣に当該期の遺構が存在するとみられる。

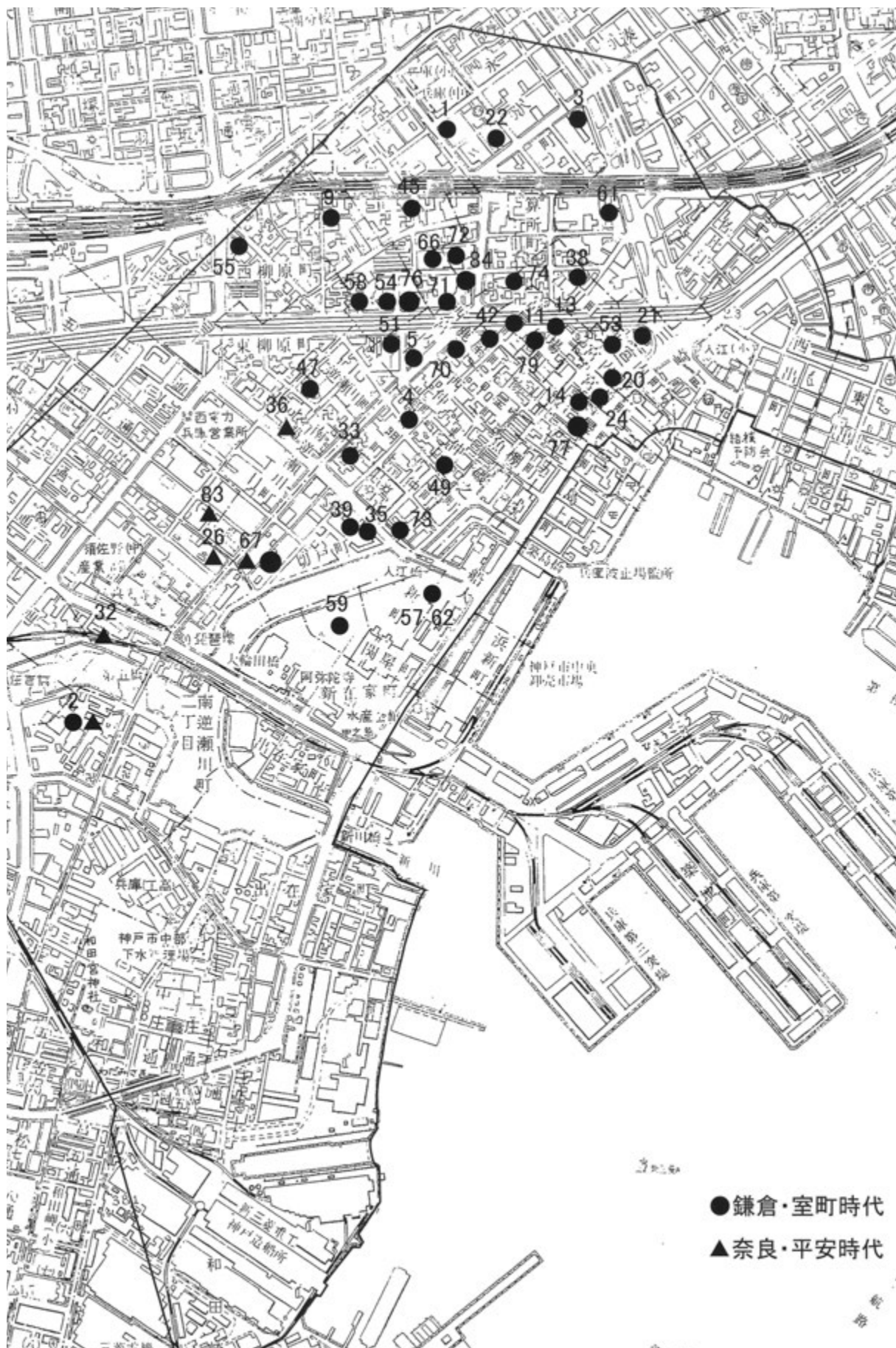


fig.161 奈良～室町時代の遺構面を検出している調査地点（縮尺不同）

② 兵庫津の変遷について (fig.161)

今回の調査地を含む兵庫津遺跡北側エリアでは、これまでの発掘調査で鎌倉時代～室町時代までの遺構を確認しているが、それ以前に遡る遺構や遺物包含層は確認されていない。

それに対して、兵庫津遺跡の南側エリアでは、第2・26・32・36・67・83次で奈良時代～平安時代末の遺構と遺物が確認されている。第2次調査では、奈良時代～平安時代末の遺物が多く出土し、第26次調査と第83次調査では、後背湿地と考えられる面から平安時代（9～10世紀）の須恵器や緑釉陶器、転用硯等が出土している。第32次調査では、奈良時代～平安時代前半の溝等が確認されており、大輪田泊を構成する港湾施設の一部と推測されている。第36次調査では平安時代前期の井戸、第67次調査では奈良時代～平安時代末の土坑と古墳時代の遺構面が存在する可能性が指摘されている。このような状況から兵庫津遺跡の南側エリアは、江戸時代の真光寺と薬仙寺の東側を主とする範囲に奈良時代～平安時代末までの遺構と遺物の分布域があるとみられる。

兵庫津遺跡の南西側エリアは、「元禄兵庫津絵図」によると畑地が描かれており、これまでの発掘調査でも当該期の遺構が希薄となることが明らかとなっている。兵庫津遺跡の南西側エリアで確認されている奈良時代～平安時代の遺構は、その多くが大輪田泊に関連する遺構の可能性がある。奈良時代～平安時代末の大輪田泊とは位置を離れた場所に大輪田泊が鎌倉時代に再建され、室町時代にかけて港湾都市としての兵庫津が成立していったのであろう。近世も位置的にこの室町時代の兵庫津を継承して拡大発展したと考えられる。



fig.162 2区第6遺構面全景（西から撮影）

20 兵庫津遺跡第 85 次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、兵庫区南東部の神戸港兵庫突堤に面した海岸付近に位置する奈良時代～江戸時代にかけての複合遺跡である。遺跡の立地は、旧湊川と和田岬の間に挟まれて形成された浜堤列と、浜堤列の間に存在する湿地上にある。

古くから「大輪田船息」、「大輪田泊」と称され、文献上にもたびたび登場する。奈良時代には、行基が改修したとされる港の一つとして、重要港湾と位置づけられてきた。平安時代には、日宋貿易の拠点として平清盛が整備し、室町時代も将軍足利義満による日明貿易の拠点として、国際港の役割を担っていた。戦乱の世になると、経済的な面だけでなく兵站的な面からも兵庫津は重要視され、天正 8 年（1580 年）の池田恒興による花隈城攻めの後、その資材が兵庫城築造の際に利用されたと言われている。その後は、豊臣秀吉の勢力下で治められてきたが、慶長元年（1596 年）の慶長伏見地震で被災し、火災と地震の痕跡が発掘調査で検出されている。江戸時代には、大坂の外港としてだけではなく、西国街道の宿場町として、陸路の面からも交通の要衝となっていた。そして宝永 8 年（1711 年）には人口 2 万人となり、国内有数の都市へと成長を遂げる。人口増加に伴い町場も拡大していき、海岸部や湿地帯の埋め立て、北東部の西出町と東出町へ居住地が広がっていく。この様相は、絵図でも都市拡大の変遷が確認できる。幕末には、外国船が頻繁に日本近海に姿を見せるようになり、大阪湾岸防備増強のため、湊川崎と和田岬に砲台が建設され、その後、慶応 3 年（1867 年）に兵庫開港を迎える。

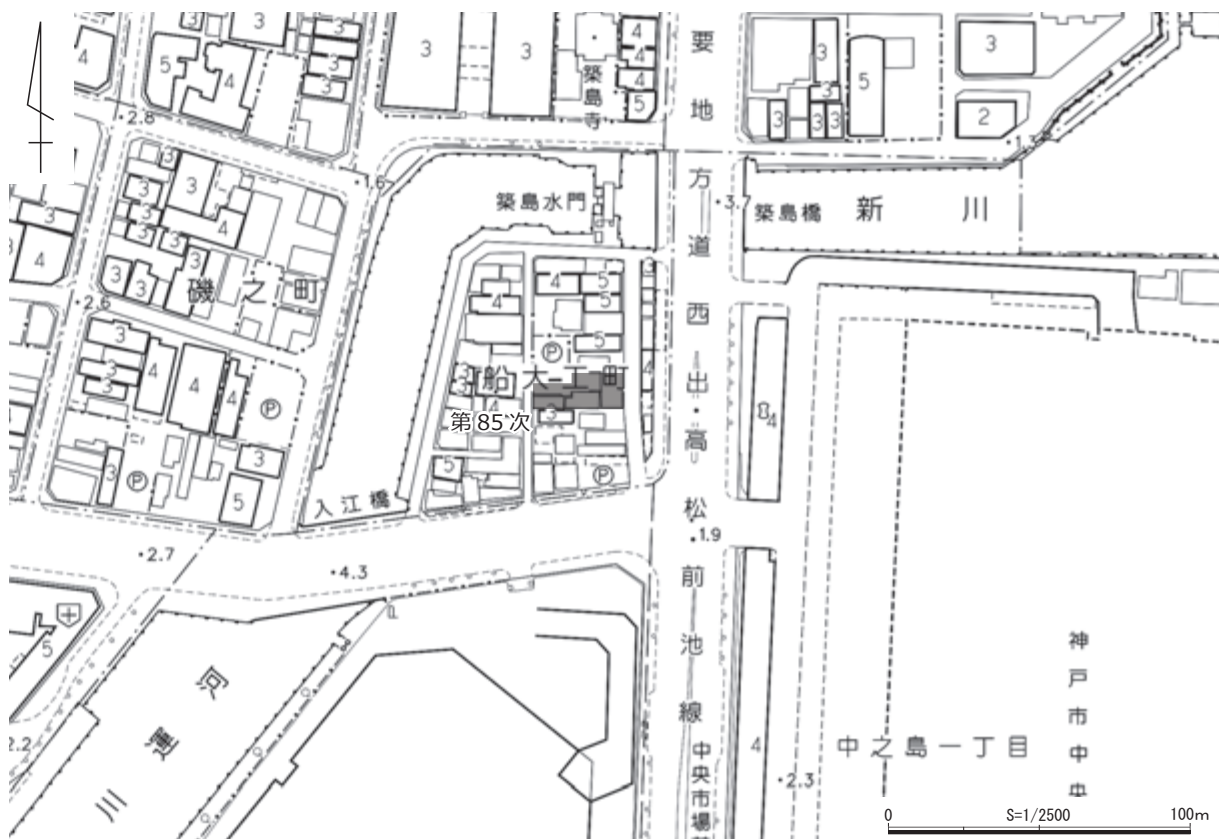


fig.163 調査地位置図

今回は、共同住宅建設に伴う発掘調査で、事前に試掘調査を行った結果、遺物包含層および遺構面を確認したことから、工事によって埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲を対象に発掘調査を行うこととなった。本調査地点は、船大工町では初の調査例となる (fig.163・165)。



fig.164 調査区配置図



fig.165 元禄期兵庫津復元図上での調査地位置図 (縮尺不同)

2. 調査概要

発掘調査は、事業予定地のうち、建築工事で埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲を対象として調査範囲を設定した。作業の工程上、3分割して調査を行い、調査順に西側の調査区を1区、中央の調査区を2区、東側の調査区を3区と呼称する（fig.164）。現地の標高は約1.8mを測る。

調査は、遺物包含層上面までを重機により掘削し、それ以下の掘削・遺構検出・遺構掘削等は人力で行った。遺構と遺物の記録図化にあたっては、調査地内に測量用基準点を設置して、それをもとに調査担当者が図化を行った。記録写真は、35mmカメラ・120mmカメラ・4×5カメラ・デジタルコンパクトカメラを用い、撮影にあたった。

3. 基本層序

層序は、上層より、表土・盛土・攪乱土→灰色砂質土→褐灰色砂質土→灰黄褐色砂質土（上面が第1遺構面）→黄灰色砂質土+炭層（上面が第2遺構面）→にぶい黄褐色砂質土（上面が第3遺構面）→明黄褐色～褐灰色砂（上面が第4遺構面）の順で堆積する（fig.166）。なお、調査区西端では、地表面より1.2m下で湧水した。

4. 第1遺構面の概要

灰黄褐色砂質土上面で土坑14基、溝1基、ピット10基を検出した。標高は、T.P.1.0m前後を測る。調査区の西側では、土間や焼土・炭で覆われた部分と礎石列を確認した。一部、土間が残存する部分も確認している。攪乱により、調査面積の1/3ほどしか遺構面が残存していなかった（fig.167）。

SK03 1区で確認した直径60cm、深さ20cmの土坑である。陶器の甕が上下逆に据えられた状態で出土した。甕は底部がなく、口縁部と若干の胴部が残存している。土坑内には、黒褐色粗砂混じり細砂（炭化物混じる）が堆積し、その上層に甕を囲むように淡黄色粘質シルト（土間）がある。甕内埋土は、灰黄褐色細砂質土→黒褐色細砂質土の順で堆積する。水琴窟としての機能を想定したが、小ぶりの甕であることから、異なるものと思われる。土間の高さは、残存している甕の高さとほぼ同じである。

SK13 2区で検出した直径100cm、深さ45cmの土坑である。埋土は、にぶい黄褐色粗砂質土（鉄分混じり）→暗灰黄色砂質土～砂→浅黄色細砂質土→褐灰色砂質土（瓦を多量に含む）→浅黄色砂混じりシルト質土→灰黄褐色砂質土（砂・小礫混じり）の順に堆積する。瓦等を廃棄するための土坑と考えられる。遺物は、瓦以外に土師器、陶器、磁器、染付が出土している。周辺を掘削中に土人形が出土した。

SK14 2区で検出した直径130cm、深さ50cmの土坑である。埋土は、にぶい黄褐色砂質土（礫混じり）→暗褐色砂質土（礫混じり）の順に堆積している。遺物は、磁器、鉄製品、銭貨が出土している。

礎石列 1区北半で検出した東西方向に3石並ぶ礎石である。石の大きさは、直径30～50cmで、その間隔は60cm、100cmとばらつきが見られる。各礎石の面は平らであるが、東端の礎石は斜めに傾いていた。元々傾いていたか、建物が無くなってから傾いたかは不明である。この礎石列は、建物の境界に当たる礎石と考えられ、礎石の北側に土間が拡がることから、居住空間が北側にあったことが分かる。南側は不明であるが、土間は確

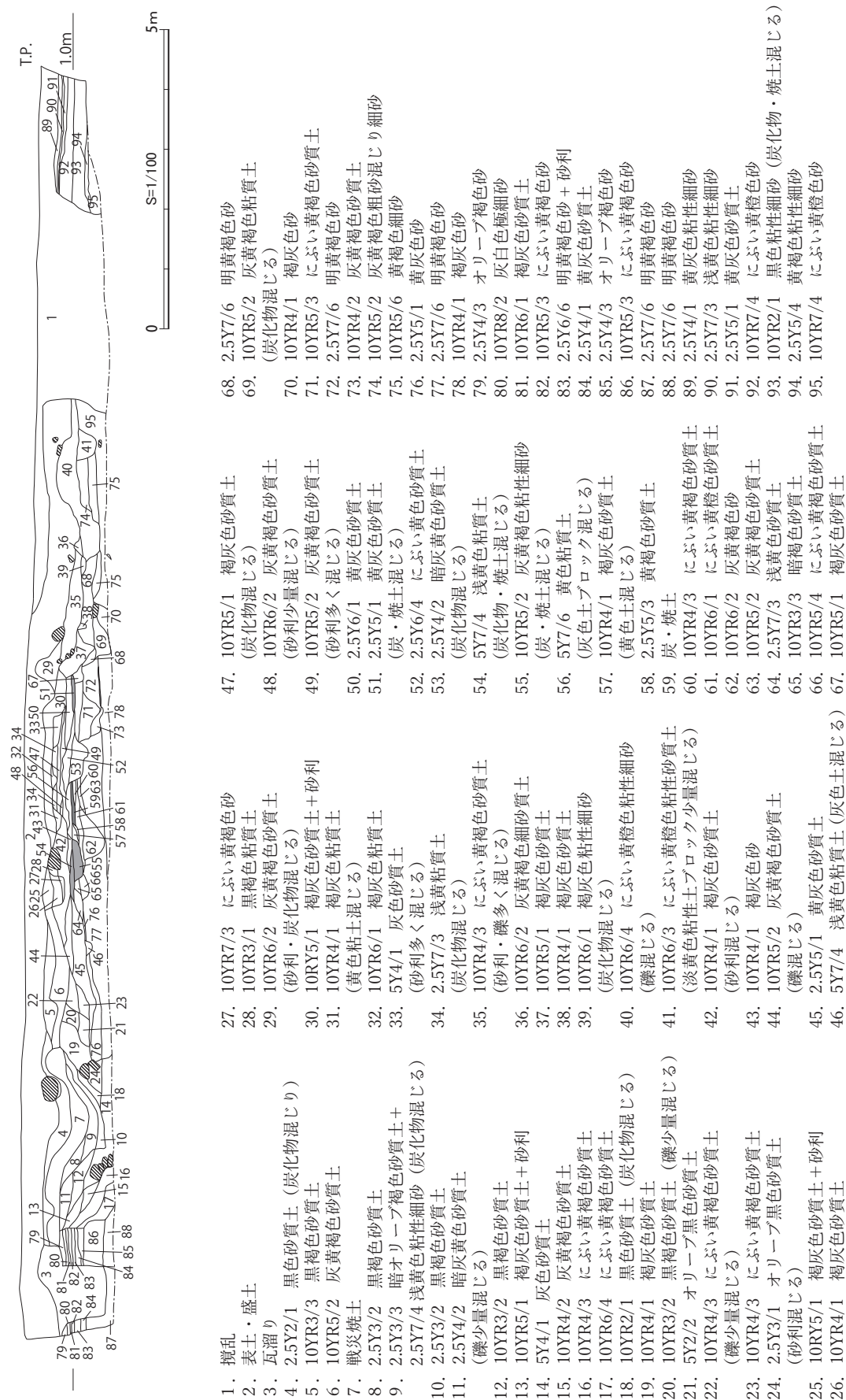


fig.166 調査区南壁土層断面図



fig.167 第1遺構面遺構配置図

認できていない。

石組み 3区南端で検出した直径6mの土坑内に組まれた近代以降の石組みである。方形の石組みの東西長は4.5mを測る。南半は調査区外のため南北長は不明であるが、検出した長さは2.5mを測る。拳大～直径40cmを超えるような川原石を数段にも積み上げていた。近代の土管が石組みの西壁を貫通していたため、排水を目的とした施設であると考えられる。掘形から煙管が出土している。

5. 第2遺構面の概要

黄灰色砂質土および炭層の上面で土坑12基、溝1基、ピット6基、用途不明遺構2基を検出した。また、調査区西端の一部と調査区中央の南半（2区南半）で炭と焼土面を確認した。標高は0.9m前後を測る。西端の焼土・炭層付近からは、銭繙（ぜにさし）が出土している。前遺構面同様に大半が攪乱で削平されている（fig.168）。

SK49 3区北半で検出した長辺85cm、短辺78cm、深さ30cmの方形土坑である。土坑内で長辺53cm、短辺47cm、深さ4cmの方形木柵を検出したが、側面と底面にかろうじて木質痕を確認したにとどまる。木質内埋土は黒褐色粘質土で、掘形埋土は黒褐色砂質土である。木柵の南北辺には、外側から打ち込まれた釘を計8本検出した。土師器、染付、瓦、鉄製品、銭貨が出土している。

SK38 3区で検出した土坑である。第1遺構面で検出した土坑だったが、第2遺構面で再検出した結果、直径210cm、深さは90cm以上の土坑となることを確認した。埋土は粘土→暗茶褐色砂質土→炭の順で堆積する。炭層があるが、底に貼られた粘土は熱を受けた痕跡がない。その下層の埋土は、暗灰黄色・褐灰色砂質土→暗灰黄色砂質土（明黄褐色土混じり）→黒褐色粘質土・礫（炭化物混じり）→褐灰色砂礫→明黄褐色砂礫→黄褐色砂質土（礫多量に含む）→黒褐色砂質土の順に堆積している。標高0.5m（検出面から0.5m）で水没する。水没レベル以下で一辺130cmほどの方形木柵を確認したが、ほとんど腐敗し、土壌化していた。木柵内埋土の下層は、暗灰色粘土で植物遺体と思われるものがまざっていた。標高0m（検出面から0.9m）以下は、掘削が困難であったため、下部構造は不明である。大きさと木柵から井戸の可能性が考えられる。遺物は、上層から染付、瓦、鉄製品、貝が出土し、下層からは土師器、陶器、染付、瓦、鉄製品が出土した。木柵内からは、陶器、染付、瓦が出土している。

銭繙 1区西側の炭・焼土を除去している際に検出した。一部、検出時に動いてしまった資料もあるが、銭貨同士が張り付いている資料もあり、束を成していたことが分かる。寛永通宝が68枚出土した。

6. 第3遺構面の概要

にぶい黄褐色砂質土の上面で土坑17基、ピット21基、用途不明遺構2基を検出した。標高は0.8m前後を測る。前遺構面同様に大半が攪乱で削平されている（fig.159）。

SK21 3区で検出した直径100cm、深さ4cmの土坑である。埋土は、にぶい黄褐色砂質土→黒褐色砂質土（土器混じり）→褐色砂質土の順に堆積する東半と、暗褐色砂質土→黒褐色砂質土（炭化物微量に含む）→にぶい黄橙色砂質土→にぶい黄褐色砂質土（少量の炭・焼土、浅黄色粘性ブロック混じり）→にぶい黄褐色砂→褐灰色砂質土→にぶい黄褐色

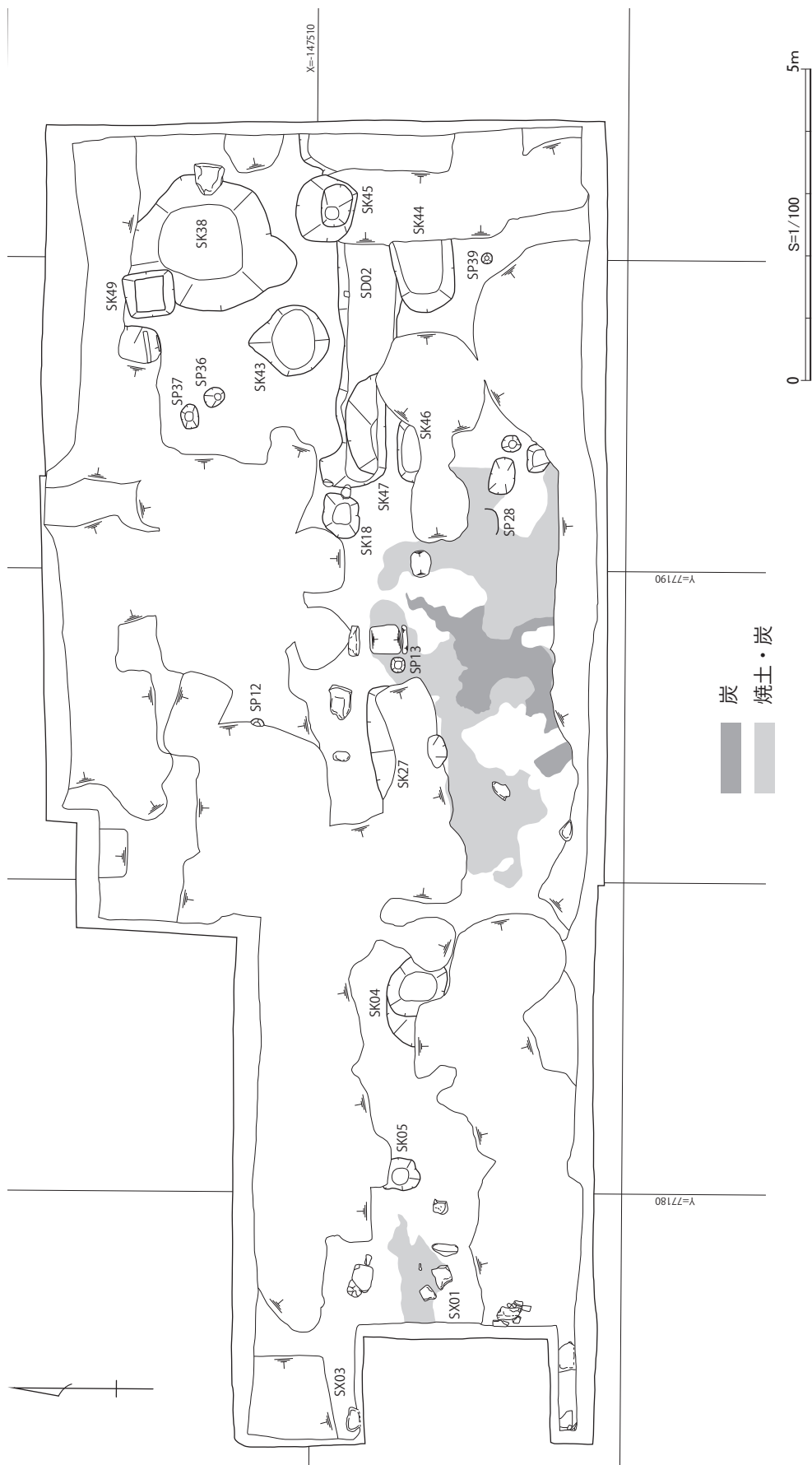
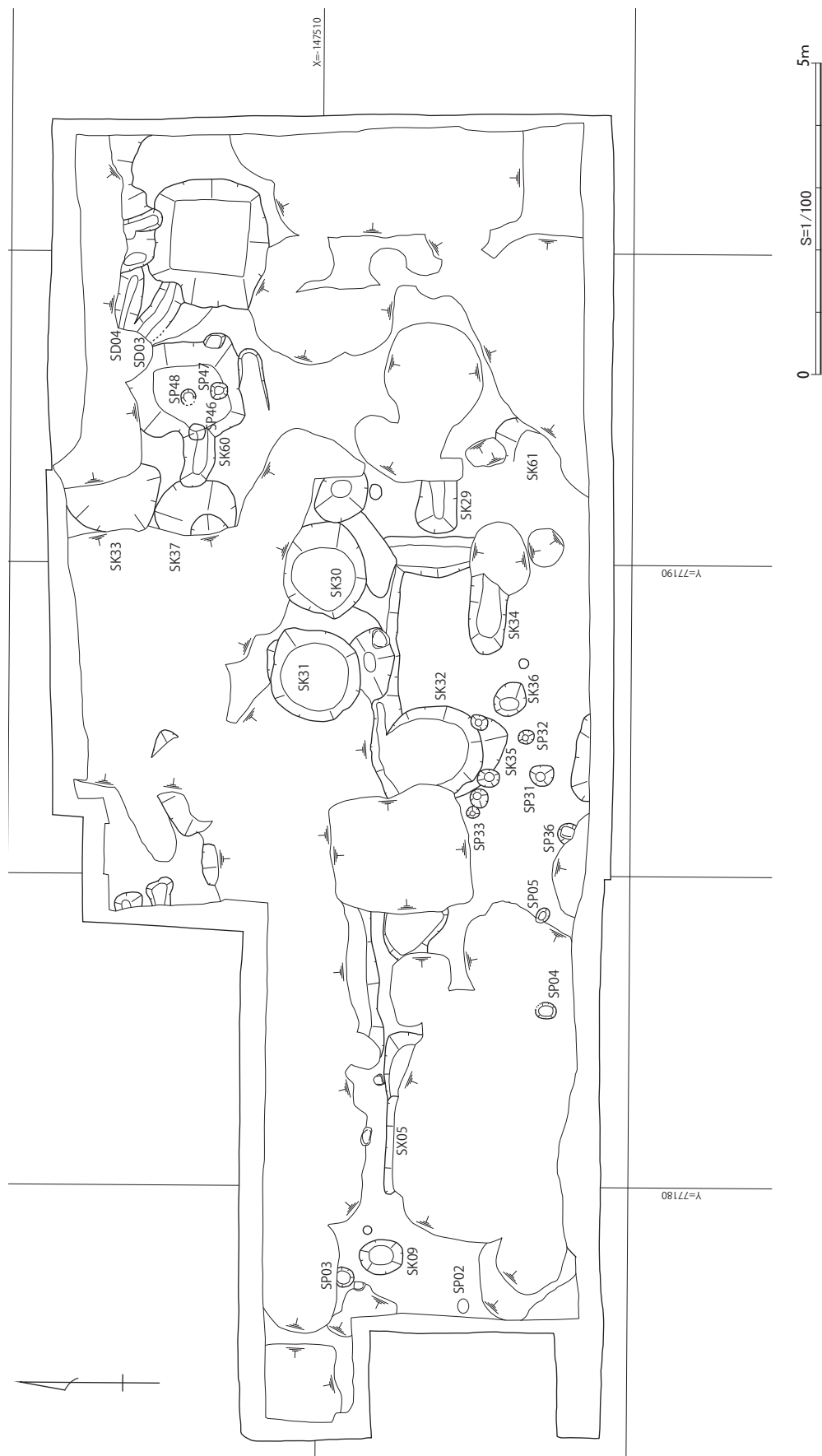


fig.168 第2遺構面遺構配置図



fig.169 第3遺構面遺構配置図



砂の順に堆積する西半に分かれる。遺物は、土師器、陶器、磁器、壁土が出土した。

7. 第4遺構面の概要

明黄褐色～褐灰色砂の上面で土坑13基、溝2基、ピット10基、用途不明遺構2基を検出した。標高は0.7 m前後を測る。調査区の北端で炭が厚く堆積した溝を検出したが、詳細は不明である。前遺構面同様に大半が攪乱で削平されている (fig.170)。

SK30 2区の中央部で検出した直径140cm、深さ3cmの土坑である。埋土は、褐灰色砂質土（浅黄色粘質ブロック微量に含む）→灰黄褐色砂質土（炭化物少量混じり）→暗オリーブ色・黄灰色砂質土（炭化物・直径5mm以下の礫少量含む）の順に堆積している。遺物は、土師器、陶器、磁器、染付が出土した。

8. まとめ

今回の調査では、近世町屋に関する遺構を検出した。第1遺構面では、建物に伴うと思われる礎石列や近代以降の石組みを検出した。遺構の時期は18世紀半ば以降だが、19世紀の遺物も見られることから、19世紀に入っても生活が営まれていたと考えられる。第2遺構面は、井戸と思われる土坑や炭・焼土の堆積、また、その堆積内から銭繻を検出した。建物跡は確認できなかったが、礎石の可能性のある石を炭・焼土堆積の下で検出している。炭・焼土を除去した下層である第3遺構面では、最も多くの遺構を検出した。しかし、建物に伴う遺構は確認できなかった。第2・3遺構面は、ほとんど時期差がみられず、17世紀末～18世紀半ばにあたると考えられる。第4遺構面は砂堆面であるが、多くの遺構を検出した。時期は、17世紀半ば～末と考えられる。遺物は、土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器・染付・瓦・土錘・鉄製品・銅製品・銭貨等が出土した。

本調査地の南側で実施した第62次調査では、江戸時代以前の遺構面を確認している。しかし、本調査地では、17世紀後半の備前焼鉢や染付等が出土しているものの、17世紀初頭に遡る資料は見られない。このような状況から、近世以降に町屋が拡張されていた可能性が指摘できる。

今回の調査は、船大工町で初の発掘調査となった。今回の調査地と元禄9年（1696年）に描かれた『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』を照合すると、東側の主要地方道西出・高松・前池線は砂浜に該当し、その東側から港湾となる。西側は現在兵庫運河となっているが、「内海」と書かれた築島船入江が存在する。内海と外海をつなぐ水門より南側に船大工町が南北に延びて2本の道路が描かれ、その両側に家屋が並ぶ。船大工町での街路は、元禄期をほぼ踏襲している。江戸時代後期の水帳絵図でも調査地西側の南北通りは船大工町大道と表現され、調査地東側にある東西方向の小道も認められる等、当時の景観とよく合致している。攪乱により大半の遺構面が削平されていたが、船大工町における兵庫津遺跡の広がりや空間利用を考えるうえで、重要な成果を得たといえる。しかし、調査範囲のうち、検出できた面積は僅かだったため、当地域における遺跡の様相は、今後の調査に期待したい。



fig.171 1区西壁土層断面（東から撮影）

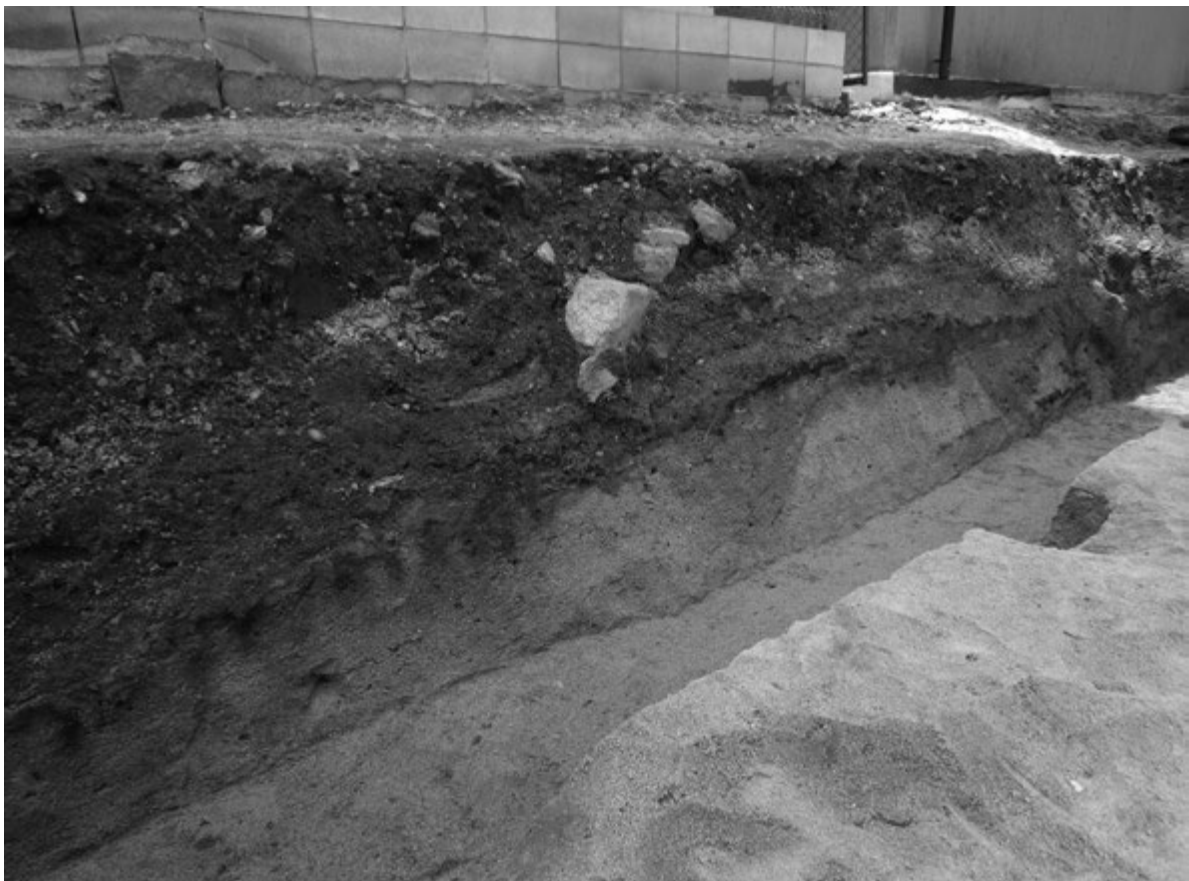


fig.172 2区南壁土層断面（北東から撮影）



fig.173 1区第1遺構面検出の礎石列（北から撮影）



fig.174 1区銭繻出土状況（北東から撮影）

21 兵庫津遺跡第 86 次調査

1. はじめに

「兵庫津」は、古くは「大輪田船息」「大輪田泊」と呼ばれ、古代より瀬戸内海航路の基幹港のひとつとして、文献上の記録に度々登場する。「大輪田泊」は、平安時代末期に平清盛による大修築を経て、日宋貿易がおこなわれた港である。中世には、「兵庫（兵庫嶋）」と呼ばれるようになり、足利義満によって日明貿易の基地として整備され、我が国有数の国際港となった。室町時代後期におきた応仁・文明の乱（1467～1477 年）により、国際港としての地位が堺に奪われたとされるが、近年の発掘調査成果からは、兵庫津の衰退を立証できる状況は認められず、港町の繁栄が続いていたと考えられている。安土・桃山時代になると、池田恒興・輝政父子により、町の中心部に兵庫城が築かれ、城下町が整備されていく。

兵庫城については、長らくその様相が不明であったが、平成 24～26（2012～2014）年度に神戸市中央卸売市場移転に伴い実施された発掘調査（第 57・62 次調査）において、兵庫城の石垣と堀が確認された。兵庫津は、江戸時代に入っても国内海運の重要港として発展し、18 世紀以降に人口 2 万人を超える町へと成長する。幕末には、国内重要港の一つとして兵庫港（神戸港）が開かれた。廃藩置県に先立つ明治元（1868）年には、兵庫勤番所に初代兵庫県庁が置かれ、明治 7（1874）年に新川運河の開削によって、今回の調査地を含む周辺一帯が削平されてしまい、現在は、かつての姿を止めていない。



fig.175 調査地位置図

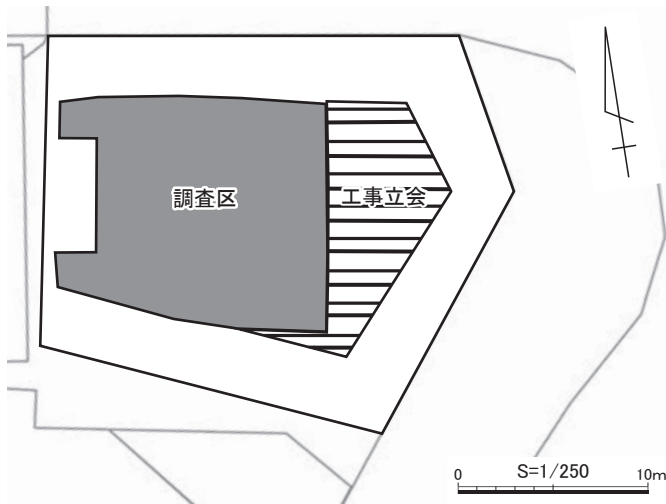


fig.176 調査区配置図

2. 調査概要

今回の調査は、個人住宅建設工事に伴って実施したものである。調査地は、兵庫城の北側にあたる地点に位置している (fig.165)。

調査対象範囲は、南北 8 m、東西 12 m の五角形状を呈する。西端 4 m 分については、大規模なコンクリート基礎が残されていたため、調査不能であった。下層確認のため、基礎解体時に立会調査も実施している (fig.166)。



兵庫陣屋跡町割図（神戸市立博物館所蔵）と各発掘調査地



勤番所に伴う石垣遺構（左：第 46 次調査・右：第 35 次調査）

fig.177 絵図に残る兵庫城と今回の調査地位置図および既存調査成果

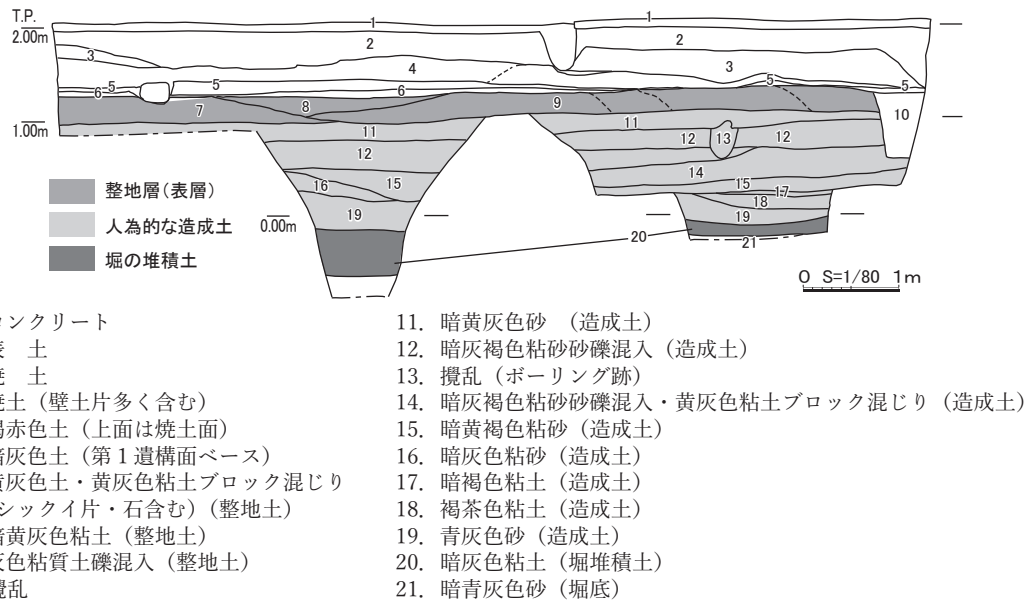


fig.178 調査区北壁土層断面

発掘調査は、戦災による焼土層までを重機で掘削し、焼土層以下を人力で掘り下げて遺構面を検出した。下層の堀跡にあたる部分については、人力による掘削が難しかったため、一部重機で掘り下げを行っている。今回の調査では、2つの遺構面を確認した。以下、遺構面ごとに主な遺構を中心に記述する。

3. 基本層序

調査区の基本層序は、現地表層のコンクリート・碎石層→層厚 20～30 cmの盛土層・表土層→厚さ 20～30 cm前後の戦災時の焼土層→建替えに伴うと考えられる数cmの薄い整地層という順序で堆積していた。この整地層には、江戸時代後期～明治時代の建物が存在する遺構面にあたる。この遺構面の下層には、「明和の上知令」後に兵庫勤番所を整備した際、旧兵庫陣屋の堀を埋め立てた普請の整地土と考えられる黄灰色土が厚さ 20～30 cmほど施されている。黄灰色土の下には、堀を埋め立てた造成土と考えられる暗灰黄色粘砂と暗灰褐色粘砂が堆積する。標高 0.4 mで堀の堆積土とみられる暗灰色粘土・青灰色砂～粘砂・暗青灰色粘土・暗黒色粘土等を検出した。この土層中からは、江戸時代中期～後期の遺物が出土している。堀底は、標高 -0.6 mで暗灰青色細砂となり、この深さが湧水層となる (fig.178)。

4. 第1遺構面の概要

戦災による焼土層の直下に乳灰色系の細砂層からなる整地層があり、この整地層を除去した標高 1.2 m前後において、第1遺構面を検出した。遺構面の南側は、後世の削平によって数cm～10 cmほど低くなっている。第1遺構面では、町屋建物の礎石列とこれに伴う排水管、カマドの痕跡と思われる焼土溜り、埋甕等の遺構を検出した。検出した遺構の時期については、江戸時代後期～幕末頃と考えられる (fig.179)。

町屋建物 (SB01) 東西方向に延びる礎石列を3列検出した。SB01の間口部分は、東西および北側が調査区外に延び、南側は攪乱によって失われていたため、本来の規模は

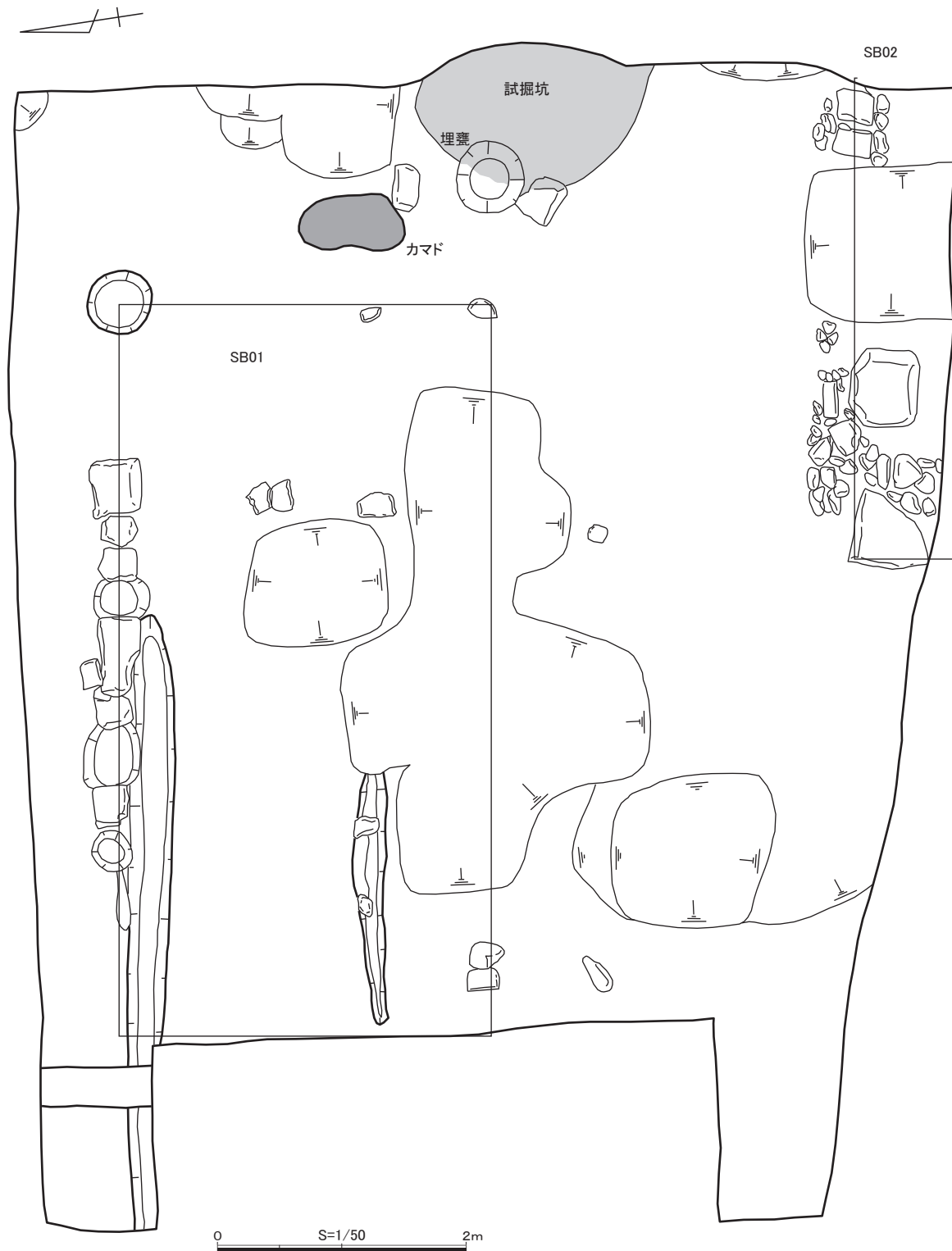


fig.179 第1遺構面遺構配置図

不明である。全体の規模は、東西の奥行7 m以上、南北の間口（幅）3 m以上と推定される。確認できた礎石列は、北側の礎石列が東西7 mで、うち西5 mは礎石が接して配されている。中央の礎石列は、東側を攪乱によって削平されていたが、東西2 m、0.6 mの間隔で小型の礎石が据えられており、その間に壁土と思われる漆喰状の土が充填されている。南側の礎石列は、さらに削平されており、接している2基の礎石と漆喰状の痕跡1 m分を確認した。

なお、東側に点在する礎石がこの礎石列の延長にあたると思われる。

排水管 SB01の北側礎石列に沿って常滑焼製の土管を繋いだ排水管を検出した。排水管は5m分を確認したが、さらに西へ延びている。土管は、径18cm、長さ60cmで継ぎ目を漆喰で固めており、西方向へ向かって排水している。SB01に伴う排水施設と考えられる。

町屋建物 (SB02) SB01の南東側に位置する町屋で、礎石と石敷きを確認した。攪乱によって東西・中央・北側を大きく削平されている。SB02の南側は調査区外に拡がるため、確認できた礎石の範囲は、南北1.2m、東西4m分であった。建物の西側は、径

60cm程の礎石と、その周囲に径5～20cmの石が敷かれていた。建物の東側は、方形の石を接するように並べており、その側面に拳大の石を配していた。この建物は、別の建物（施設）の可能性はある。

町屋建物 (SB11) SB01北側礎石列東半の下層から礎石を3基検出した (fig.180)。礎石は径40cmほどで、礎石間の間隔は1.9mある。西端の礎石は、SB01の礎石と重なるように配されていた。中央の礎石は、抜き取り穴の直下より検出されたことから、SB01に先行する構造物の礎石か、建替えられた建物の礎石にあたると思われる。

その他の遺構 カマドと考えられる焼土溜り、陶器製の埋甕等を検出している。

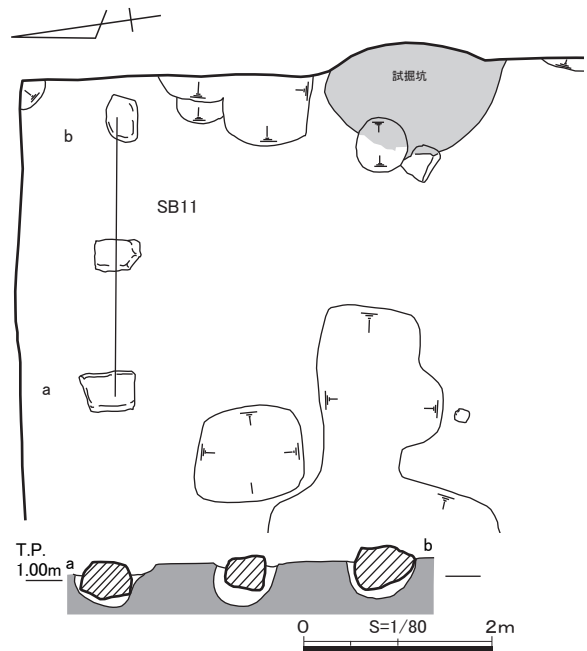


fig.180 SB11 礎石配置図

5. 第2遺構面の概要

第1遺構面の基盤層となる暗灰色土の下から、堀の埋め立て普請による大規模な造成の痕跡と兵庫陣屋の堀跡を確認した。

埋立て普請跡 固く締まった層厚40cmほどの黄灰色土と黄灰色粘土等から成り、調査区内において、ほぼ均一に堆積する。漆喰片の混入がみられる部分もある。旧兵庫陣屋の堀を埋め立てた普請整地層の表土と考えられる。黄灰色土の断面を観察すると、黄灰色土を0.8～3mの範囲で押し広げて敷き均した埋立て普請とみられる。また、中央部では、造成中に五輪塔等の石造物を集中して投棄している箇所も確認した。普代整地層の下には、堀を人為的に埋め立てた際の造成土と考えられる暗灰黄色粘砂・暗灰褐色粘砂が20～50cmほど堆積していた。これらの土層からは、江戸時代後期の遺物が多く出土した。

堀跡 調査区の全域が尼崎藩の兵庫陣屋に伴う堀の中に含まれる。堀の深さは、前述の埋め立て普請の表層上面から1.7mを測る。堀底から30～90cmほどの厚さで江戸時代中期～後期の遺物を含む粘土や砂が堆積していた。

6. 立会調査

調査地内にあったコンクリート基礎のため、発掘調査ができなかった範囲について、コ

ンクリート基礎の解体工事に合わせて立会調査を実施した。その結果、部分的に堀跡に伴う造成土が認められたものの、その大半がコンクリート基礎と湧水点近くまで攪乱されていた。

7. まとめ

今回の調査では、江戸時代後期～幕末頃の町屋を伴う遺構面と、それ以前の堀跡を確認した。

第1遺構面においては、大型の礎石を伴う町屋建物を確認し、これまで不明であった江戸時代後期の兵庫城周辺に広がる町家の様子を窺うことができた。

第2遺構面においては、検出した陣屋の堀底が標高 -0.6 m～-0.7 mで、堀の埋め立てにより、新しく造成された町家の上面が標高 1.2 mであった。これに対して兵庫城の中心部を調査した第62次調査で検出した外堀の堀底は、標高 -1.0 m前後であった。このうち、東外堀と呼んでいる部分においては、築城から陣屋までの間に、堀底に堆積した 50 cmほどの粘土層の上に勤番所の石垣を築き、埋立て普請を行っていることが確認されている。また、第62次調査の新町地区で一部確認された江戸時代後期以降の第1遺構面の標高は、1.3 mであったため、いずれも今回の調査結果と大きく齟齬をきたさないものであった。

今回発掘調査を行った地点は、元禄9(1696)年に描かれた『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』(以下、元禄絵図)と呼ぶ』によると「御屋敷」と記された兵庫陣屋北西部分の堀にあたる。『元禄絵図』は、これまでの発掘調査成果との対比によっても、その精度の高さが実証されてきた。兵庫陣屋は、尼崎藩が兵庫津支配のために奉行所を置いた場所であり、兵庫城の一部が利用されている。明和6(1769)年に「明和の上知令」によって兵庫津が幕府領になると、設置された勤番所は規模を縮小し、周囲の堀を埋め立てて町場として下げ渡されている。安政4(1857)年頃の『兵庫津絵図』では、旧陣屋の堀が埋め立てられて幅を狭め、敷地の中央に広い街路が通り、その北半分に「御番所」(勤番所)や人家が進出している様子が描かれている。また、埋め立て普請の際に作られたと考えられる『兵庫陣屋跡町割図』(神戸市立博物館蔵)では、埋め立てられた堀にあたる場所に町割りが引かれ、堀の外側沿いに「溝」と記された堀(悪水抜溝)が描かれている。

今回の調査地周辺で実施している発掘調査では、第35次調査や第46次調査でも勤番所に伴う町家側の石垣や堀、兵庫陣屋段階の堀が確認されている。今回の調査でも勤番所に伴う内側の石垣が検出されることを見込んだが、西側に入れた試掘トレンチで堀の堆積が続くことが確認できたため、内側の石垣は、西側の敷地に存在する可能性が高くなった。

埋め立て普代については、調査区の堆積状況から、ある程度帯水した状態の堀に多量の土砂や石材を投入することで埋め立てていき、表層を入念に整地する状況が確認できた。



fig.181 1区第1遺構面全景（南東から撮影）



fig.182 1区陣屋溝埋め立て状況（北西から撮影）



fig.183 2区第1遺構面全景（北東から撮影）



fig.184 2区第1遺構面下層検出状況（北東から撮影）

22 兵庫津遺跡第 87 次調査

1. はじめに

事務所建設に伴い、令和 2（2020）年 10 月 15 日に実施した試掘調査で遺跡のひろがりを確認したため、工事の影響を受ける範囲を対象として発掘調査を実施した。調査地点は、神戸市営地下鉄中央市場前駅北出入口から北へ直線距離にして約 550 m、七宮神社境内から南側へ直線距離にして約 110 m の地点にあたる（fig.185）。

当調査地周辺では、第 10・14・16・20・21・24・44・53・60・70・77・79・82 次調査が実施されている。いずれも室町時代～江戸時代の町屋跡とみられる遺構が検出されており、宝永 5（1708）年の大火に伴う焼土層や、慶長元（1596）年に発生した地震によるものとみられる噴砂痕・火災面等が確認されている。また、第 14・53 次調査で検出された礎石建物群は、15 世紀後半頃の倉庫にあたる可能性が指摘されており、室町時代の西国街道沿いに展開した集落の様相をうかがうことができる。このような状況から、当事業地内にも同時期の所産とみられる遺構面がひろがるものと考えられる。

2. 基本層序

調査区 1 は、現況面から 1.6 m まで掘削したが、掘削した深さの中で埋蔵文化財は確認できなかった。

調査区 2 は、埋め戻し土・攪乱等を除去すると、幕末～明治時代の遺物を含む灰褐色粗砂があり、その下に炭混じり青灰色粘質粗砂と暗灰色粗砂が堆積していた。この暗灰色粗

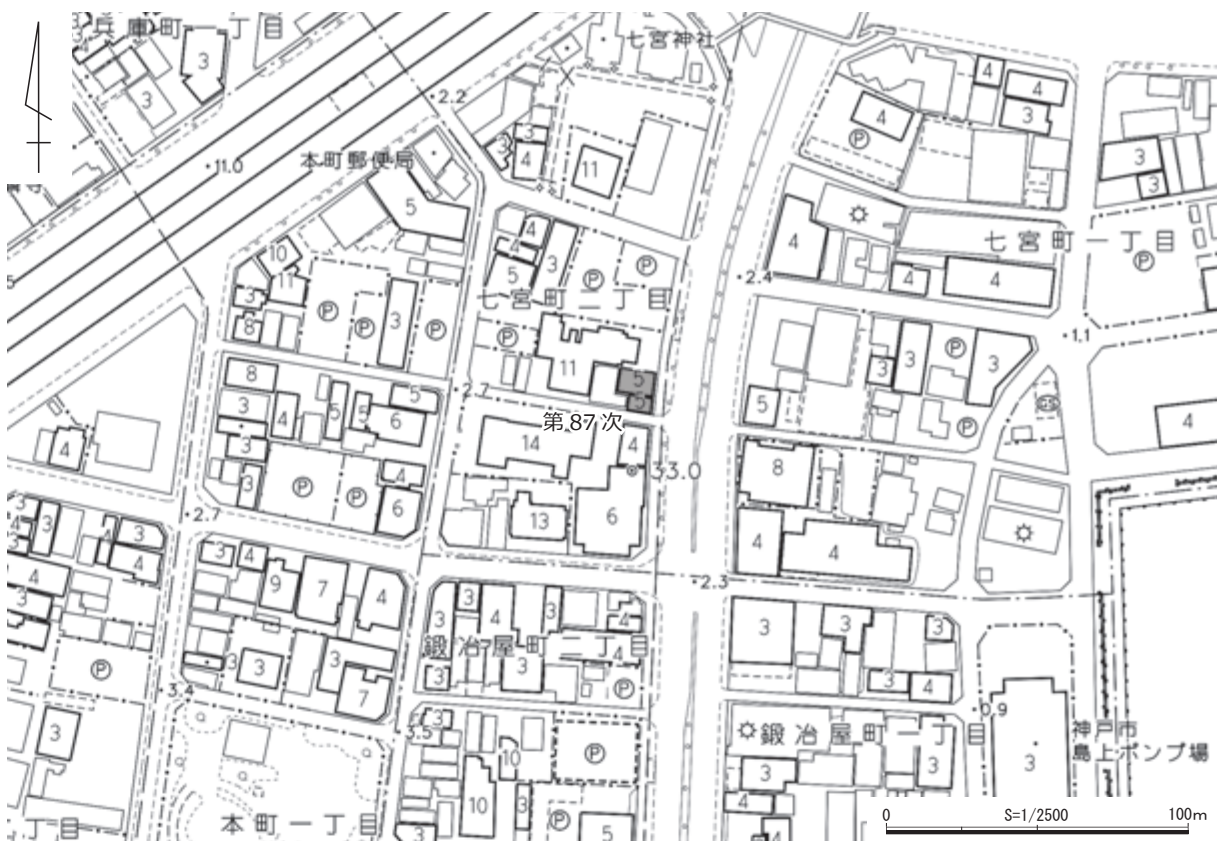


fig.185 調査地位置図

砂は、にぶい薄褐色粗砂をベースとした土層を切り込んでいたことから、暗灰色粗砂を遺構埋土と判断した (fig.188)。

3. 遺構面の概要

調査区2で検出した遺構面で、にぶい薄褐色粗砂をベースとする。この遺構面に暗灰色粗砂がL字形に掘りこまれていた。この遺構の性格は不明だが、遺構上面に堆積している灰褐色粗砂から幕末～明治時代の遺物が出土しているため、遺構面の時期は、幕末以前の時期にあたるとみられる (fig.188)。

4. まとめ

今回の調査では、調査区2から幕末以前の遺構面を検出した。遺構面を検出した標高は0.65 mであり、周辺の調査成果を参照すると、この深さで検出されている遺構面は、第14次調査の第6遺構面、第24次調査の第6遺構面、第53次調査の第7・8遺構面に相当するとみられる。これらの遺構面は、周辺の調査成果で考えられている慶長元(1596)年の地震に伴う火災層に相当する。今回検出した遺構面は、その火災層の上に堆積した土層上で検出しているため、16世紀後半～17世紀前半にあたるものと考えられる。

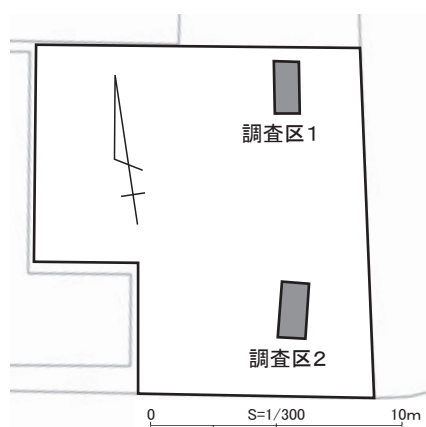


fig.186 調査区配置図

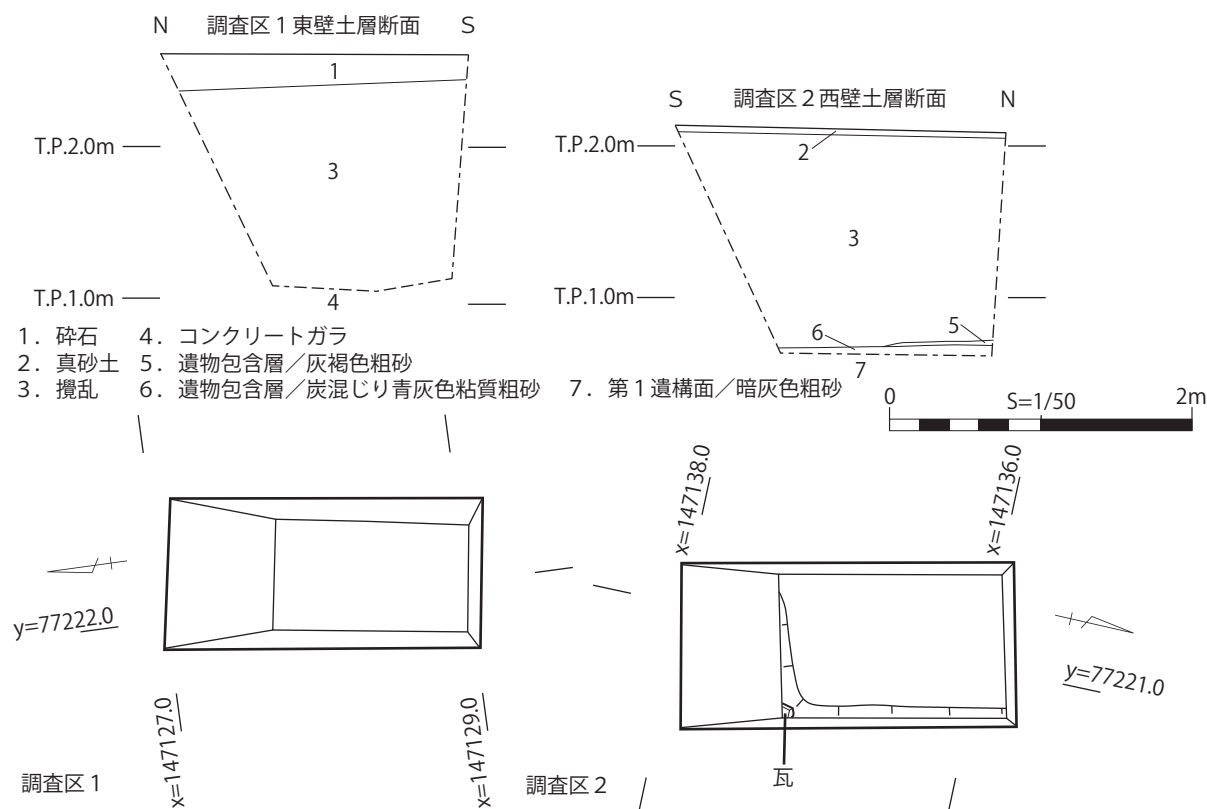


fig.187 各調査区土層断面図および遺構配置図

23 兵庫津遺跡第 88 次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、古湊川により形成されたと推定される扇状地末端から砂州の臨海部に立地し、南北 2 km、東西 1.5 km の範囲に広がる奈良時代～近世にかけての複合遺跡である。

尼崎藩領期の元禄 9（1696）年に作成された『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』では、都賀堤に囲まれた町屋がうかがえる。兵庫津は、行基の伝記である『行基年譜』に天平 2（730）年摂津国菟原郡宇治郷に「大輪田船息」を築いたという記述がある。以後、平安時代末期には平清盛が経ヶ島を築造し、日宋貿易の拠点とした。鎌倉時代には、東大寺僧俊乗坊重源により、荒廃していた大輪田泊の改修が行われ、室町時代前期に足利義満による遣明船の発着港として栄えた。戦国時代には、経済的な面だけでなく、兵員や軍需物資の輸送拠点として利用されるようになる。天正 9（1581）年には、池田恒興が荒木村重の花隈城を攻略し、その資材を利用して兵庫城が築かれている。関ヶ原の合戦以後は、豊臣家の蔵入地となり、豊臣秀頼家臣の片桐貞隆が代官として赴任する。慶長 20（1615）年に豊臣家が滅亡した後は幕府領となり、元和 3（1617）年に尼崎藩領となって、18 世紀前半には 2 万人以上の港湾都市へと成長した。

今回の発掘調査は、共同住宅建設に伴うものである。上述した内容から、今回の調査地にも埋蔵文化財が拡がると予想されたため、工事によって影響を受ける範囲を対象に発掘調査を実施した（fig.188・189）。

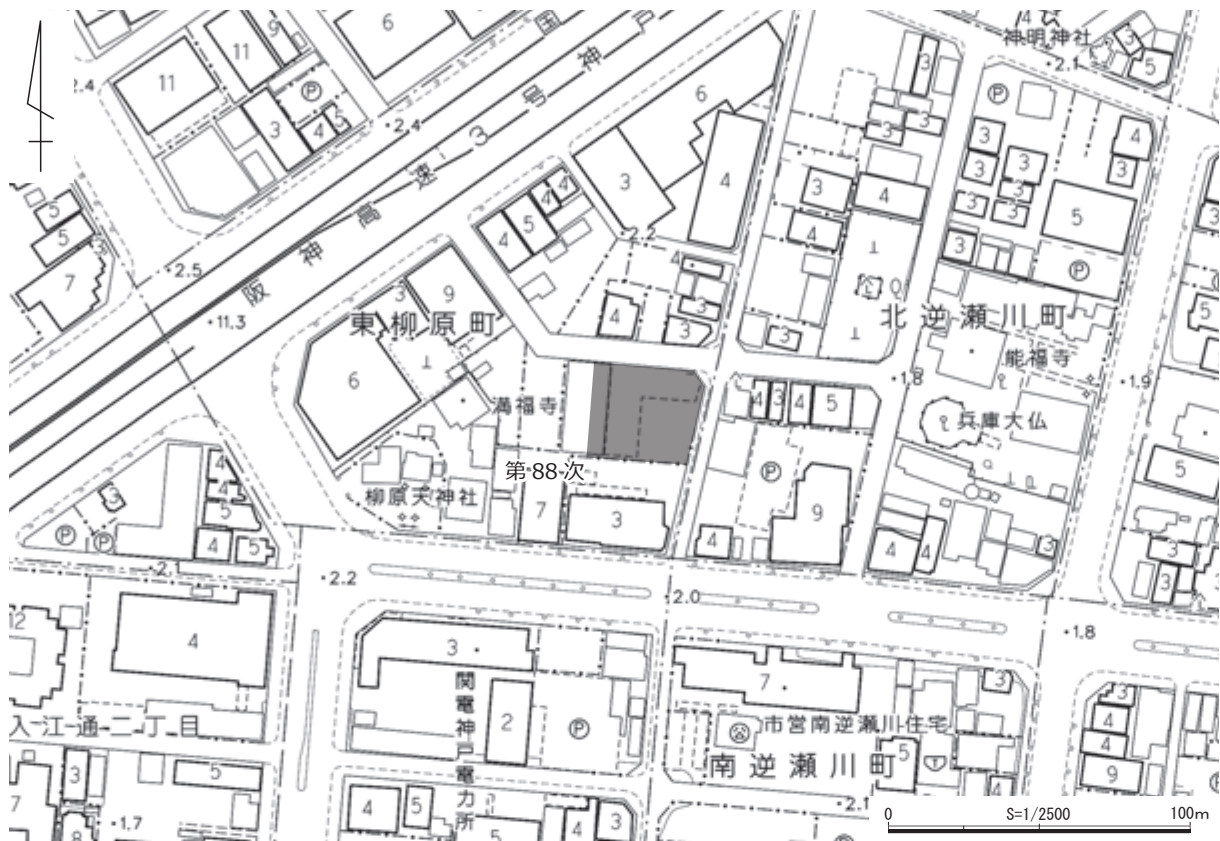


fig.188 調査地位置図

2. 基本層序

基本層序は、盛土・攪乱→暗灰褐色砂質土であり、この上面が第1遺構面となる。第1遺構面の検出標高は1.6mであった。暗灰褐色砂質土の下には淡茶褐色砂質土があり、この上面が第2遺構面となる。第2遺構面の検出標高は1.3mであった。淡茶褐色砂質土の下には淡灰褐色砂質土があり、この土層が古墳時代前期の遺物包含層となる。淡灰褐色砂質土の下には青灰色粗砂があり、この上面が第3遺構面となる。第3遺構面の検出標高は0.6mであった (fig.190)。

3. 第1遺構面の概要

18世紀～19世紀の遺構面である。多くの土坑を検出した (fig.191・192)。

SK102 平面 3.5 m × 0.8 m 以上で、深さ 25 cm を測る土坑状の落ち込みである。遺構の西側を SD101 に削平されている。仏像の土人形が出土している。18 世紀以降の土坑とみられる。

SK104 平面 1.4 m 以上 × 1.5 m 以上で、深さ 35 cm を測る土坑である。北東側を削平されている。五弁花文の皿や丹波焼甕等が出土している。18 世紀前半頃の土坑であろう。

SD101 幅 1.7 m、深さ 0.5 m の溝である。「渦福」の記銘や、手書き五弁花文の陶磁器等が出土している。18 世紀頃の溝と考えられる。

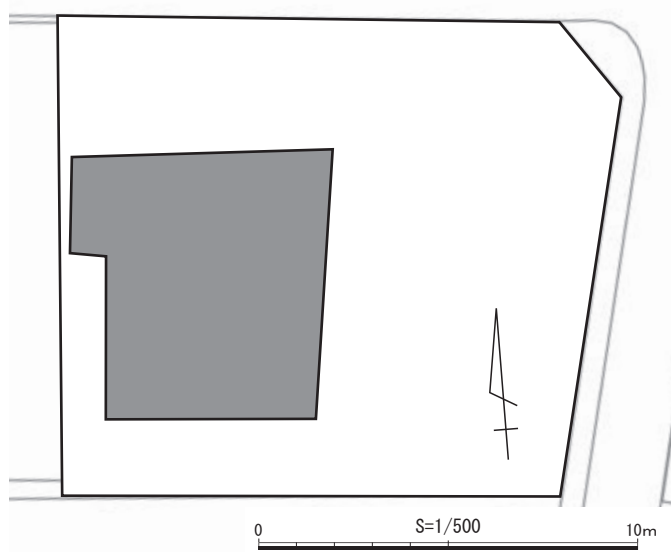


fig.189 調査区配置図

4. 第2遺構面の概要

16 世紀後半～17 世紀初頭の遺構面である。畑地と考えられる (fig.193～195)。

SD201～209 畑地の耕起に伴う溝を9条検出した。この溝は、作付け時の鋤溝ではなく、作物を収穫した際の溝と考えられる。溝は、遺存状況の良好な部分で幅 60 cm、深さ 50 cm を測る。ほぼ南北に平行している7条と、やや方向の異なる2条の溝を確認した。出土遺物は、土師器、肥前陶器、貿易陶磁が出土している。肥前磁器が出土しておらず、ほぼ17世紀初頭頃

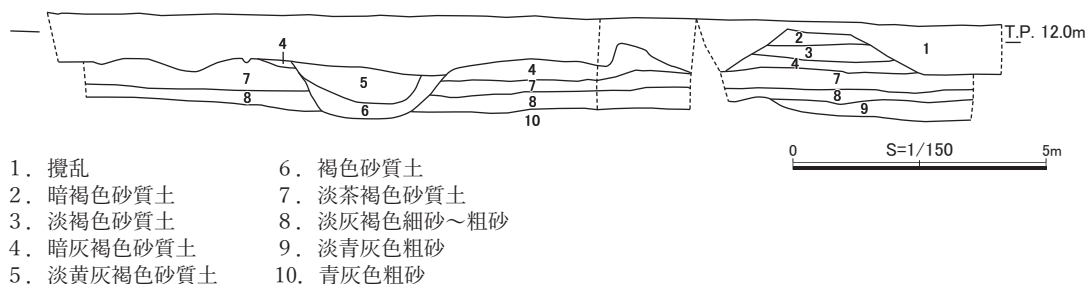


fig.190 調査区西壁土層断面

までの畑地である可能性が高い。

5. 第3遺構面の概要

古墳時代前期の遺物を含む淡灰褐色細砂～粗砂遺物包含層の下面で確認した遺構面である (fig.187・188)。確実な遺構と認定できるものはない。出土遺物に顕著な摩滅は認めらなかったことから、当該調査地の近辺に古墳時代前期の遺構が存在する可能性がある。

6. まとめ

第1遺構面は、18世紀以降に比定できる。この地域が近世に都市化した時期もこの頃以降である可能性が高い。

第2遺構面は、16世紀後半～17世紀前半の畑地である。この地域が都市化する以前は、畑地や荒

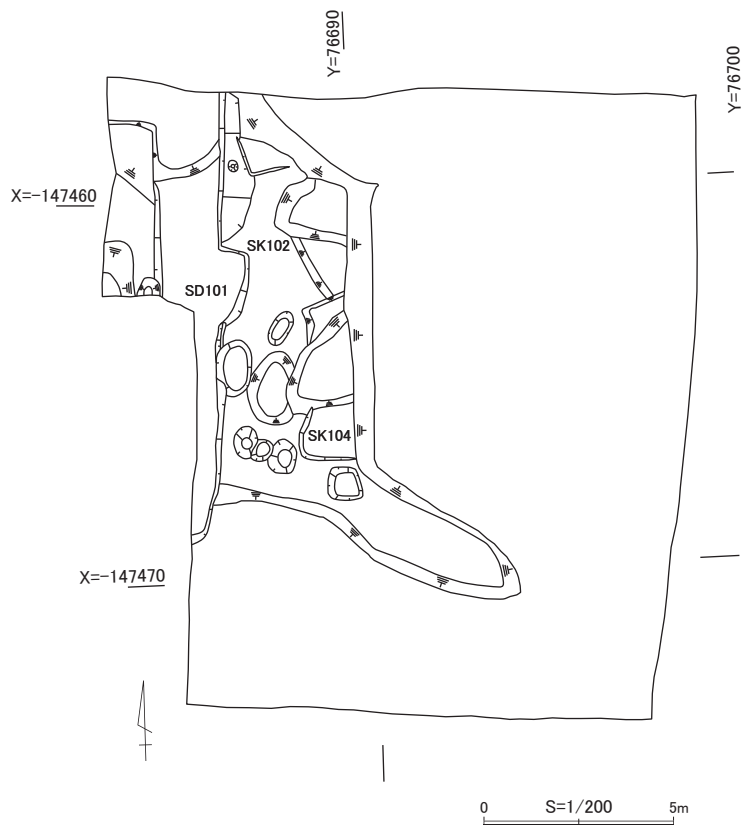
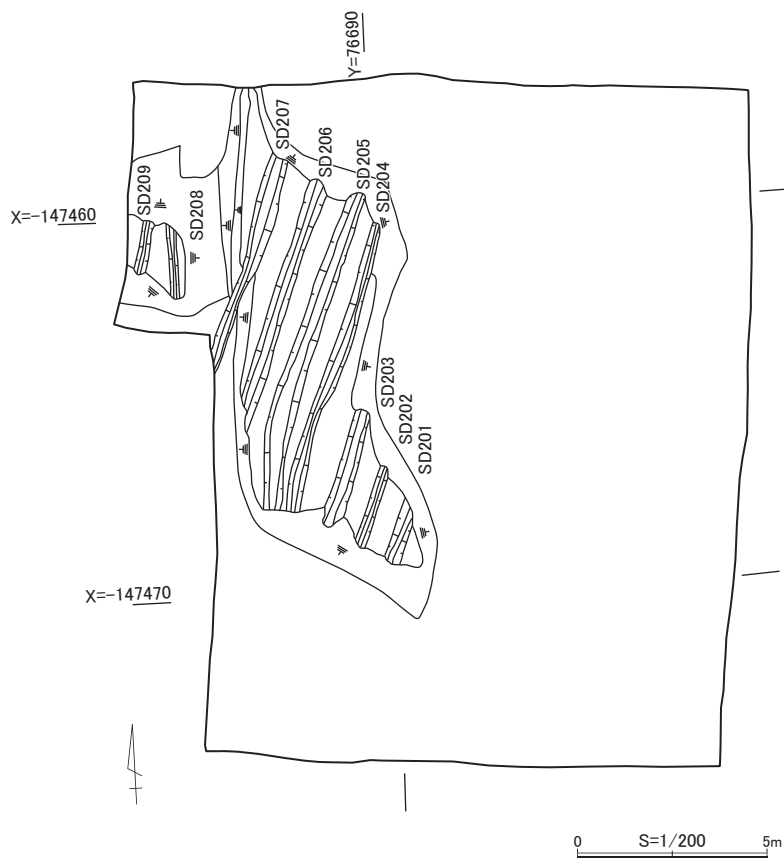


fig.191 第1遺構面遺構配置図



fig.192 第1遺構面完掘状況（北から撮影）



地であったとみられる。

第3遺構面は、古墳時代前期の土師器が多く出土している遺構面である。今回の調査地周辺で実施している調査でも古墳時代前期の遺物包含層が確認されていることから、古代～近世の港湾都市として知られる兵庫津遺跡とは、別の顔を映し出す結果が得られた。

fig.193 第2遺構面遺構配置図

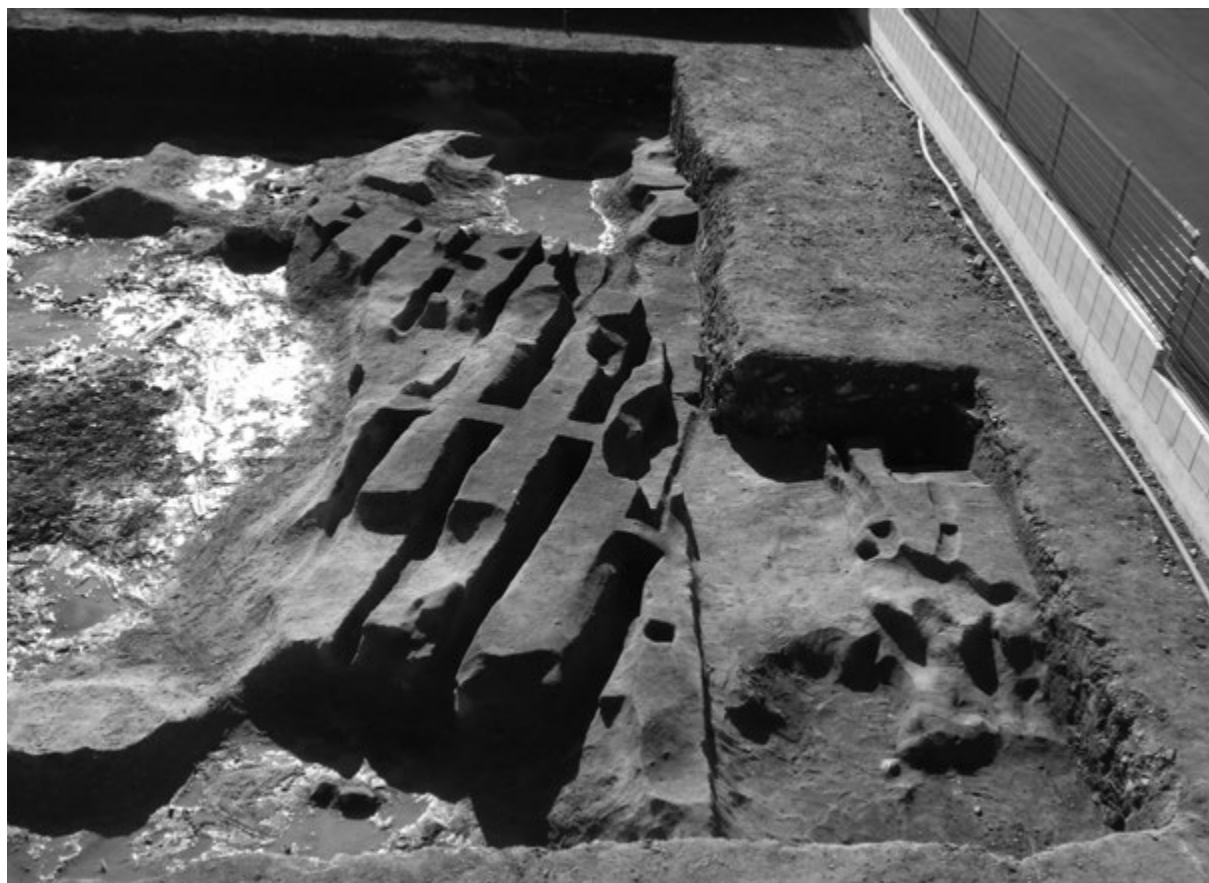


fig.194 第2遺構面完掘状況（南から撮影）



fig.195 第2遺構面耕作痕断面（北から撮影）



fig.196 調査区西壁土層断面（東から撮影）

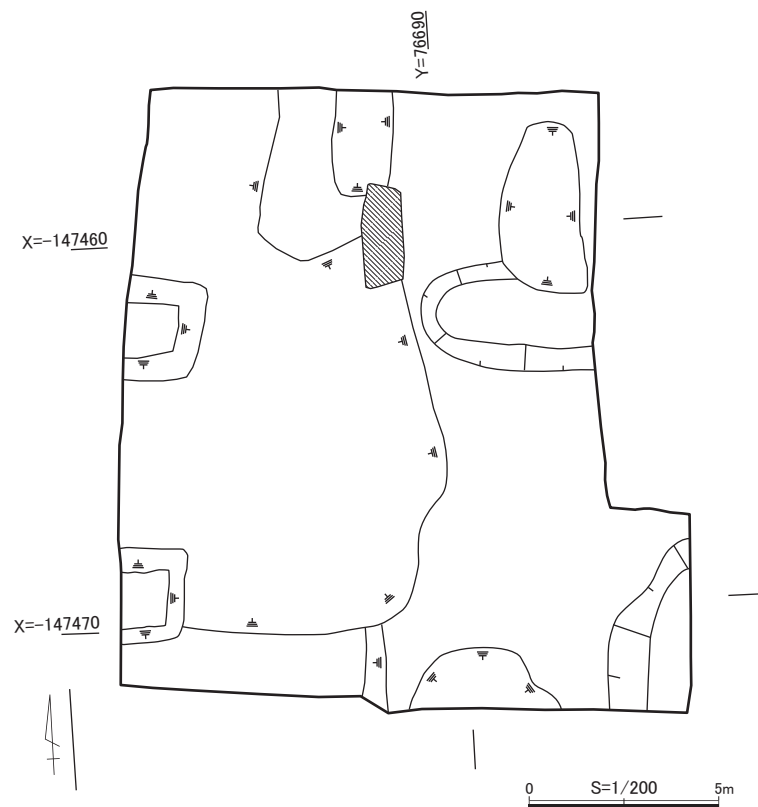


fig.197 第3遺構面遺構配置図



fig.198 第3遺構面完掘状況（北から撮影）

24 長田神社境内遺跡第19次調査

1. はじめに

長田神社境内遺跡は、荊藻川によって形成された沖積地の緩斜面地上に立地する。本遺跡は、大正13（1924）年に焼失した長田神社の再建工事の際に発見された遺跡である。昭和62（1987）年度より本遺跡内での発掘調査が開始されて以来、これまでに縄文時代後期の土坑、弥生時代後期の竪穴建物・掘立柱建物・流路・溝、古墳時代初頭の竪穴建物、古墳時代中期の掘立柱建物、古墳時代後期～飛鳥時代の掘立柱建物、平安時代の墓、中世の掘立柱建物・井戸・祭祀遺構・方形区画溝、近世の石組遺構等が確認されている。また、旧石器時代の尖頭器や弥生時代後期の小形仿製鏡も出土しており、特筆すべき成果が得られてきた。

本遺跡には、長田南遺跡と五番町遺跡が隣接している。長田南遺跡は、縄文時代晩期から中世までの集落遺跡で、弥生時代中期や庄内式併行期の竪穴建物が見つかった。五番町遺跡は、縄文時代晩期と弥生時代～中世にかけての集落遺跡で、古墳時代の竪穴建物や中世の掘立柱建物が見つかった。両遺跡で縄文時代晩期の遺物・遺構は確認されているが、竪穴建物が見つからないことが特徴として挙げられる。

2. 調査概要

今回の調査地は、長田神社境内遺跡の南東部に位置し、五番町遺跡と近接する（fig.199）。近隣では、第16・18次調査が実施されており、庄内式併行期の土器が投棄された溝や土坑、



fig.199 調査地位置図

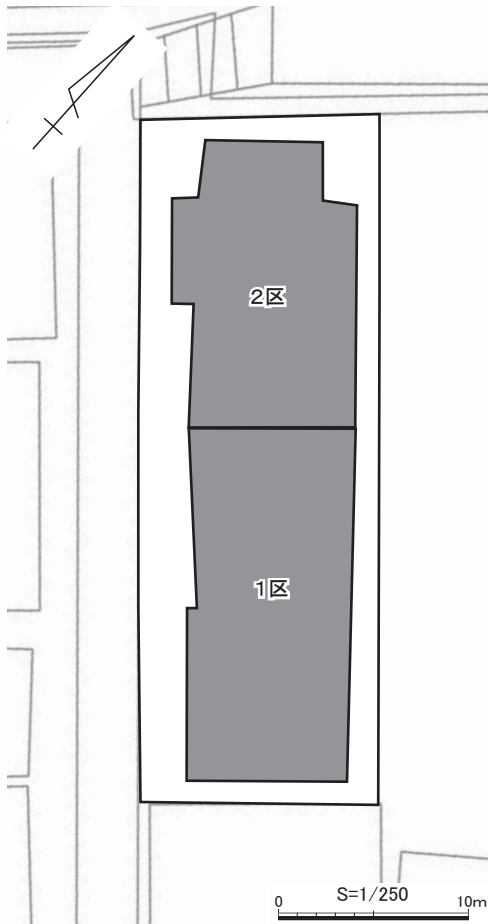


fig.200 調査区配置図

ピットが見つかった。今回の調査地からみて北西側にある新湊川は、明治 34（1901）年に開削された新川であり、それ以前は、荻藻川左岸の尾根が平地へと変わる地形変換点に立地していた。

今回の調査は、福祉施設建設に伴うものである。発掘調査は、掘削残土の都合上、南東側と北西側の 2 つに分けて実施した。南東側を 1 区、北西側を 2 区として設定している（fig.200）。

3. 基本層序

現地表面である盛土層と整地層の下に、近世～中世の数次にわたる耕土層が存在し、その下層が第 1 遺構面基盤層となる黒褐色シルト～細砂である。第 1 遺構面の時期は、遺構埋土に上層の耕土が含まれることから、中世頃にあたると考えられる。ただし、第 1 遺構面には、弥生時代後期の高坏や甕、縄文時代晩期後半の突帯文土器や打製石鏃、サヌカイト片を含んでいることから、遺構面の時期は不確定な面も残っている。第 1 遺構面基盤層の下には、第 2 遺構面基盤層となる暗灰色シルト～暗灰褐色細砂が広がる。この層の上面にも、わずかだがサヌカイト片が含まれていた（fig.201）。

4. 第 1 遺構面の概要

掘立柱建物 1 棟（SB）、柱穴列 1 組（SA）、ピットを確認した遺構面である。遺構内からの出土遺物がないものの、遺構面から陶器片が出土していることから、第 1 遺構面は、中世以降にあたるとみられる。第 1 遺構面で検出した遺構の多くは、調査区の北半で検出している（fig.202 - 左）。

SA01 は、2 区北部で検出したピット列である。確認された 3 基の柱穴は、直径 20 ～ 30 cm、深さ 20 ～ 40 cm、柱間隔は 1.2 m で、東西方向に並ぶため、柵列となる可能性がある。

SB01 は、2 区中央～南部で検出した掘立柱建物である。東西 5 間以上、南北 2 間の規模である。確認された 7 基の柱穴は、大型のものと小型のものに分けることができ、大型の柱穴は、直径 20 ～ 25 cm、深さ 30 ～ 45 cm である。小型の柱穴は、直径 10 ～ 15 cm、深さ 15 cm であった。これらの柱穴には、掘り直し痕跡が認められることから、掘立柱建物の建て替えや補強が行われていたと考えられる。

このほかに柱穴を 20 基検出したが、建物としては、まとまらなかった。

5. 第 2 遺構面の概要

溝（SD）1 条、落ち込み（SX）3 基、土坑（SK）5 基、ピット複数基を確認した遺構面である。弥生時代後期～終末期の遺構面と考えられる。遺構の埋土には、縄文時代晩期の遺物が含まれるものの、ほとんどが摩滅を受けていることから、周辺からの流入とみら

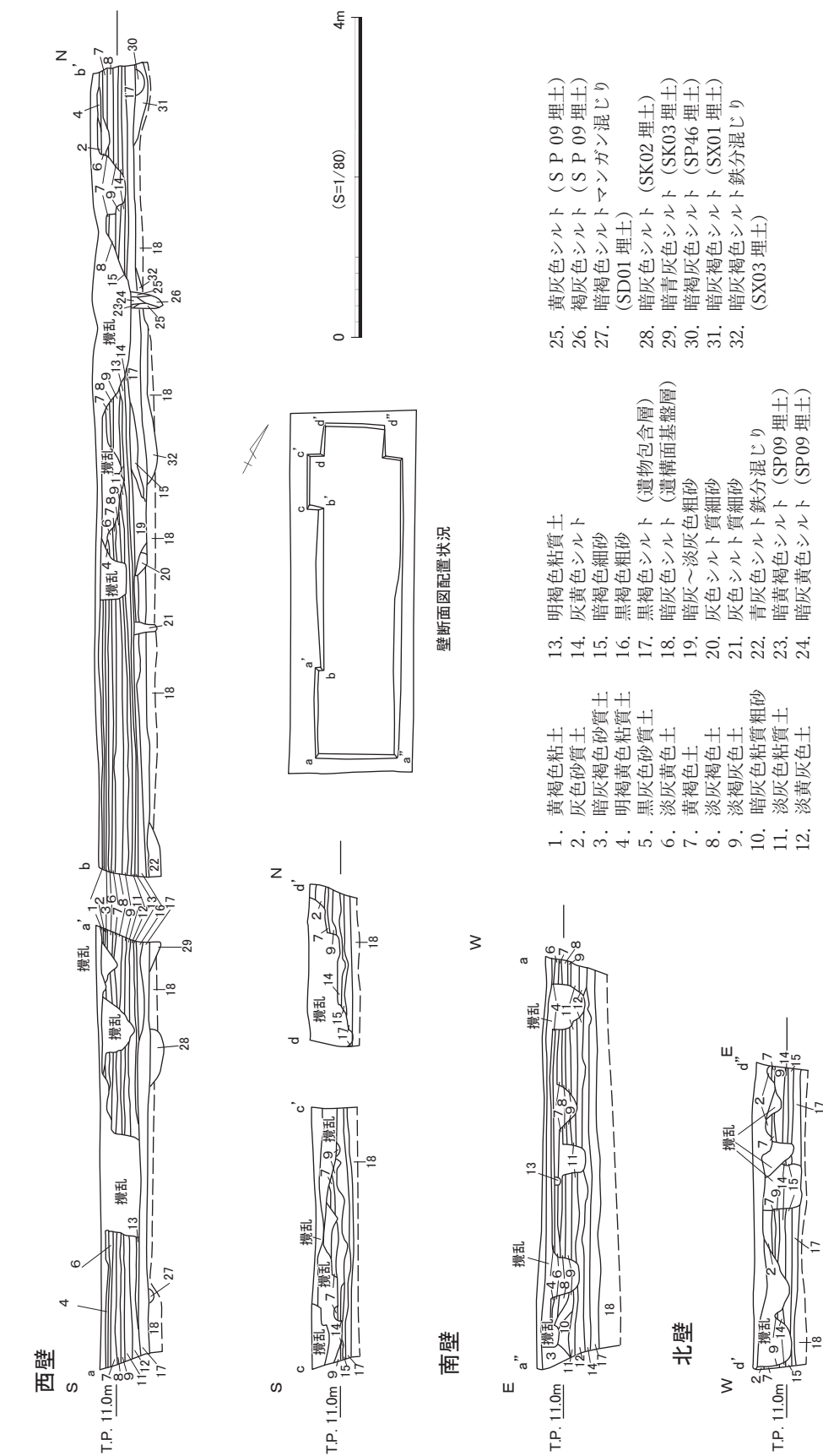


fig.201 調査区土層断面

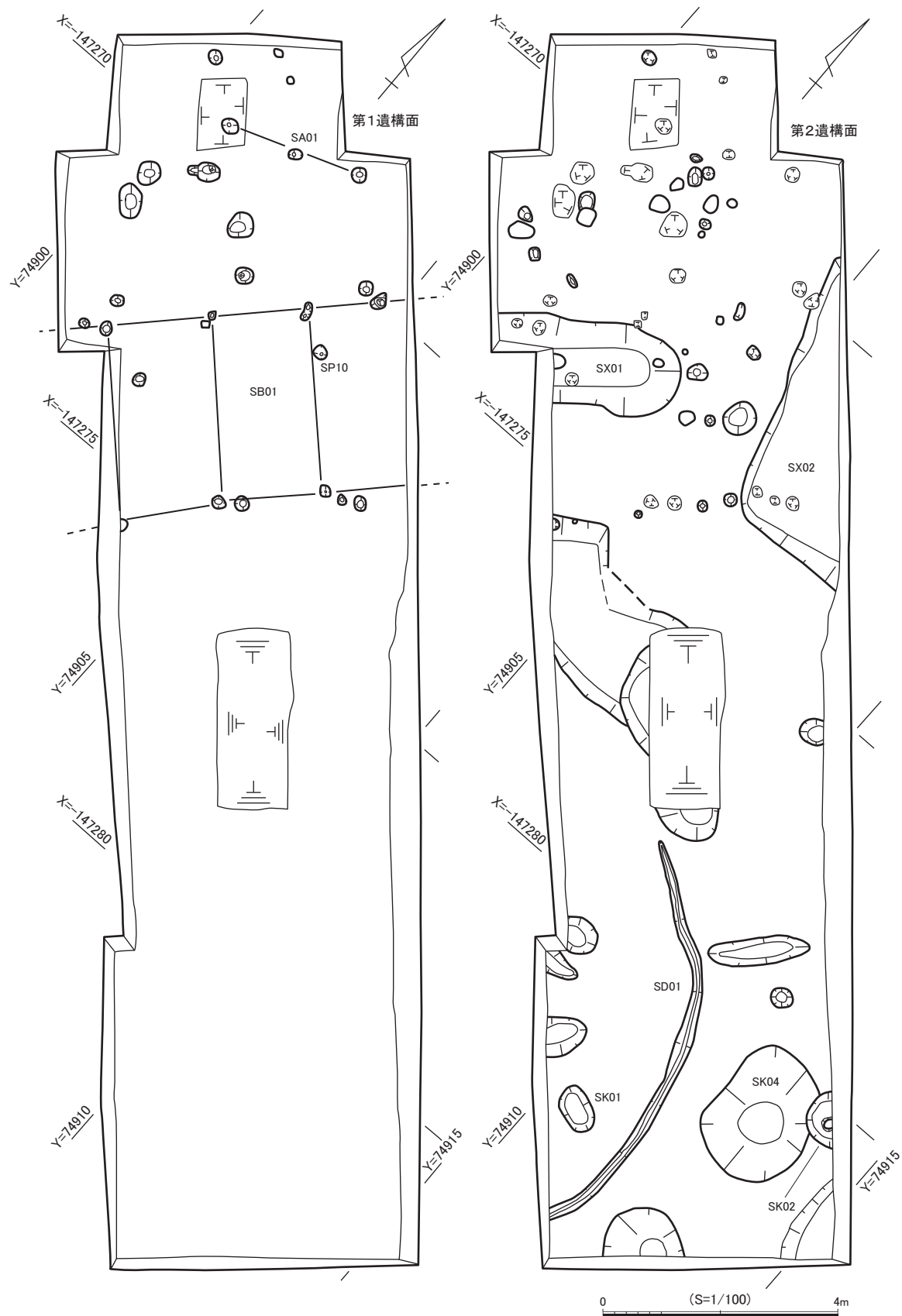


fig.202 第1遺構面（左）と第2遺構面（右）の遺構配置図

れる (fig.202 - 右)。

SD01 は、1 区で検出した溝である。溝の幅は 20 ～ 30 cm、深さ 4 ～ 7 cm である。1 区中央部で現れたのち、弧を描くように南へ延び、調査区西壁へ達する。埋土から出土した土器は摩滅しているが、胎土からみて縄文土器と考えられる。

SK01 は、1 区南部で検出した土坑である。東西 80 cm、南北 50 cm、深さ 10 cm で、楕円形を呈する。遺構内からは、サヌカイト製の石鏃が出土した。

SK02 は、1 区南部で検出した土坑である。直径 1 m、深さ 25 cm で、東側は調査区外へ続く。遺構の中央部が一段下がるため、上面が削平された柱穴の可能性も考えられる。遺構埋土からは、弥生時代後期の甕か鉢、もしくは壺とみられる弥生土器の底部が出土している。

SK04 は、1 区南部で検出した土坑である。東西 1.7 m、南北 2.2 m、深さ 20 cm で、楕円形を呈する。遺構の北東隅を SK02 に切られている。遺物は、縄文時代晩期後半とみられる突帯文土器が出土している。

SX01 は、2 区中央部で検出した落ち込み状の遺構である。幅約 1.4 ～ 1.6 m、深さ約 15 cm で西側は調査区外へ続いている。遺物は、浮線網状文土器の口縁部片が出土している。顕微鏡で観察したところ、表面に赤色顔料の付着が見られた。また、蛍光 X 線分析の結果、水銀 (Hg) が検出されなかったことから、この赤色顔料はベンガラと考えられる (註)。

SX02 は、2 区南部～中央部で検出した落ち込み状の遺構である。東西約 2 m 以上、南北約 4.5 m 以上、深さ約 1 ～ 8 cm で東側は調査区外へ続いている。検出当初は平面形から方形竪穴建物の可能性を考慮したが、柱穴や周壁溝、床面等が確認できず、遺構面からの落ちも緩やかで、埋土も第 2 遺構面包含層と同様の埋土が流入しているため、竪穴建物ではないと判断した。また、2 区第 2 遺構面の遺構検出中に、大洞系土器の壺の肩部と考えられる破片が出土している (fig.203)。顕微鏡で観察したところ、表面に赤色顔料の付着が見られた。また、蛍光 X 線分析の結果、水銀 (Hg) が検出されたことから、この赤色顔料は水銀朱と考えられる (SX02 出土大洞系土器の記述・文責：中井)。

註) 分析にあたっては、オリンパス社製 ハンドヘルド蛍光 X 線分析計 VANTA M シリーズを使用した。X 線管のターゲットはロジウム、管電圧は 40kV (ビーム 1) / 10kV (ビーム 2)、検出器はシリコンドリフト検出器である。

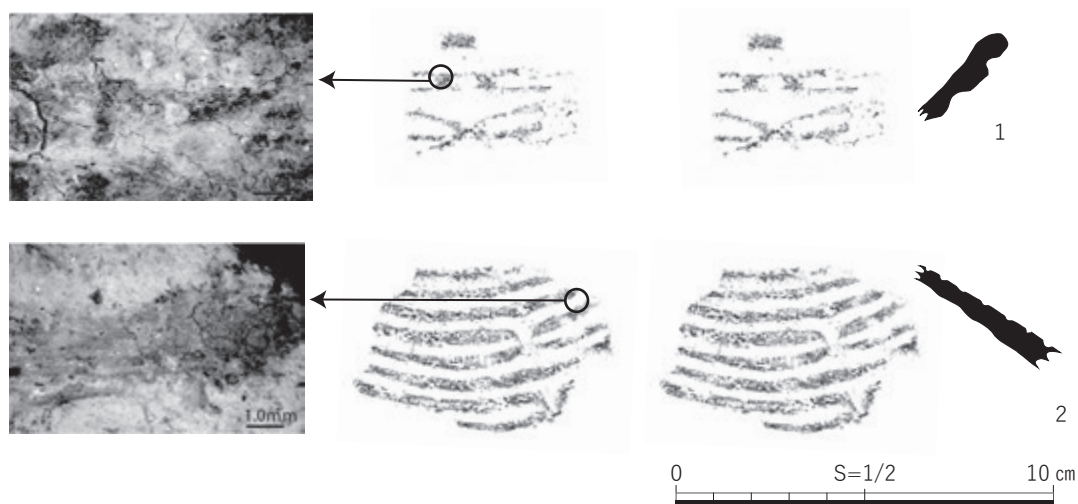


fig.203 SX02 出土大洞系土器実測図・顕微鏡写真

6. まとめ

今回の調査では、奈良時代～中世と弥生時代後期～終末期の遺構を確認した。また、これらの遺構に加えて、縄文時代晩期の遺物も確認することができた。

今回の調査地周辺では、これまでに第16・18次調査と2度の発掘調査が行われている。いずれの調査でも、弥生時代後期から庄内式併行期の遺構と遺物が確認されているが、今回の調査でも、周辺の調査で確認されている同時期の遺構と遺物を検出したことから、当該期の遺構が近隣一帯に広がっている様相を確認することができた。

縄文時代晩期の遺物については、第18次調査においても、遺構面の下から流れ込みと考えられる同時期の遺物が出土している。本調査地で出土した縄文時代晩期の土器や石鏃、サヌカイト片も遺構面や遺物包含層が堆積する過程で流入したものと考えられる。

長田神社境内遺跡では、これまでに第1次調査で縄文時代晩期の遺構が確認されているほか、南東に位置する五番町遺跡でも縄文時代晩期の遺構や遺物が確認されている。こうした人々の活動の所産が調査地の形成時に残されたものと考えられる。



fig.204 1区第1遺構面全景（南東から撮影）



fig.205 2区第1遺構面全景（北西から撮影）



fig.206 2区 SP10 土層断面（南東から撮影）



fig.207 2区第2遺構面全景（北西から撮影）

25 二葉町遺跡第24次調査

1. はじめに

二葉町遺跡は、妙法寺川と荊藻川に挟まれた地域に位置する。これまでの発掘調査で縄文時代晩期～近世の遺構と遺物が確認されている遺跡である。特に平安時代～鎌倉時代には、大規模な集落が形成されており、同時期の貿易陶磁器が比較的多く出土していることから、日宋貿易に用いられた大輪田泊との関係が伺える遺跡である。

2. 調査概要

今回の発掘調査は、共同住宅建設に伴うもので、計画建物の基礎等によって、埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲を対象として発掘調査を実施した (fig.208)。作業工程の便宜上、調査区を2分割し、調査区南半部を南区、北半部を北区とした (fig.209)。発掘調査は、遺物包含層上面までを重機で掘削し、遺物包含層以下を人力で掘削し、遺構の記録作業を行った。

3. 遺構面の概要

発掘調査の結果、遺物包含層と遺構内から中世前期の須恵器等が出土した。検出した遺構は、柱穴 (SP)・土坑 (SK)・溝 (SD)・落ち込み状遺構 (SX) である (fig.210)。

柱穴 調査区の全域で検出した。柱穴の中には柱痕が残るものもある。ただし、建物を構成する並びとなる柱穴は確認できなかった。柱穴の規模は、幅 15 ～ 30 cm、深さ 10 ～ 25 cm に収まるものが多い。柱穴からは、中世前期の須恵器が出土している。

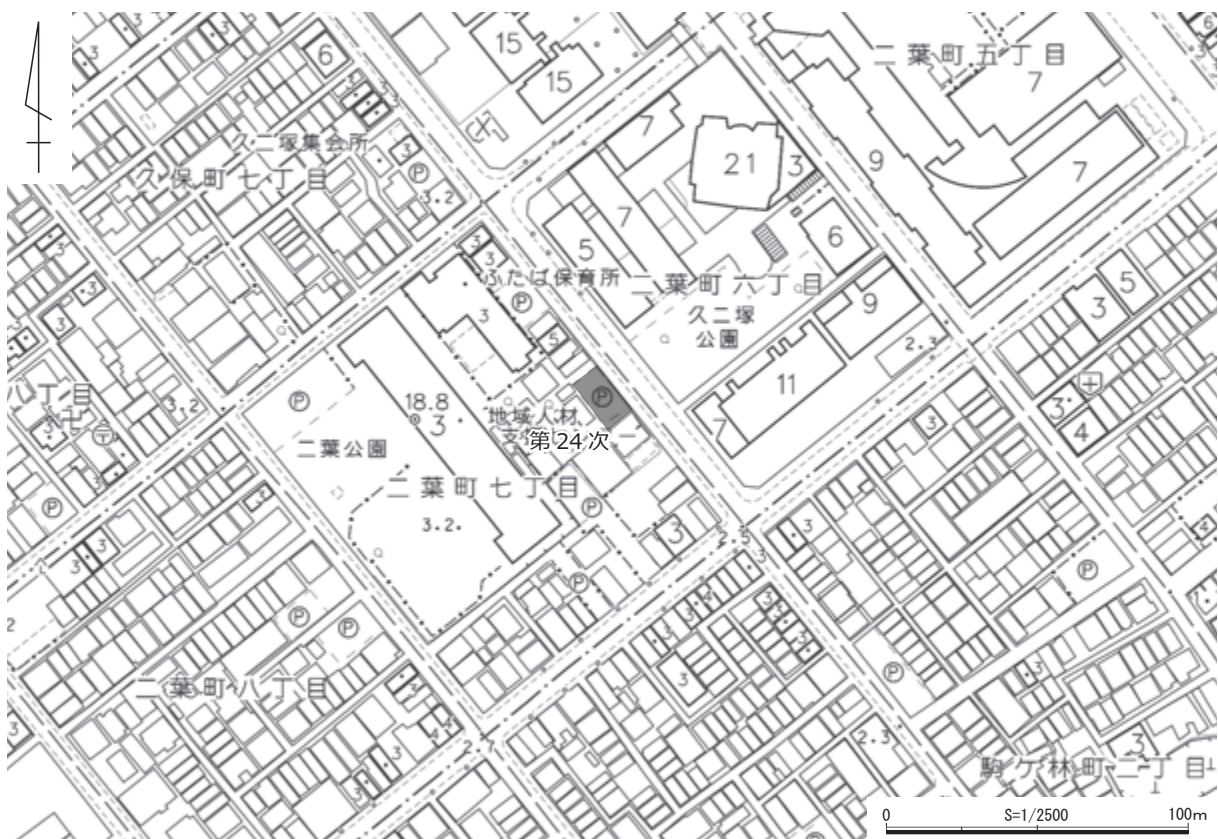


fig.208 調査地位置図

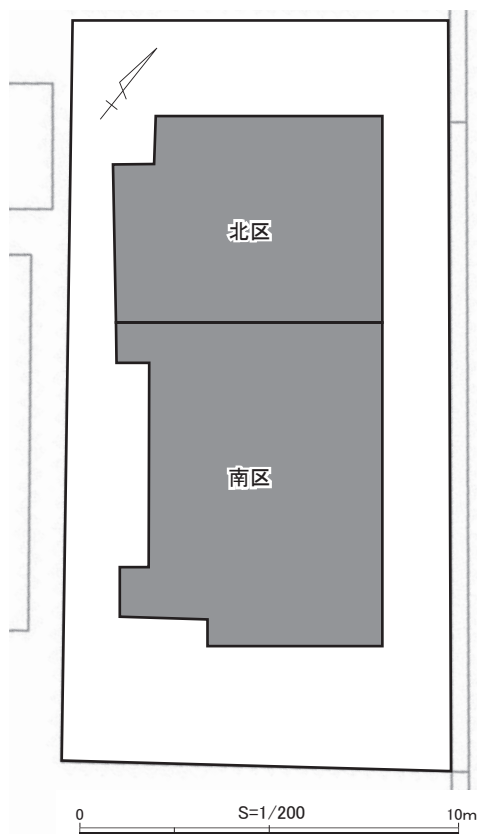


fig.209 調査区配置図

SK01 幅 70 cm × 75 cm で、深さ 18 cm を測る土坑である。中世前期の須恵器が出土している。

SX01 調査区西側へ続く不定形の落ち込みで、SK01 を削平している。遺構の幅は、東西 1.7 m 以上、南北 5.8 m、深さ 22 cm を測る。遺構内からは、中世前期の須恵器が出土している。

SD01 調査区北端で確認した小溝である。幅 70 cm、深さ 21 cm を測り、ほぼ東西方向に延びている。中世前期の須恵器が出土している。

4. まとめ

今回の発掘調査では、中世前期の遺構面を検出した。二葉町遺跡では、平安時代～鎌倉時代にかけて大規模な集落が形成されていることが、これまでの発掘調査で明らかとなっている。今回の調査も、これまでの調査結果と同じ成果が得られ、中世前期にあたる集落の一角が当調査地まで及んでいたことが確認できた。

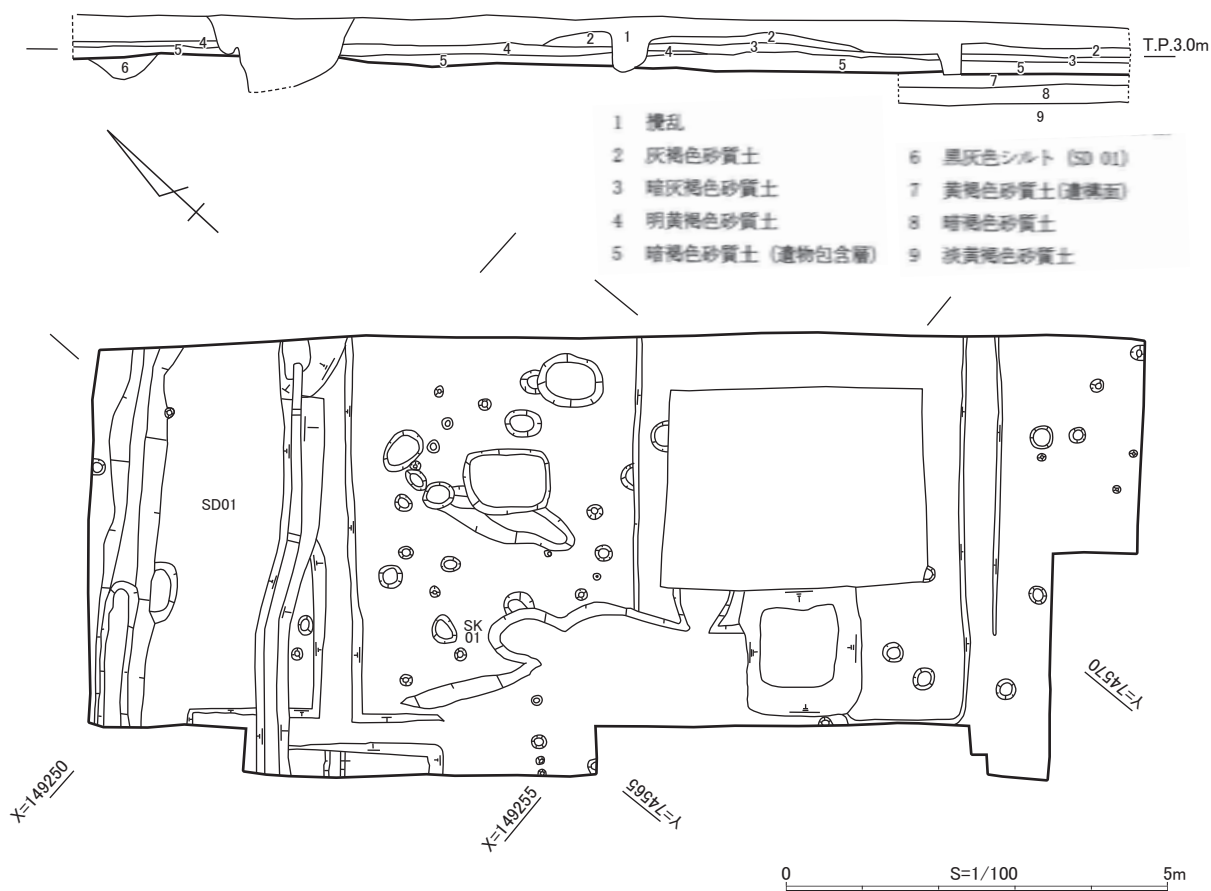


fig.210 遺構面遺構配置図・調査区東壁土層断面図



fig.211 南区遺構面全景（北から撮影）



fig.212 北区遺構面全景（南から撮影）



fig.213 SD01 土層断面（西から撮影）

26 松野遺跡第46次調査

1. はじめに

松野遺跡は、J R山陽線新長田駅西側に位置する南北400 m、東西100 mほどの面積をもつ遺跡で、これまでの発掘調査で縄文時代晩期、古墳時代、奈良時代～平安時代等の遺構が確認されている。今回の発掘調査は、市立駒ヶ林中学校のプール建設に伴うものである(fig.214)。発掘調査は、遺物包含層上面までを重機で掘削し、それ以下を人力で掘削した。

2. 基本層序

層序は、攪乱・盛土・旧耕土の下に黄褐色砂質土→淡黄褐色砂質土と堆積し、標高6.5 mで検出した黒灰色粗砂混じり砂質土上面が第1遺構面となる。この黒灰色粗砂混じり砂質土が古墳時代後期の遺物包含層で、その下に堆積する淡黒灰色極細砂・黄褐色砂質土上面が第2遺構面となる。第2遺構面の検出標高は、6.3 mであった(fig.216)。

3. 第1遺構面の概要 (fig.217・219)

鋤溝群 南北方向に延びる溝で、幅40～50 cm、深さ18 cmを測る。7条の溝を検出し、その間隔は、0.5～1 mであった。遺構内からは、須恵器と土師器の破片が少量出土しているが、時期の判断ができるものはなかった。第1遺構面の精査時に出土した遺物が古墳時代後期を主体とする時期であったが、近隣での調査では、中世前期の鋤溝が確認されていることから、今回確認した鋤溝も中世前期にあたる可能性がある。

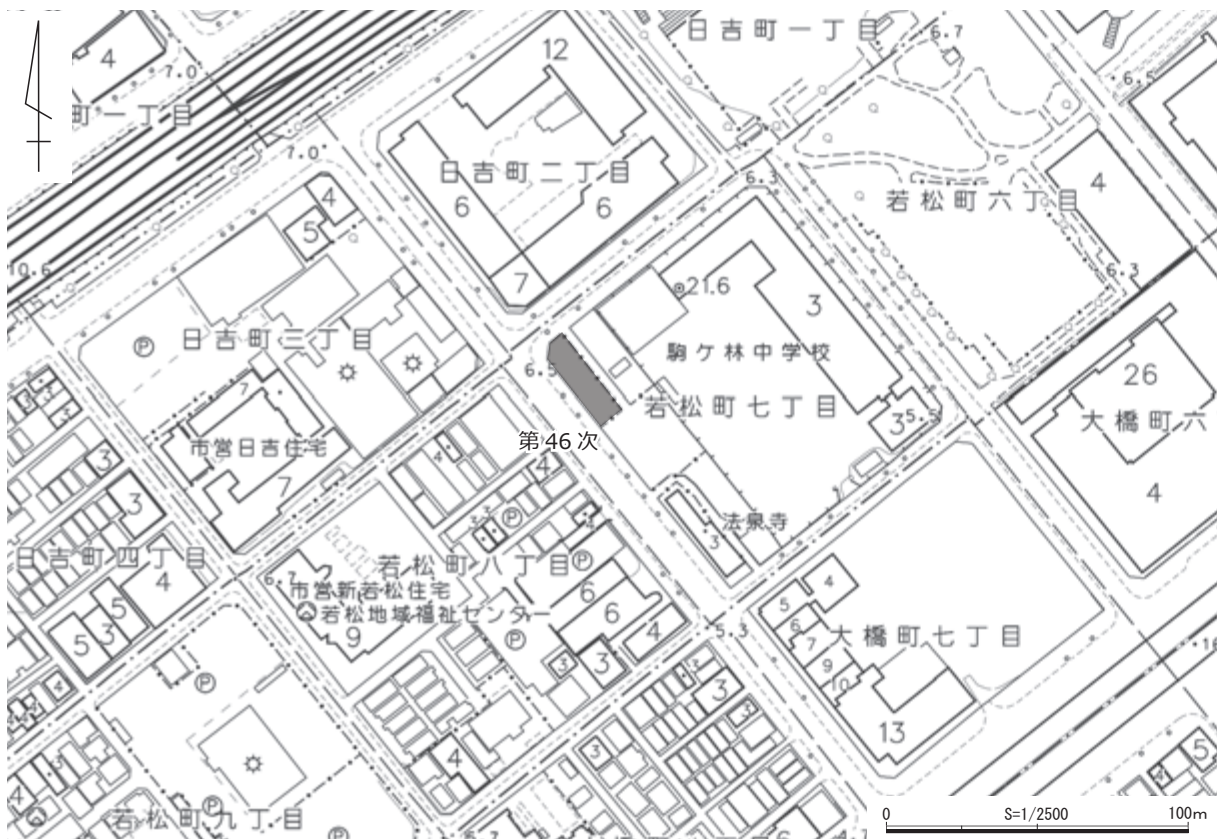


fig.214 調査地位置図

ピット どれも直径 25 ～ 35 cm、深さ 5 ～ 11 cmである。ピット内から遺物は出土していない。ピットも上記の鋤溝群と同時期にあたる遺構と考えられる。

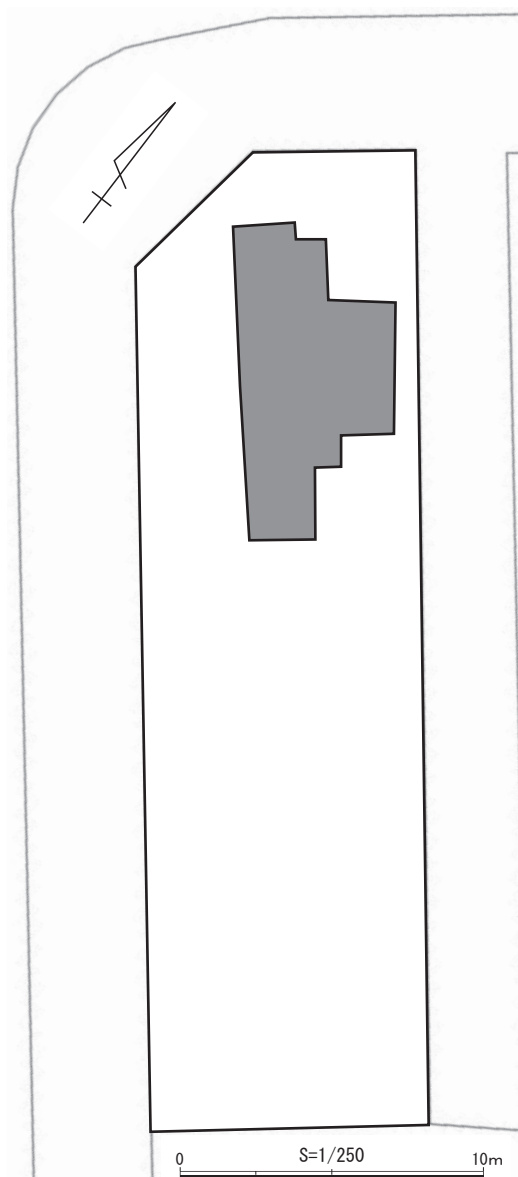


fig.215 調査区配置図

4. 第2遺構面の概要

古墳時代後期の遺構面と考えられる (fig.218・220)。

SD201 幅 0.5 ～ 1.0 m、深さ 50 cmで、南北方向に延びる溝である。遺構内からは、古墳時代後期の須恵器と土師器が出土している (fig.221)。

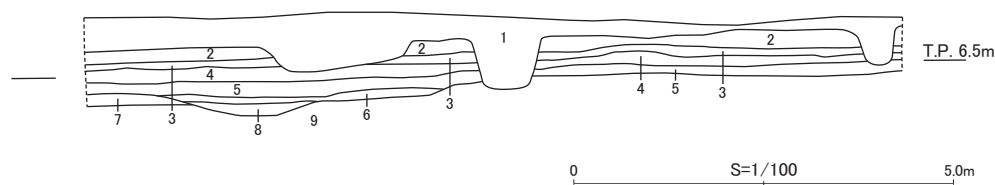
ピット 調査区内で多数検出しているが、建物や柵列等を構成する並びは確認していない。直径 25 ～ 45 cm、深さ 21 ～ 47 cmを測る。遺物は、土師器と須恵器が出土している。

SK201 径 1.5 m、深さ 14 cmを測る土坑状の落ち込みである。土師器が出土している。

SX201 調査区の東端部で確認した落ち込みである。径 4.5 m以上、深さ 30 cmを測る。古墳時代後期の須恵器が出土している。

5. まとめ

今回の工事予定範囲内は、その大部分が過去に調査済みである。これまでの調査によって、中世前期の掘立柱建物や井戸、古墳時代後期の掘立柱建物や竪穴建物、井戸等が確認されてきた。今回の調査でも、過去の調査成果と同様の遺構面が広がっている結果となった。遺構の密度は希薄だったものの、過去の調査でも同様のことが指摘されていることから、今回の発掘調査でも、遺構密度が低い状況を確認することができた。



- | | | |
|----------|----------------------------------|-------------------|
| 1 盛り土 | 4 淡黄褐色砂質土 | 7 淡黒灰色砂質土 (細砂が多い) |
| 2 旧耕作土 | 5 淡黒灰色シルト混じり砂質土 (上面が第1遺構面 遺物包含層) | 8 淡黒灰色砂質土 |
| 3 黄褐色砂質土 | 6 黒灰色粗砂混じり砂質土 | 9 淡黒灰色極細砂 黄褐色砂質土 |

fig.216 調査区東壁土層断面

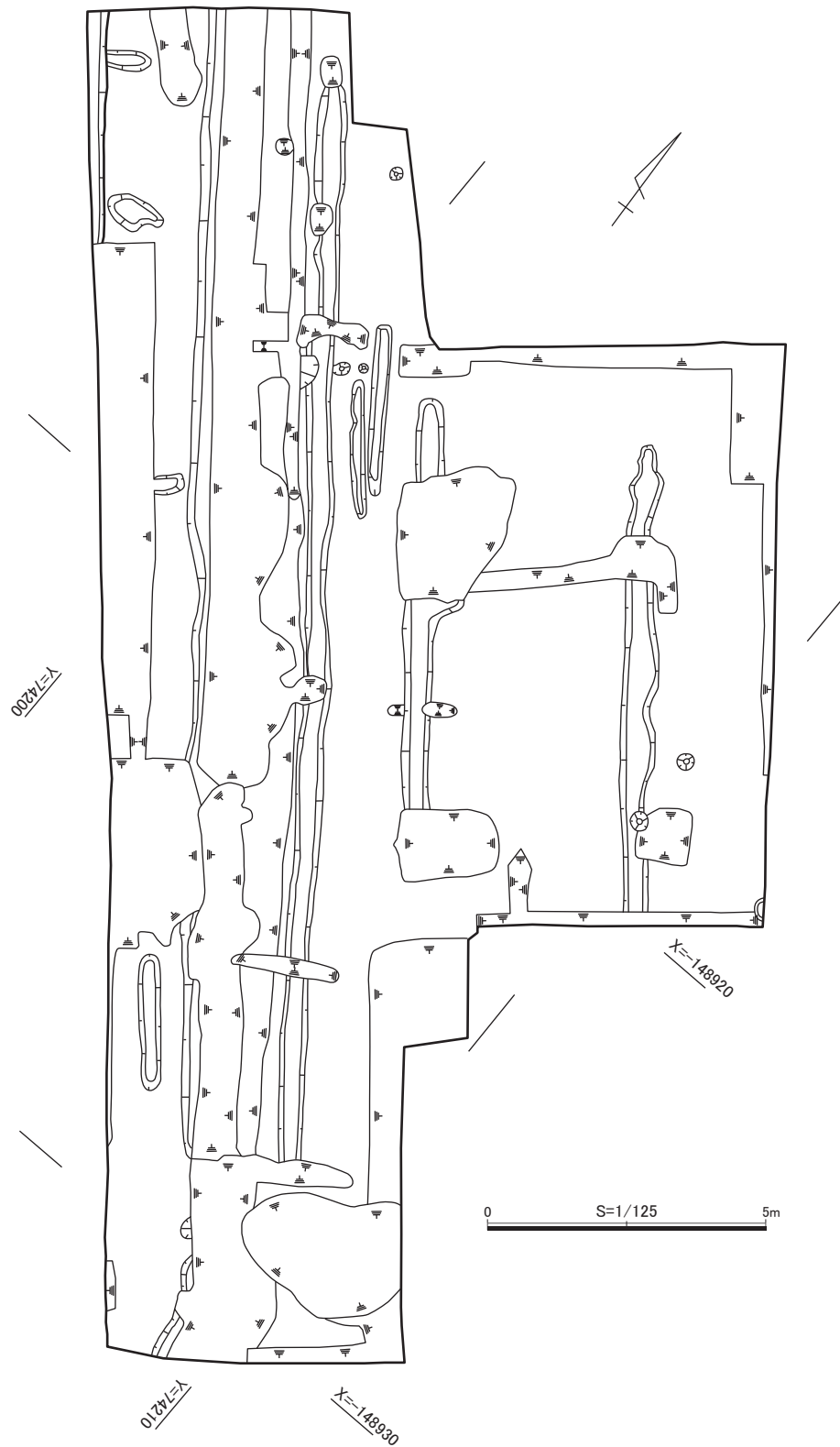


fig.217 第1遺構面遺構配置図

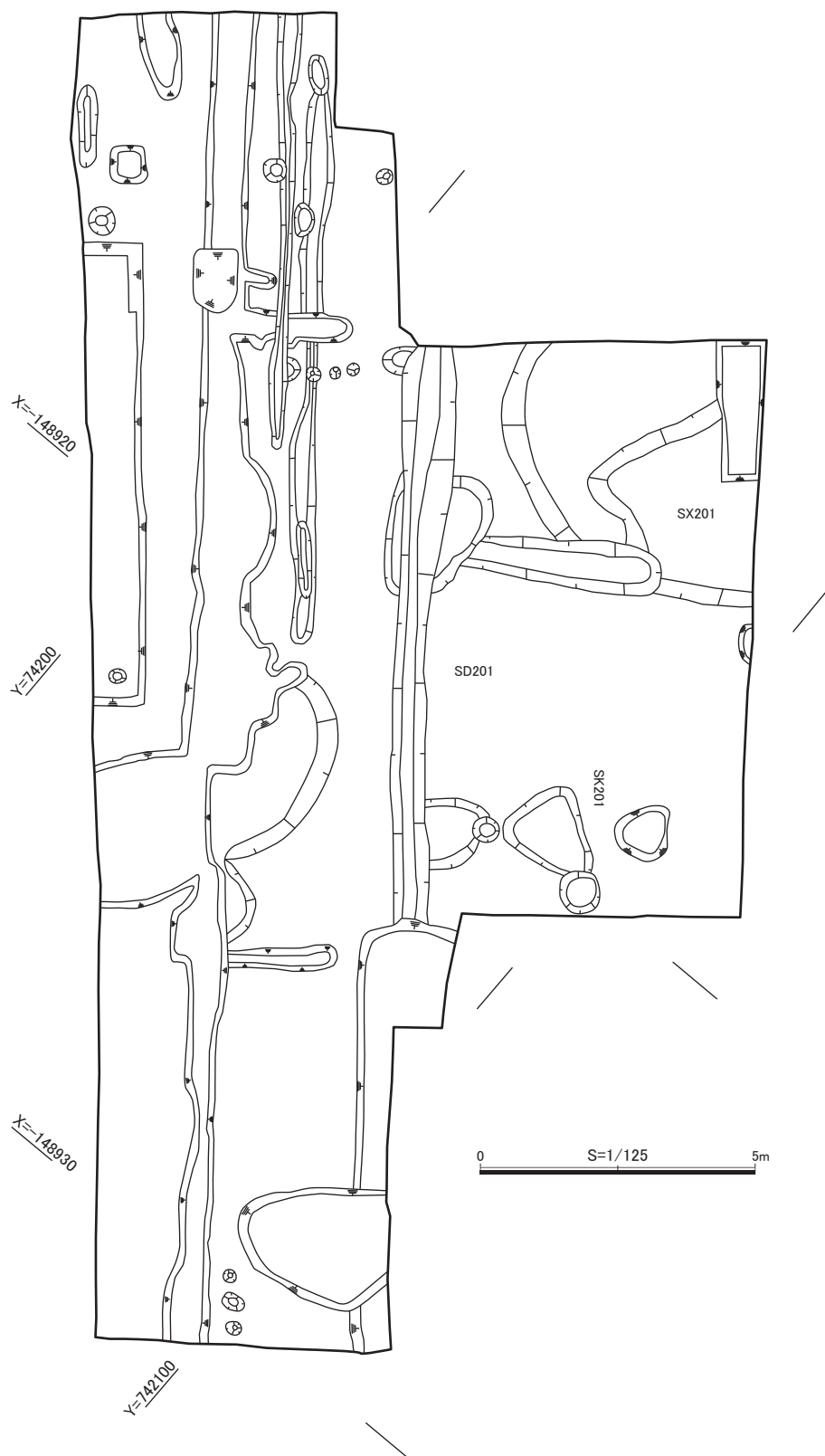


fig.218 第2遺構面遺構配置図



fig.219 第1遺構面全景（北から撮影）



fig.220 第2遺構面全景（北から撮影）



fig.221 SD 201 土層断面（南から撮影）



fig.222 調査区東壁土層（西から撮影）

27 戎町遺跡第71次調査

1. はじめに

戎町遺跡は、須磨区平田町・飛松町・戎町に広がる遺跡で、弥生時代～中世に至る複合遺跡である。本遺跡は、旧妙法寺川が形成した自然堤防と後背湿地に立地しており、弥生時代を通して豊富な遺構・遺物が検出されている。なかでも第1次調査では、弥生時代前期後半の水田が検出されており、近畿地方における弥生文化導入期の様相を考える上で重要な成果を挙げている。

今回の調査対象地は、当初埋蔵文化財包蔵地外であった。開発事業に基づき、試掘調査を実施した結果、現況 G.L.-1.6 m で遺物包含層が確認された。今回の工事計画は、複合施設建築工事に伴うものであり、埋蔵文化財に影響がおよぶ範囲を発掘調査した。

2. 調査概要

調査地は、昭和時代初期から続く板宿商店街の一角に位置する (fig.223)。試掘調査の結果、既存建物建設による攪乱が広範囲に及ぶ事が予想された。埋蔵文化財への影響がない盛土と攪乱土を事前に G.L.-1.4 m まで残土処分した後、改めて遺物包含層直上まで重機による掘削を行った。

発掘調査は、残土置場の都合上、調査区を東西に分割し、東側を1区、西側を2区とし、1区から順次調査を実施した (fig.224)。



fig.223 調査地位置図

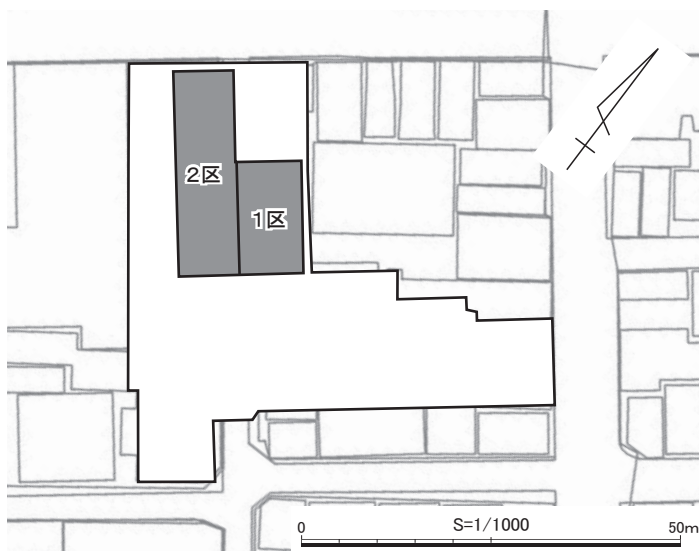


fig.224 調査区配置図

3. 第1遺構面の概要

中世以降の湿地状堆積と溝を数条検出した (fig.226)。自然流路埋没後、調査区全域が湿地となっており、精良な粘土またはシルトが堆積している。人と偶蹄目の足跡、溝を数条確認している。このことから耕作地として利用されていた可能性があるが、畦畔等の遺構は確認されなかった。遺物は出土していないが、中世の自然流路埋没後に形成されていることから、中世～近世に至るまで、湿地であったと考えられる。

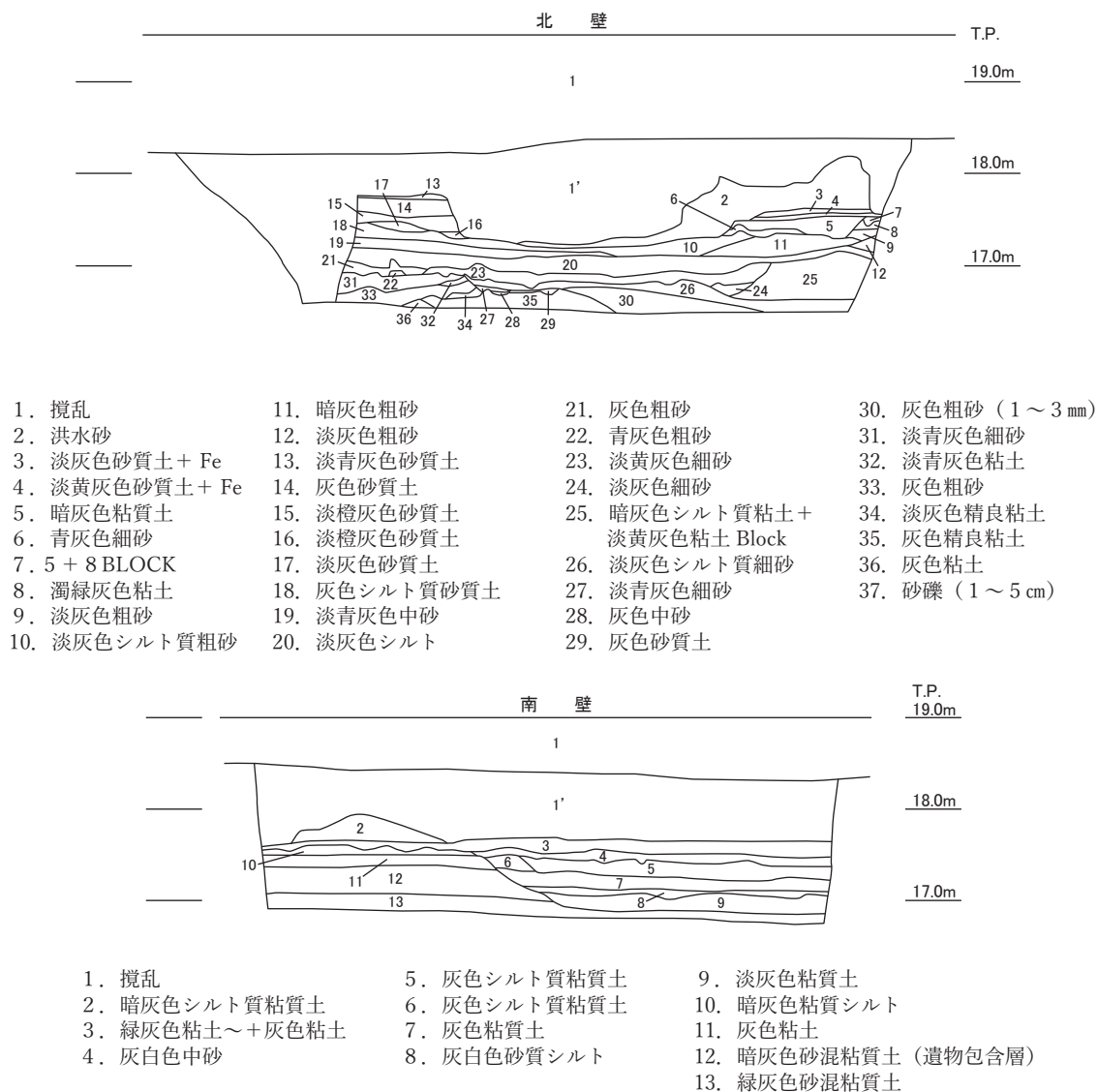


fig.225 上段：2区北壁土層断面・下段：2区南壁土層断面 (S = 1 / 80)

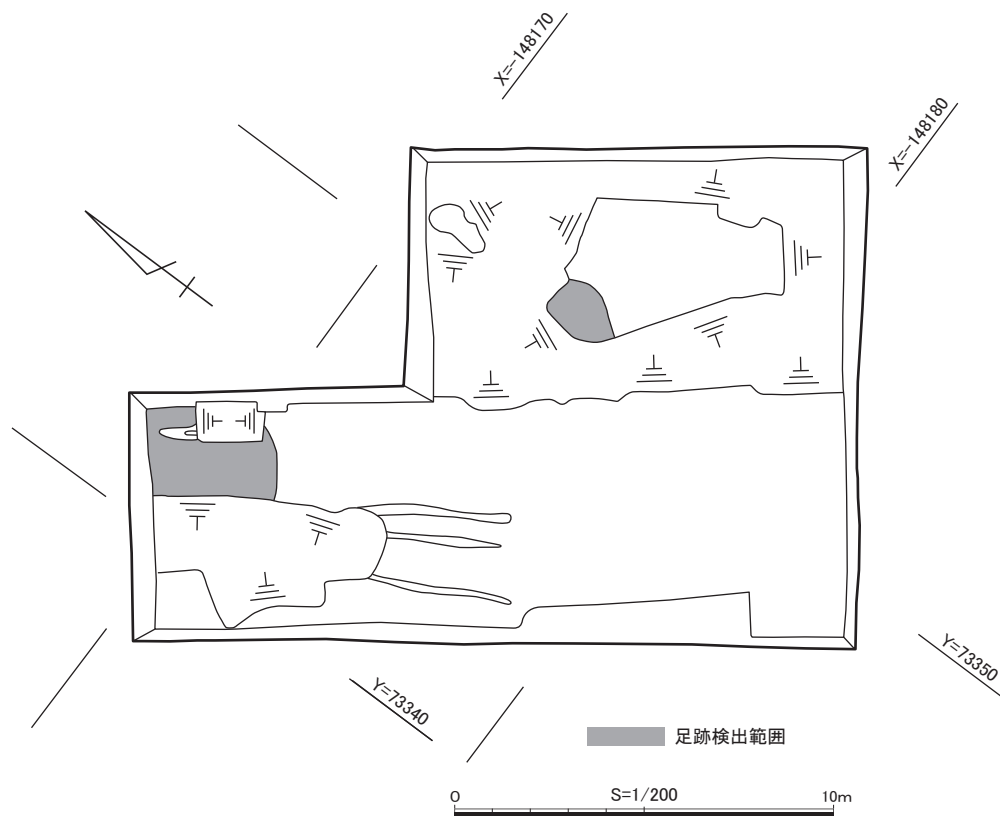


fig.226 第1遺構面遺構配置図

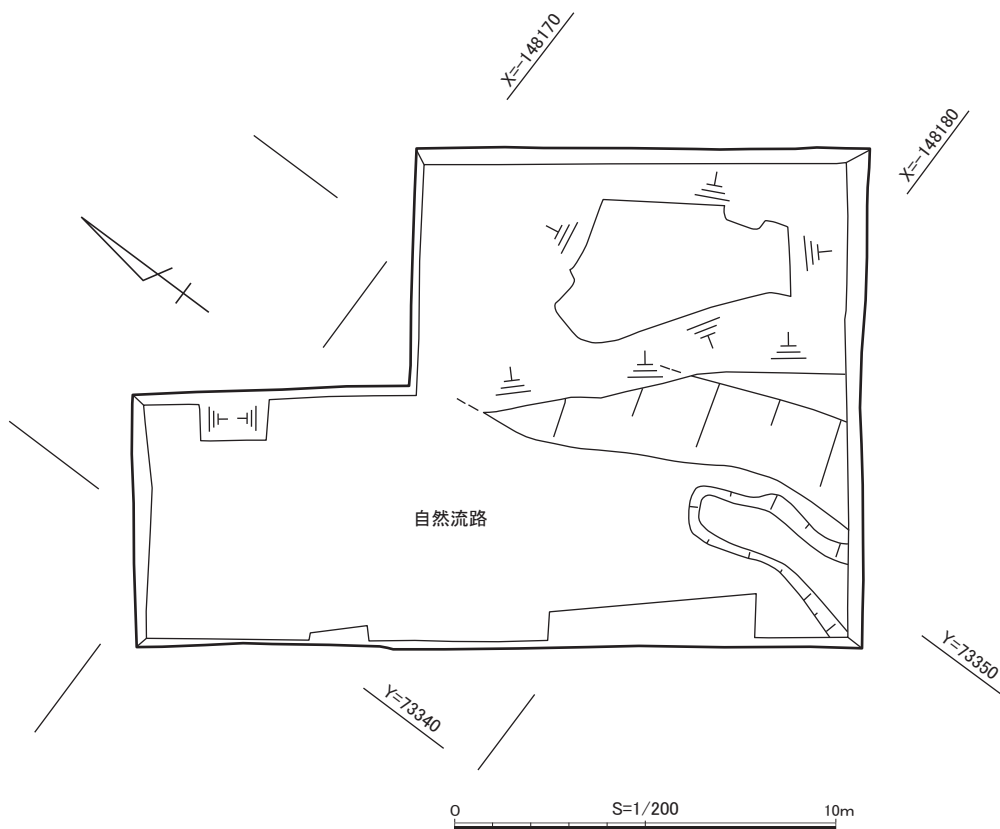


fig.227 第2遺構面遺構配置図

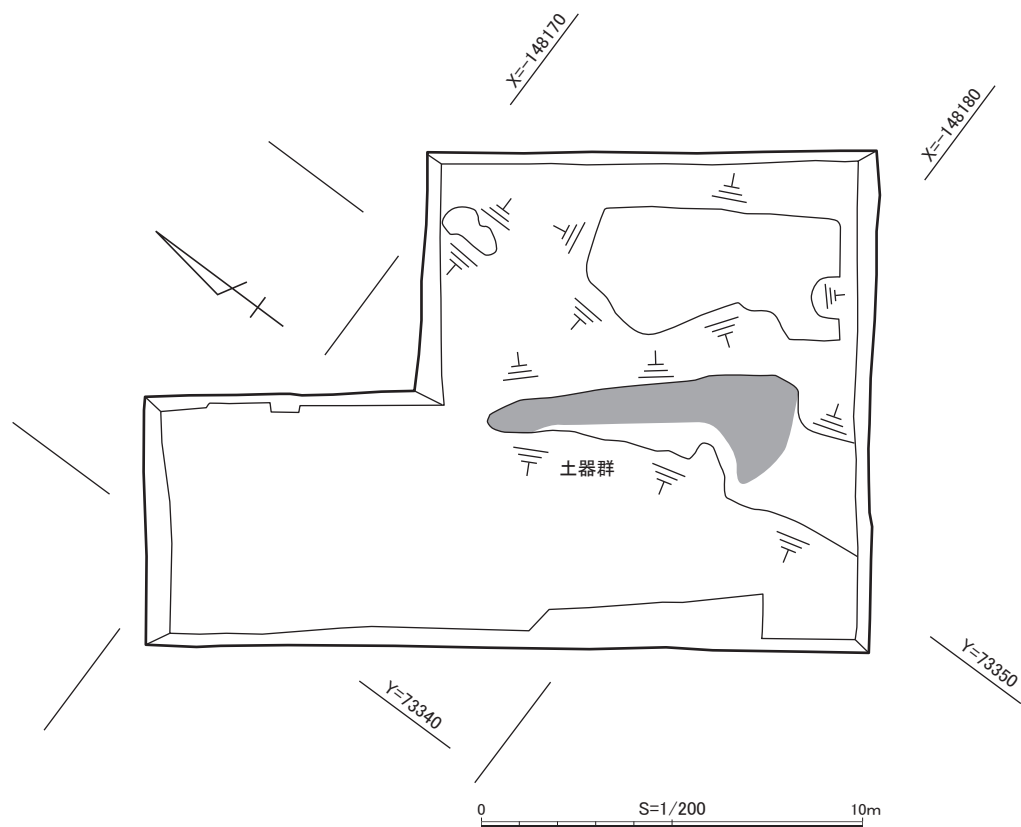


fig.228 第3遺構面遺構配置図

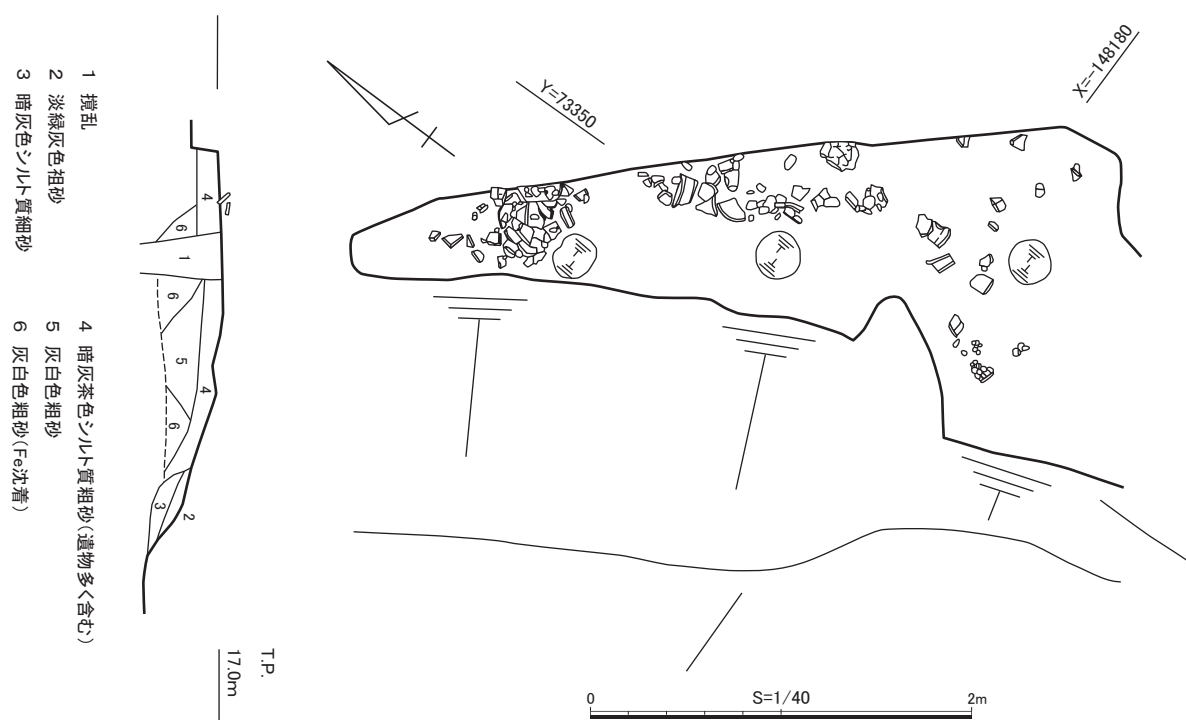


fig.229 第3遺構面土器群出土状況

4. 第2遺構面の概要

2区で自然流路の一部を検出した (fig.227)。2区のほぼ全域が南へ流れる自然流路内に収まる。南端部では、流路の東肩の一部が検出された。流路の西肩は、調査区内で検出されなかった。流路は、幅7 m以上、深さ70 cm以上である。流路内の堆積土は、細砂とシルトが水平に堆積していたことから、滞水状態か緩やかな流れであったと考えられる。流路底付近からは、中世の須恵器と土師器が少量出土した。

5. 第3遺構面の概要

弥生時代中期後半の遺構面である。攪乱および中世の自然流路によって、遺構面の大半は失われていたが、2区の南東部で遺物がまとまって出土した (fig.228)。2区南端部で検出した土器群は、その出土状況から、原位置で投棄されたものと考えられる (fig.229)。凹線を巡らす高坏や受口壺等が出土しており、すべて弥生時代中期後半の遺物と考えられる。遺物の検出範囲は、後世の攪乱や自然河道の影響により約3 m²に留まるが、本来は、周辺に広がっていたと考えられる。

6. まとめ

今回の調査で、戎町遺跡の範囲が北東側に拡がることが確認された。今回検出した弥生時代中期後半の遺構面は残存状況が悪いものの、遺物の出土状況から、生活域が近隣に存在したと考えられる。弥生時代中期後半以降は、自然流路と湿地が広がり、居住域には適さない地域であったと考えられる。東側に隣接する飛松町遺跡が当該地より高位に立地することから、中世の生活域は、当該地の北東側に展開すると考えられる。

戎町遺跡におけるこれまでの調査成果から、遺跡の北側は、弥生時代後期～庄内式併行期の遺構が多く、弥生時代中期以前の遺構は、遺跡の南側に多い傾向がある。今回の調査で、弥生時代中期後半の集落が遺跡の北端まで広がっていることが確認され、当遺跡における弥生時代中期の集落の展開を考える上で、新たな知見を得ることができた。

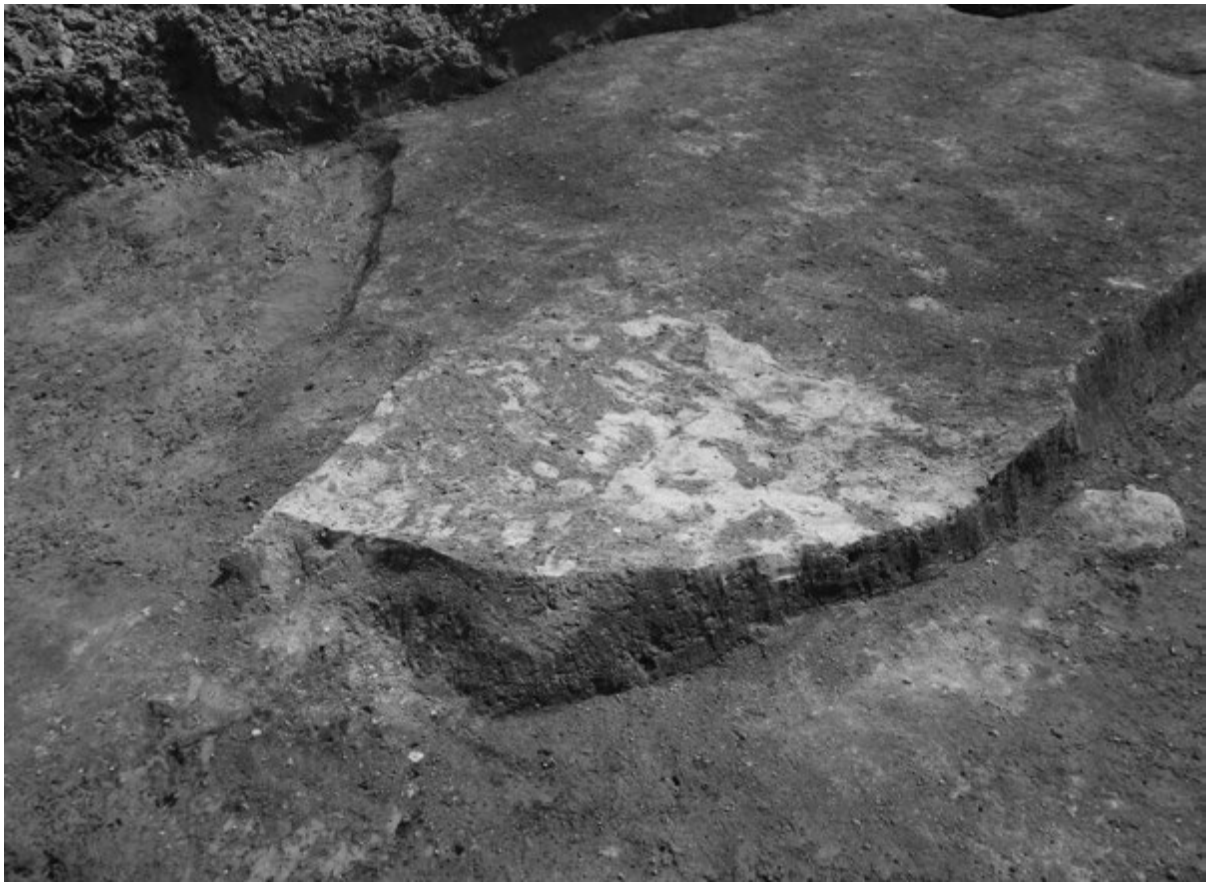


fig.230 1区第1遺構面足跡検出状況（西から撮影）



fig.231 2区第2遺構面遺物出土状況（南東から撮影）

28 戒町遺跡第72次調査

1. はじめに

戒町遺跡は、妙法寺川が形成した扇状地末端および自然堤防上に立地する遺跡である。これまでに71回の発掘調査が行われており、弥生時代～中世の複合遺跡であることが判明している。

今回の調査は、共同住宅建設工事に伴うものであり、試掘調査の結果から弥生時代の遺構面と遺物が発見されたため、工事影響範囲について発掘調査を実施した（fig.232）。

発掘調査完了後は、神戸市埋蔵文化財センターにおいて出土遺物の整理作業と発掘調査報告書の作成を行った。その成果については、令和3（2021）年刊行の『戒町遺跡第72次発掘調査報告書』で報告している。

2. 調査概要

発掘調査は、第1遺物包含層上面までを重機で掘削し、以下の遺物包含層掘削、遺構面検出、遺構掘削等は人力で行った。調査区は、北半側を1～5区、南半側を6・7区として設定した（fig.233）。遺構番号は、遺構検出順に付しているため、同一面であっても遺構番号は連続していない。遺構・遺物の記録図化にあたっては、調査地内に測量用基準点を設置し、それをもとに図化を行った。遺構・遺物の記録写真は、35mmカメラ・125mmカメラ・デジタルコンパクトカメラを用いた。



fig.232 調査地位置図

3. 基本層序

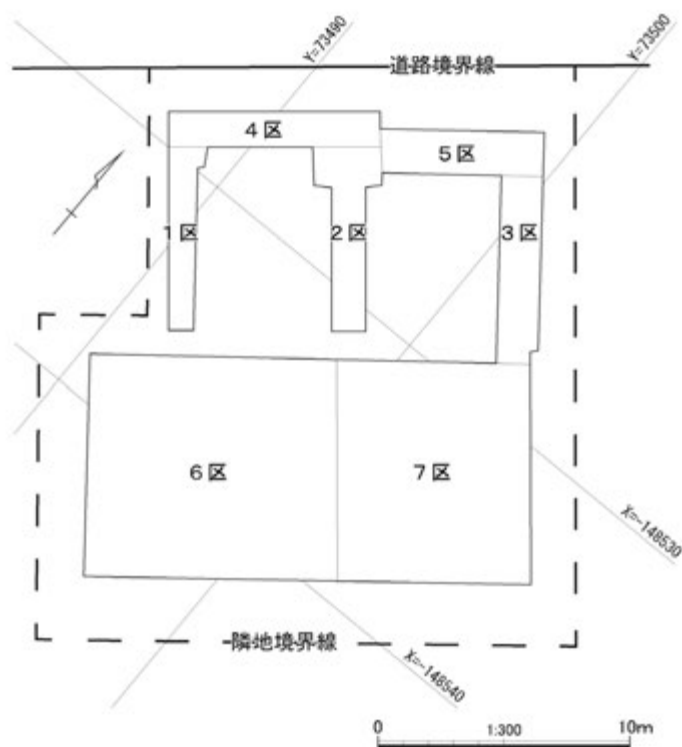


fig.233 調査区配置図

現況地表面の標高は、標高 14.9 ～ 15.0 m を測る。層序は、上層より盛土・旧耕土→暗灰黄色・灰黄色・黄褐色・にぶい黄色・オリーブ褐色シルト質土～砂質土（第 1 遺物包含層）→黒褐色粘質土層（本土層の上面が第 1 遺構面・第 2 遺物包含層）→暗褐色～暗オリーブ褐色粘性砂質土（本土層の上面が第 2 遺構面・第 3 遺物包含層）→黒褐色粘性砂質土・暗オリーブ褐色粘質土（本土層の上面が第 3 遺構面・第 4 遺物包含層）→洪水砂層→黄色砂質シルト（本土層の上面が第 4 遺構面）→青灰～灰色粘質土～シルト質土→緑灰～灰オリーブ色粘質土の順に堆積する (fig.234・235)。

第 3 遺構面は、4 区と 6・7 区の

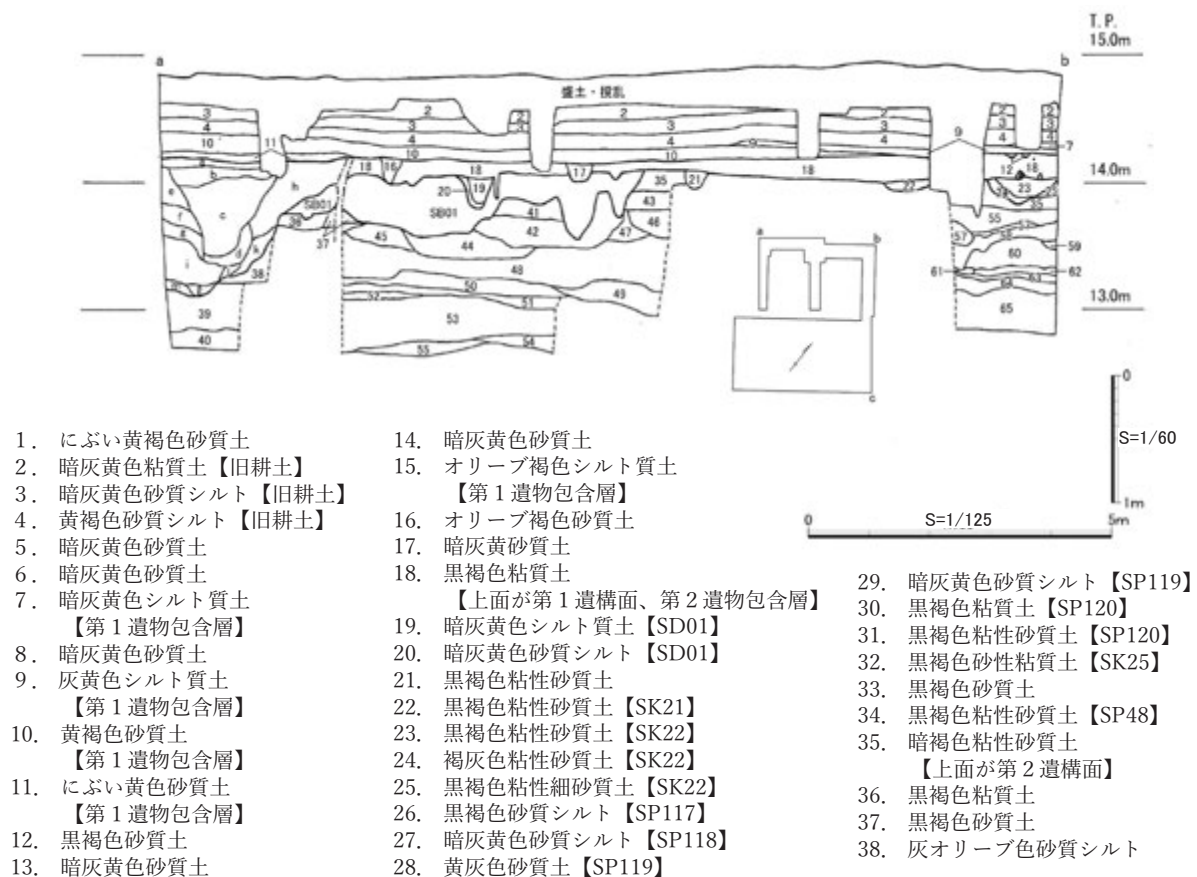


fig.234 調査区北壁土層断面

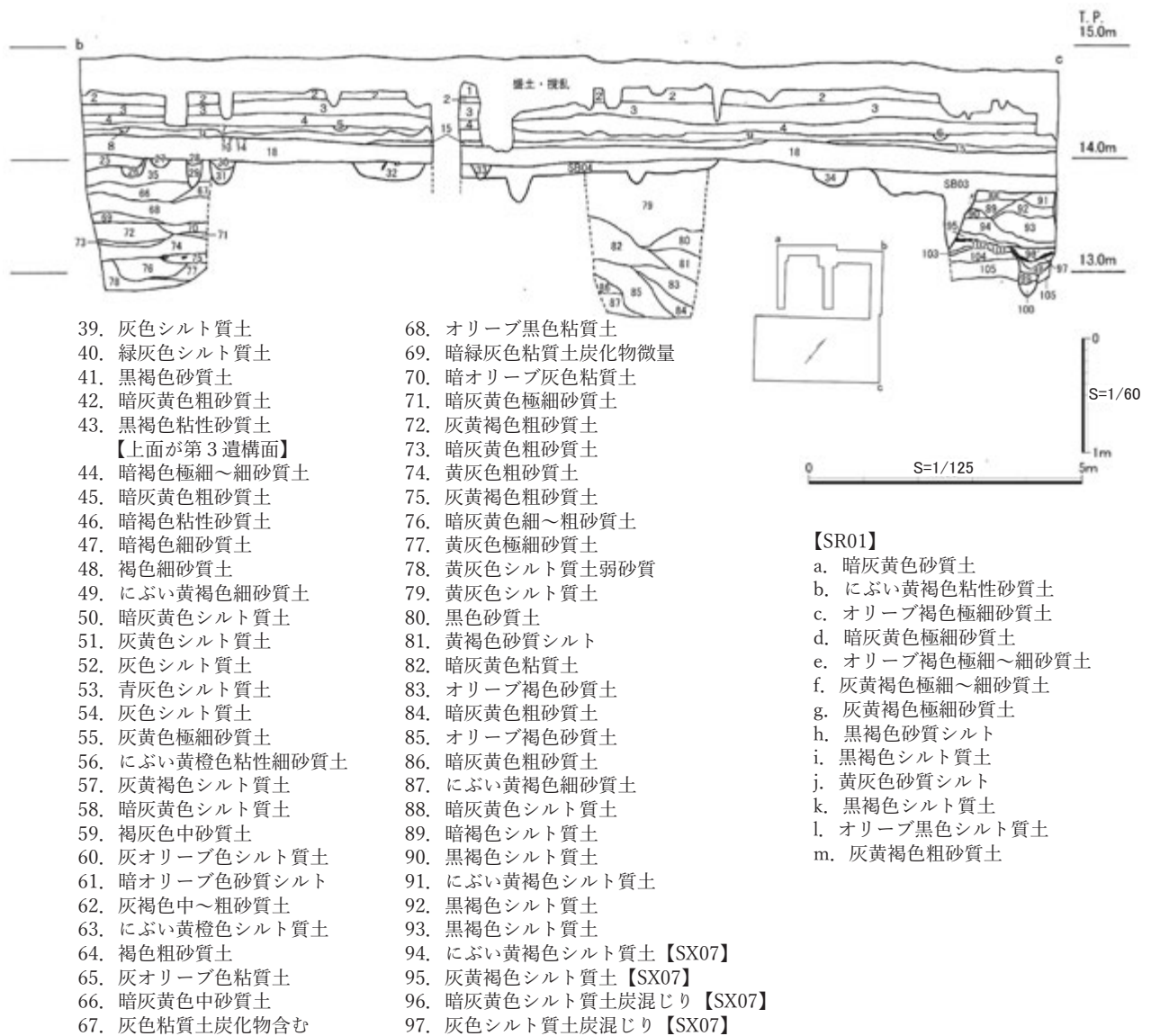


fig.235 調査区東壁土層断面

一部にのみ残存し、第4遺構面は、7区南トレンチでのみ検出しており、それ以外では確認されなかった。

4. 第1遺構面の概要

中世の遺物を含む暗灰黄色・灰黄色・黄褐色・にぶい黄色・オリーブ褐色シルト質～砂質土（第1遺物包含層）を掘削し、黒褐色粘質土上面で検出した遺構面である。下層の遺構面に比べて遺構密度は低いものの、溝（SD）5条、土坑（SK）1基、ピット（SP）3基、性格不明遺構（SX）3基、自然流路（SR）1条を検出した。遺構面上および遺構内より出土した遺物から、第1遺構面の時期は、庄内式併行期～古墳時代後期の遺構面と考えられる（fig.236）。

SD01 4区・2区・7区を南北方向に縦断する溝である。幅0.7m、深さ0.3mを測る。溝の断面形状は緩いV字形で、溝西側の傾斜はやや強い。溝を掘削した際の鍬先が入った痕跡を一部で確認した。本遺構からは、土師器、弥生土器、サヌカイト片が出土した。

SX01 2区・4区にかけて検出した性格不明遺構である。調査区外に広がるため、

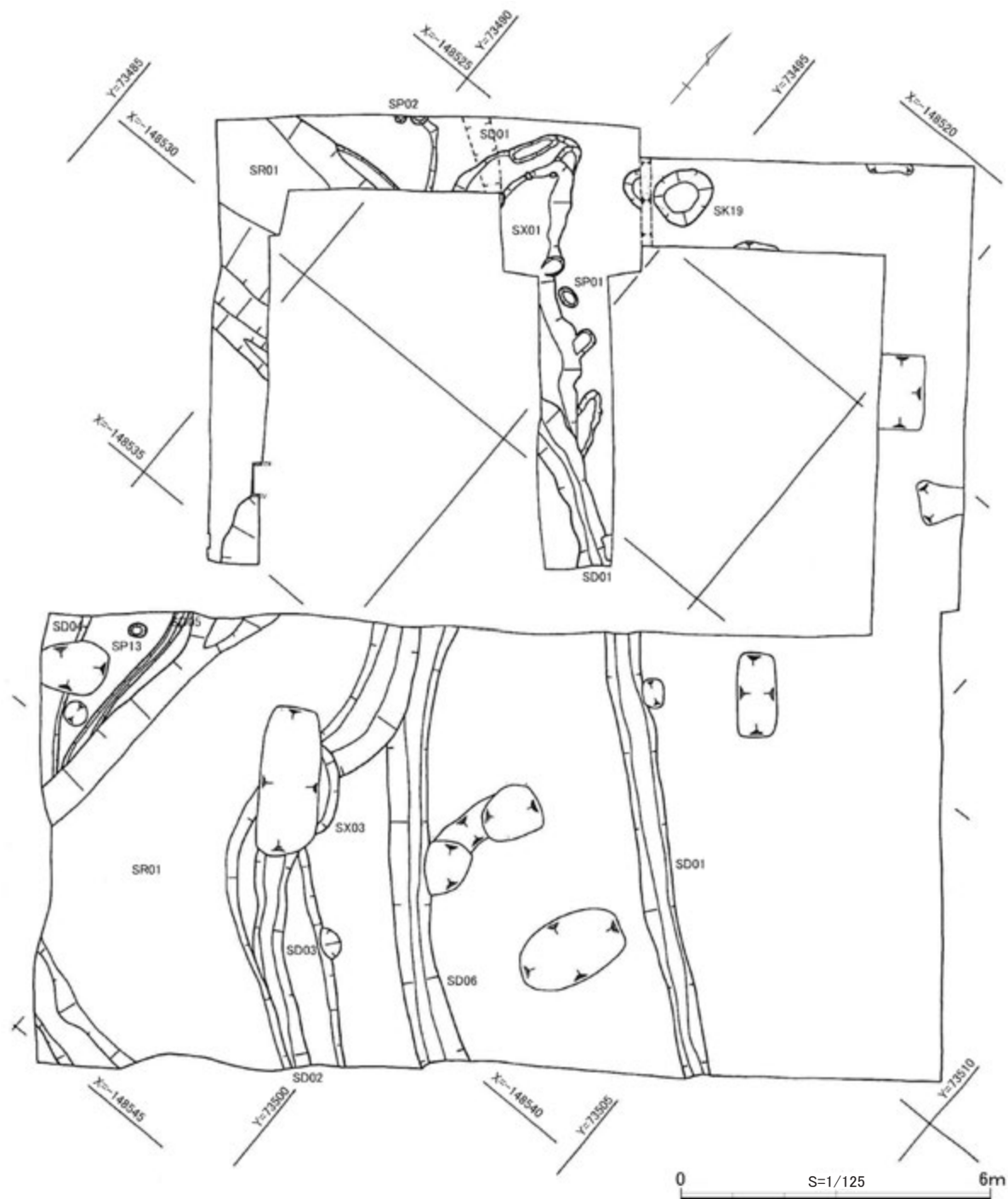


fig.236 第1遺構面遺構配置図

遺構の平面形は不明である。最深部で0.15 mを測る。本遺構からは、土師器、弥生土器、打製石鏃、磨製石斧が出土した。本遺構からは、第1遺構面の時期よりも古い時期の遺物が出土しており、本遺構の西側に隣接するSR01から溢れ出た水流によって遺構面が削られたことでできた落ち込みの可能性が考えられる。

SR01 1区西側から6区南側にかけて検出した調査区の北西～南方向へ流れる自然流路である。最大幅4.8 m、最深部1.1 mを測る。6区西側・1区・2区の間地点で屈曲すると推測され、調査区内を蛇行して流れる。6世紀代の須恵器が出土していることから、

この時期を上限とする流路と考えられる。

墳砂 SB01 の西側で検出した。噴砂は、北西～南東方向へ 0.7 m は噴出している。第 1 遺構面まで噴出しているものの、中世の遺物を含む第 1 遺物包含層にまで及んでいないため、中世以前に発生した地震痕跡と考えられる。

5. 第 2 遺構面の概要

庄内式併行期および弥生時代後期～中期の遺物を含む黒褐色粘質土（第 2 遺物包含層）を掘削し、暗褐色～暗オリーブ褐色粘質土上面で検出した遺構面である。竪穴建物（SB）

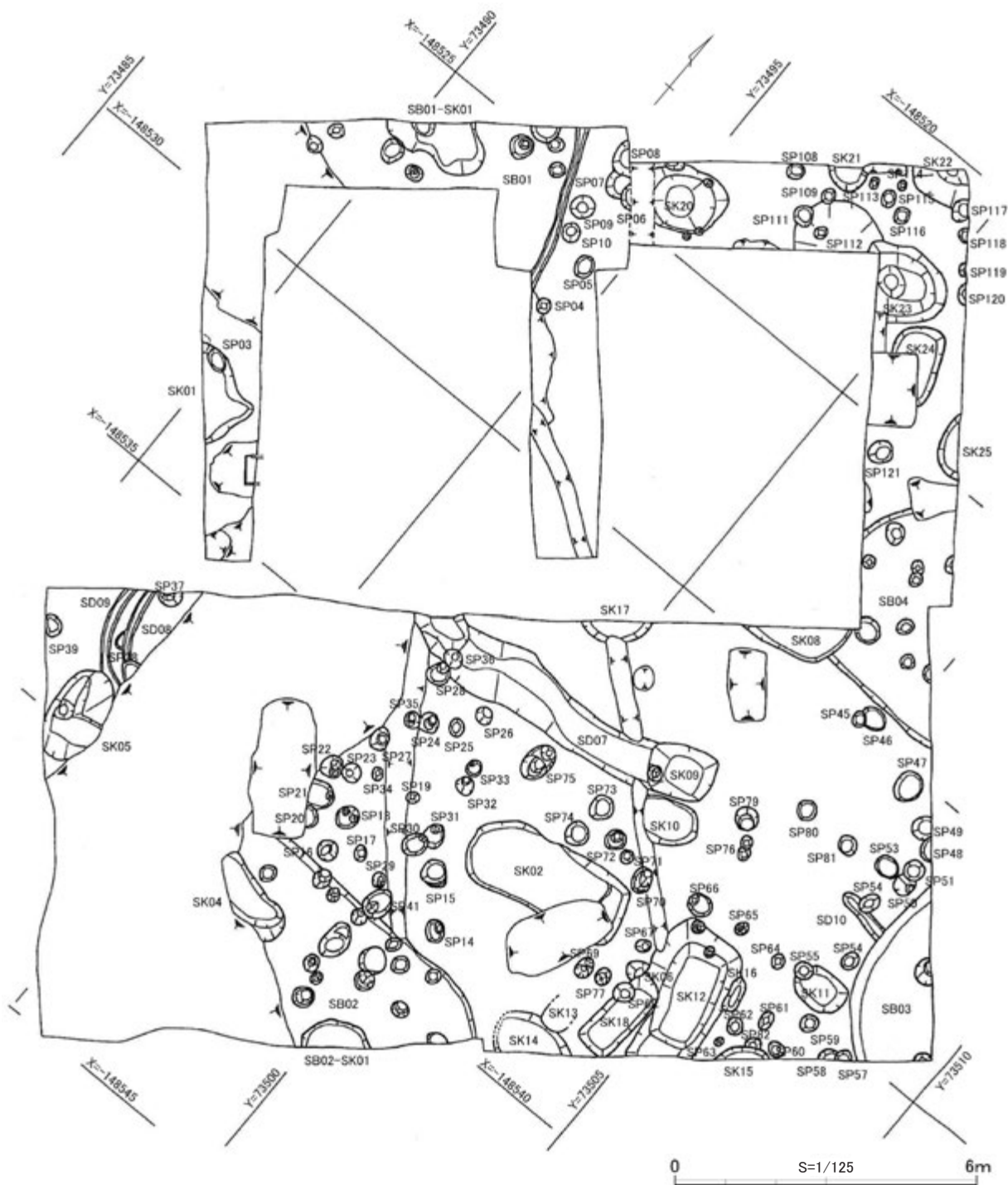


fig.237 第 2 遺構面遺構配置図

4 棟、溝 4 条、土坑 23 基、ピット 87 基、性格不明遺構 3 基を検出した。遺構面上および遺構内より出土した遺物から、弥生時代中期後葉（第Ⅳ様式）～庄内式併行期の遺構面と考えられる（fig.237）。

SB01 2 区の西側と 4 区の全域で検出した竪穴建物である。遺構の大部分が調査区外にかかり、西側は後世に形成された SR01 によって削平されていたため、その規模は不明である。本遺構の平面形は、周溝の形状から方形と推測される。一辺の大きさは、北西―南東方向で 5.7 m 以上を測る。検出面から床面までの深さは、0.15 m である。床面からは、土坑 1 基、ピット 7 基を検出した。東側の壁際では、幅 0.15 m、深さ 0.1 m の周溝を確認している。遺物は、埋土・床面・土坑内等から弥生土器やサヌカイト製打製石鏃が出土している。出土遺物の様相から庄内式併行期のものと考えられる。

SB01-SK01 SB01 の北壁側で検出した直径 1.8 m、深さ 0.45 m の土坑である。検出位置から本竪穴建物の中央土坑と考えられる。本土坑上層からは、28 ℓ コンテナ 2 箱にのぼる土器がまとまって出土した。出土した土器のうち、上層出土の土器と、床面上出土の土器とが接合関係にあるものを複数点確認できたことから、ほぼ一括で廃棄されたものと考えられる。

SB02 6 区の南側で検出した竪穴建物である。遺構の南半側が調査区外にかかるため規模は不明であるが、本遺構の平面形は、隅丸方形ないし円形と推測されることから、一辺 6.3 m 以上と考えられる。検出面から床面までの深さは 0.2 m である。建物床面からは、土坑 1 基、ピット 15 基を検出した。壁際の周溝は検出できなかった。遺物は、埋土・床面・土坑内等から弥生土器、蛸壺、打製石鏃、石包丁が出土した。出土遺物の様相から弥生時代中期後葉（第Ⅳ様式後半）のものと考えられる。

SB02-SK01 SB02 の南側調査区壁際で検出した土坑で、残存径 1.4 m、深さ 0.15 m を測る。SB02 の中央土坑と考えられる。本土坑内からは、甕が出土した。

SB03 7 区南東部で検出した竪穴建物である。南北 3.9 m 分を検出しており、その平面形は円形と考えられるが、大部分が調査区外の東側へ続くため、全体の規模は不明である。検出面から床面までの深さは 0.2 m である。床面からは、柱穴を 2 基検出した。周壁溝は確認していない。弥生時代中期の土器が出土したが、全容のわかる土器は少ない。

SB04 3 区と 7 区の境で検出した。南西隅は、SK08 に切られている。調査区外の東側へ拡がるため、全体の規模や形状は不明である。建物の平面形は、7 区での検出範囲ではやや直線的に、3 区では緩やかに弧を描く。周辺調査で検出されている竪穴建物に平面楕円形のものが確認されていることから、SB02 と同様の平面形か、これに類する平面形となる可能性がある。今回の調査では、東西 3.9 m、南北 3.8 m 分を検出した。検出面からの深さは 0.1 m である。

SK02 6 区・7 区で検出した。南側を後世の攪乱により失う。東西 3.5 m、南北 1.5 m、深さ 0.5 m の平面長方形を呈する大型の土坑である。底面には、シルト質砂が 0.1 m 堆積していたが、底面から遺物は出土していない。シルト質砂の上には砂質土が堆積しており、この埋土から弥生土器や大型の砥石等が出土した。土坑の東西両端からは、壺等がまとまって出土している。土坑の西側は、壺の底部を上方に向け、打ち割っている状況を確認した。打ち割りに用いたと考えられる砂岩の平石が共伴している。

SK05 6 区北西側で検出した土坑である。長径 1.8 m、短径 1.2 m、深さ 0.4 m を

測る。上端の平面形は楕円形を呈するが、下端は複数の遺構が組み合っている可能性がある。遺構埋土からは、28ℓコンテナ1箱分の弥生土器が出土した。遺構の時期は、弥生時代中期後葉（第IV様式後半）と考えられる。

SK12 7区南壁際で検出した南北3.1m以上、東西1.8mの土坑である。掘り進むうちに、南西部がSK18と重複することが判明した。土坑の最大深は0.4mである。二段掘りの土坑で、検出面から0.2m下がったところに段が付く。内側の長辺2.1m、短辺1.2mの範囲がさらに掘りこまれており、その深さは0.2mである。土坑検出時に比較的大きな土器片が集中する状況を確認している。

SK18 SK12の南西に位置する土坑である。規模は南北1.9m、東西0.8m、深さ0.15mである。2個1対の円形浮文を付した弥生時代中期の壺口縁片等が出土した。

SK20 5区の西側で検出した直径1.5m以上、深さ0.2mを測る円形の土坑である。本遺構は、上層で検出したSK19や、2区東側で検出したSP06～08と同一の遺構である可能性が高い。遺構の下層から土師器がまとまって出土した。

ピット 6区の東から7区の西側、7区の南側で検出した。SB03とSK12の間で検出したピットは、遺構検出時に比較的大きめの土器片が出土している。検出したピットの多くは、上方が南側、下方が北側へ傾斜した状態であり、地滑りや地震、埋設された柱根への圧力等の要因で傾斜したと考えられる。なお、建物等を構成する状況は確認できなかった。

6. 第3遺構面の概要

第2遺構面の基盤層である暗褐色～暗オリーブ褐色粘質土以下は、安定性を欠く土層であるため、調査区の大部分で第3遺構面を確認できなかった。しかし、4区の黒褐色粘性砂質土上面、6区と7区南側の暗オリーブ褐色土上面で第3遺構面を検出した。本遺構面からは、竪穴建物1棟、溝2条、土坑2基、ピット14基、性格不明遺構1基を検出した。遺構内より出土した土器から、弥生時代中期後葉（第IV様式）の遺構面と考えられる（fig.238・239）。

SB05 6区と7区の南側にまたがって検出した竪穴建物である。遺構の大半が調査区外へ広がるほか、東西ともに上層遺構や攪乱の影響を受けているため、その平面形は判然としない。ただし、少なくとも3m以上の規模であったと考えられる。本遺構内からは、溝2条、土坑2基、ピット10基を検出した。埋土や床面上から甕や壺の破片が出土しており、その様相から弥生時代中期後葉（第IV様式）の建物と考えられる。

SD11・12 いずれも幅0.1mほどの細い溝で、SD11が南北方向、SD12が東西方向へ延びる溝である。上層遺構や攪乱の影響により、検出範囲は狭い。SD12は低い段落ちに沿っ

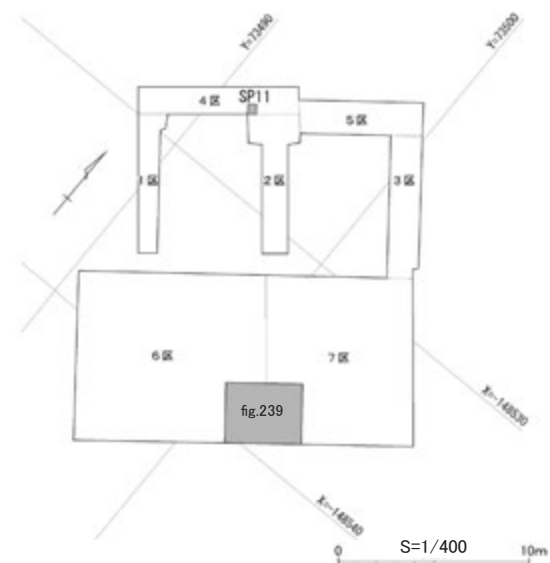


fig.238 第3遺構面図化場所位置図

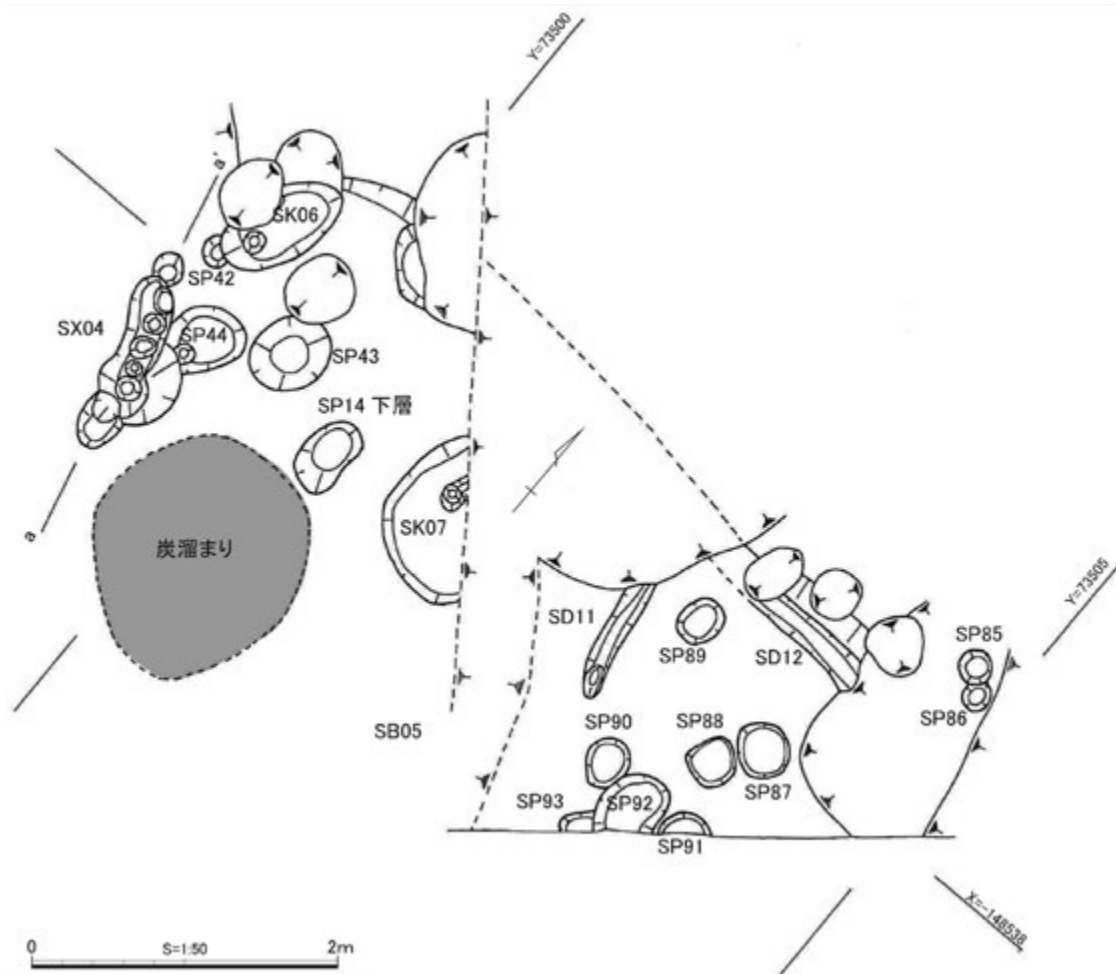


fig.239 6・7区第3遺構面遺構配置図

ており、この段落ちが竪穴建物 SB05 の北辺掘形と考えられる。6区南東部にも同様の堆積が続き、これらの範囲が SB02 に先行する竪穴建物 SB05 であった可能性がある。6・7区で柱穴と考えられるピットを検出したほか、6区では、炭の細粒を含む浅い落ち込みを検出している。SD11 は、SB05 床面の仕切り溝となる可能性がある。

SX04 直径 10～15 cm、深さ 5～15 cm 程度の小ピットが 5 つ並列して穿たれた溝状の遺構である。本遺構は、SB02 の北隣に位置するが、第 2 遺構面上では検出できなかったことから、第 3 遺構面に属するものと考えられる。また、SB05 とも隣接しているが、SB05 に伴うものかは不明である。本遺構内からは、弥生土器と杭が直立した状態で出土した。杭が残存することと、ピットが並列する状況から、この小ピットは、杭列を構成するものと考えられる。

SP11 4区西側で検出した直径 0.4 m、深さ 0.1 m のピットである。壺の頸部片や底部片が出土している。

7. 第 4 遺構面の概要

7区では、南東部（南トレンチ）と北東部（北トレンチ）の 2ヶ所にトレンチを設け、下層確認を行った。このうち、南トレンチの洪水層下で薄い炭層の堆積を検出した。炭層は、東から 8 m の範囲で検出し、下面は、黄色砂質シルト層の安定した地盤であった。被熱痕

跡や複数の遺構を検出したことから、本土層上面を第4遺構面として調査を行った。本遺構面では、溝2条、ピット13基、性格不明土坑3基を検出した（fig.240～242）。

SD13 トレンチの中央で検出した東西方向の溝である。幅0.7～1.2 m、深さ0.2 m、灰色細砂や褐色粗砂が堆積する。本遺構は、弥生時代中期の洪水に伴うもので、出土遺物は、

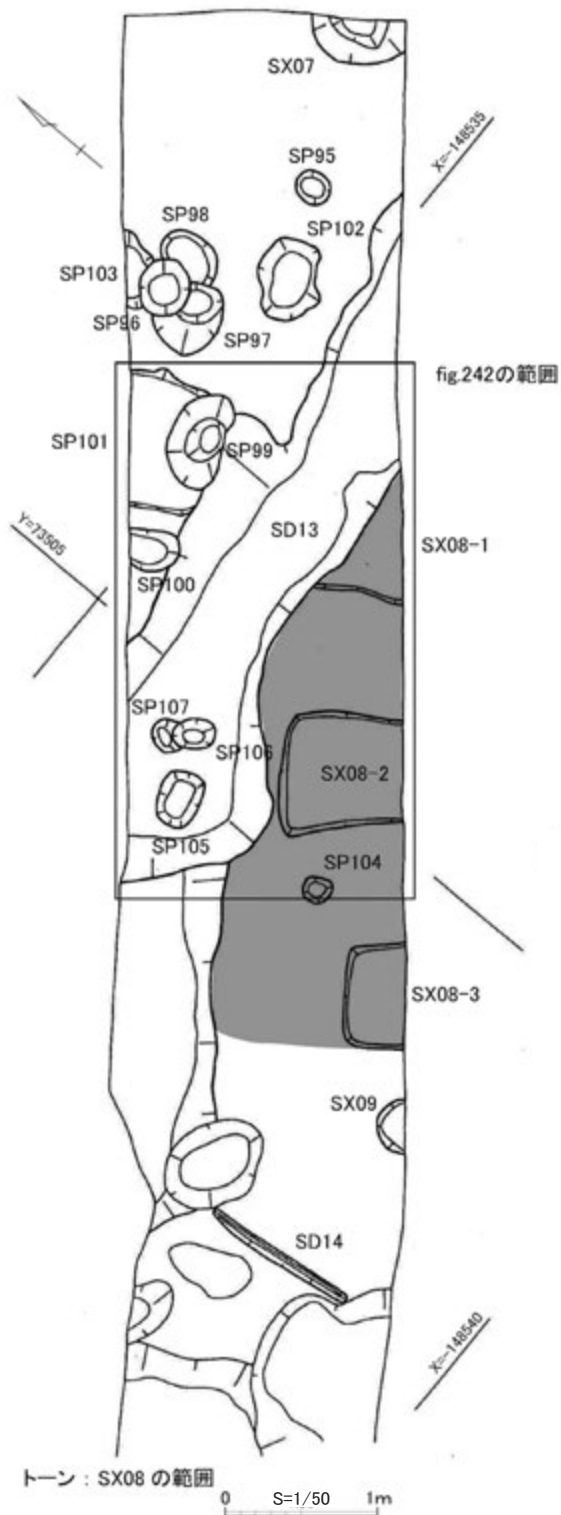


fig.241 7区南トレンチ
第4遺構面遺構配置図



fig.240 下層トレンチ配置図

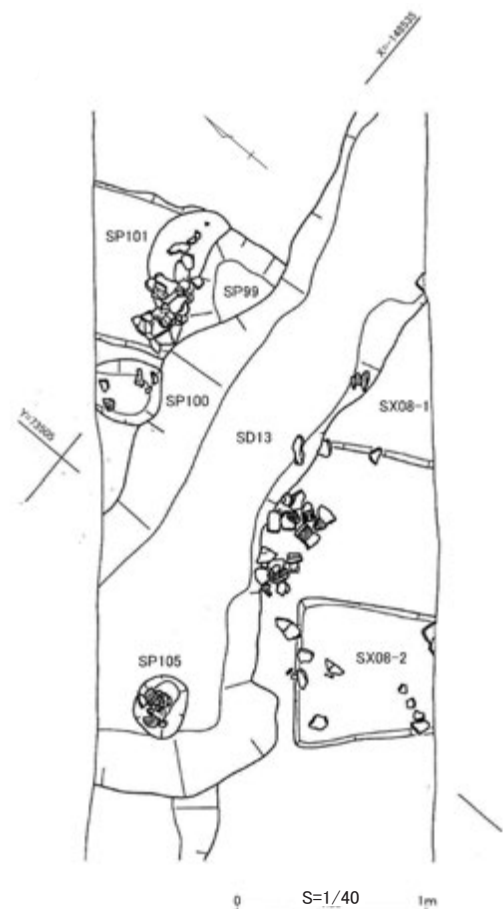


fig.242 7区南トレンチ
第4遺構面土器出土状況

弥生時代前期後半～中期初頭のものが多く、上層の洪水層とともに、わずかながら弥生時代中期の土器片も出土している。

SX08 SD13の南側に堆積した炭層下で検出した被熱痕跡で、炭の分布と被熱が顕著に残る範囲をSX08とした。検出範囲は、東西4 mで、調査区外の南側へ広がると考えられる。範囲内からは炭の堆積する平面方形の浅い落ち込みを3カ所検出し、東からSX08-01・02・03とした。このうちSX08-02は、検出長が南北0.9 m、東西0.7 mで、底部中央に円形に変色した被熱痕跡が残っていた。SX08-02北側にあたるSD13の掘形から弥生時代前期末～中期初頭に属する大型広口壺の胴部片が出土した。SX08-01とSX08-02の間の南壁際では、熱を受けた状態の壺の胴部片が出土しており、付近で火が焚かれた痕跡と考えられる。SX08-02とSX08-03の周囲には、焼骨片が散らばっていた。焼骨片を鑑定した結果、シカの角、中支骨の破片等が含まれていた。また、採取した土壌を水洗選別した結果、281粒の炭化米が出土した。

8. 下層確認トレンチの概要

1区、2区、4区、5区東端、6区南西部、7区南東部（南トレンチ）、同区北東部（北トレンチ）の7カ所で下層確認のトレンチ調査を行った。第2・第3遺構面を形成する暗褐色～暗オリーブ褐色粘性砂質土の下にシルト層と砂層が互層に堆積し、上層遺構面から0.4～0.6 mほど下がった灰色～青灰色シルト層面の一部で遺構を検出した。シルト層の上面標高は、1区北端が13.4 m、南端が13.4 m、5区東端が13.6 m、7区北東部が12.8 m、7区南東部が13.3 m、6区南西部が12.8 mである。北側と南東側が高く、それ以外の部分は、流路の影響等で下がり地形となることから、湿地状の堆積が形成されていたと予測される。

遺構は、7区で検出した。それ以外の調査区では、落ち込みないし溝状と考えられる遺構を2・4区境、7区北東部、7区南東部、6区南西部で確認した。また、6区の試掘坑断面でも浅い落ち込みを確認している。灰色～青灰色シルト面に形成された黒色シルトや暗灰色シルトを埋土とする浅い落ち込みから土器が出土しており、土坑として掘削されたというよりは、自然地形の窪みに土器が溜まったものと考えられる。この窪みは、弥生時代前期末～中期初頭にあたる。

7区北トレンチは、東西3 m、南北1.5 mのトレンチを設定して下層確認を行った。トレンチ東半は、洪水層により大きく削られる。トレンチ西側では灰色シルト面を検出し、この面からピット3基を検出した。ピット内からは、弥生土器と木片、種子等が出土している。遺構の時期は、弥生時代前期末～中期初頭とみられる。

9. まとめ

今回の調査では、庄内式併行期～古墳時代後期の遺構面（第1遺構面）、弥生時代中期～庄内式併行期の遺構面（第2遺構面）、弥生時代中期の遺構面（第3遺構面）、弥生時代前期末～中期初頭の遺構面（第4遺構面）と、それらに伴う遺物を得た。

竪穴建物は、第IV様式のを3棟検出した。戎町遺跡においては、第III様式に比して第IV様式の遺構が少ない状況であったが、本調査の結果は、この間を埋める成果が得られた。

SK02・12・18の周辺では、遺構内とその周辺で土器が破碎された状態で出土している。土器が破碎された状態で出土した状況は、第35・38次調査で確認されており、これらは周

溝墓に伴う土器破碎供献行為と考えられている。本調査で検出した SK02・12・18 が周溝墓を構成するものかは判断できなかったが、その可能性を考慮する必要がある。いずれにせよ、本調査地周辺で周溝墓の発見例はないため、今後の調査によって、墓域の有無が解明されることに期待する。

SX08 では、被熱したシカの角と骨が出土した。魚骨や他の動物骨は含まれていなかったため、SX08 は、生活に伴う投棄遺構ではなく、人為的にシカの角と骨を焼成した可能性が高い。また、炭化米も共に検出されていることから、何らかの目的をもった行為が行われた遺構と考えられる。遺構内からは、弥生時代前期末～中期初頭の土器が出土しているが、これは、第1次調査で検出されている河道出土の土器群と同時期の所産である。遺構内から出土した大型広口壺には、加飾性に富むものや外面調整に特徴があるものが含まれることから、第1次調査の成果と合わせて、六甲山系南麓地域における当該期の土器様式を考えるうえで、重要な資料となり得る。



fig.243 7区遺構面検出状況（西から撮影）



fig.244 5区第2遺構面全景（南西から撮影）



fig.245 6区東側第2遺構面全景（北西から撮影）

29 大田町遺跡第23次調査

1. はじめに

大田町遺跡は、妙法寺川左岸に位置する。標高 13 ～ 15 m の沖積地内微高地上に立地しており、これまでの調査で弥生時代前期～鎌倉時代の遺構と遺物が確認されている。特に、奈良時代～平安時代の掘立柱建物が多く検出されており、黒色土器や緑釉陶器、灰釉陶器、「荒田郡」銘の円面硯等が出土している。遺構と遺物の様相から古代山陽道に面した官衙的な性格を有する遺跡と考えられている。

今回の発掘調査は、共同住宅建設工事に伴って試掘調査を行った結果、現況 G.L.-62 cm で遺物包含層を検出し、現況 G.L.-83 cm で遺構面を確認した。そのため、工事によって埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲を発掘調査することとなった。本調査地点は、平成 10（1998）年度に実施されている第 11 次調査地の北隣に位置する（fig.246）。

2. 調査概要

発掘調査は、計画建物の基礎工事で埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲を対象に調査範囲を設定した。東側の調査区を 1 区、西側の調査区を 2 区と呼称する（fig.247）。調査地の標高は、13.6 m である。

発掘調査は、遺物包含層上面までを重機で掘削し、それ以下の土層を人力で掘削した。遺構と遺物の記録図化は、調査地に測量用基準点を設置し、それをもとに図化を行った。記録写真は、35 mm カメラ・120 mm カメラ・デジタルコンパクトカメラで撮影した。

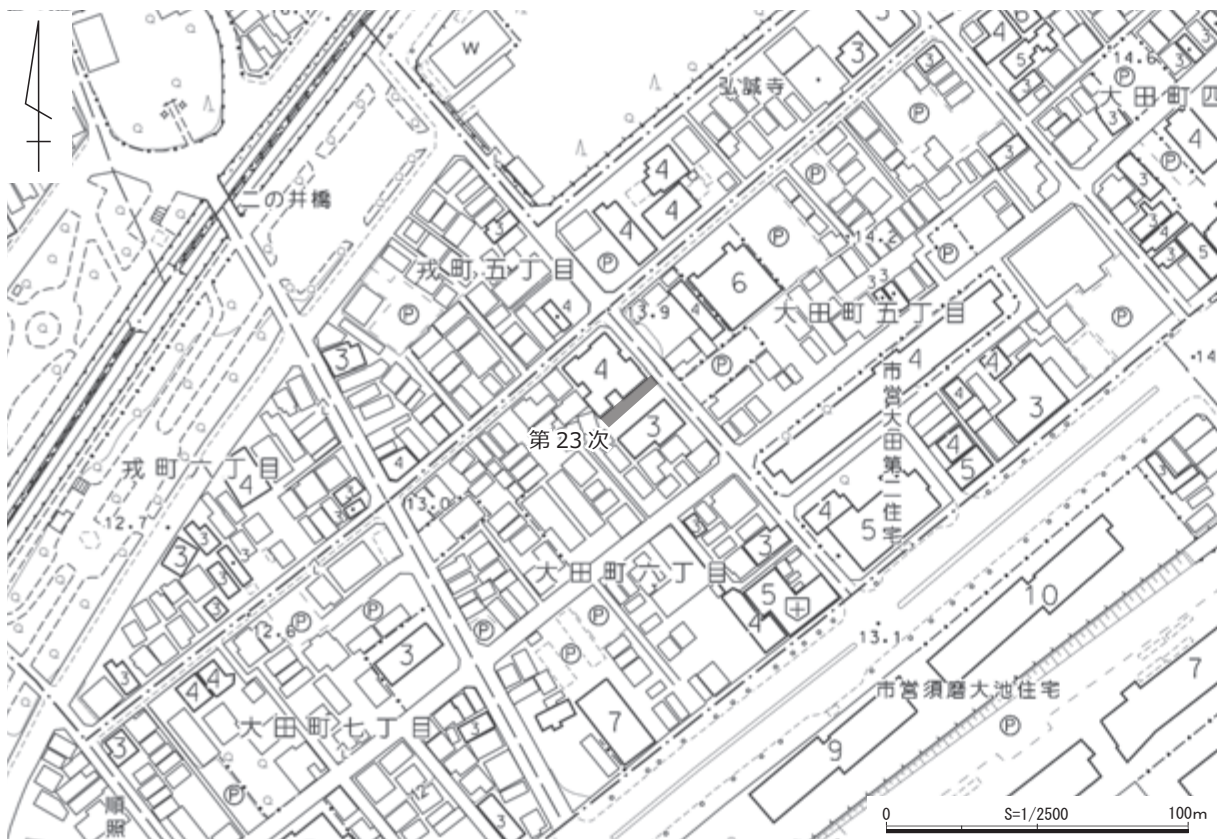


fig.246 調査地位置図

3. 基本層序

層序は、上層より盛土・攪乱土→灰色粘性砂質土（耕土）→浅黄色粘性砂質土→黄灰色～にぶい黄色粘性砂質土（遺物包含層）→黒褐色粘質土～褐灰色粗砂質土（遺構基盤層）→黄灰色～淡黄色粘性細砂質土→緑灰色細砂質土となる。遺構面の標高は、12.8 mである。下層確認のため、一部を深掘すると、にぶい黄色シルト質土→灰色シルト質土→暗灰黄色シルト質土という堆積を確認したが、これらの土層から遺構と遺物は検出されなかった（fig.248・249）。

4. 遺構面の概要

土坑（SK）3基、柱穴・ピット（SP）12基、溝（SD）4条を検出した（fig. 3・4）。

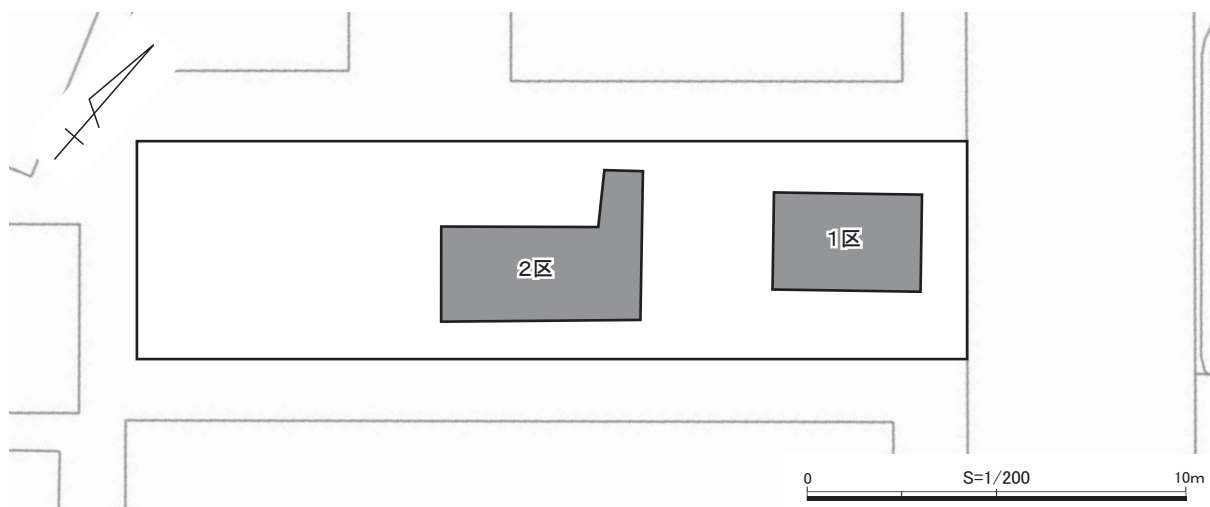


fig.247 調査区配置図

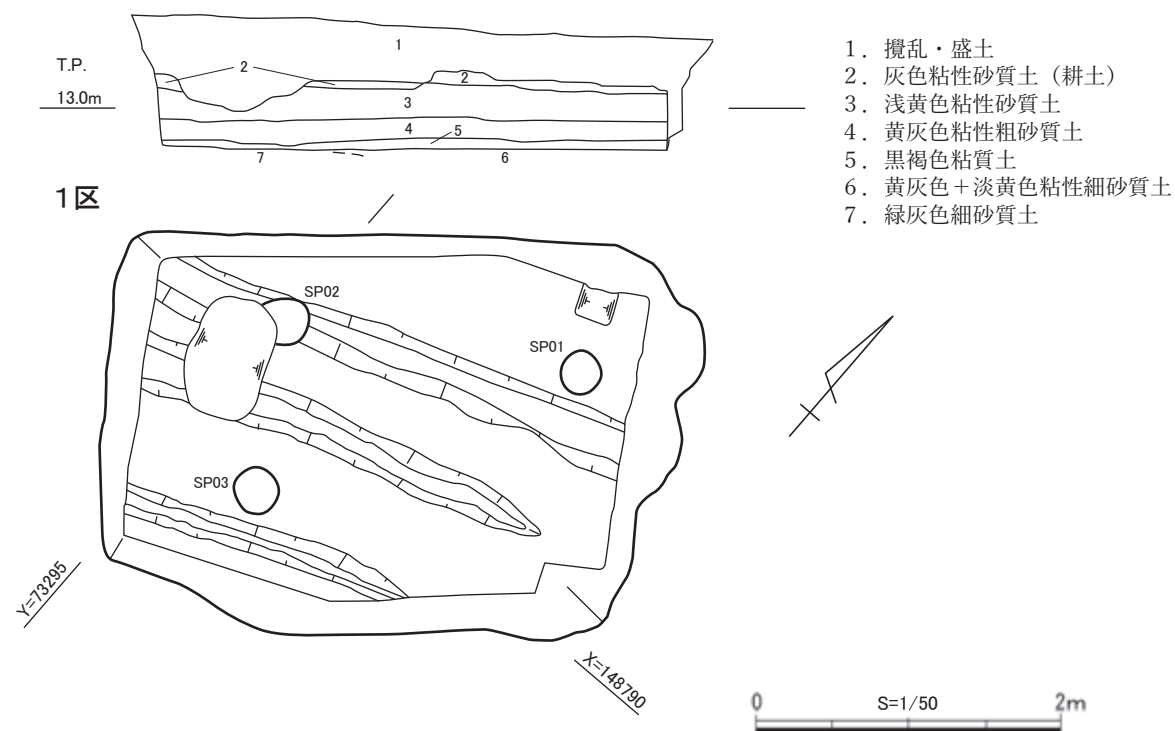


fig.248 1区遺構面遺構配置図・土層断面図

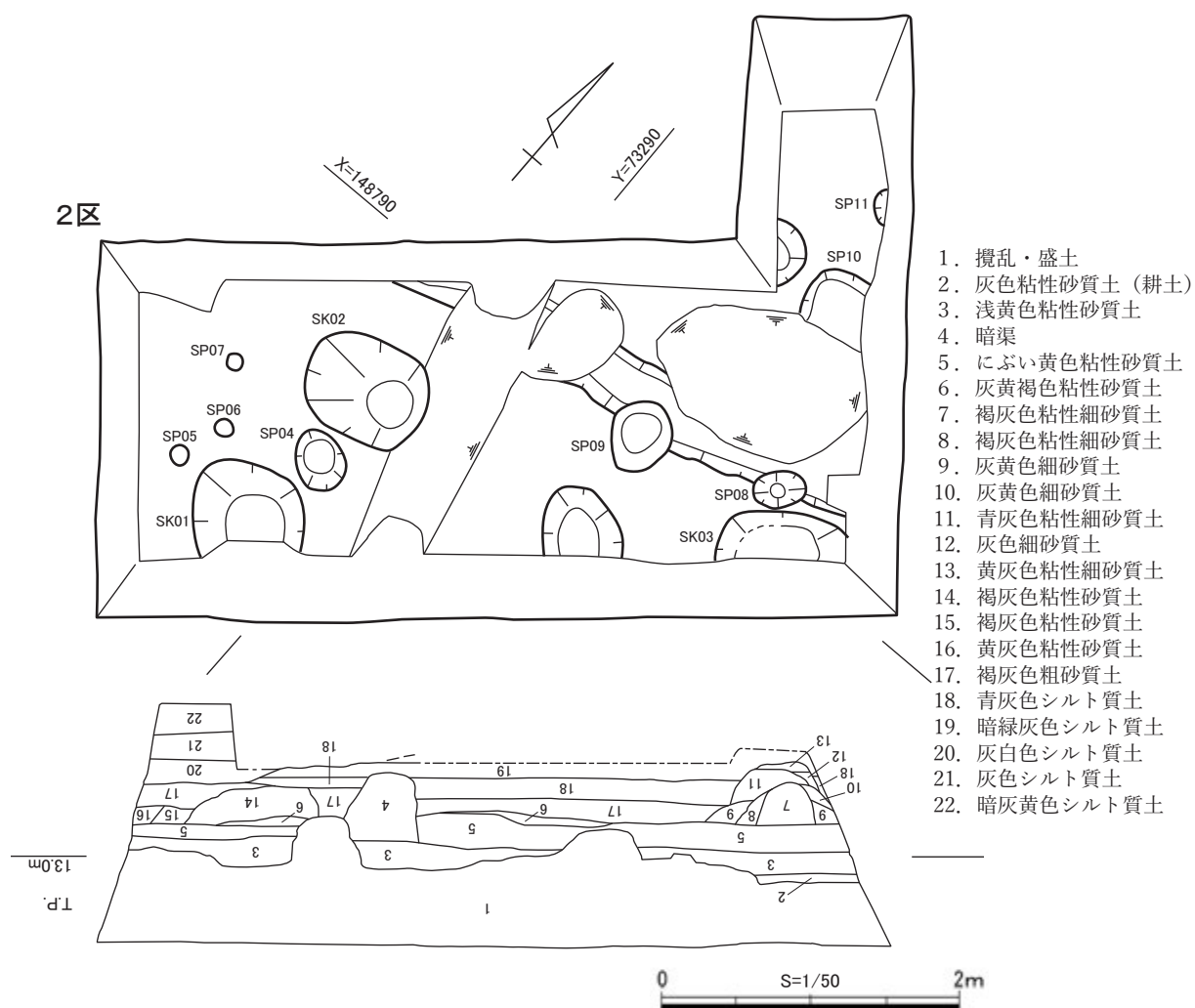


fig.249 2区遺構面遺構配置図・土層断面図

SD 1区で3条、2区で1条検出した。それぞれ平行する位置関係にあり、幅は約20～40 cm、深さ2～4 cm、長さは調査区外に延びるため不明である。これらの溝の方位はN-67°-Eである。2区に存在した近世以降の暗渠（溝の方向と直交）と従前建物のコンクリート基礎も同じ平行・直交方向にあり、現在の区画街路の方向とは異なる方位に延びている。

SP01～03 1区で検出した。直径25～30 cmで、SP01とSP02の間隔は2 mだが、狭小な調査区のため、建物としての復元は不可能であった。

SP04 2区西半で検出した。直径35～40 cm、深さ35 cmを測る。遺構底部に径10 cm大の花崗岩角礫が敷かれていたことから、礎盤として使用されたものとみられる。礎盤に接して須恵器が出土している。

SK03 2区南東隅で検出した。一辺90 cm以上、深さ50 cmを測る。底面の北辺寄りに直径16 cmの柱痕を確認したため、方形の掘形をもつ柱穴であったと考えられる。柱痕の底部には、花崗岩角礫が敷かれていた。SK03の北側約1.5 mの位置にはSP10、SK03の西側3 mの位置にはSK02が存在する。これら3基の遺構は、掘立柱建物を構成する柱穴の可能性はある。



fig.250 2区遺構面完掘状況（東から撮影）

5. まとめ

今回の調査は、狭小な調査面積であったが、土坑や柱穴等の遺構と、須恵器・土師器等の遺物を確認することができた。遺物は小片が多かったものの、古墳時代後期の須恵器杯身や古代の土師器甕（甕か）の把手等も出土している。

調査区東半の遺構基盤層以下の層位は、青灰色に変色していた。この土層は、第11次調査で検出されている古墳時代後期の流路に該当すると考えられる。溝の方向は、先述のとおり、現在の街区とは方位を異にする。当該地は、妙法寺川によって形成された扇状地の扇端に位置しており、第11次調査の北隅で確認された平安時代後期の掘立柱建物は、東西方向が $N-80^{\circ}-E$ の方位を示していた。明治19（1886）年の地図では、調査地北方に位置する池の土手南辺の方向が、この溝とほぼ同じ方向を示している。これらのことから、少なくとも当地区では建物や区画は古代山陽道に平行・直交しておらず、平安時代後期から地形の規制を受けていたと考えられる。

30 出合遺跡第 57・58 次調査

1. はじめに

出合遺跡は、明石川中流域西岸の沖積地と段丘上に立地する遺跡である。これまでの発掘調査によって、弥生時代～中世の複合遺跡であることが判明している。今回の調査は、個人住宅建設工事に伴うもので、本調査地の周辺で弥生時代～中世の遺構と遺物が確認されていることから、今回の調査地にも周辺で確認されている調査成果と同様の遺構が広がっていると予想された (fig.251)。

2. 調査概要

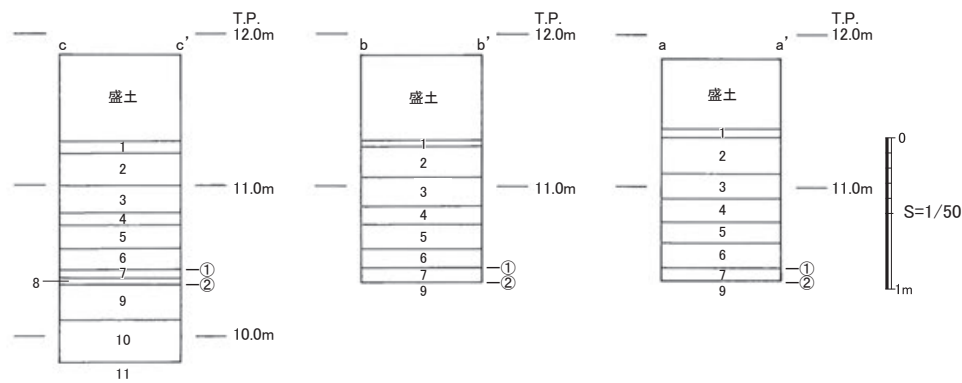
発掘調査は、第 1 遺物包含層上面までを重機で掘削し、遺物包含層以下は人力で掘削した。調査範囲は、工事影響範囲が埋蔵文化財に影響を及ぼす部分を調査区として設定した。遺構と遺物の記録図化にあたっては、調査地内に測量用基準点を設置し、平板測量によって図化した。記録写真は、35 mmカメラ・デジタルコンパクトカメラを用いた。

3. 基本層序

現況地表面の標高は、11.8 ～ 11.9 mを測る。層序は、上層より盛土→旧耕土→床土→灰色粘性細砂質土（近世耕土）→灰白色粘質土（近世床土）→黄灰色粘質土までが両調査地点で共通しており、黄灰色粘質土から両調査地点で様相が異なる (fig.252・253)。



fig.251 調査地位置図



1. 灰黄褐色粘性細砂質土【旧耕土】
2. 暗褐色細砂質土【旧耕土】
3. 褐灰色粘性細砂質土
4. 褐色ブロック(〜2mm)混じり【床土】
5. 灰色粘性細砂質土マンガンを微量【近世耕土】
6. 灰白色粘質土マンガンを微量【近世床土】
7. 黄褐色粘質土マンガンを少量・中砂を微量【上面が第1遺構面、第2遺物包含層】
8. 褐色粗砂質土【第2遺物包含層】
9. 灰黄色粘質土酸化鉄を多量【上面が第2遺構面】
10. 灰色シルト質土
11. 青灰色粘質土

fig.252 第57次調査 調査区土層断面模式図(断面幅は縮尺任意)

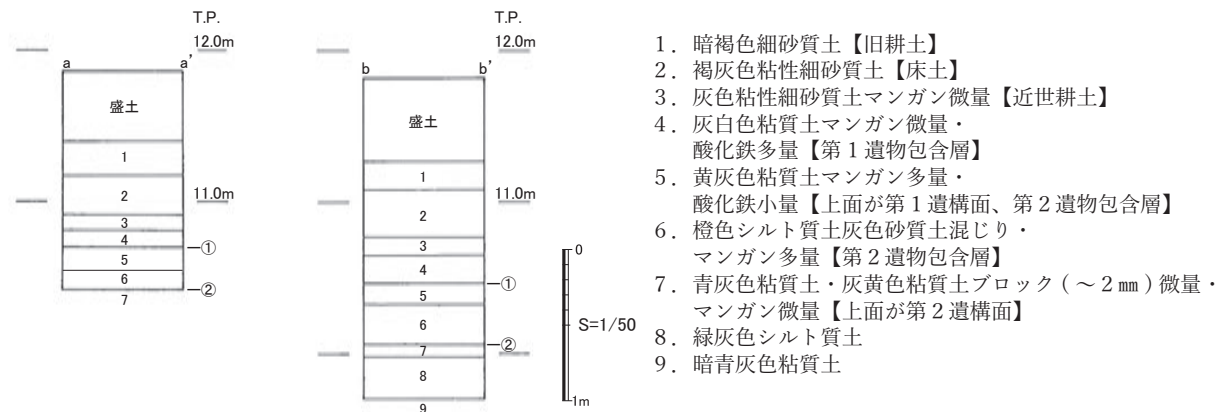


fig.253 第58次調査 調査区土層断面模式図(断面幅は縮尺任意)

第57次調査地 黄灰色粘質土(第1遺物包含層)→黄褐色粘質土(本土層の上面が第1遺構面・第2遺物包含層)→褐色粗砂質土(第2遺物包含層)→灰黄色粘質土(本土層の上面が第2遺構面)→灰色シルト質土→青灰色粘質土の順に堆積する(fig.252)。

第58次調査地 黄灰色粘質土(本土層の上面が第1遺構面・第2遺物包含層)→橙色シルト質土(第2遺物包含層)→青灰色粘質土(上面が第2遺構面)→緑灰色シルト質土→暗青灰色粘質土の順に堆積する(fig.253)。

4. 第1遺構面の概要

灰白色粘質土を掘削後、黄褐色粘質土上面で検出した遺構面である。遺構面の標高は10.4～10.7mを測る。周辺で実施されている発掘調査では、本土層上面で遺構が検出されているが、今回は調査面積が狭小なこともあり、遺構は確認できなかった。遺構面上からは、中世の土師器片が出土した。

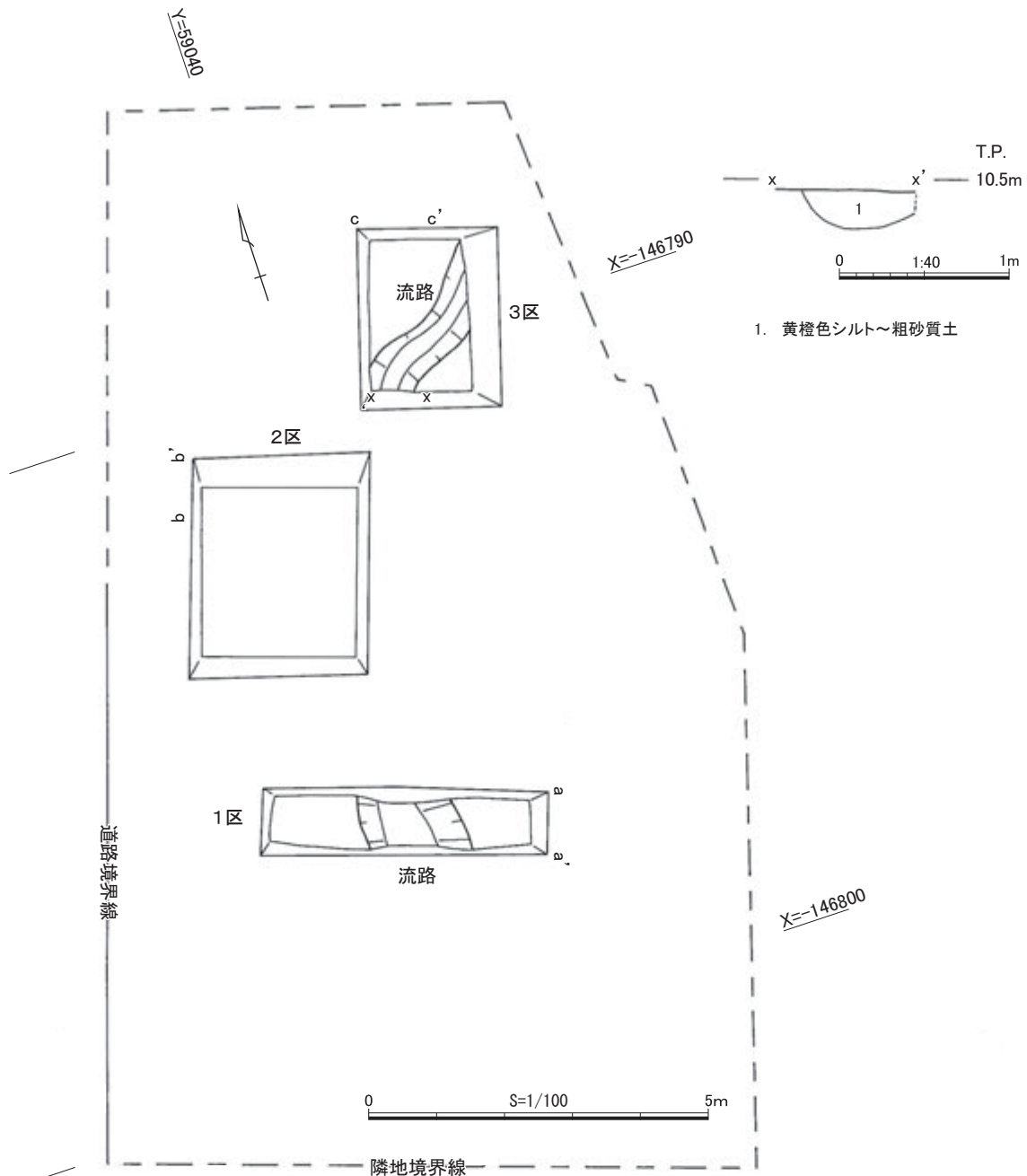


fig.254 第57次調査 第2遺構面遺構配置図・流路断面図

5. 第2遺構面の概要

第2遺構面に関しては、第57次調査地と第58次調査地とで土層が異なる。

第57次調査地では、鎌倉時代～室町時代の遺物を含んだ黄褐色粘質土と褐色粗砂質土を掘削した後、灰黄色粘質土上面で検出した遺構面である (fig.254)。遺構面の標高は10.3～10.4 mを測る。本遺構面からは、流路を1条検出した。この流路は、1区と3区で検出しており、いずれも一連のものと考えられる。最大幅は0.6 m、深さは0.45 mを測る。遺構埋土には、黄橙色シルト～粗砂質土が堆積する。本遺構から遺物は出土していないが、中世の遺構と推測される。

第58次調査では、鎌倉時代～室町時代の遺物を含んだ黄灰色粘質土および橙色シルト

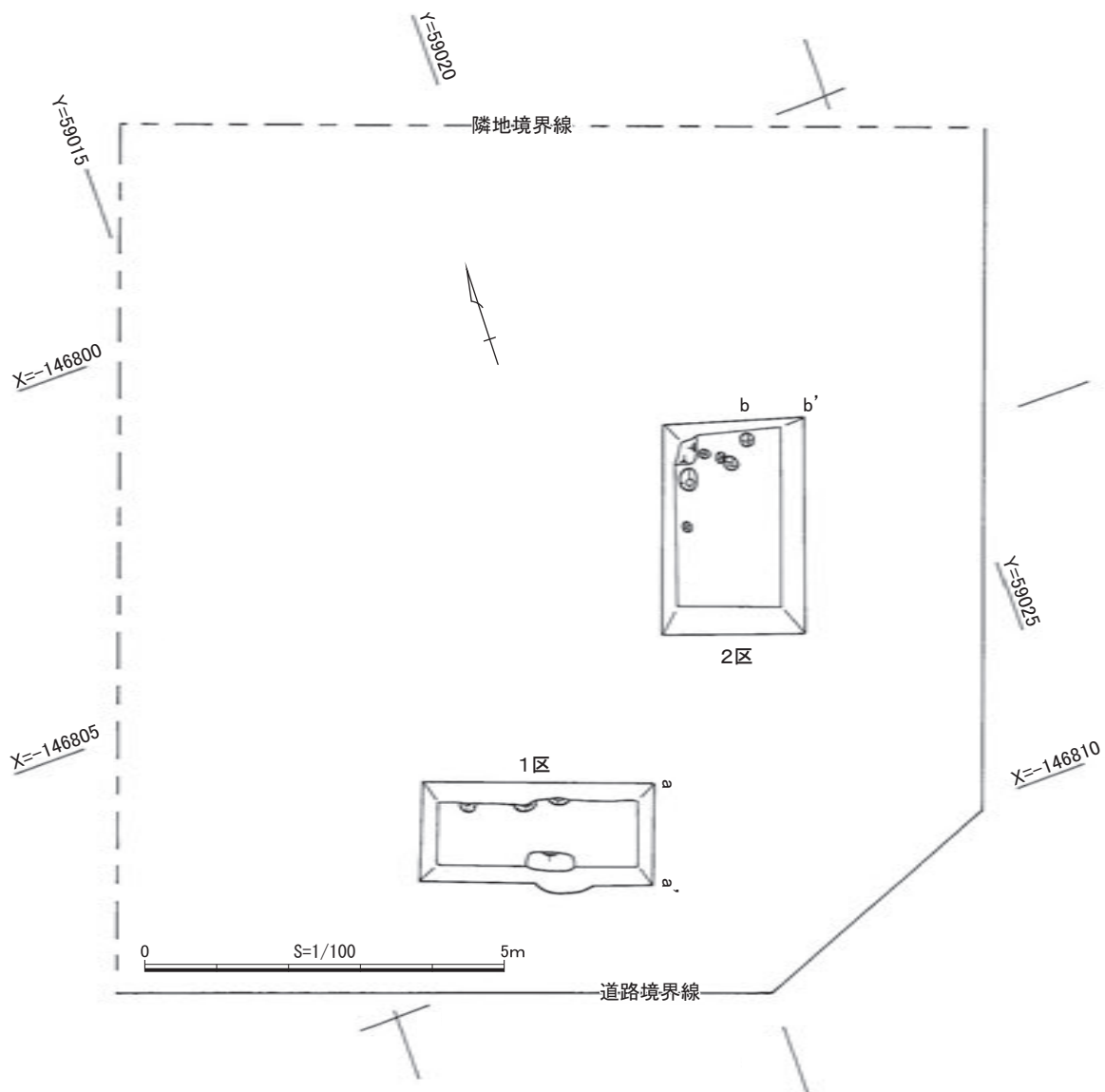


fig.255 第 58 次調査 第 2 遺構面遺構配置図

質土を掘削後、青灰色粘質土上面で検出した遺構面である。遺構面の標高は、1 区で 10.4 m、2 区で 10.0 m を測る。本遺構面では、ピットを検出した (fig.255)。1 区で 3 基、2 区で 6 基検出し、その直径は 10 ～ 30 cm、深さ 5 ～ 15 cm を測る。ピット埋土は、橙色粗砂質土が堆積していた。ピット埋土中から遺物の出土はなく、旧地形の窪みである可能性が高い。

6. まとめ

今回の調査では、中世の遺構面を 2 つ検出し、それらに伴う遺物を得た。今回の調査地に隣接する第 22 次調査との対応関係は、次のとおりになると考えられる。

- ① 第 22 次調査第 2 遺構面＝第 57・58 次調査の第 1 遺構面
- ② 第 22 次調査第 3 遺構面＝第 57・58 次調査の第 2 遺構面

なお、第 22 次調査第 1 遺構面は、本調査で確認している近世耕土上面と対応する。今回は、調査範囲が狭かったものの、出合遺跡における活動範囲や空間利用を考えるための成果を得ることができた。

31 今津遺跡第 27 次調査

1. はじめに

今津遺跡は、明石川によって形成された沖積地の左岸に立地している遺跡である。これまでの発掘調査によって、弥生時代～中世の遺構と遺物が確認されている。当調査地周辺で行っている発掘調査では、第 15 次調査で弥生時代後期～布留式併行期の遺構と遺物、第 17 次調査で弥生時代中期の竪穴建物がそれぞれ確認されている。このような調査成果から、当調査地周辺に弥生時代中期～古墳時代の集落が広がっていた状況が想定できる。

2. 調査概要

今回の発掘調査は、下水道管敷設工事に伴う立会を行ったところ、弥生時代の遺物包含層を確認したため、工事が施行される範囲を対象として、発掘調査を実施した (fig.256)。本体工事と並行して発掘調査を行ったため、盛土・旧耕土の層までは重機で掘削し、遺物包含層は重機と人力掘削を併用し、遺構面の調査は、人力掘削で行った。

3. 基本層序

基本層序は、上層からアスファルト→盛土・造成土→旧耕土である暗黄灰色粘質土（標高 12.2 m）→弥生時代の遺物包含層であるオリーブ褐色混じり暗灰色粘質土→薄オリーブ褐色混じり暗灰色粘質土→灰色粘質土→濃灰色粘質土→オリーブ灰色粘質シルト（標高 11.6 m）の順で堆積していた (fig.257)。



fig.256 調査地位置図

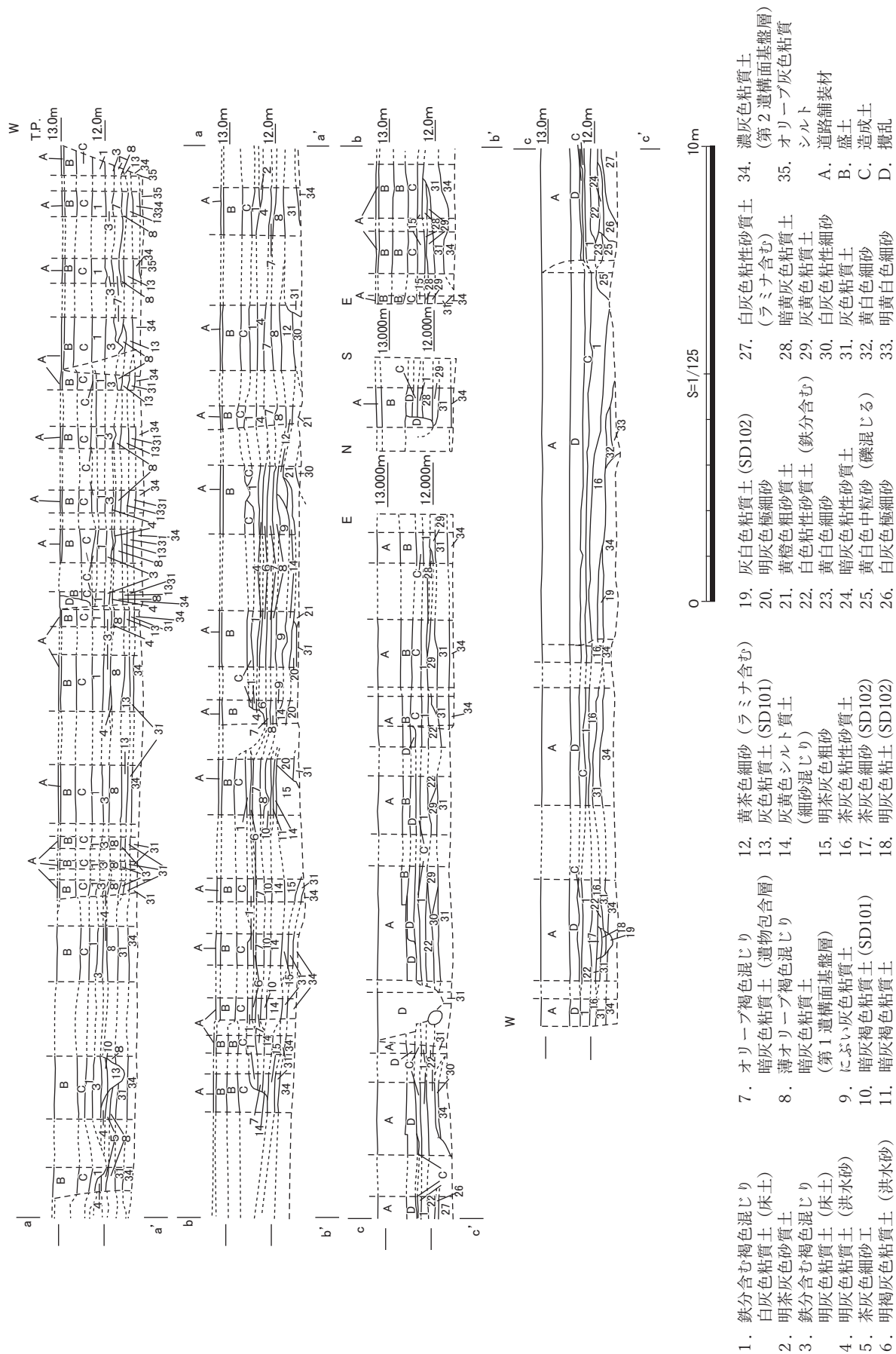


fig.257 調査区土層断面図

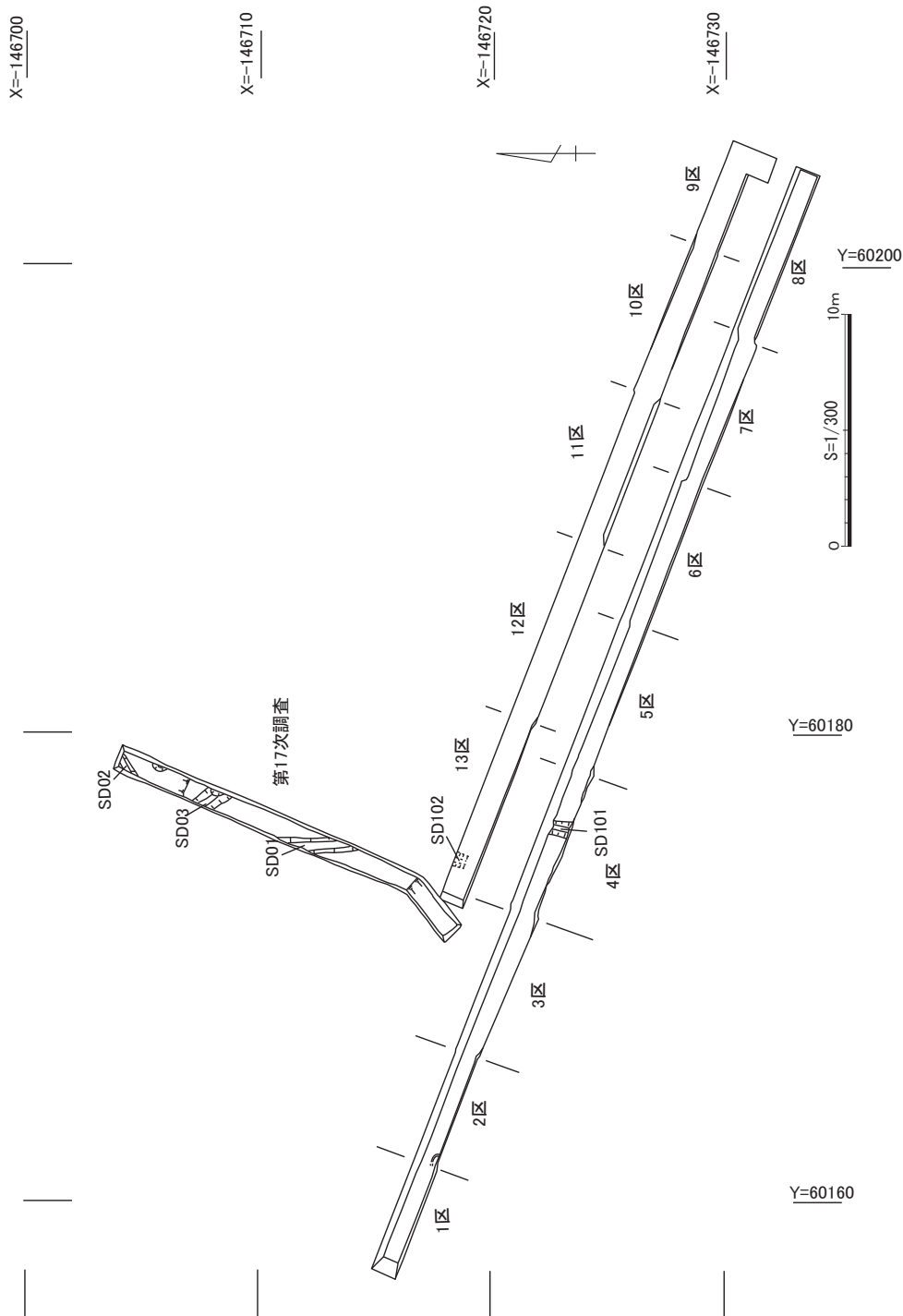


fig.258 第1遺構面遺構配置図

4. 各遺構面の概要 (fig.258・259)

SD101 幅 75 cm、深さ 50 cmの溝である。遺物は含まれなかったが、弥生時代の遺物包含層を切り込むことから、古墳時代以降の耕作に伴う溝と考えられる。この溝の北側部分については、確認することができなかった。

SD102 幅 70 cm、深さ 36 cmの溝である。遺物は含まれなかったが、弥生時代の遺物包含層を切り込むことから、古墳時代以降の耕作に伴う溝と考えられる。この溝の南側部分については、確認できなかった。

流路 幅 12 mの自然流路と考えられる落ち込みである。遺物は少量含んでおり、弥

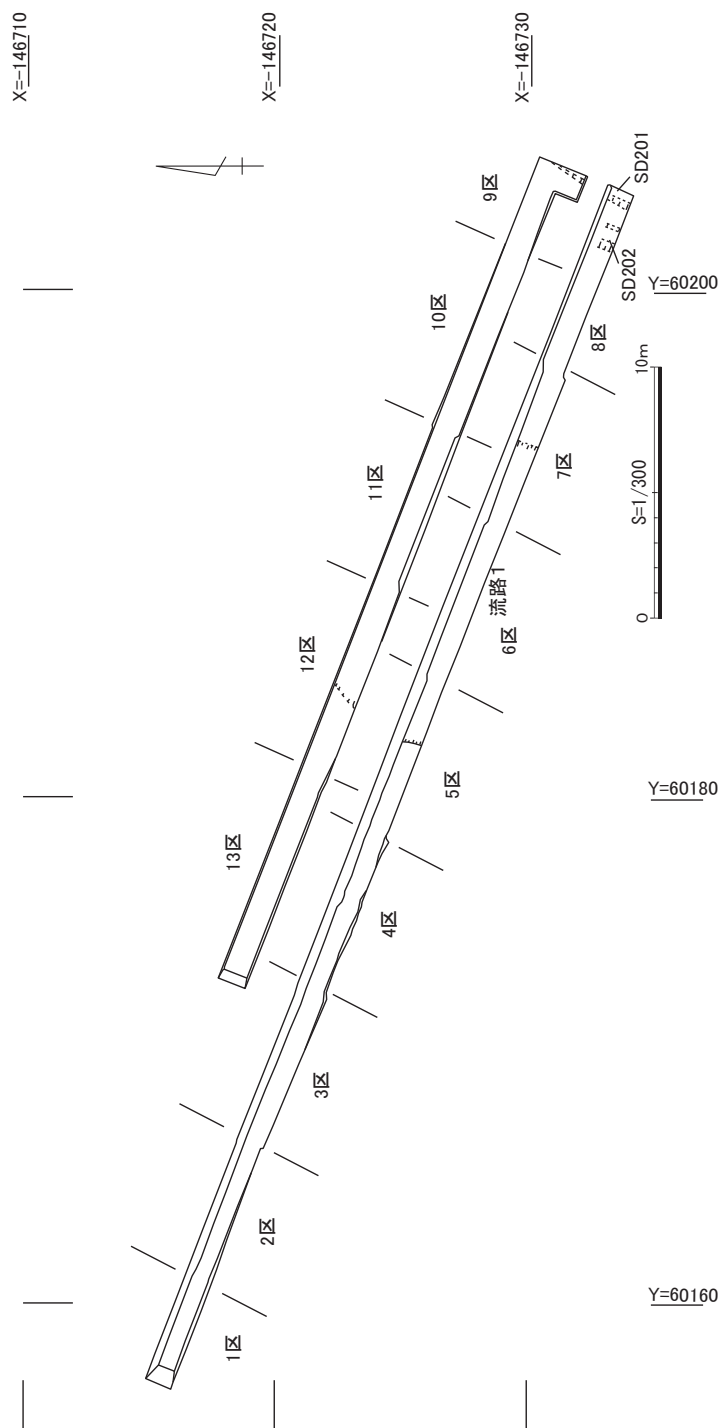


fig.259 第2遺構面遺構配置図

生時代の遺物包含層が落ち込む。北東部分の掘形は、攪乱されていたため確認できなかった。

SD201 幅 10 m、深さ 1 m の溝である。弥生時代の遺物包含層が自然堆積層を切り込むため、弥生時代の耕作に伴うものと考えられる。この溝の北側部分については、確認することができなかった。

SD202 幅 6.8 m の溝である。弥生時代の遺物包含層が自然堆積層を切り込むため、弥生時代の耕作に伴うものと考えられる。

5. まとめ

今回の発掘調査では、弥生時代の耕作溝と考えられる遺構を 2 条、古墳時代以降の耕作溝と考えられる遺構を 2 条、自然流路と考えられる落ち込みを 1 条確認した。弥生時代の耕作溝と考えられる遺構は、北東から南西方向に流れており、古墳時代以降の耕作溝と考えられる遺構は南北に流れていたことを確認した。今回の調査は、この地域における耕作地としての土地利用の変遷を考えるための情報を得る結果となった。



fig.260 3区南壁土層断面（北東から撮影）



fig.261 9区北壁土層断面（南東から撮影）



fig.262 13区 SD102 土層断面（南から撮影）



fig.263 5区流路1西掘形土層断面
(北西から撮影)



fig.264 7区流路1東掘形土層断面
(北東から撮影)



fig.265 11区北壁土層断面 (南東から撮影)

32 新方遺跡第54次調査

1. はじめに

新方遺跡は、明石川と伊川の合流地点北方の沖積地および段丘上に立地する遺跡である。これまでに53回の発掘調査が行われ、弥生時代～中世の複合遺跡であることが判明している。弥生時代前期前半に遺跡西方の明石川沿いの微高地上に集落を形成したのち、中期に集落域を広げ、明石川流域における拠点集落の1つとなる。弥生時代後期～古墳時代前期には居住域が別の遺跡に移るものの、古墳時代中期から再び集落を形成する。古墳時代中期の新方遺跡は、滑石製玉製品や、その未成品が多数出土することから、玉造り集団が存在したと考えられている。奈良時代～平安時代においても継続して大規模な集落を営んだようであるが、平安時代後半以降は、一般的な農村集落となったと考えられる。

今回の発掘調査は、店舗建設工事に伴うものであり、事前の試掘調査によって遺物包含層と遺構面が確認されたため、工事によって埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲を対象に発掘調査を実施した (fig.266)。

2. 調査概要

発掘調査は、遺物包含層上面まで重機で掘削し、それ以下の土層は人力で掘削した。発掘調査の範囲は、柱状改良される15ヶ所を調査区として設定した (fig.267)。遺構と遺物の記録図化にあたっては、調査地内に測量用基準点を設置して図化を行った。記録写真は、35mmカメラ・120mmカメラ・デジタルコンパクトカメラを用いた。



fig.266 調査地位置図

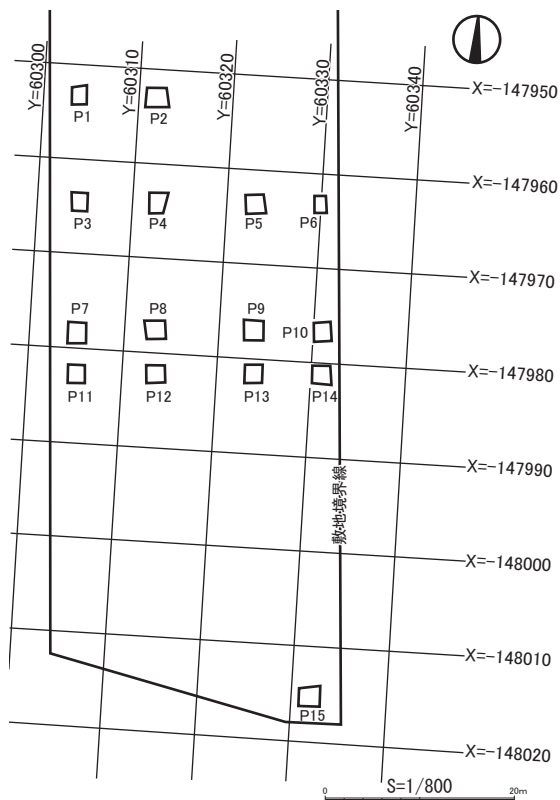


fig.267 調査区配置図

3. 各調査区の概要

① P 1

南北 2.1 m × 東西 1.5 m の調査区である。層序は、上層より現耕土、床土、砂礫を多量含むにぶい赤褐色砂質土、黄褐色シルト質土、黄灰色砂質シルト、灰色シルト質土、オリーブ黒色粘質土の順で堆積する。北半側は攪乱の影響が大きく、残った南半側は砂礫層およびシルト質土層が堆積していたため、安定した層位は確認できなかった (fig.268)。

② P 2

南北 2.0 m × 東西 2.3 m の調査区である。層序は、上層より現耕土、床土、砂礫を多量含むにぶい赤褐色砂質土、暗灰黄色極細砂質土、黄褐色シルト質土、黄灰色砂質シルト、灰色シルト質土の順で堆積する。P 1 と同様に砂礫層およびシルト質土層が堆積していたため、安定した層位は確認できなかった (fig.269)。

③ P 3

南北 2.0 m × 東西 1.6 m の調査区である。層序は、上層より現耕土、床土、黄灰色砂質シルト、

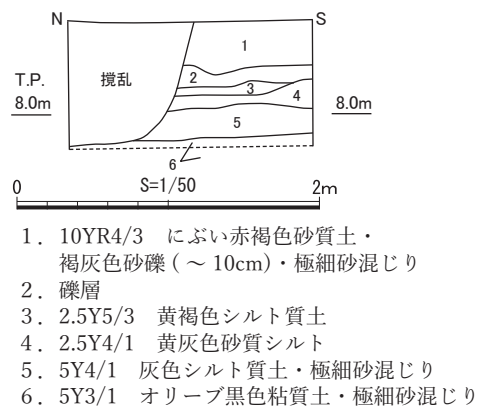


fig.268 P 1 東壁土層断面

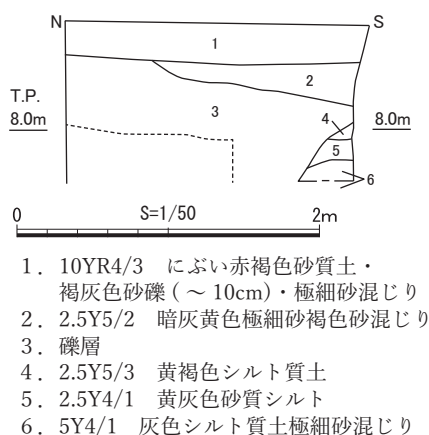


fig.269 P 2 東壁土層断面

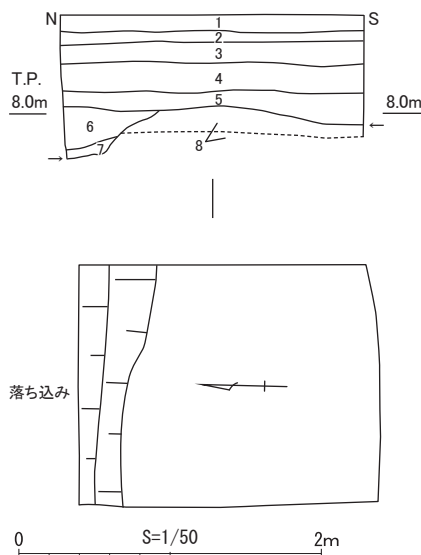


fig.270 P 3 遺構配置図・東壁土層断面

暗灰黄色シルト質土、黄褐色シルト質土、黄灰色砂質シルト（遺物包含層）、オリーブ褐色砂質シルトの順で堆積する。北側で黒褐色シルト質土、オリーブ褐色シルト質土が堆積する落ち込みもしくは自然流路を検出した。遺物包含層である黄灰色砂質シルトより古墳時代後期の土師器・須恵器、古代の須恵器が出土した（fig.270）。

④ P 4

南北2.1 m×東西1.7 mの調査区である。層序は、上層より現耕土、床土、黒褐色粘性細砂質土（遺物包含層）、暗灰黄色シルト質土、黄褐色シルト質土（遺物包含層）、灰黄色粘質土、灰色粘質土、オリーブ黒色粘質土、オリーブ灰色シルト質土の順で堆積する。

灰黄色粘質土上面が遺構面と考えられる。

幅1.1 m以上の溝を検出したが、上層の遺構と考えられる。黒褐色粘性細砂質土より中世の陶器、黄褐色シルト質土より古墳時代の須恵器と古代の瓦、溝内より弥生土器がそれぞれ出土した。溝は、中世に形成されたものと考えられる（fig.271）。

⑤ P 5

南北2.0 m×東西2.0 mの調査区である。層序は、上層より盛土、現耕土、床土、黄灰色粘性細砂質土（遺物包含層）、黄灰色粘質土、灰オリーブ色シルト質土、灰色シルト質土（遺物包含層）、オリーブ灰色砂質シルト、緑灰色極細砂質土、暗オリーブ灰色粘質土、黒色粘質土の順で堆積する。黄灰色粘質土上面が遺構面と考えられ、この土層上面で落ち込みを検出した。遺物包含層である黄灰色粘性細砂質土からは、中世の土師器や須恵器、弥生土器が出土した。下層確認中に灰色シルト質土より古墳時代の須恵器と古代の瓦が出土した

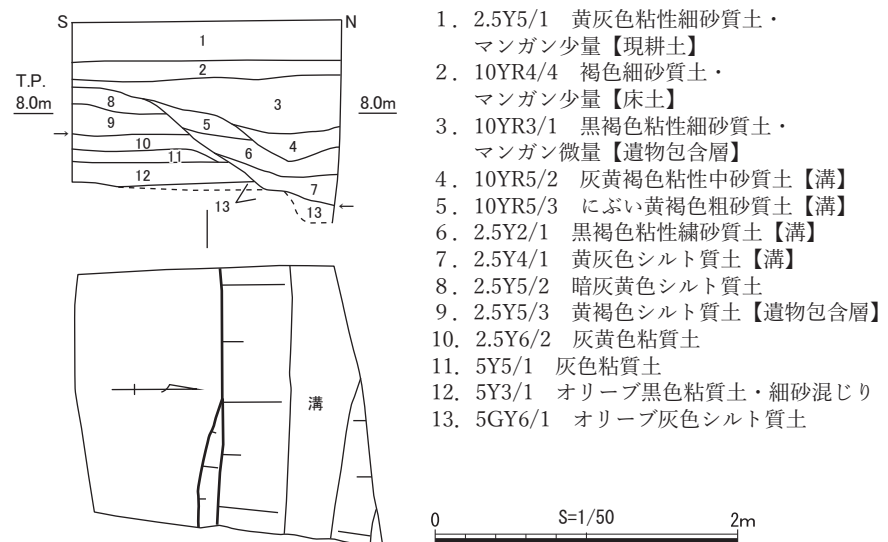


fig.271 P 4 遺構配置図・西壁土層断面

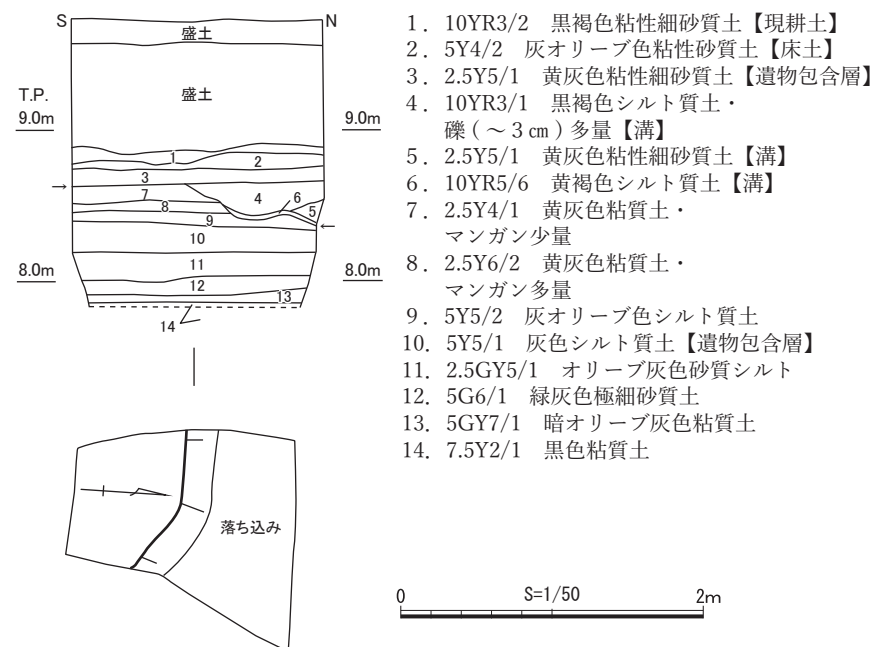


fig.272 P 5 遺構配置図・西壁土層断面

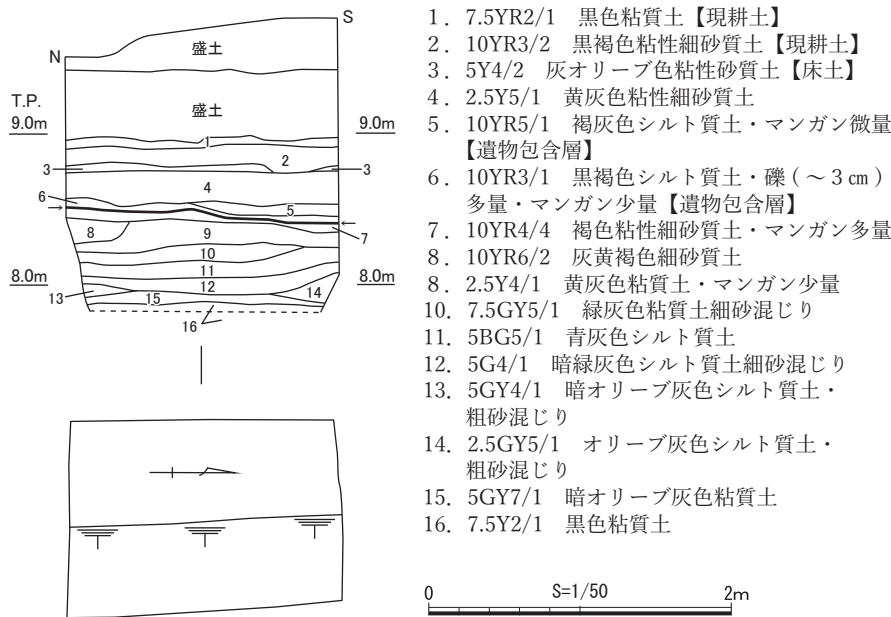


fig.273 P 6 遺構配置図・東壁土層断面

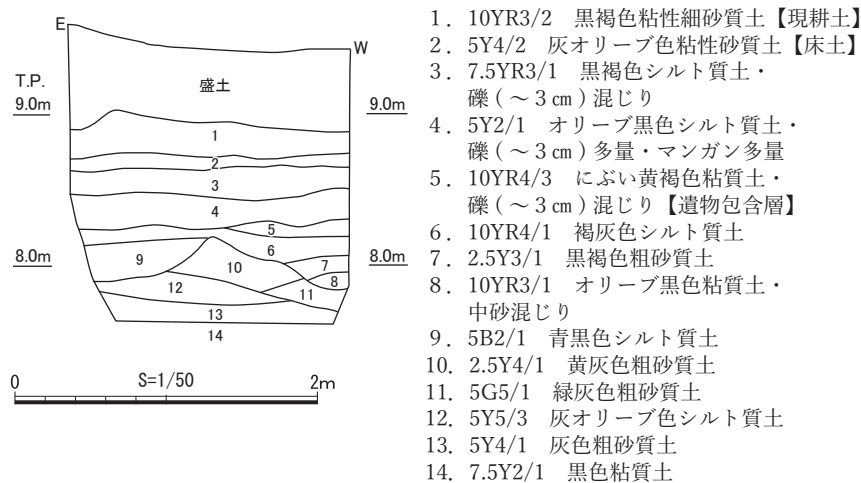


fig.274 P 7 南壁土層断面

⑦ P 7

南北 2.0 m × 東西 2.0 m の調査区である。層序は、上層より盛土、現耕土、床土、黒褐色シルト質土、オリーブ黒色シルト質土、にぶい黄褐色粘質土（遺物包含層）、褐灰色シルト質土の順で堆積し、それより下層は粗砂質土・シルト質土・粘質土がラミナ状に堆積する。遺物包含層であるにぶい黄褐色粘質土より古墳時代の土師器と須恵器が出土したが、安定した層位は確認できなかった。また、下層確認中に弥生土器が出土したものの、流れ込みと考えられる (fig.274)。

⑧ P 8

南北 2.0 m × 東西 2.0 m の調査区である。層序は、上層より盛土、現耕土、床土、黒褐色粘質土（遺物包含層）、黒褐色粘性砂質土～細砂質土（遺物包含層）、黒褐色細砂質土、黒褐色粘性細砂質土、オリーブ褐色細砂質土、灰色粗砂～細質土の順で堆積する。黒褐色細

が、以下に安定した層位は検出できなかったため、流れ込みと考えられる (fig.272)。

⑥ P 6

南北 1.8 m × 東西 1.3 m の調査区である。層序は、上層より盛土、現耕土、床土、黄灰色粘性細砂質土、褐灰色シルト質土（遺物包含層）、黒褐色シルト質土（遺物包含層）、褐色粘性細砂質土、黄灰色粘質土、緑灰色粘質土、青灰色シルト質土、暗緑灰色シルト質土、暗オリーブ灰色～オリーブ灰色シルト質土、暗オリーブ灰色粘質土、黒色粘質土の順で堆積する。褐灰色シルト質土と黒褐色シルト質土から古墳時代の土師器と須恵器が出土したが、下層の褐色粘性細砂質土層上面で遺構は検出できなかった (fig.273)。

砂質土上面が遺構面であり、この遺構面から直径30～45 cmのピットを3基検出した。また、この上層である黒褐色粘性砂質～細砂質土上面も遺構面である可能性がある。遺物包含層である黒褐色粘質土と黒褐色粘性砂質～細砂質土より古墳時代の土師器と須恵器が出土した (fig.275)。

⑨ P 9

南北 2.1 m × 東西 2.0 m の調査区である。層序は上層より盛土、現耕土、床土、黒褐色シルト質土、灰黄褐色粘性細砂質土（遺物包含層）、にぶい黄褐色粗砂質土・黄灰色シルト質土・黒褐色粗砂質土、オリーブ黒色シルト質土、灰オリーブ色シルト質土、暗青灰色シルト質土、緑灰色シルト質土、青灰色シルト質土、黒色粘質土の順で堆積する。にぶい黄褐色粗砂質土・黄灰色シルト質土・黒褐色粗砂質土上面が遺構面であり、その遺構目から直径30～50 cmのピットを4基検出した。ピット内より製塩土器と弥生土

器が出土した。また、遺物包含層である灰黄褐色粘性細砂質土から中世の土師器と古墳時代の須恵器が出土した (fig.276)。

⑩ P 10

南北 2.0 m × 東西 2.0 m の調査区である。層序は、上層より盛土、現耕土、床土、旧耕土、旧床土、オリーブ灰色粘性細砂質土（遺物包含層）、灰色粘質土、暗オリーブ灰色粗砂質土、灰色シルト質土、暗緑灰色シルト質土、オリーブ灰色シルト質土、黄褐色粗砂質土、緑灰

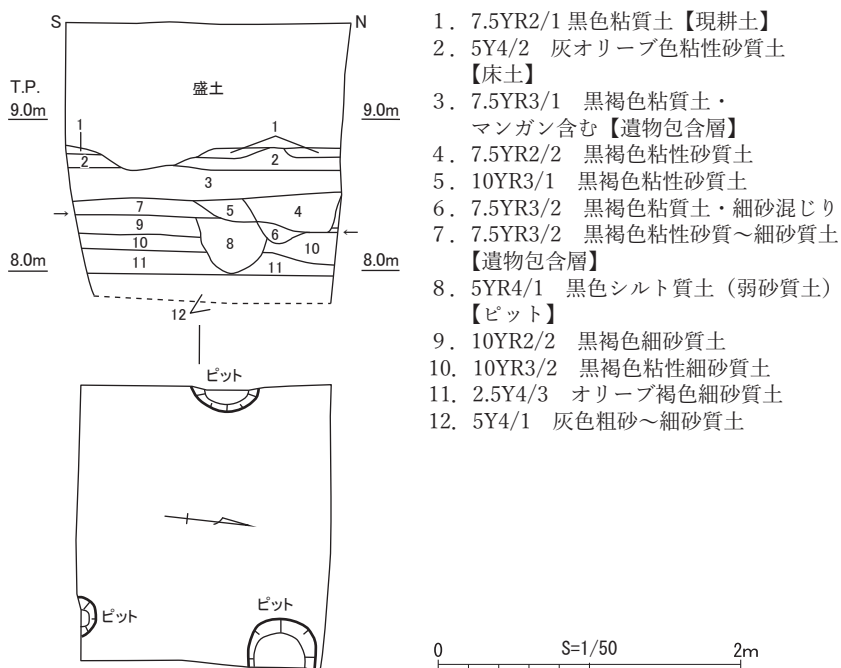


fig.275 P 8 遺構配置図・西壁土層断面

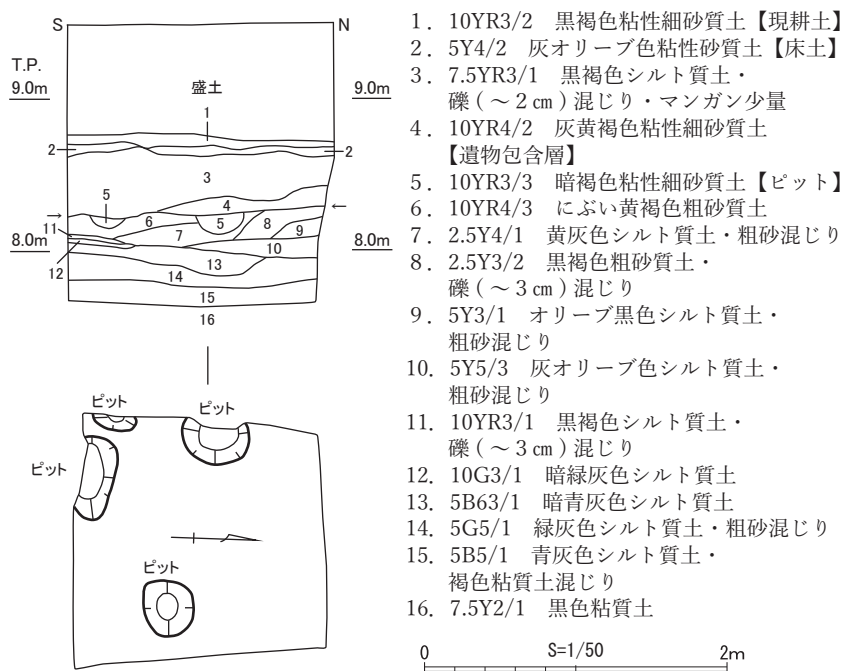


fig.276 P 9 遺構配置図・西壁土層断面

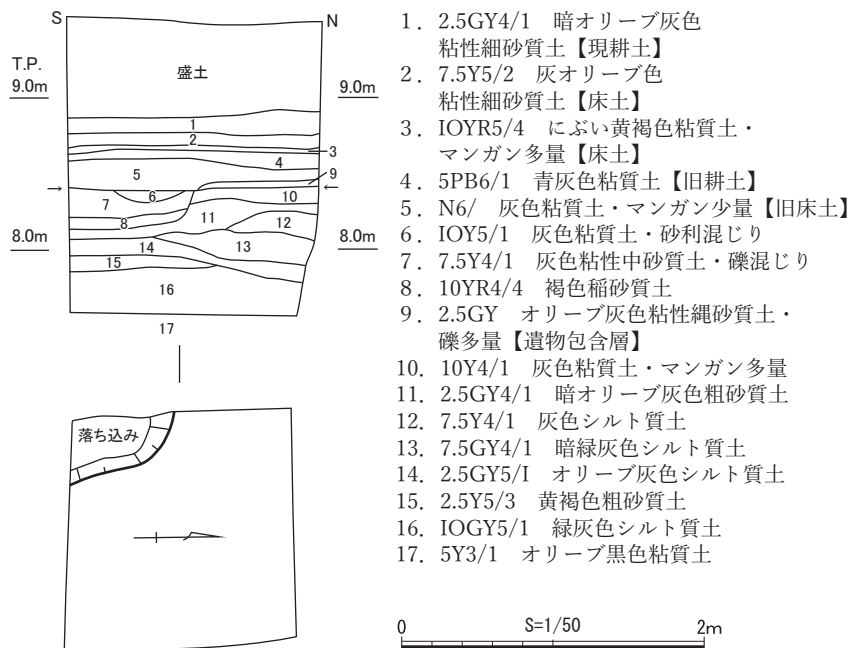


fig.277 P 10 遺構配置図・西壁土層断面

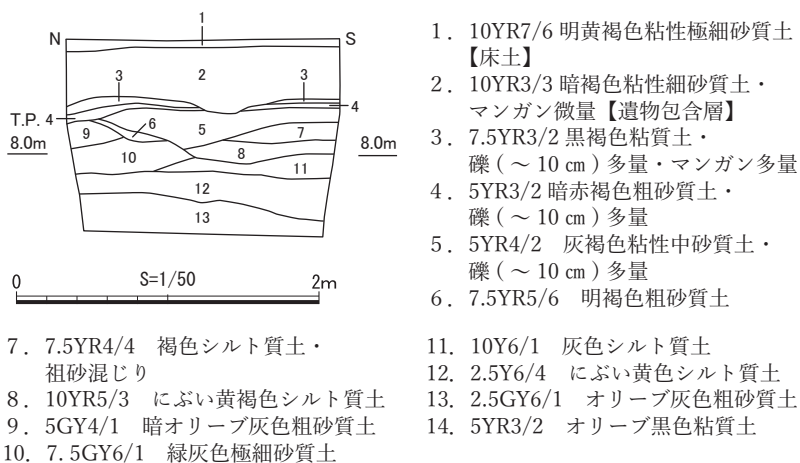


fig.278 P 11 東壁土層断面

色シルト質土、オリーブ黒色粘質土の順で堆積する。灰色粘質土上面が遺構面であり、この遺構面で落ち込みを検出した。遺物包含層であるオリーブ灰色粘性細砂質土は、薄い堆積層であるものの、多量の遺物が出土した。この土層からは、奈良時代～平安時代と古墳時代中期の遺物も出土したが、大半は古墳時代後期後半のものであった。この土層から出土した古墳時代中期後葉の須恵器

把手付埴が東側に隣接する第19次調査で検出したSE201最下層より出土した同器種のもものと接合することを確認した。このため、この遺物包含層は、SE201の掘方に伴うもの、もしくは同遺構上層の土器溜まりの一部と考えられる (fig.277)。

⑪ P 11

南北 2.0 m × 東西 1.7

mの調査区である。層序は、上層より現耕土、床土、暗褐色粘性細砂質土（遺物包含層）、黒褐色粘質土、暗赤褐色粗砂質土、暗オリーブ灰色粗砂質土、緑灰色極細砂質土、灰色シルト質土、にぶい黄色シルト質土、オリーブ灰色粗砂質土、オリーブ黒色粘質土の順で堆積する。遺物包含層である暗褐色粘性細砂質土より古墳時代中期～後期の土師器と須恵器が出土したが、安定した層位は確認できなかった (fig.278)。

⑫ P 12

南北 2.0 m × 東西 2.0 mの調査区である。層序は、上層より盛土、現耕土、床土、黒褐色粘性細砂質土（遺物包含層）、黒褐色粘質土、黒褐色中砂質土、灰色シルト質土、暗灰黄色粘性細砂質土、暗オリーブ褐色シルト質土、オリーブ灰色シルト質土、灰オリーブ色シルト質土、暗オリーブ色粗砂質土、緑灰色粗砂質土、黒色粘質土の順で堆積する。黒褐色粘質土上面が遺構面であり、この遺構面で幅 1.1 m 以上・深さ 50 cmの溝と長径 50 cm・短径 32 cmのピットを1基検出した。ピット内より弥生土器が出土した。このほか、遺物包含層

である黒褐色粘性細砂質土より古墳時代中期の須恵器と製塩土器が出土した (fig.279)。

⑬ P 13

南北 2.0 m × 東西 1.8 m の調査区である。層序は、上層より盛土、現耕土、床土、暗灰黄色粘性細砂質土、黄灰色粘質土 (遺物包含層)、灰黄色細～中砂質土、オリーブ灰色細～粗砂質土、暗オリーブ灰色極細～細砂質土の順で堆積する。遺物包含層である黄灰色粘質土より時期不明の土師器と須恵器が出土したが、安定した層位は確認できなかった (fig.280)。

⑭ P 14

南北 2.0 m × 東西 2.0 m の調査区である。層序は、上層より盛土、

現耕土、床土、褐灰色粘質土 (遺物包含層)、黒褐色粘質土、黒褐色粘性細砂質土、オリーブ褐色極細砂質土、黄灰色極細砂質土、オリーブ黒色シルト質土、灰色シルト質土の順で堆積する。オリーブ褐色極細砂質土上面が遺構面と推測され、この遺構面から落ち込みと直径 15 cm のピット 2 基を検出した。ただし、同土層は南側に滑り落ちた状態が確認されたため、地震等による断層が生じている可能性がある。このほか、遺物包含層である褐灰色粘質土より古墳時代～古代の土師器と須恵器、弥生土器が出土した (fig.281)。

⑮ P 15

南北 2.3 m × 東西 2.2 m の調査区である。層序は、上層より現耕土、床土、褐灰色粘質土、にぶい黄褐色粘性細～中砂質土、黒褐色粘性細砂質土 (遺物包含層)、暗灰黄色粘性細砂質土 (遺物包含層)、黒褐色粘質土、灰オリーブ色粘性細砂質土の順で堆積し、その下層は、砂質土およびシルト質土がラミナ状に堆積する。灰オリーブ色粘性細砂質土上面まで掘削を行ったものの、安定的な層位は確認できず遺構面は存在しないとみられる。南側で落ち込みを検出したが、形成時期は不明である。黒褐色粘性細砂質土および暗灰黄色粘性細砂質土からは、古墳時代～奈良時代の土師器、須恵器、蛸壺が出土した (fig.282)。

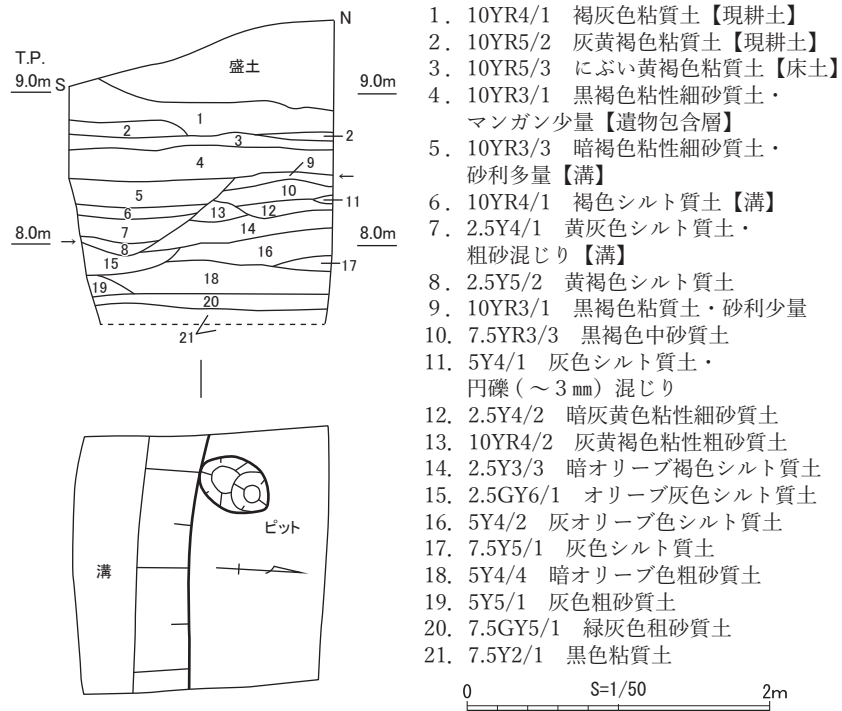


fig.279 P 12 遺構配置図・西壁土層断面

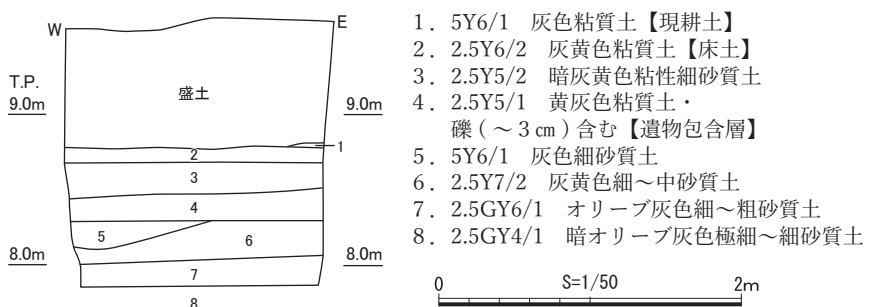


fig.280 P 13 北壁土層断面

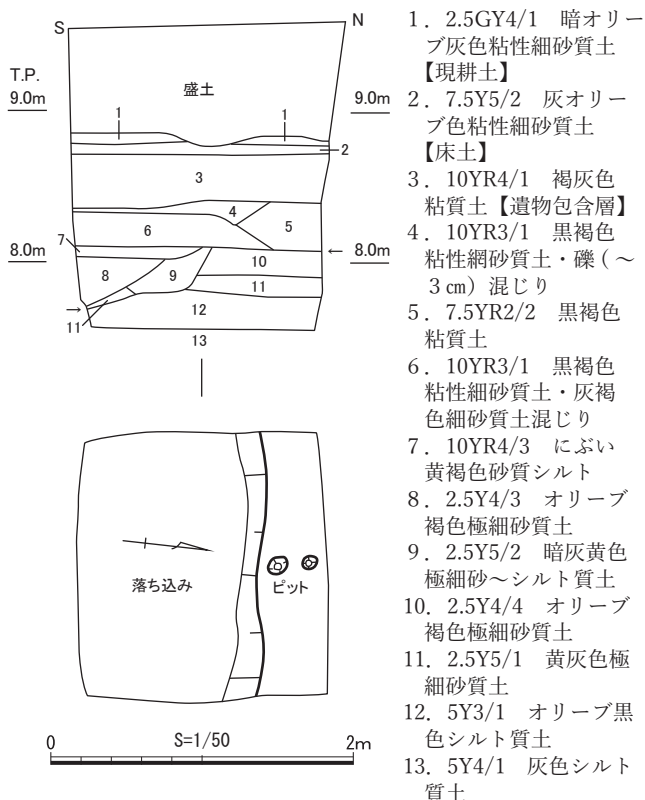


fig.281 P 14 遺構配置図・西壁土層断面

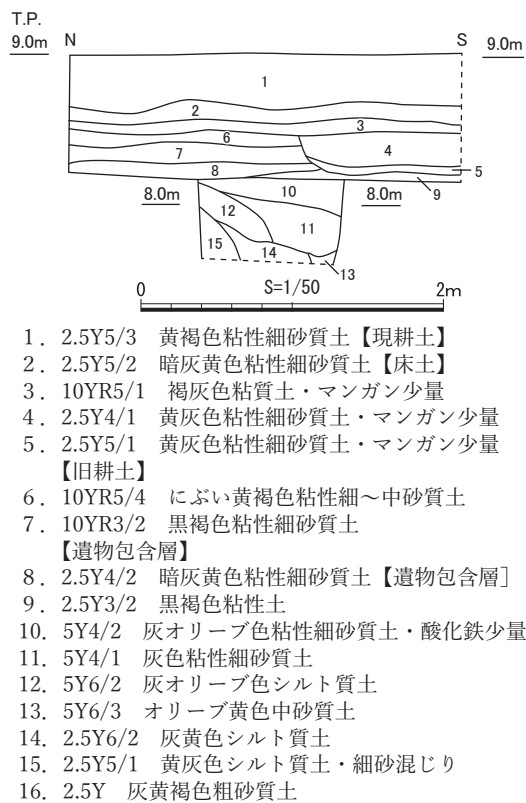


fig.282 P 15 東壁土層断面

4. まとめ

今回の調査では、15ヶ所の調査区それぞれから遺構と遺物を確認した。ただし、安定した層位が確認できなかった調査区もあることから、周囲に自然流路や地形の落ち込み等が複数存在するものと考えられる。

P 1とP 2では、礫層やシルト質土の流れ込みが顕著であり、P 3～P 6も遺構の残存状況は不良であったため、この辺りは、洪水等の影響を受けていたと推測される。P 8～P 10・P 14では、標高 8.5～8.7 mで遺物包含層の上層、標高 8.2～8.3 mで遺構面を検出した。これらの調査区からは、遺構と遺物を確認していることから、これらの調査区を結んだ線の周辺では、遺構面の残存状況が良好と考えられる。

出土遺物は、古墳時代中期の割合が高いものの、弥生時代や奈良時代、中世の遺物も出土している。本調査地点の東側に隣接する第 17 次調査（旧北方地区第 2 次調査）・第 19 次調査（同第 3 次調査）・第 20 次調査（同第 4 次調査）では、同一遺構面で奈良時代後期、古墳時代中～後期、弥生時代中期の遺構が確認されているが、今回の調査成果は、過去の調査成果と符合するものといえる。ただし、第 20 次調査で検出されている弥生時代と考えられる水田遺構は、今回の調査で確認することはできなかった。狭小な範囲の発掘調査であったが、周辺で行われているこれまでの調査成果を追認する成果を得ることができた。この成果は、新方遺跡の広がりや空間利用を考えていくための基礎資料となる。

33 新方遺跡第 55 次調査

1. はじめに

新方遺跡は、明石川と伊川の合流地点北方の沖積地および段丘上に立地する遺跡である。これまでに 53 回の発掘調査が行われ、弥生時代～中世の複合遺跡であることが判明している。弥生時代前期前半に遺跡西方の明石川沿いの微高地上に集落を形成したのち、中期に集落域を広げ、明石川流域における拠点集落の 1 つとなる。弥生時代後期～古墳時代前期には居住域が別の遺跡に移るものの、古墳時代中期から再び集落を形成する。古墳時代中期の新方遺跡は、滑石製玉製品や、その未成品が多数出土することから、玉造り集団が存在したと考えられている。奈良時代～平安時代においても継続して大規模な集落を営んだようであるが、平安時代後半以降は、一般的な農村集落となったと考えられる。

今回の発掘調査は、店舗建設工事に伴うものであり、事前の試掘調査によって遺物包含層と遺構面が確認されたため、工事によって埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲を対象に発掘調査を実施した (fig.283)。

2. 調査概要

発掘調査は、遺物包含層上面までを重機で掘削し、それ以下の土層を人力で掘削した。調査区は、幅 1.5 m～2 m、長さ 80 m の「L」字状に設定した (fig.284)。遺構と遺物の記録図化にあたっては、調査地内に測量用基準点を設置して図化を行った。記録写真は、35 mmカメラ・120 mmカメラ・デジタルコンパクトカメラを用いた。

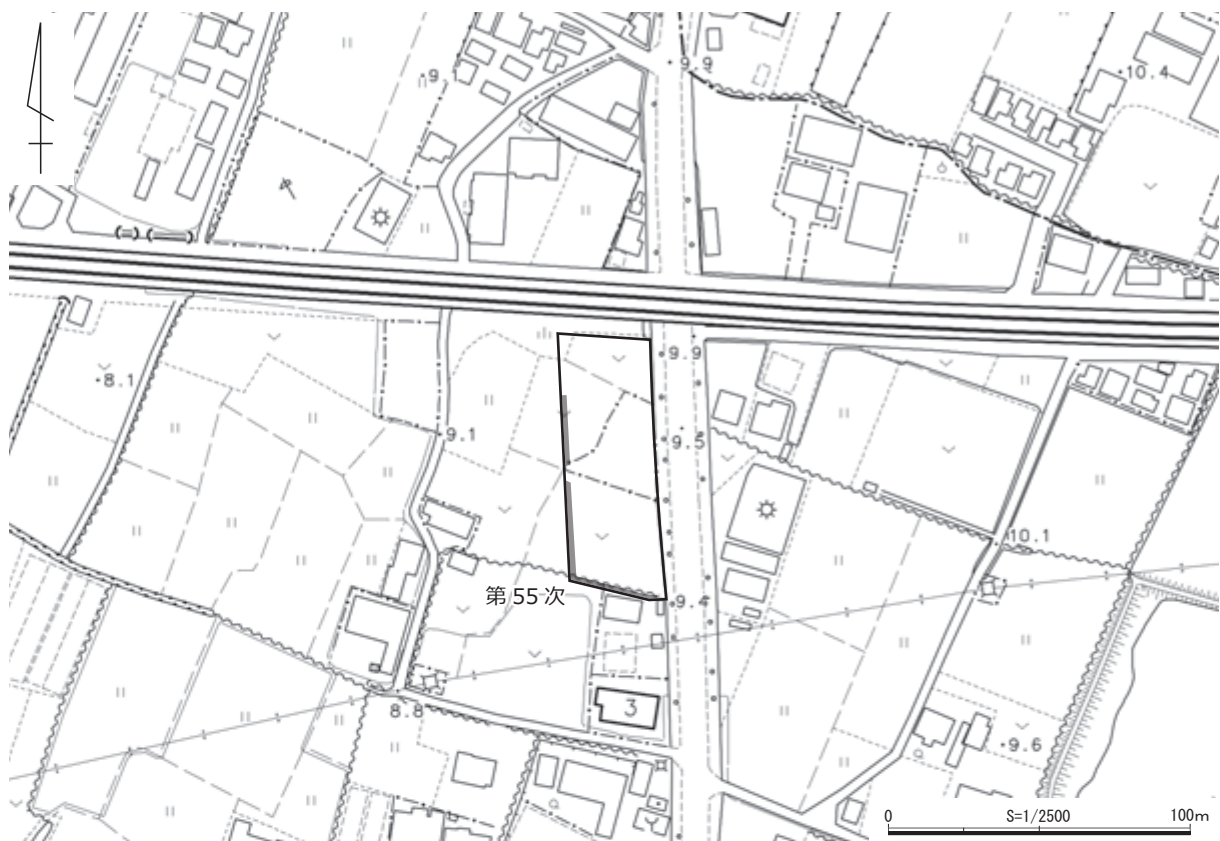


fig.283 調査地位置図

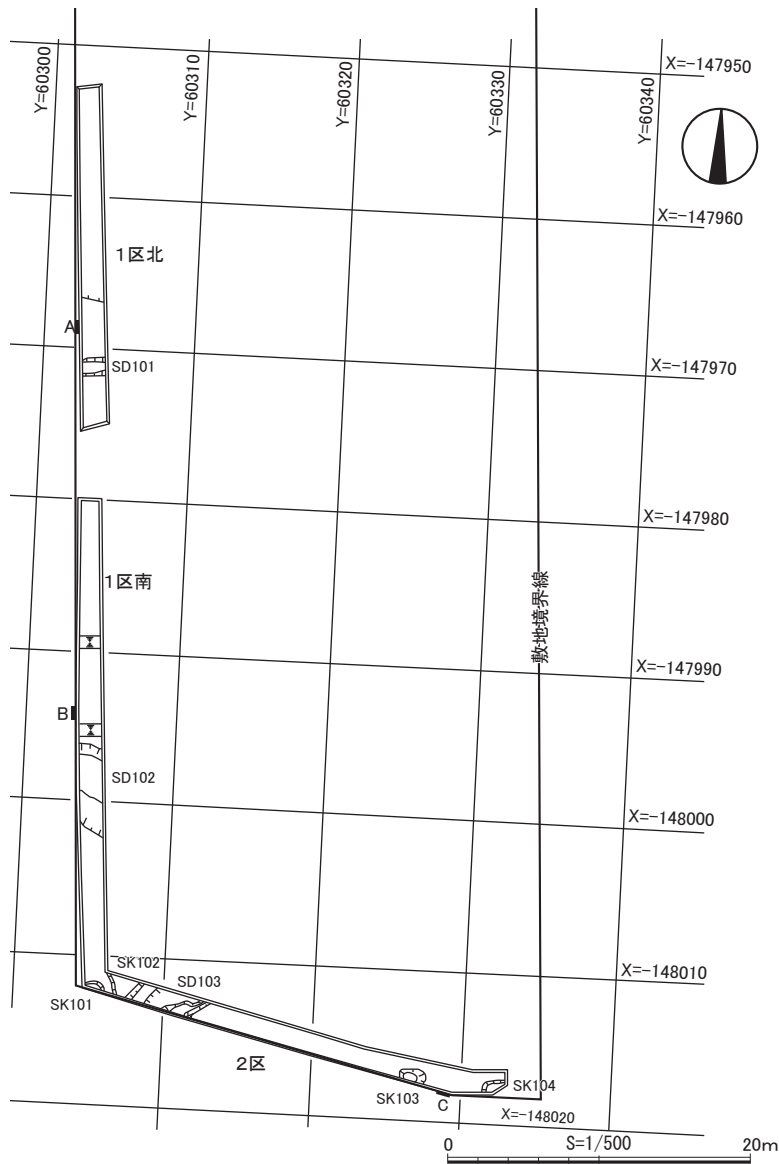


fig.284 調査区配置図

3. 基本層序

現況地表面の高さは、1区の西側でT.P.8.7 m～8.8 m、2区の南側でT.P.9.1～9.2 mを測る。

層序は、1区北が現耕土、床土、暗灰黄色粘性細砂質土（遺物包含層）、暗褐色粘質土（上面が遺構面）、黒褐色シルト質土、暗灰黄色砂質シルトの順に堆積する。1区南は、現耕土、床土、黒褐色粘性細砂質土（遺物包含層）、暗オリーブ褐色粘性細砂質土（上面が遺構面）、黒褐色粘質土の順に堆積している。2区は、盛土、現耕土、床土、黄灰色細砂質土、黒褐色粘性細砂質土、黒褐色極細～細砂質土・オリーブ黒色粘性細～中砂質土（遺物包含層）、浅黄色シルト質土・灰色粘性細砂質土（上面が遺構面）、黄灰色粘性細砂質土の順に堆積していた（fig.285）。

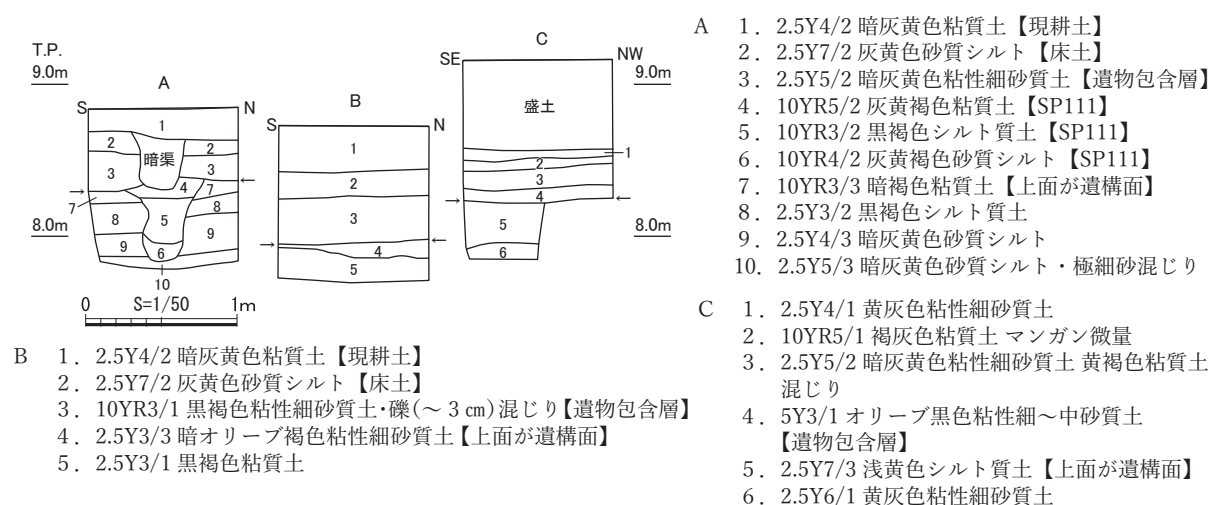


fig.285 調査区土層断面図

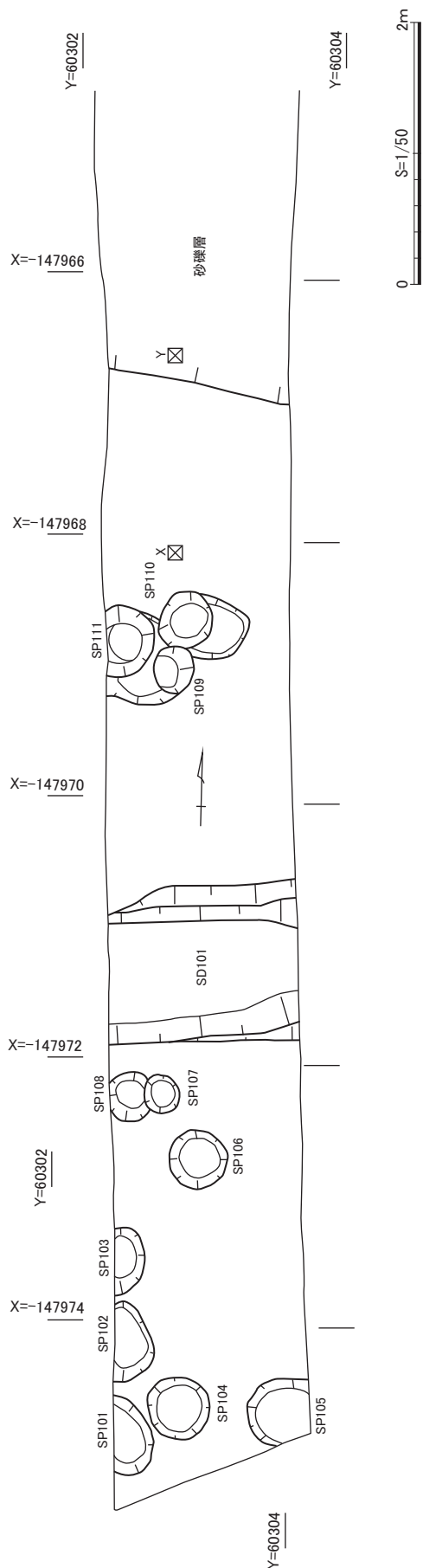


fig.286 1区北第1遺構面遺構配置図

4. 各調査区の概要

① 1区

古墳時代～中世の遺物を含む遺物包含層である暗灰黄色粘性細砂質土および黒褐色粘性細砂質土を除去したのち、暗褐色粘質土および暗オリーブ褐色粘性細砂質土上面で遺構面を検出した(fig.286)。ただし、1区北では砂礫層、1区南ではSD102北側付近まで洪水砂層が厚く堆積しており、後世の攪乱や洪水によって遺構面が削平されたものと考えられる。1区北の砂礫層との境付近では、遺構面上より古墳時代中期の土師器高

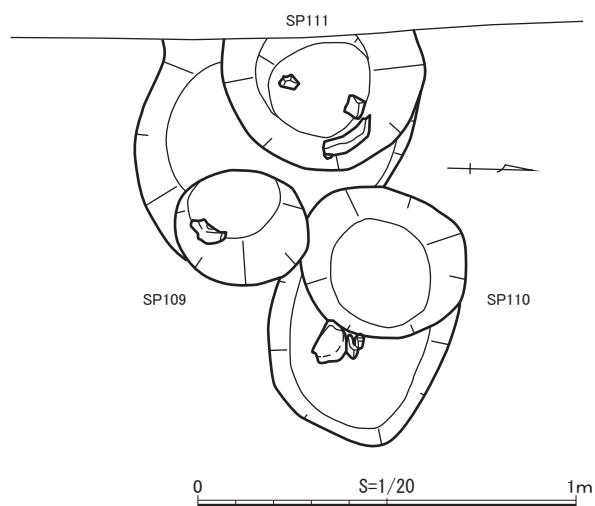


fig.287 1区 SP109～111 遺物出土状況

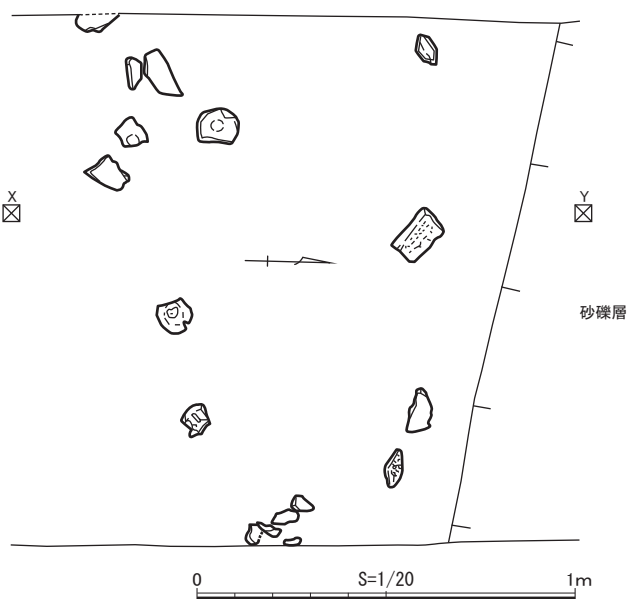


fig.288 1区北第1遺構面北側遺物出土状況

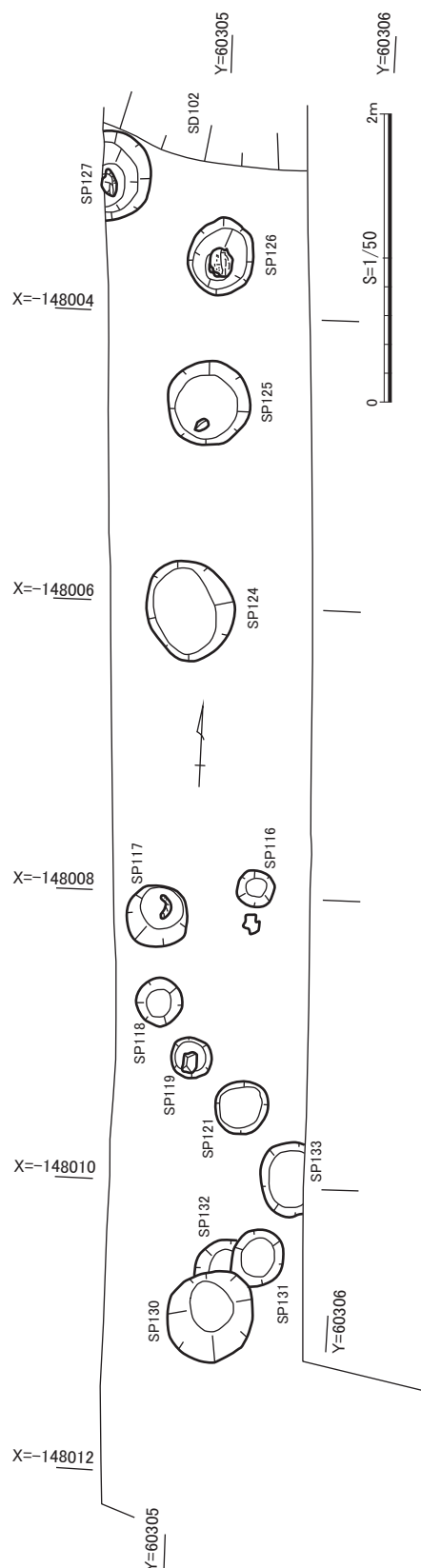
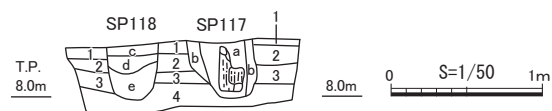


fig.289 1区南第1遺構面遺構配置図

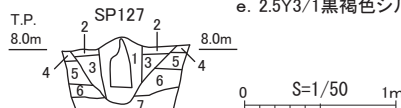
時代の土師器鍋が出土した。

SK101 1区南で検出した径1.2 m以上・深さ0.15 mを測る楕円形の土坑である。



1. 7.5YR3/1黒褐色粘質土
2. 10YR2/2黒褐色粘質土
3. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト
4. 2.5Y3/2黒褐色極細砂質土

- SP117
- a. 7.5YR3/1黒褐色シルト質土
 - b. 10YR3/2黒褐色粘質土
- SP118
- c. 10YR4/1褐灰色粘質土
 - d. 10YR3/1黒褐色シルト質土
 - e. 2.5Y3/1黒褐色シルト質土



1. 10YR3/1黒褐色シルト質土【SP127】
2. 7.5YR3/3暗褐色砂質シルト【SP127】
3. 7.5YR3/1黒褐色シルト質土【SP127】
4. 2.5Y3/1黒褐色粘性細砂質土
5. 10YR2/2黒褐色粘性細砂質土
6. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘性細砂質土
7. 10YR2/2黒褐色粘質～シルト質土

fig.290 SP117・118・127 土層断面



fig.291 SD102 北側遺物・礫出土状況

坏・須恵器高坏、古代の瓦等がまとめて出土した (fig.288)。

SD101 1区北で検出した幅1.2 m・深さ1.1 mの溝である。古墳時代中～後期の土師器・須恵器、弥生土器が出土した。

SD102 1区南で検出した幅5 m前後・深さ0.6 mの溝である (fig.291)。上層から下層に至るまで中世の土師器と須恵器、古墳時代中期の土師器と須恵器が出土しており、中世に形成されたものと考えられる。掘形の北側では、長さ25 cm程度の礫からなる集石を検出し、その付近で鎌倉

古墳時代中期～後期の土師器と須恵器が出土した。底面でピット状の窪みを3つ検出した。

SP109～111 1区北で検出した直径30～52 cm・深さ29～47 cmのピットである。いずれも、古墳時代中期～後期の土師器と須恵器が出土しており、SP111からは製塩土器が出土した (fig.287)。

SP117 1区南で検出した直径42 cm・深さ33 cmのピットである。中心部に柱根が遺存していた (fig.290)。

SP126・127 1区南で検出したピットである。SP126は直径53 cm・深さ21 cm、SP127は直径70 cm・深さ36 cmを測る (fig.290)。いずれも中心部に柱根が遺存しており、関連する遺構の可能性がある。

SP131 1区南で検出した直径45 cm・深さ23 cmを測るピットである。古墳時代中期の須恵器高坏が出土した。

② 2区

古墳時代～中世の遺物を含む遺物包含層である黒褐色粘性細砂質土・黒褐色極細～細砂質土・オリーブ黒色粘性細～中砂質土を除去したのち、浅黄色シルト質土・灰色粘性細砂質土上面で遺構面を検出した。全体的に、SD103以西は安定的な層位が確認され、遺構の残存状況も良好であったが、SD103より東側は、洪水などによって流れ込んだ土砂が堆積しており、遺構面および遺構の残存状況は不良であった (fig.292)。

SD103 2区西側で検出した幅3.1 m、深さ0.4 mの自然流路である。底面より平安時代後期の完形の土師器台付皿と須恵器碗が出土した。

SK102 2区西側で検出した長径2.7 m以上、深さ0.16 mを測る不定形の土坑である。古墳時代の土師器と須恵器が出土した。遺構内にSP128とSP129を検出したが、これらは、本土坑を切り込む上層の遺構と考えられる。

SK103 2区東側で検出した長径0.9 m・短径0.45 m、深さ0.5 mを測る楕円形の土坑である。

SK104 2区東側で検出した直径0.82 m以上、深さ0.37 mを測る隅丸方形の土坑である。

5. まとめ

今回の調査では、遺構面を1面と、それに伴う遺構や遺物を検出した。1区の北側と中央部、2区の東側の半分以上は、遺構面が削平されているか、遺構の存在が希薄であることも確認することができた。出土遺物のうち、遺構に伴うものは、古墳時代中期の割合が高く、自然流路内等からは、中世や奈良時代、弥生時代の遺物も出土している。このような状況から、本調査地点では、古墳時代中期～後期に生活行為が営まれ、平安時代後期以降に洪水に見舞われたものと推測される。

本調査地点の東側に隣接する第17次調査 (旧北方地区第2次調査)・第19次調査 (同第3次調査)・第20次調査 (同第4次調査) では、同一遺構面で奈良時代後期、古墳時代中期～後期、弥生時代中期の遺構が確認されており、今回の調査成果と符合する結果が得られている (fig.293)。これらの成果から、本地点においては、北東 - 南西方向に延びる微高地上の高まりが帯状に2本形成されており、その上に遺構が良好に残存すると考えられる。また、それぞれの南北に自然流路や地形上の落ち込みが存在し、その範囲については、遺

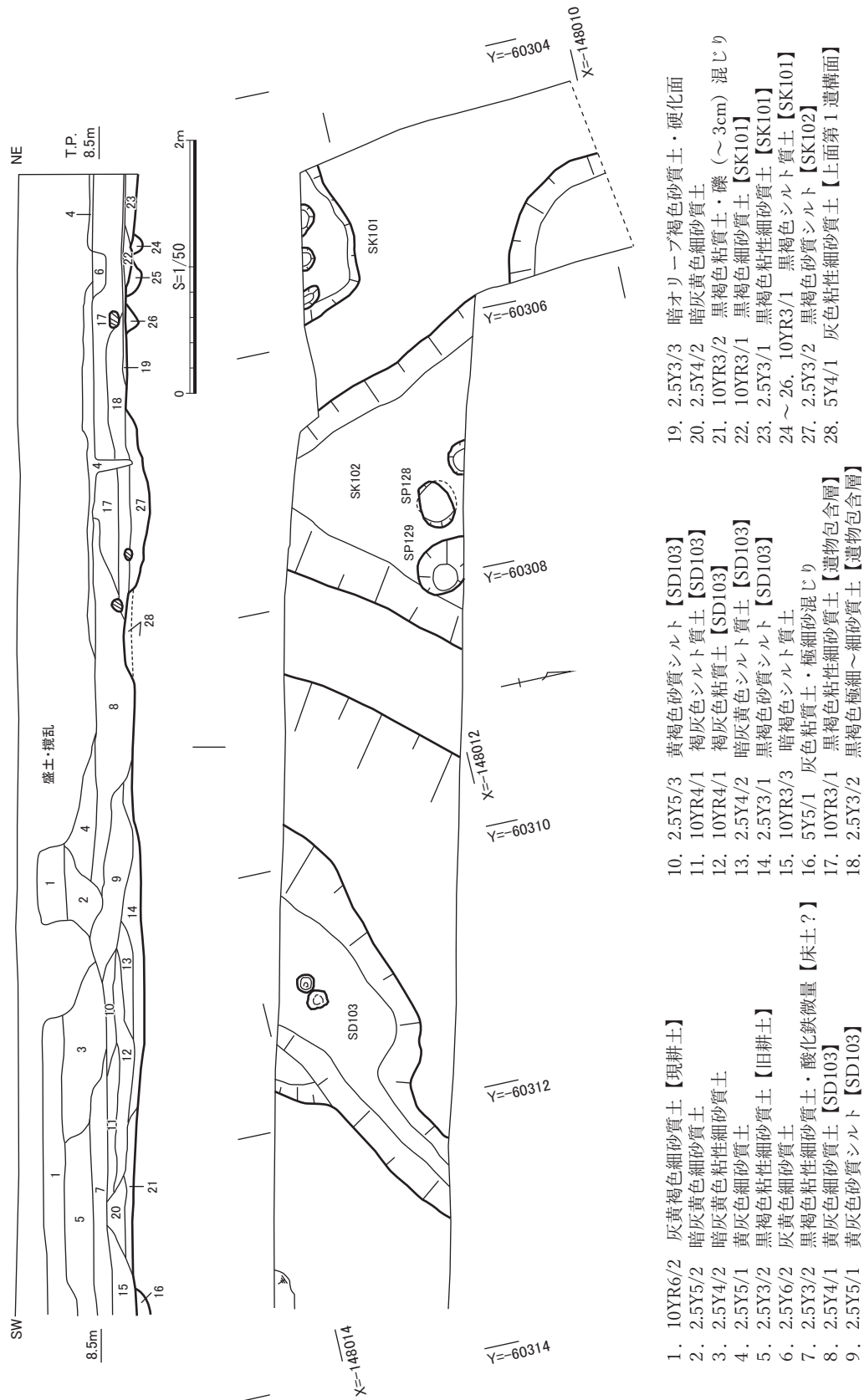


fig.292 2区第1遺構面遺構配置図・土層断面図

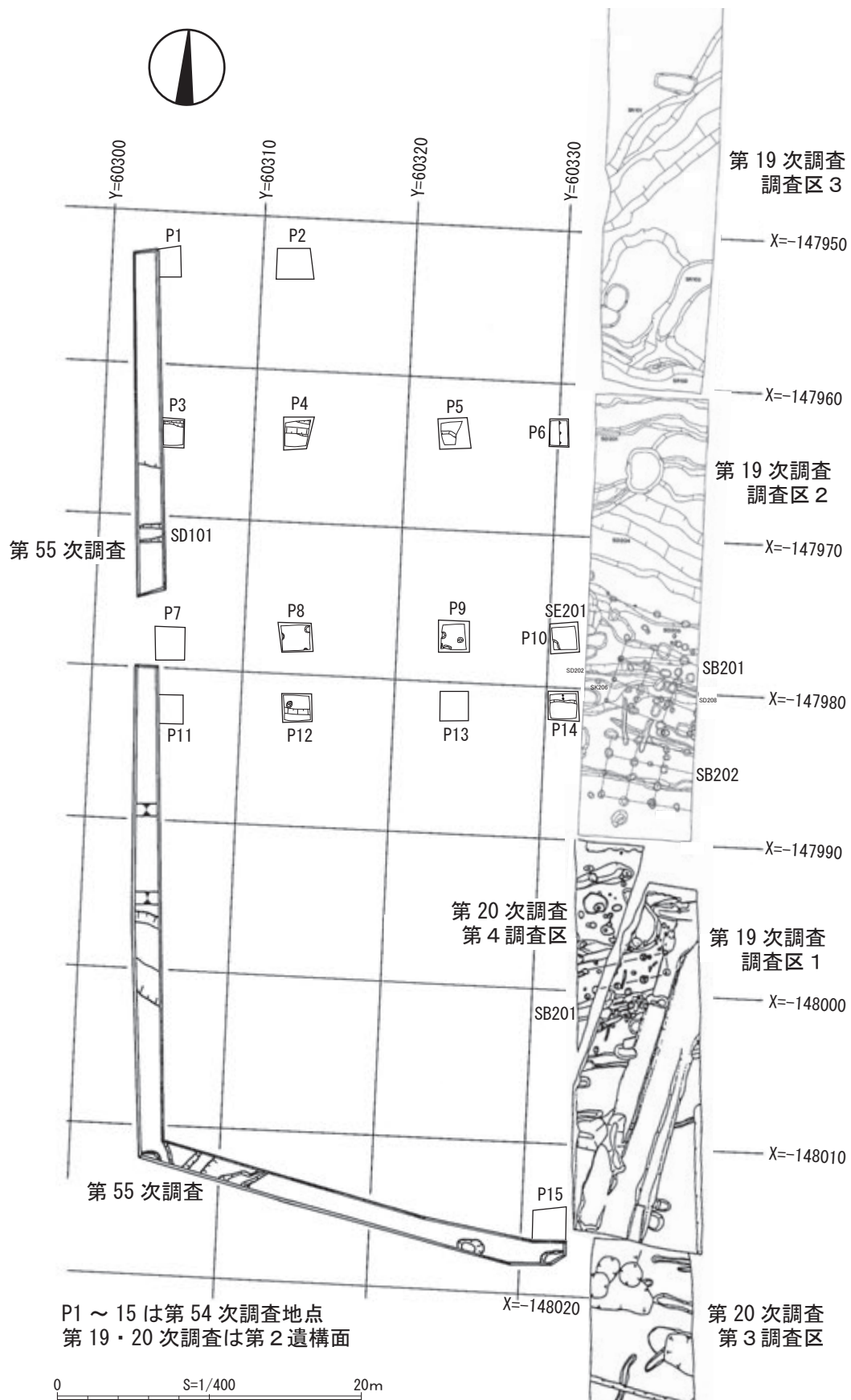


fig.293 第19次・第20次・第54次・第55次調査遺構配置図

構の密度が希薄になるものと考えられる。

今回の調査は、周辺で行われたこれまでの調査成果を補強する成果を得ることができた。新方遺跡における遺跡の広がりや空間利用を考えるための基礎資料となった。



fig.294 1区南第1遺構面完掘状況（北東から撮影）



fig.295 トレンチ北の南半全景（北東から撮影）

34 延命寺古墳第1次調査

1. はじめに

延命寺古墳は、伊川右岸の丘陵南端部に位置し、昭和49（1974）年に神戸大学の多淵敏樹氏らによって確認調査が実施された。その報告書『延命寺埋蔵文化財確認調査概要（以下、概要という）』によると、周溝を持つ直径20 m程度の円墳であること、主体部は箱式石棺であることが確認されている。また、墳丘外で第2主体部と考えられる石棺状の石組を検出したこと、弥生土器が出土していることがそれぞれ記載されている。主体部と墳丘の一部は、石積みの擁壁により保存されたが、周辺は宅地として大きく改変されている。当調査地南西側に位置する延命寺墓園付近にのみ、南側に伸びる尾根が残されており、旧地形を留めている（fig.296）。

昭和47（1974）年に編集された神戸市都市計画図（縮尺1/2500）を見ると、本調査地は、北西から延びる丘陵の末端に位置していることが確認できる。伊川および明石川下流域に形成された平野部を望む当丘陵には、古墳時代前期の古墳が多く存在する。丘陵頂部には、明石川流域最古の古墳を含む古墳群である天王山古墳群が存在し、南側に派生する尾根の端部には白水瓢塚古墳、南西に派生する尾根には小形仿製鏡が出土した高津橋大塚古墳群が存在する（fig.297）。

2. 調査概要

今回の発掘調査は、宅地造成に伴って実施したものである。工事により周囲の道路面ま

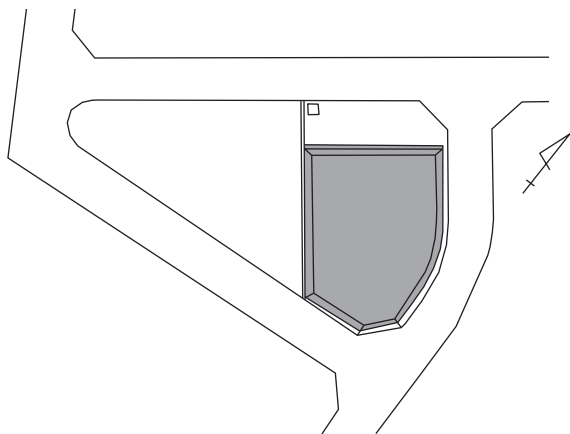


fig.296 調査地位置図



1 延命寺古墳 2 白水瓢塚古墳 3 延命寺2号墳
4 高津橋大塚古墳 5 高津橋大塚2号墳 6 高津橋大塚3号墳

fig.297 造成前の調査地周辺の古墳分布図 (S = 1/5000)



で削平を受けるため、人力による全面調査を実施した。

調査地は、確認調査以来、地域住民による継続的な除草等の管理が行われてきたため、樹根による損壊を受けることなく良好な状態を保ってきた。表土および埋土を除去すると、現地表面から 5 cm 程度で、昭和 49 (1974) 年に実施された確認調査のトレンチを確認する事ができた (fig.298)。

fig.298 調査地周辺区画図 (S = 1/400)

3. 遺構の概要

墳丘 表土直下で地山が検出され、墳丘を構成する盛土は残存していないことを確認した。現況では、調査対象地のほぼ中心が最高地点であるが、測量後の検討により、箱式石棺が位置する地点が本来の最高地点であると考えられる。『概要』によると、直径約 20 m の周溝を持つ円墳と記されているが、今回の調査地内では、周溝を確認する事はできなかった。なお、確認調査トレンチ内の埋土より、弥生土器片が 1 点出土した。摩滅した小片であったため、詳細は不明である (fig.299)。

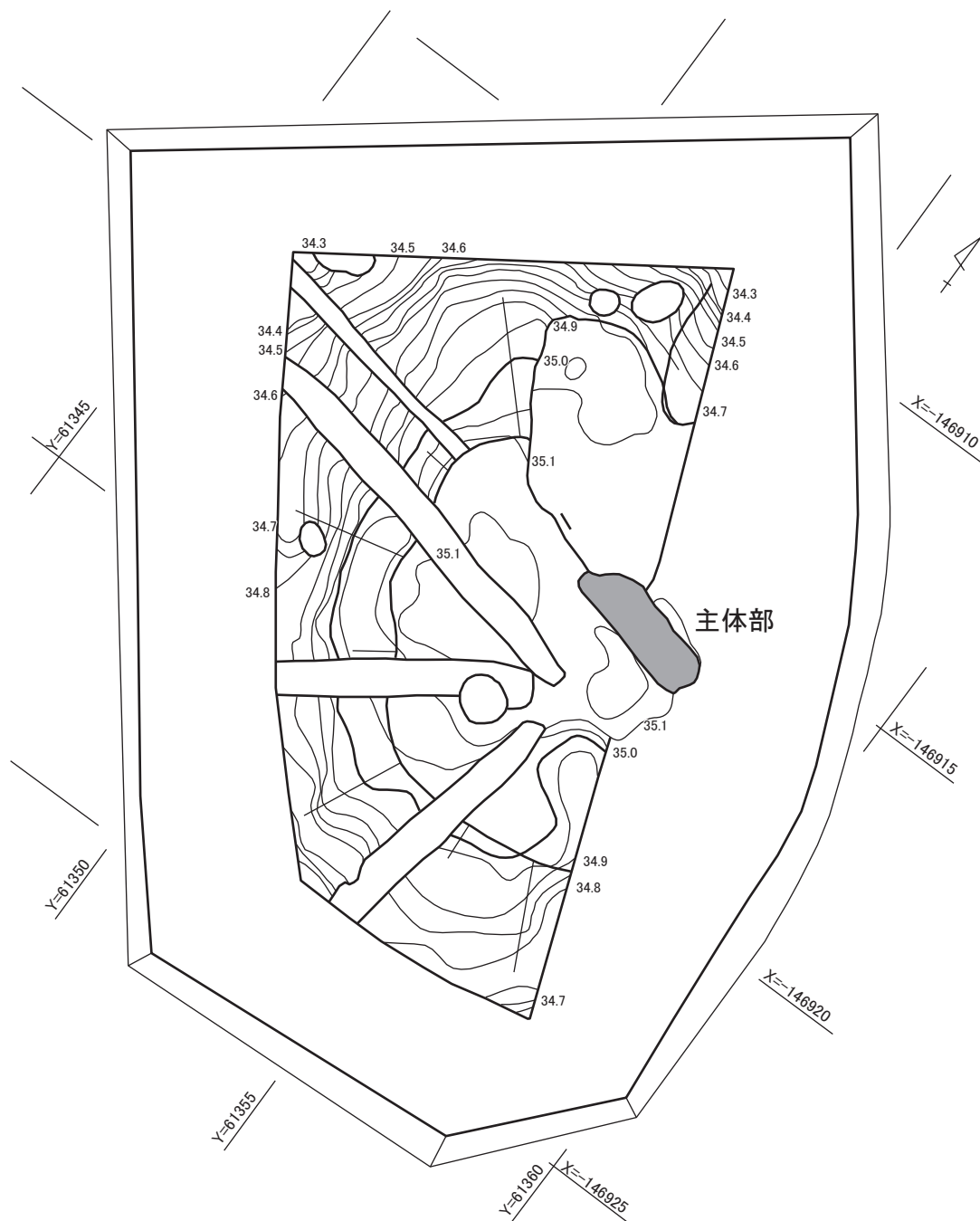


fig.299 墳丘測量図 (S = 1/150)

主体部 箱式石棺が主体部である。『概要』の写真と同様の状態を保っており、良好に保存されていた。

墓壇 主体部の墓壇は、平面形が長方形で、ほぼ東西方向に長軸をもつ。全長 3.1 m、幅 1.2 ～ 1.5 mを測る。掘形は削平を受けているため、本来の深さは不明である。石棺の配置が墓壇の中心線上ではなく、北側に寄っていることが特記される。

箱式石棺 両小口は各 1 枚、両側面は各 4 枚の凝灰岩質砂岩製の板石によって組み立てられており、底板は有しない (fig.300)。天井石の一部が棺内に残存していた。内寸の法量は、

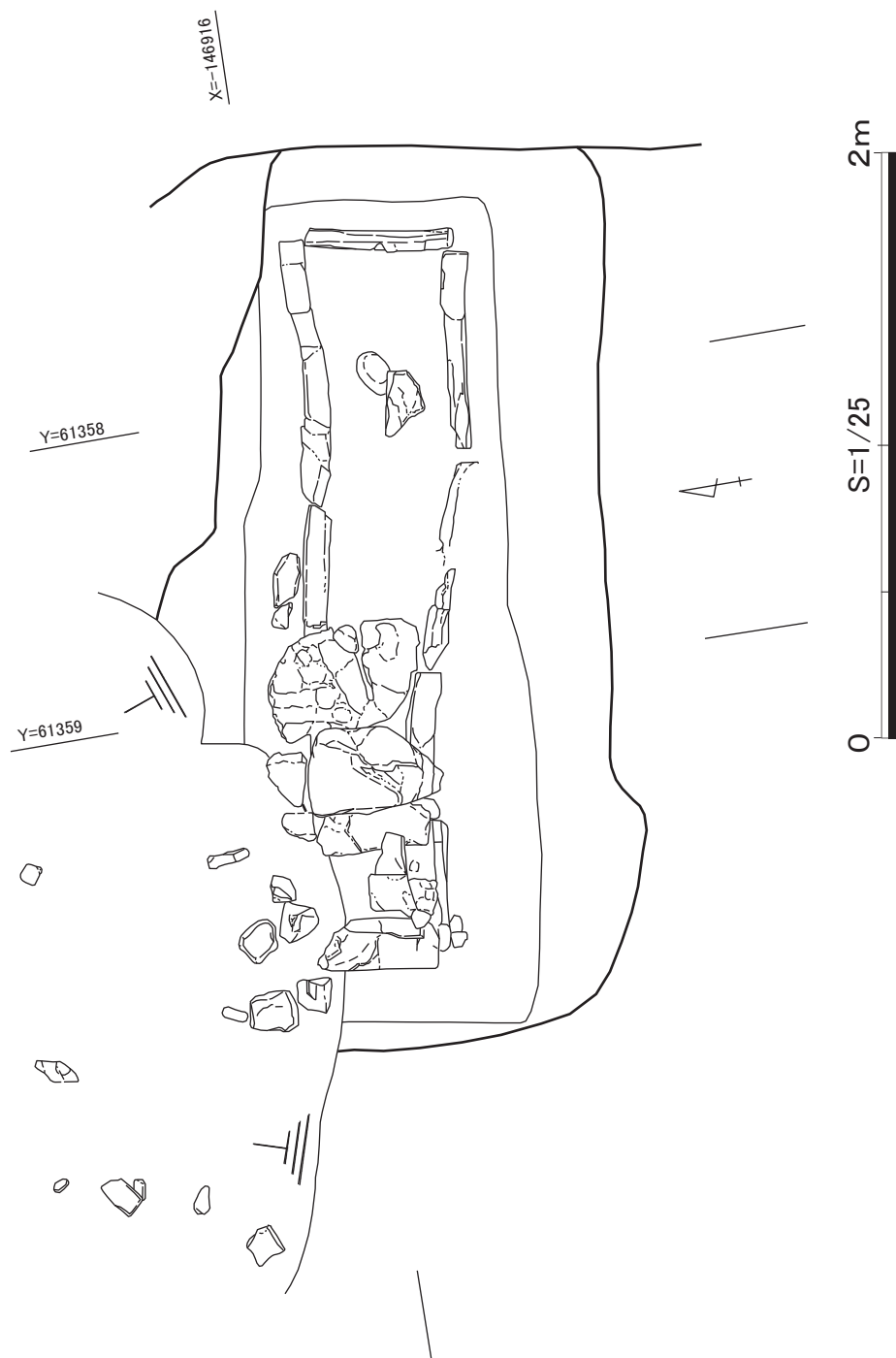


fig.300 箱式石棺検出状況平面図

棺底で全長 2.4 m、幅 53 ～ 60 cm を測る。板石は、棺内を白色粘質土で充填して固定しているが、保持力は十分でなく、すべての石材が内倒していた。石材は、触れると表面が層状に剥離するほど脆弱な状態であった。厚さ 6 cm 程度の板石を使用しており、石材が接する箇所の整形は不十分である。また、側石の基底レベルは南北で差があり、北側が南側に比べて 15 cm 低い。板石の法量によって、使用箇所を選別し、石材の上面を合わせるため、基底部の高さで調整していると考えられる。天井石は、西側の 3 ～ 4 枚分が残存していたが、側石が内倒しており、構築時の位置は保っていない。側石が直立した状況を復元すると、残存する天井石の長さが不足していることから、側石が内倒して棺内に土砂が流入する際

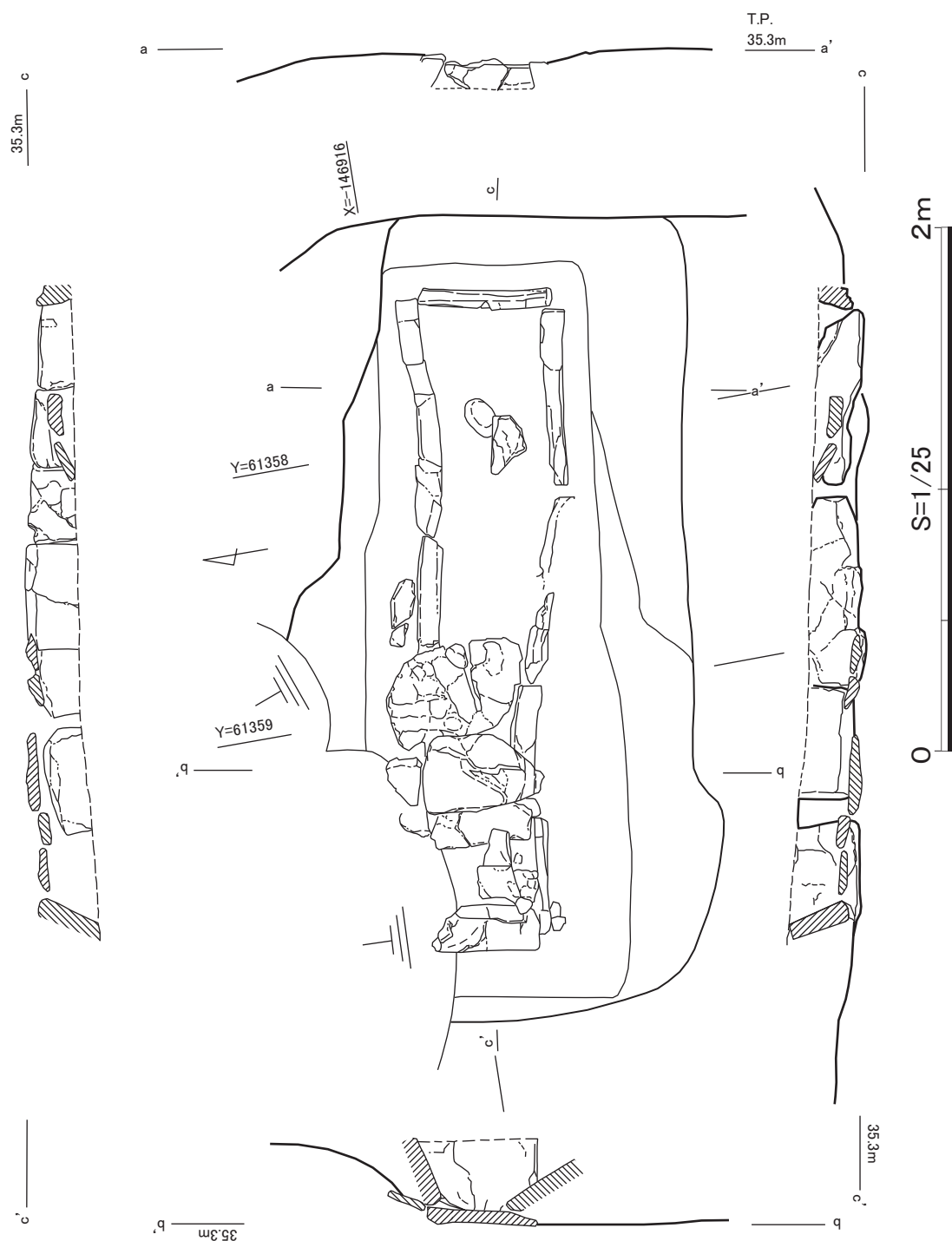


fig.301 箱式石棺平面図・断面図

に、天井石が落ち込んだ部分が残存したと考えられる。床面は、白色粘質土を 15 cm 程度の厚さで充填している。床面は西側に 10 cm 傾斜しており、埋葬施設であれば、頭位は東側と考えられる。石棺の北西部分は攪乱されており、西側小口の石材の一部と北側西端の側石が損壊していたためか、棺材の破片が散乱していた。この攪乱は、『概要』では土取等の穴と記述されており、添付写真でも確認することができる。棺内と墓壙内埋土と攪乱土については、2 mm 幅の篩で選別したが、遺物は出土しなかった (fig.301)。

その他の遺構 『概要』で報告されている第2主体部については、今回の調査区内では確認されなかった。また、弥生時代の遺構についても確認されなかった。

4. まとめ

今回は、延命寺古墳の主体部である箱式石棺を中心に調査を実施した。当古墳の箱式石棺は、天王山古墳群5号墳東棺と同様の凝灰岩質砂岩を使用していた。石材の法量に規格性はなく、石棺の構築方法も粗雑である。この違いは、時期差や被葬者の階層差を示していると考えられるが、詳細は不明である。

石棺の配置が墓壙の中心線から北側に寄っている事については、石棺の設置や埋葬時に墓壙底部へ降りるための空間として使用された事を示している可能性がある。墓壙の片側に作業空間を設ける例として、白水瓢塚古墳が挙げられる。墓壙の西側の上部が広くなっており、地山をステップ状に掘り残す等、棺の設置作業や埋葬時の利便性を考慮した機能が想定されている。延命寺古墳においては、石棺を北側に寄せる事によって、石棺の設置や埋葬時に墓壙底部へ降りるための空間として同様の機能を持たせていたと考えられる。

当古墳の時期は、表採資料からTK10型式に併行する時期が想定されているが、今回の調査で追認する遺物は確認できなかった。近隣の段丘上では5世紀前半以降に古墳の築造が開始され、南側の平野部に展開する白水遺跡の集落形成と時期がほぼ一致しており、当古墳の被葬者は、白水遺跡の集落の有力者であったと考えられる。



fig.302 調査地現況（北から撮影）



fig.303 墳丘断面検出状況（北東から撮影）



fig.304 主体部検出状況（東から撮影）

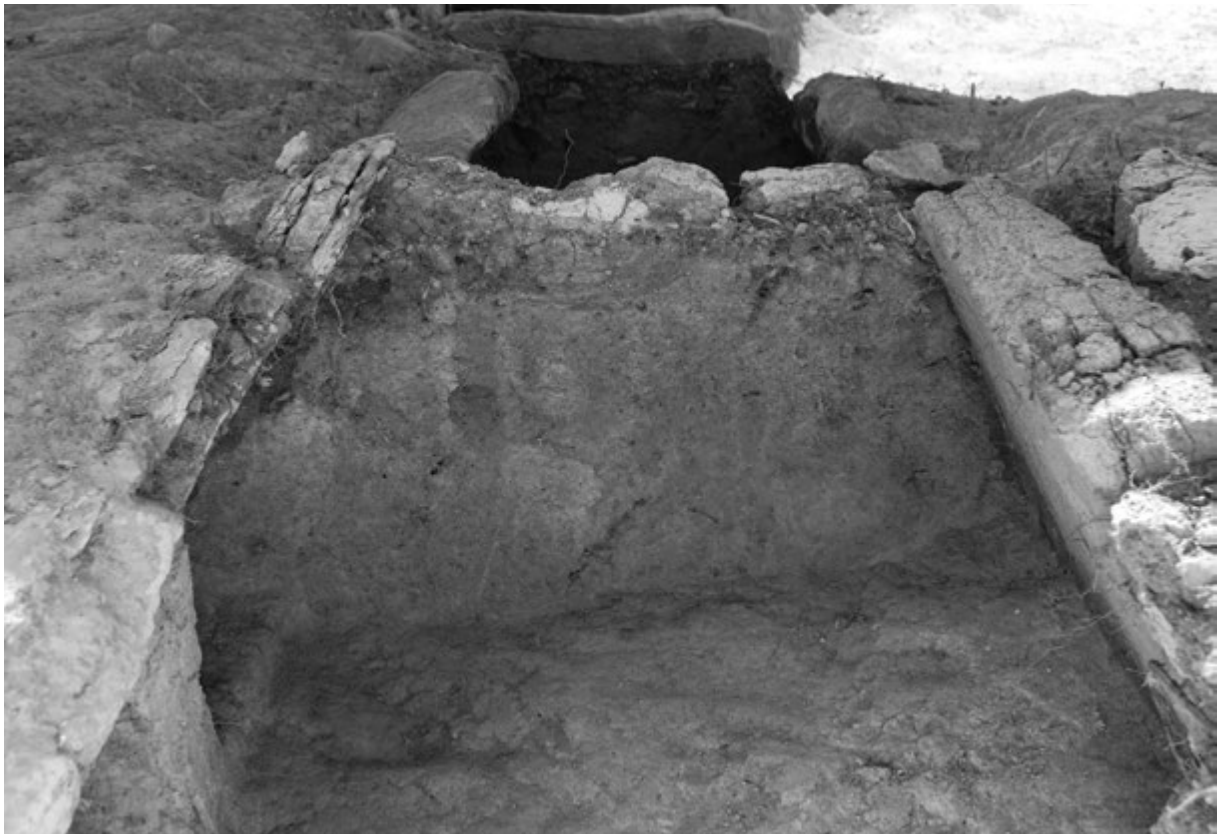


fig.305 主体部埋土堆積状況（東から撮影）



fig.306 主体部床面検出状況（西から撮影）

Ⅲ. 令和元（2019）年度実施の確認調査

1 住友家須磨別邸跡第1次調査

1. はじめに

須磨海浜公園再開発に伴い、須磨海浜公園内（神戸市須磨区須磨浦通1丁目）に所在する住友家須磨別邸洋館（以下、本建物と称す）の本館地階部分の遺存状況について、確認調査を実施した（fig.307）。調査対象面積は約28㎡で、調査期間は令和2（2020）年3月16日～18日の3日間である。

住友家須磨別邸洋館は、明治36（1903）年に竣工した洋館である。神戸の近代洋風建築を表象する洋館の一つであり、住友春翠（十五世吉左衛門友純）によって建設された。設計は、住友本店臨時建築部の野口孫市による。本館は、地上2階、地下1階建。地上は、木造、モルタル仕上げ、スレート葺。地下は、半地下構造のコンクリート基礎、煉瓦造で、上部は公園整備の際に撤去されたとみられる。本館の東側には、木造2階建て、スレート葺の洋館附属屋があった。

昭和20（1945）年の神戸大空襲で地上部分が全焼し、昭和21（1946）年に敷地が神戸市に寄贈された。昭和26（1951）年には、神戸市立須磨海浜公園として整備開放されたが、本建物の遺存状況は、長らく不明瞭なままであった。そこで、須磨海浜公園再開発事業に伴って、本建物の遺存状況を確認するための調査を実施したところ、当該期の遺構を検出したため、令和2（2020）年度に本建物範囲を埋蔵文化財包蔵地に指定するに至った。

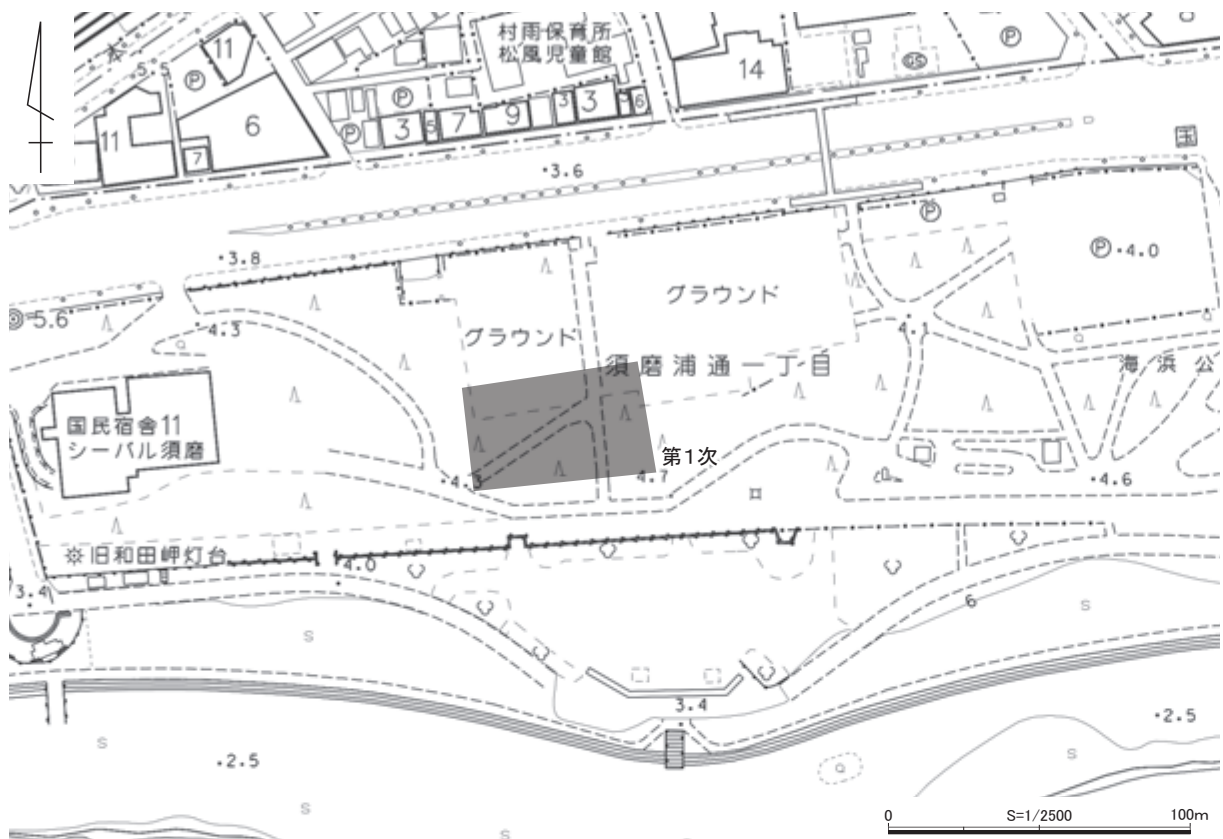


fig.307 調査地位置図

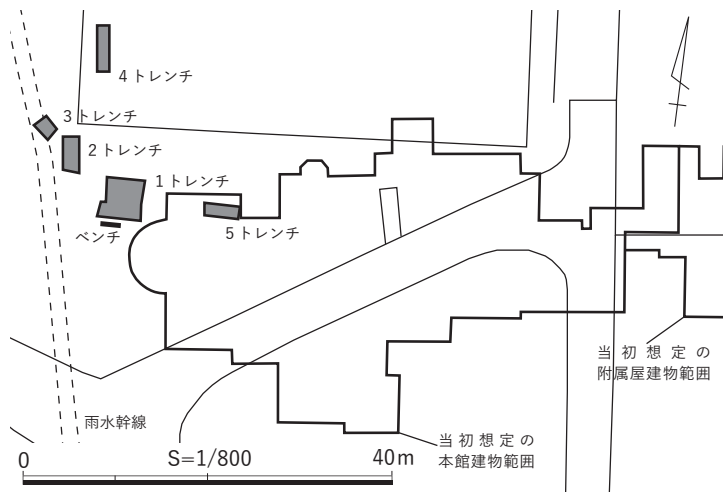


fig.308 調査区配置図

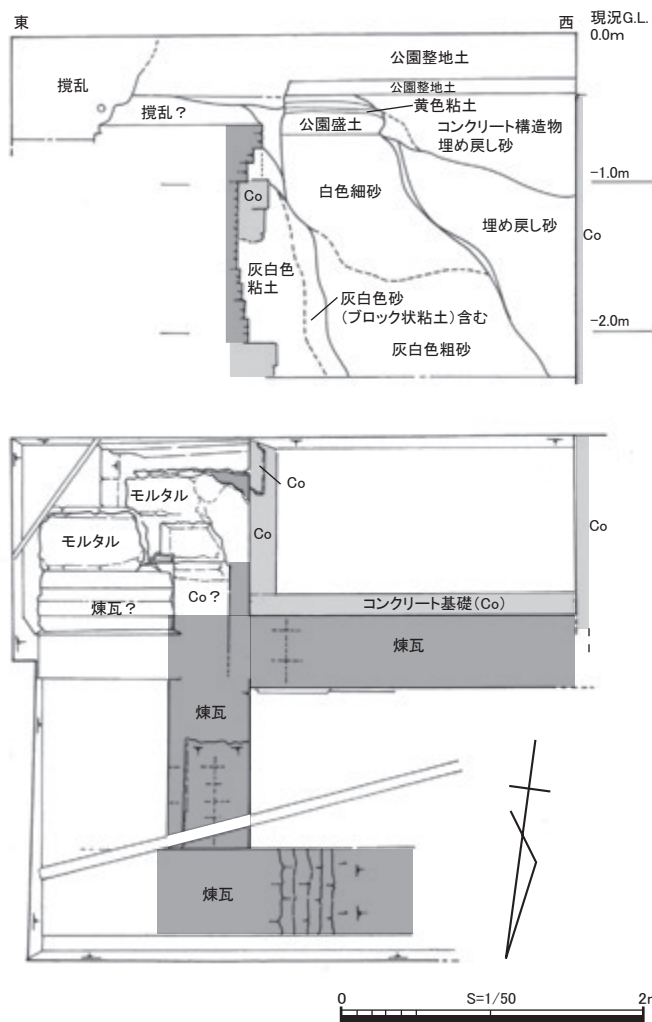


fig.309 1 トレンチ平面図・断面図

2. 調査概要

確認調査は、公園内の松林、園路、ベンチ等の施設、埋設管への影響が少ない箇所に幅 1 m × 長 3 m のトレンチを設定して行った (fig.308)。検出位置は、地階の部屋名称が不明のため、1 階平面図の名称を便宜的に用いり、以下、各トレンチの状況を報告する。

① 1 トレンチ

株式会社竹中工務店から提供を受けた本建物推定位置図をもとに、公園造成時の盛土、建物基礎の遺存状況、洋館の特徴的な形状である西辺の半円形バルコニー付近と想定される箇所に 1 トレンチを設定した (fig.309・315)。

1 トレンチでは、建物の角を形成する煉瓦積壁とコンクリート基礎を確認した。形状からみて、海辺へ出る階段の南西角に相当すると予測される。

1 トレンチで検出した遺構は、1 階大食堂南の濡縁下位を検出したと考えられる。煉瓦壁は、現況 G.L.-0.5 ~ 0.6 m を天端とし、煉瓦は、イギリス積で上から 3 枚・2 枚・2 枚・11 枚・2 枚・2 枚・2 枚・3 枚の各枚数を一つの単位として段をつくり、その合計の高さ 1.4 m 分を検出した。中位の 11 枚単位の段を中心として、天地両側で 1 段ごとに約 5 cm ずつ外側にずらして積み上げられており、全体の形状は蛇腹状となる。この中央が窪んだ状態の外壁に粘土が充填されており、粘土の一部はブ

ロック状であった。粘土を被覆する目的で煉瓦をずらして積み上げた可能性もあるが、煉瓦積の基礎部分は、他のトレンチで検出した室内側も段をなしており、構造上の基礎形態である可能性が高い。粘土は、基礎の補強とともに塩害等の影響を軽減する役割等も考え

られる。現況 G.L.-2.3 mでは、コンクリート基礎の天端を検出し、基礎厚 10 cmまで検出した。トレンチ南東角で後補のコンクリート基礎を検出したが、これは、古写真に写る階段下の柱石基部付近にあたる可能性がある。

当初 1.5 m × 3.5 mほどを調査範囲としていたが、トレンチを北側に拡張すると、ドライエリア状で幅 1.5 mの細長い区画の煉瓦壁を確認した。これにより、階段西側部分を検出したことが明らかになった。東西方向の煉瓦壁の天端幅は約 60 cm、階段に沿う南北方向の煉瓦壁の天端幅は約 40 cmであった。

また、トレンチ西壁は、後世のコンクリート壁となり、煉瓦壁を破損することなく施工されていた。構造物の詳細、用途は不明である。

② 2 トレンチ

1 トレンチの成果を受けて、昭和 26 (1951) 年以降の公園整備で設置された旧レストラン広場にあたる場所の南西角に半円形バルコニーがあたると予測し、幅 1.5 m、長さ 3 mの 2 トレンチを設定した (fig.310)。

その結果、現況 G.L.-0.5 mで煉瓦積を検出した。南北 2 m、東西 10 mの細長い区画の北西隅を検出したと考えられる。煉瓦積を上から 8 枚まで確認し、下方は未掘である。南端では、現況 G.L.-0.75 mで陶製土管を検出した。土管は、外径 20 cm、内径 16 cm、ジョイント部の最大径 24 cmを測る。建物の内側状況が明らかでないものの、図面上に出入口表記がないことから、ドライエリアにあたる可能性が考えられる。

③ 3 トレンチ

2 トレンチの北西側に幅 1 m、長さ 1.5 mのトレンチを設定した (fig.311)。現況 G.L.-0.3 mで弧状の煉瓦積を検出した。検出長は、約 1.2 m分である。弧状の煉瓦壁は、建物西辺の半円形バルコニー下位にあたると考えられることから、建物の南西部の位置がほぼ確定できた。煉瓦壁の幅は約 60 cmで、その下位から煉瓦積 8 枚分を検出した。検出面最上段の煉瓦は、内側に 6 cmほど小口面が出た状態であり、段が形成されていた。

④ 4 トレンチ

今回の工事計画で予定されている建物部分について、煉瓦積遺構の遺存状況と旧レストラン跡地の状況を確認する目的で幅 1 m × 長さ 4 mの植栽帯北側の広場に 4 トレンチを設定した (fig.312)。現況 G.L.-0.2 mが広場の整地土で、その下に灰色系の砂質土が堆積する。この砂質土は盛土と考えられ、旧レストラン建物の解体時に掘り返されて、埋め戻されたものと考えられる。

トレンチ中央からは、現況 G.L.-1.0 mで煉瓦壁を検出した。大食堂北辺下位にあたる東西方向の煉瓦壁基礎と考えられる。煉瓦壁の検出面から 30 cm下の南側でモルタル幅木を検出し、その下で厚さ 15 cm、30 cm角のコンクリートブロックが出土した。これは床面材

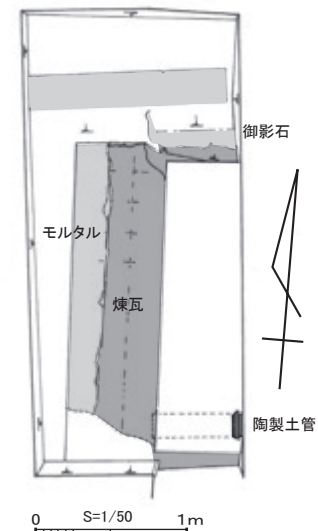


fig.310 2 トレンチ平面図

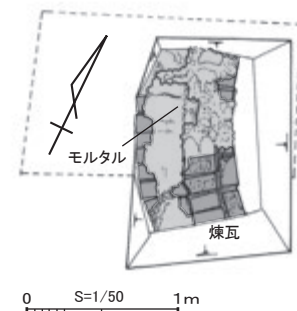
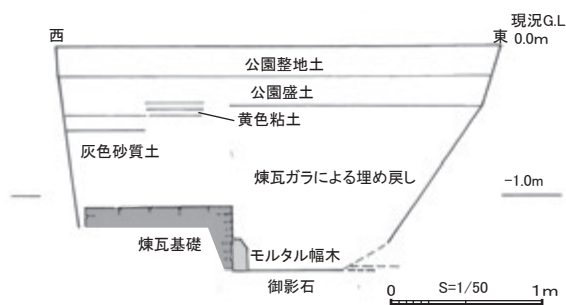
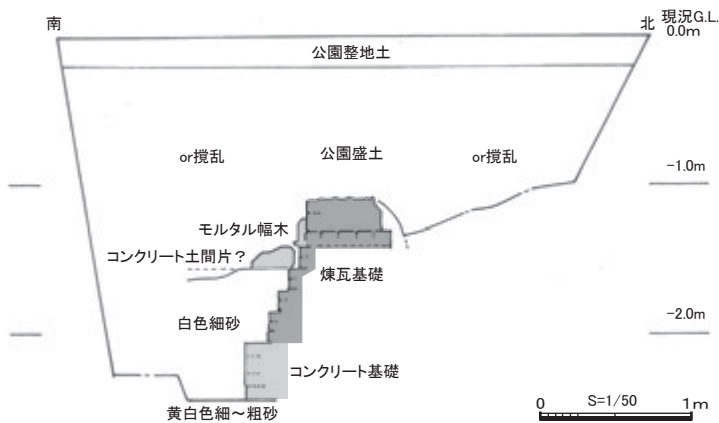


fig.311 3 トレンチ平面図



と考えられる。煉瓦壁の北側では、粘土の被覆を確認した。コンクリート片の下位を一部掘削したところ、高さ 40 cm のコンクリート基礎を検出した。最下層 10 cm は捨コンのようで、その上部には型枠の痕跡が認められる。ここでも煉瓦基礎に階段状の施工が認められる。コンクリート基礎の接地面は黄褐色粗砂、コンクリートブロック周辺は黄白色細砂が堆積しており、基礎の施工後、周辺の砂で埋め戻し、整地が行われたと考えられる。

⑤ 5 トレンチ

建物内の部屋内部の状況を確認するため、幅1 m×長さ3 mの5トレンチを設定した (fig.313)。その結果、煉瓦壁を検出し、1階居間と濡縁との境の壁にあたると

考えられる。現況 G.L.-0.5 m までが盛土と整地層で、その下から黒色粘質土と黄色粘質土を検出しており、これが公園造成面と考えられる。この土層以下は、多量の煉瓦ガラで埋め戻されていた。煉瓦壁は、居間の暖炉の下部と考えられ、幅は 1 m と大きい。検出面から下に 8 枚の煉瓦積を確認し、これが床面となる。床面からの残存高は 40 cm である。下半 20 cm にはモルタル、あるいは御影石の幅木が設置されていた。床面は、御影石を敷いていると考えられる。調査範囲が狭小であったため、部屋の全面が御影石張りかは明らかでない。おそらく暖炉の下位にあたるため、炭・灰の掻き出しのために張られていたと考えられる。幅木や床面には、煤等の付着物が確認された。

⑥ 出土遺物

大量に出土した煉瓦のサイズは、長さ 19 cm×幅 9 cm×厚さ 5 cmで、焼きは良く、胎土は精良である。刻印等は認められなかった。確認している分では、長さ 17 cm（復元値）×幅 11 cm×厚さ 5 cmの岸和田煉瓦製の煉瓦が 1 点出土している。

このほかに、染付、洋皿の可能性のある陶磁器類、瓦、釘、留金具、銅製水切板とみられる金属製品、乾式タイル、タイル（モザイクタイル含む）が貼られたモルタル床材、御影石の礎石、モルタル幅木の建築部材等が出土している。これらの多くは、埋め戻し土から出土しており、原位置を留めるものは少なかった。

また、コンクリートにモルタルを塗った床材の一部にタイルの裏型が転写されており、そのタイルの裏型には、「CREVEN DUNNILL & Co. JACK FIELD SALOP ENGLAND」の刻印があった。この製品はイギリスからの輸入品で、クレイヴン・ダニエル社ジャックフィールド工場の製品とみられる。輸入先の工場は、1874（明治6）年の完成とされる。

3. まとめ

現況 G.L.-0.5 m までが公園造成時の整地層で、部分的に後世の配管工事等の影響が及んでいたものの、今回の調査によって、本建物の南西部地階の煉瓦壁と基礎が良好に遺存することが判明した (fig. 8)。作成したトレンチ配置図や検出遺構の図面は簡易測量によるものだが、旧レストラン広場の南西角付近に洋館本館の特徴的な形状である半円形バルコニーが位置する状況が復元できた。一部では、部屋の床面を確認しており、地上階とは趣が異なると思われるが、地階の床面、壁面の造形等を知る上で貴重な資料となる。

4 トレンチでは、現況 G.L.-1.6 m まで攪乱土と埋め戻し土が堆積していたが、従前建物は、煉瓦基礎を避けて建築されているようである。調査地付近には、国民宿舎やレストランがあったが、今回の調査地東側にあたる広場の東側部分も洋館建立時の基礎が遺存している可能性が高い。

また、門柱や浜階段は、当初の部材を使用しているとみられるが、古写真と現況が異なる部分もあるため、現況と古図面を照合し、検出した建物基礎の位置を基準に再検討が必要である。

住友家須磨別邸については、従来残存状況が明らかでなかったが、明治時代における阪神間の代表的な大規模邸宅であったため、須磨の地が邸宅地として開発される契機となった重要な建物である。今後、詳細な状況把握が必要となる。

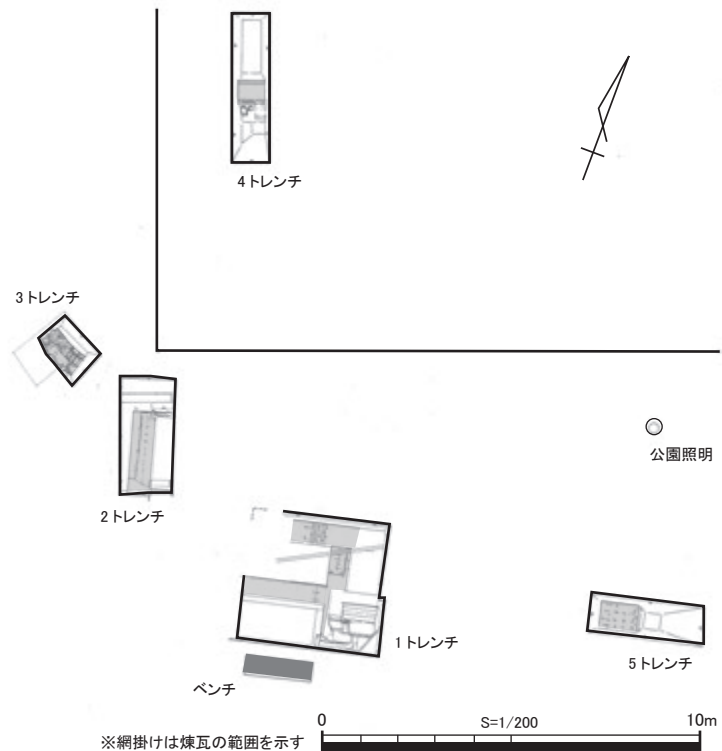


fig.314 調査地全体平面図



fig.315 1 トレンチ煉瓦壁検出状況 (西から撮影)

令和 2（2020）年度神戸市埋蔵文化財年報

刊 行 令和 6（2024）年 3 月 31 日

編集・発行 神戸市文化スポーツ局文化財課
神戸市中央区加納町 6 丁目 5 番 1 号（神戸市役所 1 号館 19 階）
TEL 078-322-5799
FAX 078-322-6148
MAIL maizoubunkazai@office.city.kobe.lg.jp

製本・印刷 株式会社旭成社
神戸市中央区琴ノ緒町 1 丁目 5-9
TEL 078-222-5800
FAX 078-222-8559

